

現代異能の災禍希望（パンドラボックス）

RKC

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超人的な力を持つ人種が存在する現代世界で超人の主人公が超人の集まる全寮制の学園に通う事になり、転校初日にヒロインの着替えを不可抗力で覗いて決闘を仕掛けられるような話です。

←真面目なあらすじ

1900年代に突如現れた超人的な能力を持つ新人類、異能者は立たない、銃は効かない、再生能力も人間以上。

そんな異能者が通う学園、異能学園。そこでは超人たちが強さを求めて切磋琢磨しあっている。そこに強さを求める少年、狼森狼牙が転校する場面から全てが始まった。

石鹼粹を再興させろ！

目次

序章

| | | |
|-------|------------------|-----|
| 1 話 | 転校、覗き、決闘 | 1 |
| 2 話 | 勝敗 | 12 |
| 3 話 | “なんでも” って約束 | 21 |
| 4 話 | 戦闘スタイル | 29 |
| 5 話 | 御三家 | 40 |
| 6 話 | 雷夢の頸 | 46 |
| 7 話 | 師匠と弟子 | 60 |
| 8 話 | はじめての遊山 | 68 |
| 9 話 | 暴動 | 77 |
| 10 話 | 鎮圧 | 88 |
| 病闘編 | | |
| 1 1 話 | 五文銭の力 | 102 |
| 1 2 話 | 臆病者 | 113 |
| 1 3 話 | 病気 | 118 |
| 1 4 話 | 復讐者 | 130 |
| 1 5 話 | PTSD | 137 |
| 1 6 話 | 黒葛原 黒子の華麗なるアフター5 | 146 |
| 1 7 話 | そんなことより | 153 |
| 1 8 話 | 黒の刀 | 162 |
| 1 9 話 | 臨死応戦 | 173 |
| 2 0 話 | じがほうかい | 181 |
| 2 1 話 | 悪夢 | 190 |
| 2 2 話 | 執着 | 200 |

2 3 話 無様

2 4 話 そんなことより

2 5 話 不憫

幕間

1. 夢毒

2. 玩具

3. 安寧

異能学園の日常

災禍希望（パンドラボックス）

3 0 話 説得 黒子の場合

3 1 話 説得 雷夢の場合

3 2 話 説得 二四三の場合

3 3 話 舞踏会1

3 4 話 舞踏会2

3 5 話 舞踏会3

3 6 話 舞踏会4

3 7 話 執事とメイド

3 8 話 作戦

3 9 話 せつ

4 0 話 箱の中にいる

4 1 話 強行突破

4 2 話 剣先の当主

4 3 話 枯れた血の花

4 4 話 五文銭 二四三

4 5 話 上戸鎖家

213

228

237

248

259

278

287

296

303

315

320

328

343

352

361

373

384

393

402

410

416

423

433

| | | |
|-------|-------------|-----|
| 46話 | 100年越しの浦島太郎 | 446 |
| 47話 | 浦島太郎の実力 | 454 |
| 48話 | 対峙 | 463 |
| 49話 | 異臓厚壁症 | 471 |
| 50話 | 彼岸と此岸 | 480 |
| エピソード | 墓 | 491 |

序章

1話 転校、覗き、決闘

場所は栃木県北部。結構な田舎の二車線道路で、初心者マークを付けた普通自動車がトロトロと徐行していた。

「車がない早朝、しかも田舎だからいいものの、都会でこんなに遅く走ってたらクラクション鳴らされ放題だろうなあ……。速く運転に慣れないと」

軽自動車を運転するのは最近免許を取ったばかりのペーパードライバー。勤勉な事に早起きして人の少ない所で運転の練習をしているようだ。

彼がふとバックミラーに目をやると、小さな何かが映っていた。

「……人？」

しかし、映っているのは後続車ではなく人間。時速40km/sで走行しているにもかかわらず、人影は近づいてくる。すぐに容姿が分かるほどの距離に。

身長は150cm程。動きやすそうな白い体操着に、肩口の長さの灰色の髪。寝ぐせなのか、髪の毛が犬耳のように突き出ている。何よりも特徴的なのは、日本人にあるまじき深紅の瞳だろうか。

その人物は彼の車に追いつくと、速度を落として併走し始める。

「ちよつと質問いいかー」

ウィンドウ越しに高めの声が聞こえてくる。彼……いや、声の高さ、身長の高さ、肩の狭さからすると彼女だろうか。胸は薄いが。

「は、はい!! 何でしょうか!?!」

人が車と並走するという、普通ならありえない事態に困惑しながらも、ペーパードライバー君は返事をする。

「異能学園って、この道ずっと真つすぐ行けばあるんだよね？」

「へっ? え、ええ、確かそうだったと思いますけど……」

「了解、助かった! どうにもスマホのGPSの調子が悪くてな!

ほら見てくれよ。今の現在地、神奈川って事になってんだぜ?」

「そ、そうですね!!」

彼女がスマホをペーパードライバー君に見せるが、彼の方は突如の事態と慣れない運転に気を取られて、そんな余裕はなさそうだ。

「ま、それじゃな! 事故起こすなよ!」

そう言ったときり彼女は加速し、すぐに小さくなってしまった。ペーパードライバー君はゆつくりと停車し、ハンドルにもたれかかる。

「——あれが『異能者』^{シンギユラリテイ}か。姿だけならともかく、超人的な能力を發揮してる所は初めて見たな……」

◇

異能者^{シンギユラリテイ}。その言葉は1912年に突如として現れた新人類を指す。異能者はその身に異能^{キュリア}を宿し、それを駆る事で超人的な能力を發揮できる。

どれ程の能力かと言えば、異能者には小銃が効かず、戦車すら単騎で破壊でき、手練れの異能者が30人も集まれば小国程度軽く制圧できるだろう。

圧倒的な武力を個人が持つようになり、当然世の中は混沌に陥った。異能者の大半は力を背景に暴れまわり、暴虐の限りを尽くした。そうでない者は異能者に怯え、少しでも異能者からの被害を減らそうと団結して生活するように。

国家間の戦争すら一時休止され、異能者とそうでない者の決定的な対立構造の完成が間近。そこに待ったをかけたのは、とある3人の異能者。その3人は暴れる異能者集団のリーダーを異能の力で封印したと伝えられている。

絶対的なリーダーを失った異能者集団は内部分裂を起こし、多数の派閥に分かれることとなった。その後は各派閥が絶妙な均衡状態を保ちながら時間は過ぎ——

「ふーっ……、やっと着いたか。茨木の実家からここまで1時間もか

かっちまった」

時は西暦2022年。先ほどペーパードライバー君に道を尋ねていた彼女が荷物からタオルを取り出して汗を拭いていた。

「ここが異能学園か。随分と田舎にあることで」

彼女は拭いた傍から浮き出る汗を苛立たしげに拭いながら、目の前の建造物を睨みつけていた。

異能学園。

とんでもない武力を持った異能者の高校生を集め、多感な思春期に暴走しないよう管理する学園。仮に少年少女たちが暴走してしまっても、被害が最小限となるよう田舎の山奥に位置している。

その校門をくぐった彼女は、汗でべとべとの服を着替えるため、更衣室を探し始めた。校内案内図はどこだ、とウロウロしていると、制服を着た生徒を発見する。

「更衣室がどこにあるか知ってるか？」

先輩の可能性など考えないタメ口。生徒は彼女の姿をひとしきり見てから答える。

「えっと……更衣室なら東校舎の一階、一番奥にあるけど」

「ありがとな」

彼女は軽く手を挙げてお礼を言い、教えられた場所を目指す。3分とかからず目的地に着いた彼女は首を傾げた。

「……更衣室、男女別れて無いのか？」

彼女の経験からすると、更衣室は男女横並びで存在している事が多いはず。しかし、更衣室と書かれた部屋は一つしかない。

過去に覗きとかの問題があつて、男女の更衣室が引き離されているのかもしれない。そう考えた彼女はひとまず、更衣室が一つしかない事に納得した。

続いて彼女は扉のマークを確認する。すると、そこには男女のはっきりしない絵が描かれていた。

（……どっちだこれ？ マークじゃなくて『男』とか『女』ってはっきり書けよ）

次第に考えるのが面倒くさくなってきた彼女は思考を止め、更衣室

にカチこんだ。

(更衣室が男女別れているにも関わらず、あの生徒は俺をこっちへ案内した。つまりこっちが「男性」更衣室という事だ)

——なんと。彼女は「彼」であった。

そして、彼が今侵入した更衣室は「女性」更衣室である。

彼が勢い良く開けた扉を抜けると、そこには下着姿の女体があった。

「……は？」

予想外の光景に彼はその場で固まる。

「あら？　こんな時間に珍しい客人ですわね」

緩くロールした金の髪。くびれのある抜群のプロポーション。彼と同じ深紅の瞳。

それらの特徴を持った下着姿の女はお嬢様のような口調で話す。その一方で彼の脳内は混乱を極めていた。それでも確かな思考は一つ。

(——あんのクソ野郎！　俺を女と勘違いしやがったな…!!　しかも目の前のこいつも勘違いしてやがる…!)

自分を案内してくれた生徒と現在進行形で勘違いしている女生徒に対する怒りだった。

「……おはよう」

彼はブチギレの本心を鉄仮面の下に押し込めながら、波風を立てないような挨拶を繰り返す。

彼にとって、この場面は女と勘違いされていることを利用する他無い。この女が出て行くまでやり過ぎ、その後こっそりと逃げれば良い。でなければ、覗き魔のレットルを張られてしまう。

「ご機嫌よう」

お嬢様然とした挨拶をする女生徒に彼は会釈を返す。彼は彼女の横を早歩きで通り過ぎようとしたその時、動揺からロッカーの金具にバッグを引っ掛けてしまった。

ブチブチと嫌な音がした後、バッグの中身が床にブチまける。

「あら、大変」

下着姿の女生徒は彼の荷物を拾い集めてくれる。いや、彼にとっては拾い集めてくれやがる。だろうか。

「?、こちらの服は……?」

彼女が手にしているのは彼の制服。彼の「男子用」制服。

「……男、であらせられると」

彼女は服を床に置き、空いた手を口元に近付ける。

「——うふふふふ……!!」

そして上品に笑い始めた。予想もしていなかった彼女の出方に彼は困惑する。

「あー……は、ははは……」

とりあえずの愛想笑い。

「何がおかしくって?」

彼女は笑い声から一転、地獄コキユートスの最下層の如き冷たい声を発する。同時に常人であれば目で追う事すら不可能な速度の回し蹴りを繰り出した。

彼は彼女の蹴りを腕でガード。直後、彼の体は更衣室・校舎、計二枚の壁を突き破り、中庭へと吹き飛ばされた。

「くそ……っ! いきなり手エ出してきやがって……! しかも壁二枚ぶち抜きやがった。……まさか俺の弁償じゃないよな、これ?」

彼は体勢を整え、瓦礫と化した校舎の壁を眺めながら、そんなことを考えている。かなり余裕があるようだ。

そこに一陣の風が。風に乗って飛んできた粉塵に彼は目を細める。狭い視界の中、さつきまで下着姿だった女性が女学院風の服を身に纏い、悠々とこちらに近付いてくる。

「女性の様な外見を武器に、堂々と覗きとは……。その度胸だけは褒めて差し上げましょう。——しかし」

彼女はいつの間にか手に持っていた扇子を、これ見よがしに音を立てながら閉じる。

「失態の代償は重くってよ? 嫁入り前の淑女の肌を見た罪、万死に

値しますわ。とはいえ流石に人死にを出すわけにもいきませんし、50%OFFにまけておいてあげましょう」

「万死の50%OFFって5000回死ぬだろ、その俺!! とうかそもそも俺は悪くねえ!! 男の俺を女子更衣室に案内したクソ野郎が全部悪い!」

彼が自分以外の非を訴えると、彼女は口元に扇子を当てて考え込む。

「……まあ、貴方のその見た目では女子と間違えられるのも仕方ない事でしょう。しかし、扉のマークを確認すれば男女どちらの更衣室かは明白でなくって?」

「あのマークだけで男か女かハッキリ区別できるか!! 誰だあのマーク設計した奴! 「男・女」「Man・Woman」 分かりやすい表記はいくらでもあるだろうが!!」

「あら、昨今のジェンダーフリーに対応した我が校のマークにケチを付けるのでしょうか? 二元的な性分別なんて古い差別的な考えをお持ちの様でございますわ。」

それにマークが紛らわしいというならば色で判別すればよろしい。例えば私であれば赤、貴方であれば青。一般的な感性すら持ち合わせていないのでしょうか? それとも小市民のお頭では色すら認知できなくって?」

「はい差別発言いただきました!! その通りです!! 名家のお嬢様と違って私めの脳みそは色を正しく認識してくれませーん!! ジェンダーとかいうわけ分からん事に配慮する前に、俺みたいな色覚異常者や盲目の人に配慮した設計をしたらいかがあそばせ!? 敷地内に点字ブロックすら無いなんてちゃんちゃらおかしくっておハーブ生えますわ!」

お互いにヒートアップ。発言の内容も支離滅裂なモノに。

しかし、彼の発言を受けて、彼女は僅かに目を見開いて気まずそうに目を逸らす。

「…ああ? 何だよ? 急に萎れやがって」

彼女はこめかみに浮かべていた青筋を収め、代わりに顔を青くして

いる。しばらくして、彼に頭を下げた。

「……は？」

「先ほどの発言——お詫びのしようもございません。偏ひとえに私の思慮の浅さ故……今一度、申し訳ありません」

やけにシリアスな顔をする女。さつきまでとのギャップに、彼は肩透かしを食らう。

「……あー、そういうのはよせ！ 俺の方だって悪口ベラベラ喋ってたんだからおあいこだろうが。何、マジになって頭下げてんだお前は」
「しかし……」

「俺は色盲で、それは事実だ。無い事をでっち上げられたならともかく、事実を揶揄やゆされても気にしやしねえだろうが」

「……おチビさん」

「事実だから気にしない。……というかお前かなり余裕あるな」

「あら、ほんのセレブジョークですわ」

いつの間にか頭を上げ、扇子で口元を覆う彼女に彼はため息を吐く。

「とにかく、不可抗力って事が分かったんなら、これでもういいだろ？」

それじゃあ……」

「お待ちなさい」

問題解決。そう考えた彼はその場を後にしようとする。しかし彼女はそれを許さなかった。

「ああ？ まだ何か用か？」

「謝罪を頂いていません事よ」

「謝罪？」

彼は頭に疑問符を浮かべる。〃何を言っているんだこいつは〃と言わんばかりの表情。

「不可抗力とはいえ、女性の素肌を見たのです。一言あつてしかるべきではなくなつて？」

「何で？」

彼がそう言うと、彼女のこめかみに青筋が戻ってきた。

「こちらもただ下着姿を見られて、何もなしに溜飲を下げられませんか

ことよ。一言、一言で良くつて？　「すみません」と言つてくだされば……」

「いやだね。俺は悪くない」

女のこめかみに青筋が増えた。

その時、辺りがにわか騒がしくなる。校舎の壁をぶち破った音を聞いた野次馬が集まってきたようだ。

騒がしい周囲とは対照的に、彼女は無言で懐からハンカチを取り出し、彼の方に放り投げる。野次馬の喧騒が増した。

昔、貴族が決闘をする際は手袋やハンカチを相手に放り投げるのが作法とされていたらしい。彼女の行動はそれに則ったものか。

「気が利くな。丁度鼻を噛みたかった所だ」

チーン！

決闘の申し込み。

彼は彼女の意図をしつかりと読み取った上で、受け取ったハンカチを用いて鼻を噛んだ。

「瓦礫の粉塵を吸いすぎてな。助かった」

そう言いながら彼が顔を上げると女の顔中青筋まみれだった。野次馬も静まりかえっている。

「…随分と人を虚仮コケにするのが上手なようですわね。でしたら口に出して申し上げましょうか。貴方に、決闘を、申し込めます」

((うおおおおおツツツ!!!))

彼女がそう言うや否や、さっきまでの静けさが嘘のように野次馬が盛り上がった。それに対し、彼はあくまで冷静に肩をすくめ、両手の平を上に向ける。

「決闘罪って知らないか？　法律勉強した方が良いぞ？」

「異能学園は治外法権。敷地内では何が起こっても学生自治で解決される……外の法律は期待されないよう！」

バキーン!!

彼女は台詞を言い終わると同時に、手にしていた扇子をへし折る。

その際、扇子から出ているいけない爆音が周囲の空気を揺らした。扇子はどうやら金属製らしい。

「あいつ、上戸鎖様かみとくざりに対して何したんだ？」

「さあ？ 俺も今来たばかりだから何が原因かは知らねえ」

「お？ 決闘か？ 始業前の良い見世物じゃん」

「とういふか見たこと無い顔だな。転校生か？」

野次馬達が思い思いに発言している。彼は多くの注目が自分たちに集まっていることを確認した後、目の前の彼女と会話を続ける。

「ちなみにここで俺が逃げた場合は？」

「実家の財力を最大限に活用して、ありとあらゆる社会的制裁を行わせていただきます」

「怖い怖い…。分かった、やりやあいんだろ。とういふか罪に問われないんならむしろ歓迎だぜ。俺の目的を果たすにやあこつちの手っ取り早い」

彼は不敵な笑みを浮かべながら中指を立てた右手を天へと突き上げる。多くの注目が集まっている今、彼が自分の名を知らしめるには絶好のチャンス。

「耳かっぽぼじって良く聞きやがれ、モブ異能者共!! 俺はこの学園で最強になる男だ!! 手始めにこの女から血祭りに上げてやる!!」

彼は突き上げた腕をそのまま振り下ろし、突き立てた中指を彼女に向ける。

不遜な宣言の後、しばらくの静寂。

「……………はあああああああ!!?!?!」

まず反応したのは野次馬達。肺活量も異常な異能者達の大合唱に、校舎の窓ガラスが何枚か割れた。

「ふざけんな!!」

「何抜かしてんだあのアホ!!」

「殺せー!!」

「ただで済むと思ってるのか!?!」

「死ねー!!」

「出来るわけねえだろ!!」

数々の暴言が降り注ぐ。野次馬の怒りは頂点に達し、今すぐ彼VS全員の乱闘が始まってもおかしくない状況。

「——お静かに」

その一触即発の場を制したのは彼女の一言。今にも爆発しそうな生徒たちを言葉だけで抑える。それだけで学園内における彼女の立場の高さがうかがい知れるだろう。

「大口結構。真贋しんかんはすぐにハッキリしますわ」

彼女は彼を値踏みするように見つめる。彼も真つすぐ見つめ返す。

互いの視線で火花が起こりそうなその時、

「ねえ、決闘するのは決まったみたいだし、バトルフィールド作ろうか？ 50m×50mの高さは5mで良い？」

野次馬の1人——「結界ちゃん」が声を上げた。

この雰囲気の中、のほほんと発言できる彼女は意外と大物かもしれない。

「よろしいでしょうか？」

「好きにしろ」

彼が了承した途端、周囲の空間が一瞬歪み、すぐ元に戻る。

結界ちゃんが二人を覆うように透明な壁——結界を張ったのだ。

「…これはすごいな」

さつきまで何も無かった空間を彼がノックすると、見えない壁がコンコンと音を立てる。

「強度は…」

彼は腰を落として、渾身の正拳突きを繰り出す。

バリイン！

大きな音を立てて見えない壁が割れた。粉々に砕けた破片は地面に落ちる前に消滅する。

「おい、これじゃ壁にならないぞ」

「ご自慢の結界を破られた結界ちゃんは、驚きの言葉を漏らす。

「……あれ、人間？」

「異能者でしょ」

「いやそれは分かってるけど！ それでもおかしいって…。私の結界……ええ…？」

戸惑う結界ちゃんを他所に、彼は宣言を続ける。

「どうやら、バトルフィールドは無しみたいだな。悪い悪い」

「……どうやら私の蹴りを防いだのは偶然ではないようですよすわね」

彼の技を見た彼女は表情を引き締め、組んでいた腕を解いた。

「決闘の内容は『負けた方が勝った方の言う事を何でも一つ聞く』
で、よろしいでしょうか？」

「賛成。分かりやすくして良い」

彼はその場で小刻みにジャンプを繰り返して、リズムを刻む。同時に
体内の『異能』キユリアを加速させ、戦闘態勢に入った。

ここで解説。

シンギユラリテイ

『異能者』の体内には『異能』と呼称されるエネルギーが流れている。『異能』は血液のように生理的な機能として体を循環し、身体能力を向上させるのだ。

訓練された異能者であれば『異能』の循環速度を早める事で更なる能力向上を望める。彼も、当然彼女も非常に高い練度で異能を循環させられる事だろう。

「さて、ルールも決まりました。後は戦いの火蓋を切るだけですわね」
彼女も構えを取り、全身の異能を加速させる。

かみとくさり

「上戸鎖 柄鎖、参ります」

つかさ

「口上ね、合わせてやるよ。狼森 狼牙、推して参る」
おいのもり ろうが

決闘の火蓋が切って落とされた。

2話 勝敗

「上戸鎖かみとくさり 柄鎖つかき、参ります」

「口上ね、合わせてやるよ。狼森おいのもり 狼牙ろうが、推して参る」

狼牙が決闘の口上を言い終えた瞬間、狼牙の目の前には柄鎖が。彼はステップの途中で足が完全に大地から離れてしまっている。

「っ…!!」

柄鎖の掌底。狼牙は咄嗟にガードするも、宙に浮いたままでは踏ん張れる術もなく、思い切り吹き飛ばされる。彼は何とか空中で体勢を立て直し、校舎の壁で受け身を取った。そのまま壁を蹴り、元の位置に戻る。

「異能者シンギユラリテイ 同士の戦闘でステップ…随分と悠長ではございませんか？」

異能者は一般人と比べものにならない程高速で動ける。一般人同士の戦いでは隙にならないような僅かな対空時間も、命取りとなり得るのだ。

忠告をした柄鎖は地に足をべったりと付ける不動の構え。武道に心得の無い者でも隙の無さが窺える巖いわおのような立ち振る舞い。

「ボクシングの試合を見て俺に合つてそうだとステップを取り入れたが、実践じゃ通用しねえか。…親父が生きてりゃこんな無様を晒す前に注意してくれたんだろうな」

少しだけ苦しそうな表情を見せた狼牙。柄鎖の忠告を素直に聞き入れ、彼も地に足を付けた。

「俺は実戦経験がほぼ皆無でな。この試合で色々と学ばせてもらおうぜ」

「私も貴方から何かを学べれば幸いです。もつとも、学ぶに値するモノを持っているかが一番の問題ですが。さ、存分に拝見させてくださいませ」

柄鎖は構えから流れるように手を突き出した。そして手招きをして「来い」と挑発する。

「言われずとも」

今度は狼牙が一気に距離を詰める。縦拳、フック、ローキック、ス
トレート、手刀、膝蹴り。近距離クロスレンジで何度も手を出すが、柄鎖に全て弾
かれてしまう。

とはいえ、彼女の防御には余裕が無い。ギリギリで凌いでいる状態
だ。事実、あわやという場面も多々見られる。

しかし、決め手に欠けるのか数十合のやり取りの後、狼牙の方から
距離を取った。

「ふう…っ」

「スー…フー…」

お互いに息を整え、仕切り直し。先に動いたのは狼牙だった。先ほ
どより前傾姿勢になり、攻めっ気を見せる。

「——なるほど、大体わかった」

狼牙の意味深な発言。その意図を読み切れず、柄鎖は僅かに眉をひ
そめる。

直後、狼牙の突進。縦拳、フック、ローキック——ここまでは先ほ
どと同じ。柄鎖も同様に対応する。

しかし、ここからが違った。

「お前の…隙っ!!」

狼牙が腰を落とし、体と腕を捻り、正拳突きしゅうきゆうの構えに。その構えは
まるで引き絞られた強弓しやうきゆうの様。

正拳突きへの移行自体は異能者からすればかなり遅い動作だった。
しかし、柄鎖にとつては一度体験した流れからの急な転調だったため
反応が遅れる。加えて、柄鎖にはローを攻められた後、僅かに胴体へ
の注意が疎かになる癖があった。

「…っ—」

柄鎖が一瞬驚いた後、ボディを守る。しかし、そんな間に合わせの
防御で防げるほど狼牙の正拳は安くない。数百万回と繰り返された
一撃は彼女に少なくないダメージを残す…：はずだった。

ガイン!

「ぐ…っ!?!」

狼牙の拳と柄鎖の腹がぶつかった瞬間、金属質な音が響いた。想定

外の痛みに、狼牙は手を抑えている。

「——っゲホ、ゲホ……っ」

正拳を叩き込まれた柄鎖もお腹を抑えながらむせていた。しかし、ダメージはそれほどではなさそうだ。

「——まさか数合のやり取りで私の『癖』まで読み取るとは。素直に脱帽ものです。しかしこの学園、体術だけではまかり通りません」

「いったい何が……？」

「金剛不壊^{こんごうふくわえ}。『異能』を用いた肉体の硬化。上戸鎖一族に伝わる奥義ですわ」

「なるほど……。これが噂の『奥義』」

体を循環する事で身体能力を向上させる非科学的エネルギー^{キョリア}『異能』。それだけではなく、循環の方法を工夫する事で特別な現象を引き起こすことも出来る。それが『奥義』。

その強力さは、奥義を使える異能者と使えない異能者では大きな差が生まれてしまう程。故に、開発された奥義は一族での秘伝とされ、外部に漏れないように扱う事がほとんど。企業と特許の関係を想像するのが一番分かりやすいだろうか。

二人の間には再び問合いが広がっている。柄鎖はゆつくりと、しかし隙のない動きで構えを取った。

「私の金剛不壊を破らぬ限り、貴方に勝ち目はありません。しかし、どうやら先ほどの攻撃が素の貴方の最高火力のご様子。」

——『素能』^{エレメント}、お先に切つては如何でしょうか？」

『素能』^{エレメント}。異能を消費することで発動できる特別な能力。発動できる能力は個人によって異なる。

素能には様々な能力があり、人にとっては切り札となり得る。しかし、身体能力を強化する異能^{キョリア}を消耗してしまうため、その後の戦闘力が落ちてしまう弱点もある。

そのため、素能はここぞという場面だけで使うのが理想だ。

「……チツ、こんな大勢の前で見せたくは無かったが……」

狼牙は靴と靴下を一瞬で脱ぎ、素足で大地を踏みしめる。体勢は低

く、腕を前に垂らして脱力。

彼の構えが変わり、柄鎖が警戒を強める。普通であれば警戒した彼女の制空権に突っ込むのは危険な行為だ。しかし、狼牙は構わず突っ込む。地面スレスレの超低空ダッシュ。

「な……っ！」

人の身ではまず不可能な体勢での突進に柄鎖が目を剥いたのも束の間、次の瞬間には狼牙の掌底が彼女の脇腹に突き刺さっていた。

「ガイーン！」

相変わらずの金属音が鳴るが、狼牙は気にせず腕を伸ばし切った。柄鎖の体が一瞬浮いた後、地面に靴を擦りながらスライド移動する。会心の一撃を入れた狼牙はすかさず追撃に行く。二撃目もヒット。だが、柄鎖も負けじと手を出していた。相打ち気味にお互い弾かれ、仕切り直しの距離に。

「——ゴ、ブツ……ゴボツ、ゲホ……ッ！」

柄鎖は構えを崩さないまま、血反吐を吐いた。辺りに濃厚な鉄の臭いが広がる。

内臓損傷。相当なダメージを受けたはずだが、彼女はあくまで冷静だった。

「——超低姿勢でのダッシュ、さつきとは比べ物にならない速度、金剛不壊を破るパワー、そしてダッシュ中、膝が普通とは『逆に』曲がった事。すべてを合わせて考えると……狼牙様の『素能』は動物の力を宿す身体能力向上系でしょうか」

凶星。たったの一合で自分の素能をほとんど見破られ、狼牙は顔を歪めた。

狼牙の素能、^{ヴォルフ}『狼化』。発動すると単純に身体能力を向上させられるほか、脚の関節を狼のように変化させ、四つん這いに近い体勢での行動が可能となる。

「追撃が甘くなければ、貴方が勝っていたやも」

「……へっ、口から血イ吐きながら何強がってんだか」

柄鎖の洞察力と冷静さに少しだけ気圧された狼牙だが、客観的に考えれば彼の圧倒的有利。柄鎖は狼牙のスピードに反応できなかつた

上に、彼のパワーは金剛不壊を貫く。

ネットクなのは未だ判明していない柄鎖の素能ぐらいか。

(なら、素能を使わせる暇も無く速攻で！)

狼牙は伏せの状態で四肢に力を込める。四つん這いからの突進。

彼の素能、^{ヴォルフ}「狼化」の専売特許。

全身の骨格構造が音を立てて変化する。二足歩行から四足歩行に適した体へと一瞬で変化を遂げた後、前足と後ろ足で地面を蹴った。

狼牙は地を這う姿勢で柄鎖の前まで近づき、足払いを繰り返す――が、その攻撃は空を切った。

払おうと狙っていた柄鎖の足が空に。その足は迷わず狼牙を踏みつけに来る。

「ガッ……！」

柄鎖の足が狼牙の腹へと的確にめり込んだ。すかさずマウントを取りに来た彼女に対して、彼は痛む体を何とか動かして対抗する。しかし、寝技・関節技の間合いでの戦闘経験が彼には一切なかった。

数秒も経たず、狼牙の喉に柄鎖の腕がねじ込まれる。彼の気道は完全にロックされ、酸素の補給がままならない。

「超低姿勢での突進。まさか同じ技が二度通じるとお思いで？ ……降参なさい。パワーに優れているようですが、裸締めから逃れられるほどではないでしょう」

降参。狼牙にとってはありえない選択技だ。そんなことを考えるどころか、今の彼は柄鎖の手加減に対して怒り心頭だった。

(気道じゃなく動脈を絞めれば即座に俺を気絶させられるものを。この状況を詰みと勘違いしているのなら、誤解の代償をキツチリ払って貰おうか……！)

狼牙は素能を全開で発動した。出力を上げすぎると消耗が激しいため、今まで本気を出していなかったが……なりふり構っていられなくなっただろう。

狼牙は渾身の力で柄鎖の腕を掴んだ。

「……っ！」

金剛不壊で硬化しているはずの柄鎖の腕。しかし、そんなことお

まいなしに狼牙の指は彼女の腕を破壊していく。血管を潰し、肉を千切る感触が彼の指に伝わって来た瞬間、ついに柄鎖の腕が解かれた。狼牙は自由になった気道から酸素を確保しつつ、掴みから握りへとグリップを変える。そのまま柄鎖の腕を引き、よろける彼女に素能の出力全開のまま一撃を繰り出した。

(これで……勝ちだ!!)

狼牙のパワープレイは不格好だが成功した。彼の拳が柄鎖の腹に吸いこまれていく。彼の全力を込めたりバーブロー。柄鎖の肝臓を再起不能に陥れるであろう殺人拳。

ガイン!

——果たしてそれは、金属質な音に阻まれた。

「……は？」

(金剛不壊? いや、そんなチャチな防御突きやぶって……)

困惑する狼牙。彼は脚を引っ掛けられてすつ転ぶ。直後、視界いっぱい柄鎖の拳が。

彼の記憶はそこで途絶えた。

◇

狼牙の顔面へと綺麗に振り下ろされた拳をゆっくりと浮かせる柄鎖。鼻血が粘着質な音を立てて糸を引いた。

「私の素能、^{ポンド}鎖枷^{ポンド}は相手の素能を無効化するガスを発生させる能力。異能の消耗も激しいので常時発動はしておりませんが」

柄鎖が狼牙に説明する。とはいえ、その受け取り手はピクリとも動いていないが。狼牙の姿を見て、野次馬が歓声を上げた。

「だっせえ!! 大口叩いて負けやがった!!」

「流石御三家の一角。ぽっと出の転校生には負けないか」

「けど、良い勝負だったんじゃないか? 編入生にも有効打あったし」

「それよりあのパワー! 私の結界ぶっ壊したんだよ、アイツ!!?」

「とはいえ、今じゃ地面のシミだ。大口叩いた報いだけ」

「挽かれたカエルみてえだな！」

「言えてる！」

狼牙の意外な実力に驚く者3割、イキつたにも関わらず負けた狼牙をバカにする声7割。勝敗がついた途端、口々に感想を言いながら中庭から人が掃けていく。ついには柄鎖と狼牙だけが取り残された。

「……………」

柄鎖は狼牙の顔を殴った手を見つめる。

「僅かに固い感触。不完全でしたが……金剛不壊？ まさか、戦いの中で模倣をしたとでも……？」

そう呟いた後、柄鎖は狼牙を抱き上げる。

「面白いお人。残り短い人生の退屈しのぎにはなりそうですわ。…ゲホ…ツ」

柄鎖は意味深な言葉を発した後、血を吐く。

「…私のダメージも洒落になっていませんわね。腕の一部を千切られかけもしましたし。一緒に治療を受けるとしましょう」

そうは言うものの、保健室へと向かう彼女の足取りはしっかりとしたものだっただけ。

◇

(…ガ、…口…ガ、…狼牙ツ！)

懐かしい声だ。

(立てツ、狼牙！ 稽古はまだ終わってないぞツ！)

ずっと聞いていたい。

(お前は最強の異能者になるんだ！ この程度で音を上げている場合かツ!!)

ああ、そうだ。俺は強くなって…強くなって…

「お、や…じ…」

「はい、私は親父じゃない。ついでに男でもない」

うわ言を呟く狼牙が、知らない人の声に反応して目を覚ます。

「つぐ…！」

「無理しなさんな。顔にデカいの貰ったんだ。急に体を起こすとフラつくよ」

狼牙の身を心配する人物は白衣を着た女性。異能学校の保険医だ。そしてここは保健室。

とはいえ、狼牙は自分が置かれている状況を把握しきれておらず、困惑している。

「…そうだ！ 決闘！」

「そ、決闘。君は負けてここに担ぎ込まれたってわけ」

保険医が狼牙の方に触れた。

「ほいっと」

気の抜けた掛け声の後、狼牙の全身の痛みや倦怠感が無くなる。

「とりあえず私の素能で治しといたから。…おっと、目を覚ます前に治しとけ、ってクレームは受け付けないよ。治療には私の異能だけでなく患者のエネルギーも大量に使う。すぐに補給が出来る状態じゃないと危ないのさ。点滴の針が異能者に刺さりやあねえ…」

そう言いながら保険医はベッドに付属のテーブルをセットし、その上に大量の料理が乗ったお盆を乗せる。

「食つときなさい。今の君に必要なエネルギーはそいつで賄える」

そう言い残して保険医は部屋を出て行ってしまった。取り残された狼牙は箸を手取る。

目の前の料理、まずはご飯を口にかき込んだ。碌に噛まずに飲み込み、次は魚。中骨も取り除かず、頭から丸かじりする。

「…ずずず…ぐすつ…」

一尾丸ごと、鼻汁と一緒に飲み込んだ。続いてサラダ。葉物が箸で上手くつかめなかったため、手づかみで口の中に運ぶ。

「…えふつゝ…ぐず…つゝ…」

ジャクジャクという小気味よい咀嚼音で嗚咽を誤魔化しながら、食

事を進める。今度は手羽先。骨ごとかみ砕く。

「……………くそっ……………くそっ ぐぞ……………っ ！！」

涙が肉に塩気を与えて丁度良い塩梅。ガリゴリと骨髓まで食らいつくした後は、汁物を一気に流し込む。

「……………おえっ げほっ、げほ……………っ ！！」

流し込む最中、しゃっくりを起こしてむせた。今まで胃に収めていた物が少しリバースする。器に戻した胃液混じりの残飯を再び胃に押し戻した。

（――次は負けるものか）

無様に負けた彼は強く誓う。親父との約束を果たすために。そして過去の自分を乗り越えるために。

3話 “なんでも” って約束

狼牙ロウガと柄鎖ツカサ、二人の決闘の翌日。昨日のダメージが残っているのか、狼牙の目覚めはいつもより遅かった。学園寮のベッドが思ったよりフカフカだったのもあるかもしれない。彼の実家のペラペラ布団とは大違いだった。

狼牙の部屋の中には沢山の段ボールが積み重なっている。昨日は夕方遅くまで気絶していたため、荷解きをする暇がなかったためだ。とはいえ、まったく荷解きをしていないわけでは無い。彼が最優先で段ボールから取り出したおいた荷物——仏壇の前に正座する。

仏壇の真ん中には狼牙の父親の遺影が。彼が線香に火をつけて香炉びやくだんに立てると、白檀びやくだんの香りが部屋中に広がった。

彼はこの匂いが好きだ。目を閉じれば、昨日の事のように親父との思い出が脳裏をよぎり——
「……」

同時に思い出したくない記憶もフラッシュバックする。どうしようもない自分の瑕疵かしに吐き気すら込み上げていた。

しばらくしてようやく気持ち悪さが収まる。今一度、白檀の香りを吸いこみ、立ち上がった。
「行ってくる」

その言葉に返事は無かった。

◇

異能学園1年A組。ここでは先生が教壇に立ち、今まさにホームルームが始まる所。

「え、本日のホームルームですが……なんとですね、転校生が来ております。先生、このセリフを二日連続で言うとは思いませんでした。」

入って来なさい」

先生に呼ばれた転校生——狼牙は教室の扉を開け、先生の隣まで悠々と踊り出た。クラスメイトたちは彼を見て様々な表情を浮かべる。軽蔑、値踏み、好奇心……様々あったが、一番多いのは驚きの表情。全員の視線が彼の首と手首に注がれている。

「はい、昨日決闘騒ぎを起こして一日中気絶していた狼森狼牙君おいのもりです。みなさん仲良くしてあげてくださいね。では狼牙君、軽く自己紹介を……と言いたい所ですが、その前に一つ良いですか？」

「なんだ？」

「はい、先生には敬語を使いましょうね。本題に戻りますが——なぜ君は鎖付きの首輪と手枷を嵌めているんですか？」

先生がそう言うのと同時に狼牙の首元からジャラ、と金属の音が鳴った。

「その問い、私がお答えさせましょう」

クラスの後方、昨日狼牙を負かした柄鎖が席を立つ。彼女は優雅に教壇まで歩み出て、彼の首輪から伸びる鎖を掴んだ。

「狼牙、自己紹介なさって？」

「……茨城から来た狼森狼牙だ。この女の……つぐえー！」

柄鎖に思いつきり鎖を引かれた狼牙。喉に首輪が食い込み台詞を中断させられる。

「言葉遣い」

「……茨城から来ました、狼森狼牙です。昨日づけで柄鎖……ご主人様のペットと相成りました。よろしくお願いします」

狼牙が自己紹介を終えると、クラスメイトが一齐に大爆笑し始める。先生は状況についてこれていないのか、口を開けてぽかんとしていた。

「良くできました」

柄鎖が俺の頭をこれ見よがしに撫でる。それを見て、クラスメイトは更に腹筋を崩壊させていた。

「ぎゃーっははははは!! 転校二日目でなんの冗談だそりゃあ!!」

「おいおい！ 狼が一匹教室に紛れこんでんぞ!!」

「こりや珍しい！ ニホンオオカミだ！ とつくの昔に絶滅しちゃったかと！」

「生物係決めんぞ！ こいつは手のかかりそうなペットが来たもんだ!!」

散々つばら馬鹿にするクラスメイト共。

狼牙がこんな目に合っているのは昨日の決闘のせいだ。

「勝った方が負けた方に一つ命令できる」

彼は歯ぎしりをしながら敗北の代償をしかと受け止めていた。

(……いつか全員ぶっ飛ばす)

とはいえ、内心穏やかではなかったが。

「はいはい、皆さん煽るのはそれぐらいにしてください。ホームルームもこれで終了です。狼牙君はその席に座ってください」

先生の注意で多少は静まったが、それでも少くない野次。狼牙はそれらを浴びながら指示された席に座った。彼の隣に柄鎖も座る。

「……お前の隣かよ」

「不満でしょうか？」

「何でも言う事を聞かせられるとはいえ、人間をペット扱いする異常者の隣に座りたい奴がいると思うか？」

「10000人に1人くらいはおられるのではなくって？」

「あいにくとおれは9999人の方だ」

俺が反論すると柄鎖は口元を抑えて笑う。

「…何が可笑しい？」

「失礼。首輪を付けたチワワが強がろうと吠えている姿が面白くてついで」

柄鎖の言葉を受けて、狼牙は怒りより困惑が勝った。

(こいつ、こんなに攻撃的な発言をするタイプだったっけか？ 昨日会った時はまともな奴だという印象だったが…改める必要があるかもしれない)

「ああ、そうそう。今日から私が貴方に稽古を付けて差し上げましょう」

「はっ？」

柄鎖の急な発言に更なる困惑が狼牙を襲う。彼が鎖の音を立てながら首を傾げると、彼女が説明する。

「貴方、この学園で最強になる事を目標にしているのでしょうか？まさか一人で達成するおつもり？」

「……」

今の段階では、狼牙より柄鎖の方が強い。これは昨日の決闘の結果から見た純然たる事実。

強くなるためには自分より強い柄鎖に稽古を付けてもらうのが近道。彼はそう考え頭を下げる。

「頼む」

「承知いたしましたわ。…とはいえ案外と素直ですね。あなたの性格からすると、もっと噛みつかれるものかと」

「俺の何を分かった気でいやがる。指導を受ける相手に頭を下げるのは普通だろうが」

「ごもつとも。それが分かっているならもう少し言葉遣いにも気を付けた方が良くのではななくて？」

「ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します、ご主人様。…これで満足か？」

「80点。ペットなら語尾に“ワン”とでも付けてみてはいかが？」

柄鎖の発言に狼牙は思わず目を丸くした。

さつき狼牙をチワワ扱いした事と合わせて考えると、彼女はお嬢様然としている時もあるが、本質はサディストそのものらしい。

狼牙はそう結論付けた。

「…フン、ペットに首輪と手枷まで付けるとは用意周到な事で。動物愛護団体に叩かれなきやいいがな」

「あら、猛獣ですもの。キチンと鎖に繋いで置かなければ周りに迷惑をかけてしまいますわ」

皮肉を軽く受け流す柄鎖。狼牙は辟易としながらも、疑問に思ったことを聞く。

「……どうしてお前は俺に稽古を付ける？ お前のメリットは何だ

？」

柄鎖と狼牙のファーストコンタクトは控えめに言っても最低最悪だったと言えるだろう。にも関わらず、彼女は彼の目標の手伝いをすると言う。

不気味だ、その点については納得を得ておきたい。そう思つての質問。

「メリット、ですか？」

そんなことをどうして聞くのでしょうか？　と言わんばかりの顔で柄鎖は首を傾げる。

「名家の子女として、手伝いが必要そうな人を助けるのは当然のことでございますわ。ほとんど習慣のようなものですので、メリットと言われると…少々言葉にはしづらいですわね」

「柄鎖様！」

柄鎖が顎に手を当てて考え込んでいる所に、クラスメイトが大きな声を上げながら駆けつけてくる。

「向こうのクラスで三森君と日高君が乱闘騒ぎを起こしそうですね！　彼らの素能で暴れるとなると校舎が半壊しかねません！　仲裁に来てはくれませんか!？」

「私からもお願いします。柄鎖さん」

教師風の男が柄鎖に頭を下げる。乱闘騒ぎを起こしているクラスの担任だろうか。教師が生徒に頭を下げるとは何とも奇妙な学園だ。個人の武力に差がありすぎる異能者の学校ならではの光景か。

「承知しました。すぐに向かいます」

「一限まで10分も無いのに乱闘騒ぎ。この連中は血の気が多すぎないか？」

「入学早々私を煽って決闘を行った貴方が言いますの？　…後10分しか無いからこそ仲裁する必要があるでしょ」

「いつもありがとうございます」　「いえ、名門御三家として当然の事ですわ」　などと言葉を交わしながら、柄鎖と取り巻き達が教室を出ていく。

（あいつ、サディストなのに周りの奴らから慕われてはいるんだな。

というか、サディストと世話焼きの性格って両立できるものなのか
…)

助けるのは当然、と言う発言から慕われる性格を持ち合わせている
のも確かなのだろう。とはいえ、真逆のSっ気を存分に味わった彼と
しては少し納得いかなかった。

◇

狼牙が柄鎖の性格について頭を悩ませていると、いつのまにか教室
から人氣がなくなっていた。全員、乱闘騒ぎの野次馬に行ったのだろ
うか。

(…俺も見に行くか)

そう思い狼牙が腰を上げた瞬間、

「始めまして、なのです」

彼に後ろから抱き着く影が。

「っ……」

狼牙は咄嗟に抱き着いて来た腕を掴み、背負い投げ。投げの途中で
腕を振りほどかれたため、すっぽ抜ける。急いで顔を上げるが敵の姿
は見えない。

「ビックリさせちゃいました？」

またしても後ろから声が。狼牙が急いで振り返ると、そこには彼よ
り少しだけ身長の高い女性が立っていた。

その子の容姿。前髪は切り揃えられており、もみあげが長い。髪色
のベースは濃いベージュで、所々に白のメッシュが入っている。そし
て長い後ろ髪を彼岸花の簪で留めていた。

顔つきは幼く、特徴的なのはその瞳。彼女の瞳孔は渦巻いており、
見ていると飲み込まれそうな異様さだ。

「なんで俺の背後を……！」

狼牙は耳が良い。ほんのわずかな物音も聞き逃さない自信が彼に

はあった。にも関わらず、目の前の彼女は彼の背中を取ったのだ。

それは彼に警戒心を抱かせるのに十分な理由だった。

「私、気配を消すのが得意なのです。……あ」

彼女は狼牙の後ろに目線を送り、素っ頓狂な声をあげる。それに釣られた彼が後ろを振り向く。が、何も無い。彼が再び顔を前に向けると彼女は消えていた。

「こんな風に、ね？ えへへえ……」

視線を切った狼牙は再び後ろから抱き着かれていた。何となく予想出来ていたため、驚かずに済んではいるが。とはいえ、ねつとりした女の笑い声に寒気を覚えていた。

僅かに注意を逸らしただけで背後を取られた。これが実践だったら致命的だ。

「…何の用だ？」

「お友達にならないのです？」

「誰が？ 誰と？」

「狼牙くんが、私と」

「断る」

「そんなこと言わずに、ね？」

こんな珍妙で得体の知れない奴と関りを持ちたくは無い。狼牙はそう思いながら、耳元で囁かれたこそばゆさに眉を歪めていた。

「まずはお友達の第一歩として、お互いの事を知ります。狼牙くんは…2月8日生まれ、遅生まれなんです。血液型はO型。奇遇です。ねえ、私もO型なんです」

彼女は狼牙の学生証をいつの間にか手に持ち、それを参照してつらつらと感想を述べていた。

「俺の学生証！ 財布に入れてたはずじゃ…!？」

「私、手癖も悪いのです。こんな風に、ね？」

彼女は悪びれもせずに狼牙の財布をひらひらと見せびらかしてくる。その後、彼の上着のポケットに財布を押し込んだ。

そこまでは調子の良かった女だったが、一転して悲しそうな口調に。

「私、お友達が少ないのです」

「だろうな」

「だからこそ狼牙くんとは是非お友達になりたいのです」

彼女は狼牙に一層密着する。

「まさか私と『同じ匂い』の子が転校生として入って来るとは思わなかったのです。これは運命なのです」

「同じ匂い？」

狼牙鼻を鳴らして匂いを嗅ぐが、彼の体臭と彼女の体臭は全く違う。彼が疑問符を頭に浮べていると彼女が答えてくれる。

「雰囲気的な意味での匂いなのです。」

そう、私と同じ——人殺しの匂い」

「……」

「狼牙くんはどう感じたのです？ 人を殺す時。あ、そもそも何人ぐらい殺した事あるのです？ 私……」

「少し黙れ」

心の急所に無断で触れられた狼牙が強めに言うと、女生徒は首を竦める。

「ご、ごめんなさいなのです……。私、自分の得意な話題になるとつい止まらなくなっちゃうのです。こういう所がウザイって思われちゃうんですよね……」

彼女は狼牙に絡ませていた腕をほどく。それからしばらくの静寂。

かき乱された心を落ち着けた彼は、背後で立ち尽くす女の方へと振り向いた。

「……名前は？」

彼女はビククリするほど目を見開いた後、慌てて学生証を取り出す。そして狼牙の目の前に突き出した。

五文銭 ごもんせん 二四三 ふししみ

「できれば『フシミン』って呼んで欲しいのです」

フシミンは小さい声で照れながら言った。

4話 戦闘スタイル

転校初日に決闘、気絶、二日目の朝に人からペットに格下げされ、更にはヤバい奴に絡まれるという幸先の悪いスタートを切った狼牙。しかし、そこからは無難だった。1限から4限まで授業を受けて昼食。5限、6限と授業を受けて放課後に。

「柄鎖、自由時間だ。稽古を付けてくれるんだろ」

彼は今日の朝に取り付けた約束を持ち出して、柄鎖に話しかける。

「気が早い事でございませぬね。…ま、今日は予定もありませんし、良いでしょう。それでは体操着に着替えた後、私についてくるように」

「分かった」

「更衣室は間違えないようお願いしますわね」

「分かってるよ!」

狼牙は半ギレ気味に更衣室へと向かい、速攻で着替えて戻って来る。

「着替えてきたぞ。で? お前について行けば良いんだったか?」

「ええ、私が利用している修練場まで向かいますわ。10kmほど距離があるのでウォーミングアップがてら走りますわよ」

そう言つて柄鎖は走り始める。狼牙も彼女の3歩後ろについて後を追う。二人は車道を時速60km程で駆けながら会話を交わす。

「更衣室へ行く時に耳に挟んだんだが、『ランキング』ってのは一体何なんだ? 中庭で殴り合ってる奴らとその野次馬が言ってたが」

「察しはついていてるでしょうが、改めて説明すると学内の強さのランキングでございませぬ。学園公式のものではなく、生徒間で勝手に決めている非公式なものではありませんが」

「生徒間で勝手にね…。具体的に聞いても?」

「システムは単純。下位の者が上位の者に勝てば、ランキングの入れ替えが発生します。その逆は何も起こりません」

「そのシステムじゃ、上位の奴が決闘を受けるメリットがない。ランキングを奪われるだけだ」

「上位の者は下位からの挑戦を月に1回以上受ける決まりがあります」

わ。それを破ればランキングが下がります」

「なるほど」

雑だが分かりやすいシステム。学生間で管理するにはこれぐらいの方が良いのだろう。

「管理方法は？」

「スマホのアプリでございますわ。学園の有志が開発したものを使っております」

「脳筋ばっかじゃねえんだな、この学校」

「…異能者は戦う事以外頭が無いと勘違いしておられなくって？」

「少なくとも俺は戦い以外頭に無い」

「さもありなん、でございますわね」

柄鎖が引きつった笑い顔を浮かべた後、続けて口を開いた。

「最強を目指すだけの貴方には関係ないかもしれませんが、ランキング上位で卒業すればその後の就職が有利になる恩恵もありますわ。SPや警察、自衛隊の特殊部隊などですわね。とはいえ無条件で就職というわけにはいきませんが。やはり実力だけでなく精神面での適正というのもありますから」

「そうか」

狼牙は興味が無い事項を適当に聞き流し、聞きたいことを聞く。

「ちなみにお前のランキングは？」

「1位」

「喧嘩の仲裁に呼ばれるわけだ。……って事は、お前を倒せば学園で最も強くなれると」

「素能の相性もありますから最強を語るのは難しいと思うのですが…平たく言えばそうなりますわね。……などと話している間に目的地に到着いたしましたわ」

柄鎖が足を止めたのに倅なぐらい、狼牙も足を止める。10分ほど走って到着した施設。柄鎖は修練場と言っていたが、四角で入り口がガラス張りの建物は一見すると研究所のように見える。100歩譲ってトレーニングジムといった所か。

柄鎖の後を追って狼牙も施設の玄関をくぐる。中はますます研究

所といった様相。

「柄鎖様、本日はどのようなご用件で」

「いつも通り修練を積むだけですわ。後ろの方もご一緒に」

「承りました。後ろの方のお名前は？」

「狼森狼牙」
おいのもり

「：はい、登録完了いたしました。こちらのゲスト用IDカードをお使いください」

入退室を管理・制限するIDカードの存在。ますます研究所のよう。

「受付じゃあ随分と偉そうだったが、ここはお前の所有する施設なのか？」

「偉そうにしたつもりはないのですが：：そうですね。正確には
かみとくさり
上戸鎖家が所有する施設です」

「名門ってのは俺の想像以上に金持ちなんだな」

「当然でしょう。上戸鎖家は名門の中でも御三家ですから」

名門。

約100年前に異能者シンギユラリテイが誕生してから、特に実力の高い者を始祖とした一族の事。

異能者の人間離れた戦闘力は軍事・国防に大きな影響を与える。それを考えると、国際情勢が不安定だったころの異能者の名門がどれほど高い権力を持っていたかが予想できる。

現代では戦車やラミサイルやらの開発で昔ほど異能者の戦闘力に頼らなくても良くなったが、それでも名門の影響力は大きい。

御三家。

名門の中でも特に大きな三つの家の事。

上戸鎖家、黒葛原家つづらはら、雷家いかづちの三つがそれに該当する。御三家ともなると一つの家だけで東証一部上場企業に匹敵する影響力を持つと噂されるほどだ。とはいえ名門はどこも秘密主義のため、実態は明らかではない。

などと解説している間に、柄鎖がIDカードを扉にかざすと自動で

扉が開けていた。狼牙もそれに倣って部屋の中に入る。

部屋の内装は武骨の一言。ある程度広さのある空間に科学的な装置が2、3個置いてあるだけ。

「ここが修練場でございませぬ。壁や床に最新の高硬度素材を使用しておりますので、多少のヤンチャも問題ありません」

「ホントか？」

自信満々に語る柄鎖。その真偽を確かめるべく、狼牙は壁に向かって正拳突きを繰り返した。

ベゴオ！

ウー！ウー！ウー！

「……壁、半壊したぞ？ 何か警報も鳴ってるし」

「……くっつ勝手に壁を殴らないでくれます!? 多少のヤンチャと言ったでしょう!!」

「……すまん」

これに関しては自分が全面的に悪い。そう思った狼牙は素直に謝った。

◇

警報を聞いた研究員たちに嚴重注意を受けた後、再び柄鎖と部屋に二人きりに。

「……さて、気を取り直して修練を初めましょうか」

「オネガイシマス」

狼牙は最新の高価な素材を用いた壁をぶっ壊したにも関わらず、弁償はしなくても良いと言われた。その負い目のせいでカタコトになっってしまったのかもしれない事だろう。

「まず初めに貴方が普段どのような修練を積んでいるのかを見せていただきたいと思いますわ。それによって指導の方法も変わってきますので」

「普段の修練か……」

渋る様子を俺が見せると、柄鎖がすかさず突っ込んでくる。

「あら、何か問題でも?」

「いや問題というか器具がな…」

「トレーニング器具なら古今東西の物を取り揃えていますわ。電話一つですぐに倉庫から運んでこさせられます」

「そうか。なら全面ガラス張りの部屋を用意してくれ」

「……ちよつと待ってくださいる?」

しばし頭を抱える柄鎖。結局ガラス張りの部屋は用意できなかつたようだが、数十枚の鏡を部屋の中に運んでくることで代用してくれた。

「本当なら上にも鏡が欲しいんだが…まあ良い」

最低限の環境が整った所で狼牙は練習を開始した。

まずは腕を水平に広げる。すると、周りの鏡に映る彼も腕を広げる。彼は腕を水平に広げたつもりだったが、鏡の自分を見ると僅かに右腕が上がりすぎていることに気づく。即座に修正した。

今度は真上に手を挙げる。鏡を見ると、僅かに左腕が前に傾いていた。これも修正する。

その後も様々なポーズを取り、イメージと現実とのずれを適宜修正していく。これが彼の準備体操だ。自らの体を思い通り、しかも寸分の狂い無く動かせないようでは何も始まらない。チューニングは念入りに行う。

狼牙は調整中、鏡越しに柄鎖と目が合った。彼女は何を思ったのか、右手の甲を左の頬に添え、左手を右腕の肘当てに持つていく。いわゆるお嬢様の高笑いポーズ。：真似してみろという事だろうか。

狼牙がお望み通り、と言わんばかりに完璧に真似してやると、今度は簡単なステップを踏み始めた。彼はそれも完璧に真似してみせる。

すると、単調なステップが一気に複雑なリズムに。加えて上半身の振りも加わり、お金を取る完成度の踊りを披露し始める柄鎖。

当然狼牙もそれを模倣する。流石に一度目では完コピ出来なかつたが、柄鎖は踊りをループさせていたため、2度目のループで完全模倣を完了させた。

「…この振付け、一応習得に2週間はかかったのですけれど」

「遅くないか？」

「貴方が早すぎるだけでしょうに…。私の金剛不壊を昨日の戦いだけで模倣した前例もありますし、天才型ですね」

「天才、ね…」

天才。生まれつき備わった優れた才能。

「優れた」というのは絶対的なものではなく、周りとの比較で決まる相対的な指標だ。しかし、狼牙は親父としかまともな人付き合いをしてこなかったため、相対的な判断が出来ない。そのため、柄鎖の天才という言葉が素直に受け取っていいのか判断に困る。

「…俺が天才かどうかは知らんが、模倣については親父が教えてくれた。幼い頃から人の模倣をし続けてきた」

深呼吸をする。

「学ぶ事とは、真似ぶ事」

大地に両足を付ける。

「強者の術を真似ぶ事」

昨日手合わせした強者の姿を思い出しながら構えを取る。

「それすなわち、人類の英知である」

狼牙の構えを見た柄鎖が呆れた顔をする。

「私の構え。まあ、貴方なら簡単に模倣できるでしょうけど」

「お前と俺とじゃ体格が違うから俺に最適な構えではないが」

狼牙が構えていると、突然柄鎖が手を出した。上段、中段、下段。い

きなりの攻撃だったが、狼牙はそれらを丁寧にさばく。

「この構えは良いな、守りやすい。それでいて…ッ！」

地面を蹴り、一瞬で柄鎖に肉薄する。

「詰めやすい。攻防一体の良い構えだ」

「それはもう、我が家に伝わる基本の構えですから。とはいえ、この構えは本人の技量をそのまま反映する鏡のような構え。熟練者にとっては守れば堅牢、攻めれば烈火と形容できる隙の無い構えですが、未熟者にとっては守っても脆弱、攻めても小火と化してしまう。

狼牙様におかれましては、私の守りを打ち破った攻めの嗅覚に関し

ては文句のつけようもございませんが…」

柄鎖は先ほどと同じように狼牙に向けて手を出す。しかし、先ほどとは勢いが桁違いだ。彼は反射で凌ぐが、次第に手が足りなくなってくる。ついには、喉元へと手刀を突き付けられてしまった。

「守りの方は今一つの様ですわね。本能的すぎます。動きに無駄が多くなっていますわ」

狼牙は急所に突き付けられている柄鎖の手を払う。

「ふん、守る前に攻めて倒せば良いだろ。そっちの方が俺に向いてる」「そうですわね」

俺の言葉に柄鎖も同意。

「技術を教えてどうこうなる状態ではありませんし」

そして口元をニヤリと歪めながら呟く。狼牙の優秀な耳はそれを聞き逃さなかった。

「どういう事だよ？」

「あら、聞こえていましたか？ 独り言のつもりだったのですが」

「御託は良い。さっきの呟きはこういう意味だ」

狼牙が追及すると、柄鎖は強く一步を踏みだしてくる。突然の踏み込みに驚いた彼は反射的に一步下がる。

その隙に柄鎖が狼牙を押し倒し、上に覆いかぶさった。

「な、にを…？」

狼牙は押し倒されたものの、敵意は感じなかったためされるがままに。

「守りが本能的で単調。その理由は貴方が一番良く理解して無くて？」

柄鎖の顔が狼牙の喉元へ近づく。そして、彼の喉ぼとけの上を生暖かいものが這った。その感触に生理的嫌悪を覚えた彼は、腕を使って柄鎖をつき飛ばそうとする。しかし、のしかかっているという位置の有利さを活かし、柄鎖は彼を抑え込んできた。

柄鎖の舌は狼牙の頸動脈を捉え、起伏を何度も往復する。ついには、歯が肌に食い込むその瞬間、柄鎖から強烈な殺気が放たれた。

狼牙は考えるより先に体が動いていた。今出せる限界まで素能の

出力を引き上げ、柄鎖を蹴り飛ばす。そして急いで立ち上がった。ここでようやく彼の全身の皮膚が泡立つ。

口から飛び出そうな程心臓が脈を打っている狼牙とは対照的に、柄鎖は彼に蹴られた部分の埃を淡々と払っていた。

「……っ、い、良いところのお嬢様が随分とはしたない真似をするんだな」

狼牙は一息に言い切ってから大きく息を吸う。彼が荒れた呼吸を整えている間、柄鎖は舌を唇から覗かせ、口角を吊り上げていた。

「お目汚し失礼。空威張りしている人を見ると、どうしても虐めたくなってしまう性さがなもので」

空威張り。

その言葉は狼牙のコンプレックスに突き刺さり、根を張り、萌芽する。二の句が継げない。せめてもの抵抗として、彼は僅かに湿った喉を必要以上に袖で拭った。

狼牙が黙り込んで顔を青くすると、打って変わって心配そうな表情を浮かべる柄鎖。彼女はゆっくりと狼牙に近寄り、無遠慮に頭を撫でる。

「申し訳ありません。悪い癖が出てしまいましたわ。言いすぎてしまったようで」

狼牙の頭に乗った手は大きく、固く、彼の親父の手に似ていた。何度手の皮が剥げたのだろうか。何度修練を繰り返して拳を傷つけたのだろうか。

撫で方は優しく、髪の流れに沿ってゆっくりと動く。

「……つやめろ！ ガキ扱いすんじゃねえ！」

狼牙は我に返り、頭を振って柄鎖の手を払う。

「あら失礼、子供扱いしてほしそうな雰囲気でしたので。それに満更でもなさそうでしたが」

「ふん……」

悪びれず言う柄鎖に、狼牙は腹を立てつつも反論はしなかった。撫でられて穏やかな気持ちになったのは事実だったため。

「……稽古、続けるからな」

「どうぞ。止めてしまつて申し訳ありませんわ」

◇

体のチューニングを終えて、ふと柄鎖の方を見るとこの施設の職員と何やら話し合っている様子だった。

「……そんなに金持つてねえからな」

「いったい何の主張ですの……」

壊した壁の代金を改めて請求されるのかと思つた狼牙の主張に、柄鎖は呆れた顔をする。

「貴方のパンチ力について話していただだけでございますわ。先ほど壁を半壊させた貴方の正拳突き。その破壊力を推定してもらつたのですが……これ本当ですか？ 計算ミスではなくって？」

「いえ、複数人で検算しましたので間違いないかと」

「そうですか。……え、良くこれを喰らつて、私生きていますわね

……。私、思っていたより頑丈かもしれません」

柄鎖はいつの間にか手にしていた扇子で自分を扇ぎ始める。

「ところで貴方、正拳突きの稽古はどれほど行つておいで？」

「左右合わせて1000回。それを毎日。ゲロ吐くぐらい体調の悪い日もこれだけは休んだことがない」

「流石に体調不良の日は休んだ方が良くと思いますが……。であれば杞憂だつたようですね」

「何が？」

「貴方の弱点ですわ」

弱点と言われた瞬間、狼牙は顰め面に。

「俺に弱点だつて？」

「ええ。分かりませんか？」

「……俺が模倣した技の事か？ 毎日の反復練習で体に技を染み込ませていないから、練度が低い。」

現にお前との決闘の最後、咄嗟に金剛不壊を使用したか、ほとんど硬化できなかった。……単純に金剛不壊が難しい技だったつてのもあるが。」

狼牙の答えを聞いて柄鎖はにっこりと微笑む。

「そこまで分かつているなら言う事はありませんわ。異能者たるもの、折れた肋骨が肺に刺さつていようが片腕がもげていようが、これだけは繰り出せるという「技」を持つていなくてはなりません。」

そしてその「技」は気の遠くなるような反覆練習をもつてしか会得できない。模倣を主とする貴方にはその技が無いかと心配しましたが：正拳突きがあるようですわね」

（狼牙！ 異能者たるもの、利き腕が千切れていようが内臓をぶちまけていようが、繰り出せる「技」をもつていなくはいかん！ 一日1000回だ！ 一日たりともサボるでないぞ！）

柄鎖の言葉に、狼牙の記憶の中の親父の言葉が重なる。

（武骨な手といい、発言といい。女のくせに男の親父と良く重なる奴だ）

狼牙がそうして感慨にふけていると、頭の上に手が乗った。

「だからガキ扱いすんじゃないぞ！」

狼牙は柄鎖の手を跳ねのけて距離を取る。

「あら失礼、つい手が。私、母性がある方なのかもしれませんわね」

勝手に撫でてきた当の本人は悪びれもしない。

「チツ：正拳突きの稽古に入らせてもらおうからな」

「どうぞ」

狼牙は腰を落として右腕を引く。体のチューニングを終えて万全の体はスムーズに構えを取ってくれる。理想のフォームである事を体感した後、拳を突き出す。彼の腕は半回転しながら風を切り裂き、衝撃波をあたりにまき散らしながら空を打った。

「お見事」

「……どうも」

もう一度正拳突き。今度は反対の腕で。

「稽古中に失礼しますが、今後のご予定をお伝えしておきますわね。」

貴方の稽古を見て方針は決まりましたわ。模倣の能力を加味すると実戦形式で経験を積んでいくのが良いでしょう。明日からは私がお相手しましょう。

それと一応健康診断も行わせていただきます。異能者シンギュラリティーたるものが資本。

明日は朝の5時30分にここへ集合するように。今日の夜は何も食わず、当日は検尿を忘れないようお願いしますわ
「分かった」

柄鎖の話が終わるのはちょうど、50回目の正拳突きの時だった。

5話 御三家

狼牙が柄鎖の元で修行をした翌日。

健康診断のせいで、早朝からバリウムやら発泡剤やら内視鏡やらを飲み込ませられた彼はすこぶる体調が悪い。しかし、学校をサボるわけにもいかず、ムカムカする胃を抱えたまま授業を受けていた。

キーンコーンカーンコーン

学校の終わりを告げる6限のチャイム。アブノーマルな異能者達が集まる学園といえどチャイムはノーマルな仕様。

「狼牙くん♪」

退屈な授業を終え、やっと稽古に励めると考えた瞬間、狼牙に抱き着いて耳元で囁いてくる女生徒が。

「なんの用だ、フシミン」

「今日は驚かないのですね」

「お前の匂いは覚えた。近付けば分かる」

彼は耳だけでなく、鼻も良い。

「じゃあ今度からは風下から近寄る様にします」

「脅かさないうって選択肢は無いのか？」

「一緒に遊びに行かないのです？ お菓子貰えるのですよ」

会話のキャッチボールが成り立たないフシミンに、閉口しかける口ウガだが、何とか持ち直す。

「行かない」

「そんな事言わずに。有名な御三家の子女たちが集まる華やかな会なのです。きつと楽しめるのですよ」

「……御三家、か」

「あ、興味出てきたのです？ お菓子貰えるので、是非行くのですよ」
「どれだけお菓子推しなんだお前は……まあ行くけど。案内しろ」

（御三家は異能者の名門の中でもトップスリー。その子女であれば、当然学園の中でも最高峰のはず。最強を目指すならそいつらの面を拝んでおいた方が良さだろう）

「分かったのです。じゃあ一緒に行くのです」

狼牙の了承を得たフシみんは狼牙の背中も絡みついたまま、彼を推すようにして廊下を歩く。

「というか御三家の御貴族様の会にお前や俺が入っていいのか？」

「んー…多分大丈夫です。黒子ちゃん（くろこ）がきつと許してくれます。彼女、優しいですから。私にいつもお菓子をくれるのです」

「お前の『優しい』の基準、誘拐される子供と同レベルだぞ」

雑談をしながら歩く事数分、小さな会議室に到着。大層な奴らが集まる部屋にしては、随分とこじんまりしている。狼牙は少し、肩透かしを食らった。

「失礼するのです」

「邪魔するぞ」

フシみんがノックもせず扉を開けたので、狼牙もそれに倣って入室する。すると5つの瞳が二人を射抜いた。

二つは柄鎖のもの。驚いたような呆れたような瞳。

もう二つは黒髪の女生徒のもの。人を値踏みするようなねっとりとした瞳。

後一つは狼牙より小さい女生徒のもの。侵入してきた二人の事などどうでも良いと思っていそうな無機質な瞳。

「二四三様（ふしのみ）、それに狼牙様まで…。今はちよつと御三家だけで込み入った話をしておりますわ。回れ右して今すぐ帰っていただけませんか？」

「まあまあ柄鎖君。せっかく来てくれたんだ、少しぐらいは良いじゃないか。別に聞かれて困るような事を話しているわけでもあるまい。それとも柄鎖君は二人のお客をもてなしする心の余裕すら無いのかな？」

柄鎖に待ったをかけたのは黒髪の女生徒。身長は160cm程。黒髪は背中あたりまで伸ばしている。顔つきは美人系で、服装は全身真っ黒。黒い制服に黒タイツ。今は被っていないが、学帽すら黒。そして常に微笑を浮かべており、何を考えているか分からない不気味さがあった。

ともかく、黒髪の女生徒に反論された柄鎖はため息をつき、

「…好きになさって」

それだけ言い放った。

「雷夢君もそれで良いかな?」

黒髪の女生徒は小さい女生徒に目線をやる。

「…」

彼女は喋らず、ただ目を閉じた。

「沈黙は肯定と受け取るよ。…と言う事で、改めて二人を迎えよう。何も無い部屋だがよろこそ、空いている席へ座ると良い」

「私は黒子ちゃんの隣に座るのです」

フシみんは黒髪の女生徒の隣に座り、机に置いてある個別包装のお菓子の手を伸ばす。狼牙は柄鎖の隣に座った。

「…どうしてここに?」

柄鎖が狼牙に小声で耳打ちする。

「フシみんに連れられて。御三家の奴らの顔を拝みにな」

「あの方とききたら…。というより『フシみん』って呼んでおりますのね」

「そう呼べって言われた」

狼牙がそう言うのと、柄鎖は笑いを堪えたような表情に。

「何だよ」

「いえ…何でも…。…フシみん…」

顔を伏せて妙な奴だ。狼牙はそう思った。

「さて」

黒髪の女生徒の声に引つ張られ、全員が彼女の方を向く。

「二四三君はともかく、そちらの狼牙君とは初対面だ。お互い自己紹介と行こうじゃないか。まあ、君は学園内じゃ有名人だから、ある程度は知っているんだけどね」

転校初日に決闘騒ぎを起こして気絶。二日目には首輪と手枷付きで柄鎖とのSMPプレイを晒した狼牙だ。それはさぞ有名人だろう。

「では私からいこうか。」

黒葛原家当主、黒葛原黒子。学園に通う身だが、一応当主を務めさ

せてもらっているよ。学園ランキングは柄鎖君に一步劣る2位だね」
「いたって普通の自己紹介。しかし、狼牙はどことなく嫌悪感を抱いた。黒子とは初対面のはずなのに。」

狼牙は妙に思いながらも、表情に出すことはしない。

「その歳で当主なのか?」

「そうだよ。両親が早くに亡くなってしまっただけね。そして私の他に子供をこさえていなかった。それで私にお鉢が回ってきたというわけだよ」

「…そうか」

親を亡くした。自分と同じ境遇の黒子に、狼牙は少しだけ親近感を抱いた。

「黒子ちゃんはとっても優しいのです。ゴミクズの私にもお菓子をくれますし、お茶だって淹れてくれるのです」

「二四三君、あまり自分の事をゴミクズなどと貶すものではないよ。ほら、こっちのチョコも食べたまえ」

(…優しいというよりは餌付けしているだけな気が…)

狼牙は何となく打算臭さを感じた。

「さて、次は雷夢の番だよ。その間に私は二四三君と狼牙君にお茶を淹れるとしよう」

黒子が席を立ち、戸棚から茶葉やティーカップの用意をし始める。

狼牙は少しだけその様子を眺めた後、自己紹介の手番を振られた女生徒——雷夢に目を向ける。

「……」

しかし、彼女は喋らない。顔を明後日の方に向けたまま佇むだけ。

「…柄鎖、なぜあいつは喋らない。声帯が無いのか?」

「いえ、ただ面倒くさがっているだけだと思いますわ。代わりに私が紹介しましょう。」

雷家七女、雷雷夢。見ての通り寡黙ですので、あまり話しかけすぎないように」

雷夢の容姿。身長は140cm程、紫の髪はボサボサで肩にかかる程度の長さ。服装はジャージ姿。そして一番特徴的なのはその左目。

瞳にヒビが入っており光彩が無い。先天的なものか、はたまた後天的なものか。

仮面を張り付けたように無表情な彼女は、常に不機嫌そうにも見える。

そんな雷夢の左目を狼牙が見つめていると、彼女の無表情があらさまに不機嫌な顔に。それ以上は止めておけど、柄鎖が狼牙の袖を引っ張った。

「こいつのランキングは？」

柄鎖もやや不機嫌な表情に。狼牙が忠告を無視したせいだろう。とはいえ問いには一応答える。

「…46位ですわ」

「確か全校生徒が約300人だから…。なんだ、御三家の割に結構弱いんだな」

「狼牙様」

柄鎖の嗜めるたしなような声が耳を打つが、煽りが止まらない。

「まあ、片方の視力がないんじゃないか」

ドギヤ！

テーブルが狼牙に向かって飛んでいく。彼は咄嗟に蹴り上げて防御。異能者の蹴りを二発も喰らった挙句、天井に叩きつけられたテーブルは無残にも爆散。

残骸が降りしきる会議室の中、雷夢が親の仇を見るような目つきで狼牙を睨んでいた。

「わあ」

「おやおやおや」

フシみんと黒子が間抜けな声を上げる。それを皮切りに雷夢が動いた。ミサイルを思わせるような高速突進。狼牙はそれを迎え撃つべく構えを取ったその時。

「二四三様！」

「あいあいさー」

突如割り込んだフシみんによって突進を受け止められる雷夢。柄鎖に首根っこを引っ掴まれる狼牙。

「黒子様！」

「はいはい」

黒子が会議室の窓を開く。

直後、遠心力。窓の外へと投げ捨てられた雷夢と狼牙は空中で身を翻し、人気のない校舎裏へと着地した。

「やるなら外でなさって！」

柄鎖の怒号が三階から降ってきた。それをBGMにしながら二人は対峙する。

「なんだ、怒っちゃったか？ 御三家つてのは随分と煽り耐性がないんだな。御貴族様は口喧嘩に慣れてないご様子だ」

「…そのかまびすしい喉から声帯を引きちぎってやる」

決闘は突如として始まる。

6話 雷夢の頸

突如として始まった狼牙ろうがと雷夢らいむの決闘。

初手は雷夢の突進。速いが、狼牙にとって対応できないほどじゃない。

彼は軸をズラして突進を回避した後、視力の無い左目側から拳を繰り出す。

ガゴ

果たして狼牙の攻撃は面白いようにヒットした。しかし、雷夢は構わず突っ込んでくる。それに対して左拳で迎撃。ダッキングで躲かれる：が、その動きは読んでいた。

人間、片目では距離感が掴めない。そのため隻眼の雷夢が防御行動をとるなら受けやバックスウエーではなく、下に躲すと予想済み。

狼牙はフエイント気味に繰り出していた左拳を開き、雷夢の髪の毛を掴む。そのまま彼女の顔面に膝蹴りをかました。雷夢は咄嗟に片手をクッションにするが、それだけで完全に防げるわけもない。鼻をへし折る感触が狼牙の膝に伝わってくる。

が、雷夢は怯むどころか更に一歩前へ踏み込み、狼牙の腕を掴んだ。
(こいつ…、痛みを感じないのか?)

雷夢の右目は朦朧としており、膝蹴りのダメージが残っているのが容易に確認できる。

にもかかわらず、止まる気配が無い。

狼牙は嫌な怖気を心の奥に押し込め、拳を繰り出す。もろに突き刺さった。硬い腹筋を通り越し、衝撃が中にまでとどいた手ごたえ。だが、それでも雷夢は怯まない。狼牙の胸元に顔面を押し付けてくる。こうまで密着されると殴りづらい。

「離れろ…っ！」

拳を繰り出せばすべてが当たる。防御行動を取らないのではなく、取れていない。膝蹴りのダメージはまだ残っている。しかし狼牙の腕を掴む手にだけは万力の様な力が込められていた。

「…くっ！」

雷夢の執念に圧された狼牙は、彼女を引き剥がそうと、素能エレメントで身体能力を強化し、渾身の肘鉄を繰り出す。雷夢の背中目掛けて自由な腕を大きく振りあげたその時。

「…取った」

雷夢の瞳が正気を取り戻す。直後、腕を振り上げたせいでガラ空きになった狼牙の脇腹に掌底が突き刺さった。

◇

「捕まってしまいましたか」

「転校三日目で二敗とはあの転校生も災難だねえ。ま、喧嘩を売る相手を選ばないのが問題だと思っけれど」

三階から観戦していた柄鎖つかさと黒子くろこが感想を述べる。

「二敗って、もう負け決定なのですか？ 今までは狼牙君優勢だったと思うのですが？」

対して雷夢の事を良く知らないフシみんは疑問を口にする。

「そうだねえ…負けは言い過ぎたかもしれないけど、今は雷夢君の勝利パターンにドハマリしている。密着距離での打ち合いで彼女の右に出る者はこの学園にはいないからねえ」

「密着距離が得意ですか。…確かに凄いです。普通、パンチは振りかぶれば振りかぶるほど威力が上がる。けど、あれだけ窮屈な空間にもかかわらず、凄い威力のパンチなのです。あれは“寸勁”ですか？」

「おや、お目が高い。確かにあの技は“寸勁”だよ。たった一寸3センチの猶予だけで己の体重を十分に載せた拳を放てる高等技術。加えて…」

「加えて？」

「まあ、実際に見てから解説しようか」

◇

「か…はっ！」

狼牙の体に衝撃が響く。金剛不壊でガードしているがまるで防げていない。

(硬化させた皮膚表面を通り抜けて体内に衝撃が伝わってきた。いったいどんな技を使ってやがる…?)

いや、今はそんなことを考えている暇はない。この状況をどうにかする方が先)

「懐でちよこちよここと…っ！」

狼牙はお返しに殴り返すが、こう狭い空間では拳に体重を乗せられない。加えて、雷夢の体捌きで衝撃を受け流される。

(なら…っ！)

狼牙は素能を発動させ、身体能力を強化する。そして、自分の腕を掴んでいる雷夢の腕を掴んだ。そのままねじる。

規格外のパワーは、そのまま雷夢の皮膚と肉を千切り取った。

しかし、雷夢は顔色一つ変えず狼牙を殴り返す。

(マジで…痛みを感じて無いのか…!?)

ゾツとする狼牙。直後、雷夢が再び構えた。寸勁の再来。それに対する防御として彼は体を拳に押し付けた。

(いくら何でも接着状態から殴るのは不可能なはず…。せいぜい押すのが関の山……?)

「が…っ！」

しかし、現実には狼牙の予想を簡単に裏切った。

◇

「！ 今のは完全に接着状態から殴ったように見えたのです。あれは

「いったい？」

「あの技の正体は…」

「『無勁』」

興奮する二四三に、したり顔で解説しようとした黒子を遮って口を開いたのは柄鎖。

「一寸の隙間すら必要の無い勁^{けい}。故に『無勁』。異能の特殊運用によってもたらされる零距离打撃。それがあの奥義の正体ですわ」

「良い所だけ持って行かないでくれよ…」

不満そうな顔で呟く黒子。だが彼女はめげずに続きを解説する。

「付け加えるなら『無勁』は雷夢君が生み出した奥義だね」

「そうなのですか？ 普通、奥義は名門一家に伝わる相伝の技じゃないのですか？」

「普通はそうだね。上戸鎖家には『金剛不壊』が、我が黒葛原家には『心眼』がある様に。しかしね、雷家には奥義が無いんだよ」

「奥義が無いのに御三家入りしてるのです？ 何か理由があったりするんですか？」

「奥義が無いのに御三家入りしている理由は雷家の者だけに現れる特有の『素能』にある。雷家の素能、それは電気を操る力。それが殴り合いにおいてどれだけ有効かは想像がつくだろう？」

「……触るだけでビリビリさせられる。そして痺れた体は脳からの電気信号を上手く受け取れなくて、思うように動けなくなっちゃうのです」

「その通り。雷家はそのアドバンテージだけで御三家入りした家なんだよ。強力無比な素能があるからこそ奥義を必要としない」

「じゃあどうして雷夢ちゃんはさつきから素能を使ってないのです？」

あれだけ密着してればビリビリ一発で終わりだと思うのですけど」
フシみんの素朴な疑問。黒子は肩を竦めた。

「使えないのです？ それか出力が異常に低いとかなのですか？」

「後者だね。雷夢君は素能の出力限界が低すぎた。彼女の出せる電撃はとても弱い。ボールペンのお尻を押すと電気が流れる玩具にも劣るぐらいだ」

「それはとても弱いのです。玩具以下なのです」

悪気なく呟くフシミン。彼女は更に続ける。

「それに加えて片目が見えないともなると大変そうですね。距離感が掴めない上に死角も増えますから」

「そうだね。先天的な片目のハンデのせいで殴り合いは圧倒的に不利。だからこそ彼女はあれだけ執拗に前に出ようとする」

「密着しちやえば距離感とか関係ないですからね」

「けれど素能の出力が低いせいで、密着しても電撃によるノックアウトは不可能。だからこそ彼女は密着距離で真価を發揮する。『寸勁』と『無勁』を身に着けた。他にも色々技を持っているようだけど、パツと見て分かるのはその二つだねえ」

黒子の説明を聞きながら、フシミンは雷夢をじつと見つめる。

「……雷夢ちゃん、良い表情なのです」

「表情？……無表情に見えるが」

黒子が首を傾げた後、二四三も続けて首を傾げる。

「どこがですか？ あれだけ苦しそうな表情は初めて見たのです。怒りと憎しみに満ちていて、思わず目を覆いたくなっちゃうのです」

とはいうものの、ジツと戦いを眺めるフシミン。黒子もそれに倣う。が、やはり無表情にしか見えなかった。

「怒りと憎しみか……。表情については知らないけれど、確かにそうだねえ。生まれつきのハンデを背負った彼女は実力主義の雷一族で随分と無体な仕打ちを受けたと聞く。だからこそ狼牙君に隻眼を擲や揄ゆされて逆上したのだろう。」

我を失っている雷夢君が狼牙君を殺してしまう前に仲裁しないとねえ」

「治外法権とはいえ、学園内で人死にが出るのは不味いですしねえ」

二人の眼下には密着距離で雷夢にボコボコにされている狼牙が大勢は決したという判断を下すのも当然だろう。

「……早く模倣なさい」

一人だけは別の結末を頭に描いていたが。

「……そういえば二四三様、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「何ですか？ 柄鎖ちゃん」

「雷夢様の無表情が怒りと憎しみを携えているとおっしゃっていましたが……狼牙様はどうお見えになって？」

「狼牙君ですか？」

話を振られたフシみんは目を凝らして狼牙を見る。

「……とても臆病なのです」

「臆病、彼が？」

黒子は首を傾げる。

「はい、とつても。まるでハムスターみたいに」

「あら、奇遇ですわね。私も同じ感想ですわ」

「ですよねですよね！」

「とはいえ、ハムスターよりはチワワの方が的確な比喻でなくって？」

あれでいて結構甘えん坊な所がありましたよ？」

「え、でもハムスターの方が可愛いのです。あの手に収まりそうな小ささ。狼牙君に抱き着いた時の温かさは昔動物園で触ったハムスターそのものだったのです」

「……私を置いて盛り上がりたがらないで欲しいんだが……」

黒子は疎外感に眉をひそめた。

◇

「っほ……っ！」

私の拳がおしやべりクソ野郎の腹に当たる。硬い手ごたえ。柄鎖から金剛不壊を習ったのか？ まあ良い、こんな練度の低い金剛不壊では私の攻撃は防げない。体内に衝撃を伝える技、いっつう“一通”で貫ける。

なんて考えている間にも反撃が。容易く避ける。

何度も寸勁と無勁を叩き込んでいるのに反撃できるとはタフな奴だ。…いや、私の臂力が劣っているのか？

その思考がよぎった瞬間、頭が沸騰しそうになる。ただでさえ片目と素能の出力が低いハンデを持っているんだ、臂力ぐらいに恵まれても良いだろう？ どうして神様は私に何も与えてくれなかった？

ダメだ。この憤りは目の前の肉人形を壊さないと発散できそうにない。無勁、寸勁と言わず、全力の拳。損壊、毀損、破壊。

真つ赤に染まった思考から繰り出される拳。それは大ぶりすぎたらしい。

振りかぶりの僅かな隙を突き、窮屈な隙間で体を半回転させる野郎。私は思わず目を見開いた。

その体捌きは私の…っ！

顎が跳ね上がる。脳を揺らされ、一時的に思考が飛ぶ。しかし、奴の腕を掴む手からは力を抜かない。例え腕の筋を切られようとも、関節という関節を外されようとも。絶対に離さない。

私にある才能はこの異常な執念だけだ。

クズの主席と次席から引き継いだ天性の性悪を排泄物共の坩堝でよく熟成させて出来上がった醜い執念だけ。

脳からの指令が無くとも意志を反映してくれる私の手。それが途端に弾けた。野郎の腕を手放してしまう。

……は？ 何が？

私の手は奴の腕を掴んでいたはずなのに、手のひらを殴られたような衝撃が。

あり得ない。振りほどかれるならともかく、弾かれるなんて。私の無勁でもない限りは。

……まさか、コピーした？ 私の無勁を？

蹴り飛ばされた。果然と地面を転がる。

……私が無勁の開発と習得に何年かけたと思っっている？ 3年だぞ、3年。

地面との摩擦で勢いの死んだ体を起こす。

それをさっきの手合わせでコピーした？ 見ただけで？ 体験しただけで？

立ち上がる。が、膝が言う事を聞いてくれない。痛みは無いが相当ダメージが蓄積しているようだ。

素能だつてそうだ。お前は身体能力向上なんていう強力でいて汎用性のある能力なのに、私は宴会芸レベルの電撃。

…なぜお前はそんなにも才に恵まれている？ 私はこんなにも欠けているのに。

震える膝をぶん殴つて黙らせる。霞む視界の中に野郎を捉えた。

許せない。許せるはずもない。野郎は雷家の排泄物共と同じだ。素能の出力が強力だったり、両目が揃っているという才能だけで私を踏みにじり続けてきたあのクソ共と。

「……………この……………穎才がああああああ!!!」

喉を切り裂き、血反吐を吐きながらの馳走^{しそウ}。半ば倒れ込むように突進するが、初めの時と同じように軸をズラされる。直後死角から殴られ、目の前がホワイトアウト。

私の右目が視界を取り戻したその時、綺麗な正拳突き型の型が見えた。

それはとても綺麗で洗練されていて。眩しいくらいだった。

◇

「はあ…っ、はあ…っ…決着…」

狼牙はたまらず膝を付く。流石に殴られすぎたようだ。

(雷夢。隻眼かつ素能を使わなかったにも関わらず、恐ろしい強さ

だった。相手のミスが無ければどうなっていたか……)

「お疲れ様です」

いつの間にか下に降りてきていた柄鎖が、狼牙にねぎらいの言葉をかける。

「…あれで46位か」

「そう気落ちしないでくださいませ。彼女が46位にいるのは遠距離攻撃を得意とする異能者に勝てないからでございます。先ほどのように近接戦で彼女に勝利したのは片手で数える程しかいませんのよ？」

片目で距離感が掴めない雷夢。遠距離攻撃を苦手とするのは道理だろう。

(あれだけ強いのに片目が無いだけで46位、か)

「……悪い事言っちゃったな」

(気軽に彼女の目について触れるべきでは無かった。煽って決闘を誘うためとはいえ言い過ぎた)

気落ちする狼牙の頭の上に柄鎖の手が乗る。

「気づいたのならよろしい」

柄鎖の手は戦闘で荒れた俺の髪を整える様に撫でてくる。

「ついでに申し上げますと、あなたの色盲について無暗に触れてしまった私の心境にも思いを馳せていただきたいものですが」

「俺の色盲は別にハンデになってない。トラブルの元ではあるが」

「……それと撫でるの止める、セクハラだぞ」

「しっかりと堪能してから言う言葉がそれですか？ ペットなのでから主人からのスキンシップは素直に受け取るべきですわ」

「…」

「…え、本当に嫌でしたの？ でも女性が男性の頭を撫でたくらいで…いや、今の時代そんなステレオタイプな性別観で物事をはかつては…」

狼牙が不貞腐れていると、ブツブツと何事かを呟き始める柄鎖。疲れている彼は彼女を放置して立ち上がる。

「あ、お待ちになって。一つ聞きたいことがあります」

すると柄鎖は我に返って狼牙を呼び止めた。

「疲れてるんだ、さっさと保健室に行かせてくれ」

「すぐに済みますので。…先ほどの決闘、雷夢様の手を弾き飛ばした後、どうして蹴り飛ばしたのですか？」

「……………どういことだ？」

「雷夢様の手を弾き飛ばした後、決定的な隙が存在していた。あそこで雷夢様を蹴り飛ばさず、正拳突きを放っていればそれで決着だったはずです。どうして貴方はそうしなかったのでしょうか？」

柄鎖の問いかけ。狼牙はすぐに答えられない。

彼は自分のプライベート空間に土足で侵入された時の様な不快感を押し込め、口を開く。

「…あの時は二度と懐に潜り込まれたくないと思っていた。だから距離を取るために蹴り飛ばした。それが判断ミスだったのは認める。それで良いだろ」

ぶつきらぼうに答え、足早にその場を去った。

◇

「やっぱり臆病ですわね」

柄鎖は去り行く狼牙の背中を見ながら呟く。

「ま、それは後でもよろしい。今は雷夢様の方が先ですわね」

柄鎖が視線を向けた先には半壊した校舎が。

「まったく…もう少し加減なさい」

狼牙に対して愚痴をこぼしながら、崩れた校舎を踏破する柄鎖。少し歩くと正拳突きによって射出され、校舎を半壊させる弾丸となった雷夢が卒倒しているのが見える。

「死んで…は、いませんわね」

雷夢の胸が小さく上下しているのを確認した後、外傷を確認している。

「肋骨と胸骨体にヒビ。…狼牙様の正拳突きを喰らってこれだけのダメージとは。」

先ほどの発言、撤回する必要がありますわね。狼牙様は急所を外した上で手加減もされていた。雷夢様が踏ん張らなかつただけですか」「はあく…また派手にやったねえ」

柄鎖が雷夢に対して舌を巻いていると、ぼさぼさの髪を掻きながら保健医が登場する。

「二昨日ぶりだね、柄鎖君。この子を担架で運ぶのを手伝ってくれるかな?」

「ええ、問題ございません。…狼牙様とは会いましたか? 保健室へ行ったはずですが」

「会ったよ。もう治療した。今はエネルギー補給してもらってる。…つたく、三日で二回も決闘なんてどれだけタフなんだか。 3、2、1」

雑談をしながらも雷夢を担架に乗せる二人。担架はそのまま保健室まで緊急搬送されていった。



意識の覚醒。瞼を開くと、欠けた視界に映るのは白い天井。

保健室、それも一番奥のベッド。それがすぐに分かってしまう程、私は保健室の常連だ。

「ご機嫌よう、雷夢様」

「……柄鎖か」

下手に体を起こしたりはしない。顔も動かさず口だけで返事をする。

「治療は?」

「最低限。残りは今から行うそうですわ」

「…私は何時間気絶していた?」

「5時間ほど」

私があいつと戦ったのは16:30ぐらい。つまり今は21:30か。

「起きたか不良娘。これでやっそこき残業が終わる」

保険医の登場。彼女は素能を発動させ、私を治癒する。その後、手に持っていた料理を私の前に置いた。

「栄養補給してさっさと帰るんだね。それかここに泊まるか。どっちでも良いけど泊まった場合は宿泊料代わりに掃除しといておくれよ」
今日は流石に疲れた。泊っていく事にする。掃除は翌朝にすれば良いか。

「それにしても、もう少し怪我しないようにして欲しいねえ。私の仕事の1/10が雷夢君の治療なんだが」

「最低限のダメージには抑えた」

「そりゃご苦労様。今度はノーダメージを目指して頑張ってくれ」

保険医はそれだけ他の仕事を始めた。私は目の前の料理に手を付ける。

しばらくの間、私の咀嚼音だけが部屋に響く。ふいに柄鎖が口を開いた

「狼牙様が謝っておられましたよ。『悪い事を言ってしまった』と」
ベキ

その名前を聞き、私は持っていた箸を折った。

「野郎の名前を口にするな。虫唾が走る」

「あら、虫唾が走るだけで済むのですね。てつきり『殺したくなる』とおっしゃられるかと」

決闘中は確かにそう思っていた。しかし、あの正拳突きを見せられた後では話が違う。

「……野郎の努力は認める。あの正拳突きは一朝一夕で身につくものじゃない。……綺麗だった」

目を閉じれば嫌でも思い出す。動く芸術とも言える一連の動作。一体どれほどの修練を積みあげたほどの正拳突きを。

加えてあの威力。あの技が使えれば私の復讐に役立ちそうだ。今

後修練を積むとしよう。

それにあの技ももう少しで実戦投入できる。そしてあの技も次の雷雨の日には…

「…ケヒツ…ヒヒヒ…ッ」

来るべき日を想像すると、どうにも気持ち悪い笑みを抑えられない。

ぐずぐずと渦巻く黒い感情に浸りながら目の前の飯をかき込む。味も匂いもしないが空腹の胃に料理が落ち込むたび、ほんのわずかな満足感を得ることができた。

「悪い顔になっていきますわよ。一応生徒の間では雷夢様は寡黙でミステリアスなキャラと認識されているのですが、そのイメージが無茶苦茶です」

「勝手なイメージだ。そしてお前には言われたくない」

こいつは優等生の皮を被っているが、調子に乗っている奴を見ると虐めたくて仕方なくなるサディストだ。そんな奴からイメージについてとやかく言われたくない。

「逆の立場になって考えてみれば確かに。私には言われたくないでしょうね」

コロコロと笑う柄鎖を見ているとふと思い出した事があったので、聞いてみる。

「そういえばお前、一年後に死ぬって聞いたぞ。どうして平静でいられる?」

普通、一年後に死ぬともなれば怯えるのが普通だ。私のように何が何でも成し遂げたい宿命があつて、そのために命を落とすのであれば今の柄鎖の態度も多少は納得できるが。

「…難しい問いですわね」

柄鎖はしばらくの間考え込む。そして極めて平静な口調で語り始めた。

「私が死ぬのはこの世界を救うためです。そして私は名家の子女であり、自分の役割を果たすようにと教育を受けてきました。長年続いた教育は私に張り付き、覆いかぶさり、どんな時も優雅で美しいお嬢

様”という仮面を作った。

その仮面が今の平静を装っている…。と言うのが私としてもしつくりきますわね」

「ならその仮面の下は？」

「剥がれるまでは分かりませんわ。」

死に怯え、腰を抜かして泣き喚いているのか。それとも運命を呪い、怒り叫ぶのか。はたまた今と変わらず平静でいるのか…。

ま、そんなことを考えていてもしょうがありませんわ。今を楽しみませんと。最近は愉快なペットを飼い始めた事ですし」

普段の優等生然とした顔を楽しそうに歪める柄鎖。新しいおもちゃを見つけて楽しいご様子。

とはいえ、今の柄鎖の顔は私の大嫌いな顔だ。実家で何度も見ざるを得なかった醜悪な顔。自分の内でどす黒い感情が無限にあふれ出し、次第に目の焦点が合わなくなってくる。

「……ふー……ふー……」

私の呼吸が荒くなり始めた頃、柄鎖が口元を隠して、私の背中を撫でてきた。

「落ち着きなさって。今飛び掛かってこられても困りますわ。私も不注意でした」

「…ふん」

鼻で返事をした後、ベッドに寝転がる。今日はダメージを受けすぎた。もう寝よう。

「お休みなさいませ」

ドアが開き、閉じる音を聞いてから私は目を閉じた。

7話 師匠と弟子

雷夢らいむと狼牙ろうがの決闘から2週間。転校3日目で学内ランキング46位まで一気に駆け上がった彼は、ますます注目的だった。主に喧嘩を売られる的として。

「狼牙！ どんなこすい手を使って46位まで上がったあ!? メツキを剥がしてやるから相手しろお!!」

そう言つて狼牙にいちやもんをつけた生徒。回し蹴り一発でのされた。

「ふふふ、野蛮な戦い方をする野良犬だ…。僕の高貴でエレガントな戦いの前にひれ伏すが良い!!」

薔薇を啜えて狼牙に勝負を仕掛けた生徒。正拳一発でエレガントな顔を野蛮に変えられた。

「今までの決闘を通して君のデータは全て収集させてもらった！ そして僕のPCが導き出した勝率99%!! さあ、その順位を明け渡してもらおうか!!」

パソコン片手に決闘を挑んだ生徒。今までの戦闘で使った事の無い技で1%を引いていた。

「正拳リベンジ！ 三日三晩寝ずに考えたこの軟結界、破れるものなら破つてみさらせ！ 柔よく剛を制すつてね！」

自慢の結界を破られたことを根に持っていた結界ちゃん。拳ではなく手刀で繰り出される突きによって、ゴムのように柔らかい軟結界を切り裂かれ、落ち込んでしまった。

という風に狼牙はやたらと喧嘩を売られるようになった。彼にとって決闘を行う事はやぶさかではないが、相手が弱すぎる。こんなやつらに時間を取られるぐらいなら、一人で稽古をしていた方が為になる。

そう考えた狼牙は学園にいる間の空き時間は一人で稽古するようになっていた。今は昼休み。校庭や中庭で決闘騒ぎを起こしている奴らを尻目に、彼は人通りがほとんどない校舎裏で正拳突きの練習をしていた。

腰を落として右腕を引く。そして突き出された拳は半回転しながら風を切り裂き、衝撃波をあたりにまき散らしながら空を打つ。

狼牙がその動作を数十回繰り返していると、校舎の角から誰かがやって来た。

「げ……っ」

「…チツ」

やってきた人物——雷夢は舌打ちをかまし、彼女の顔を見た狼牙はバツの悪い表情を浮かべた。彼の脳裏には、この前片目が見えない事を揶揄した事が思い出される。

「あー…」

狼牙が何を言うべきか分からずまごまごしていると、雷夢は両目を閉じた状態で彼の前を通り過ぎていく。しかし、彼女の行く先には工事用の資材が散乱していた。狼牙の正拳突きの衝撃で積まれていた鉄パイプや角材が散らばったのだ。

「お、おい……」

狼牙の声など一切気にせずそのまま歩を進める雷夢。あわや資材に足を引っかけると思われたが、その足は器用に資材を避けていく。その光景に狼牙は驚き、顎に当てた。

（両目を閉じているにも関わらずいったいどうやって…。俺の場合は匂いである程度の判別は付けられるだろうが…）

「ちよっと待て！」

狼牙が大声で呼び掛けると雷夢はようやく立ち止まった。

「何だ」

振り返った彼女は開眼しており、無機質な左目と苛立たしげな右目が狼牙を見つめた。

「この前は……わ、悪かった。流石にデリカシーが無さ過ぎた」

狼牙は頭を下げて謝罪する。

「……謝罪は言葉でなく行動で示せ」

その声に狼牙が顔を上げると、雷夢が目の前まで近づいてくる。

「正拳突きを教えろ」

「わ、分かった」

彼にとつてそれぐらいはお安い御用。今まで人に教えた経験は無いので、上手くやれるかは不安だったが。

「とりあえず型を見せるから真似しろ」

狼牙は雷夢の前で正拳突き of 動作を行う。生まれた衝撃波が二人の髪を揺らした。

「…」

仏頂面のまま狼牙の真似をする雷夢。そこそこ形になってはいたが、本家とは比べようもない完成度。

「足の開きが狭い。もう少し余裕を持って…そう。拳を突き出す時は真つすぐに。打点は膝の高さで調整した方が良い。それと腰のひねりが早すぎる。もう少しだけ溜めろ」

狼牙はひとまず三つアドバイスをする。それを受けた雷夢が再び正拳突きを行う。すると、彼女の拳は風を切り、独特な音を立てた。

「よし。他にも改善するところとして…」

「今日はもう良い」

狼牙の言葉を遮った雷夢は、正拳突きを何度も繰り返す。

「三つを体に覚え込ませる」

そう言ったきり、狼牙には目もくれず稽古に精を出し始める雷夢。彼は教師を頼まれたものの、数分で仕事が終わってしまったため、彼女の横で自分の稽古を始める。

狼牙の稽古内容は超至近距離での体捌き。雷夢の十八番の動きを記憶から引つ張り出し、現実で再現する。

彼は身長が低いため、腕のリーチも短い。そのため相手の懐に入り込んで戦う場面が多くなるはず。そう考えての復習だ。

狼牙がそんなことを思いながら模倣を行っていると、雷夢の拳が風を切る音が急に聞こえなくなった。彼は稽古を止めてしまったのかと思いい彼女の方を見るが、正拳突き自体は続けていた。

しかし、腕に力が入りすぎている。そのため動きが硬くなってしまい威力半減。

良く見れば握りこんだ拳から血が流れていた。握力で爪が手袋を破り、更には皮膚まで食い込んで怪我をしている。

「そんなに力入れても逆効果……うおっ……」

狼牙の言葉の途中で、雷夢の手のひらから血が飛び散った。それに怯む狼牙に、雷夢は怒りを滲ませた声で呟く。

「私は日に三つぐらゐの改善が限度だ。少しずつじゃないと技を習得できない。」

対してお前は数度見ただけで技を再現できる」

稽古を中断した雷夢が狼牙へと近付く。その目は据わっており、何をしでかすか分からない不気味さを携えていた。

「この差はどうして生まれた？ 他だってそうだ。私は片目なのにお前は両目が健在で、私の素能はおもちゃの電流を生み出す程度なのに、お前の素能は使いやすい身体能力強化系なんだ？」

声を荒げているわけでは無い。眉を吊り上げ、歯をむき出しにしているわけでも無い。しかし、自分より背の小さい雷夢に狼牙は気圧されていた。

「教えるよ、なあ天才」

返答を誤れば殺されかねない。狼牙がそう感じる程、黒く、深く、重たい瞳。

だからといって、狼牙はご機嫌取りには走らない。そんな服芸が出る程器用では無いのも一つだが、そういう話題なら彼にも言いたい事があったからだ。

「俺は両目が見えてるし、素能も強力だし、模倣が人と比べて得意なのは否定しない。」

けどそれを持っている俺を指して天才って言うのならお前だって天才だろうが」

「…は？」

雷夢が目丸くした。狼牙は「こいつでも驚いた表情をするんだな」、と思いつつ話を続ける。

「ツカサから聞いたぞ。俺が模倣した『無勁』はお前が作った技なんだろう？」

俺のは既存の技を模倣してるだけだが、お前は技を新しく作った。そっちの方がよっぽど天才じゃないのか？ 少なくとも、俺には新し

い技を作るような真似は無理だ」

「……」

雷夢の焦点の合っていないなかった瞳が収束していく。

「…無いものねだり、か」

雷夢は左目に手を当てて、そっぽを向く。

「新しい技を生み出すのは難しい事じゃない。型を体系的に学び、異能の理ことわりを正しく知れば」

雷夢はこつちに目線を送って来る。

俺が説明する番、とでも言いたいのか？

「…模倣も難しい事じゃない。模倣したい動きを正しくとらえる目と、とらえた動きをきちんと再現できる体のコントロール技術があればな」

「けれど模倣は私にとっては難しい。」

そして多分、新しく技を生み出す事はお前にとっては難しい。無いものねだりだ」

先ほどまでの感情的な姿どこへやら、雷夢は淡々と話を進める。

「…が、片目を欠損し、ゴミみたいな異能を持って生まれた自分の事は大嫌いだ。異能に恵まれた上に、数年かけて生み出した技を数分で盗んでいくお前の事もな」

そう言われると狼牙は返す言葉が無かった。長い時間をかけて生み出した技をものの数分で盗まれれば良い気分はしないだろう、と想像したためだ。

「お前の技、使わない方が良いか？」

「…なぜ私に聞く」

雷夢は怪訝そうな表情を浮かべた。彼女の疑問に答える。

「学ぶ事とは真似まねぶ事。俺はお前から学んだ、つまりお前は俺にとっては師匠に当たる。」

そして俺は師を尊重する。そうすべきだと親父に教えられた。だからお前が望むなら、俺はお前の技を使わない。それが、尊重するという事だろう」

俺の言葉に雷夢は再びそっぽを向く。

「……師匠、か」

そして頬を僅かに緩ませた。笑っている、という程では無い。あくまで無表情の範囲内だったが。

「なら私にとつてはお前も師匠か」

「まあ…そうなるな」

狼牙が答えると、雷夢は元の仏頂面に戻っていた。

「技は勝手に使え。お前の正拳突きも勝手に使わせてもらおう」
「分かった」

初対面では険悪、殴り合い。今日の逢瀬でも地雷を踏み抜きかけた二人。しかし今、この場は少しだけまともな雰囲気。狼牙は少しだけ踏み込んで聞く。

「お前は どうして この学園に来た？ …ハッキリ言つて戦うには向いてないだろ。異能者になつたからつて戦わなければいけない訳じゃない。他の道だつて選べる。なのはどうして」

「どうして、か……ケヒヒ…ッ！」

狼牙の質問を皮切りに雷夢が気色悪い声で笑つた。さつきまでの無表情が嘘のように口元を歪めながら手袋を脱ぎ捨てる。

手袋の下にはボロボロの手があつた。関節は歪み爪はズタズタ、骨も出つ張つたり凹んだりと不揃い、そして凍傷と思しき痣が広範囲を覆っている。

「この傷……ひひひっ……！」

雷夢は手の凍傷跡に触れた後、上着を脱いだ。

上半身裸になつた彼女。その肌には無数の傷が刻まれていた。

火傷、裂傷、凍傷、痣、雷撃傷。数える事すら難しい程のおびただしい傷痕。

「これらの傷を私に刻み込んだクソ共を苦しめてやりたい…。受けた苦痛を何倍にもして返してやりたい…。それから殺す…そう、根絶やしだ。あんなクズ共は根絶やしだ…！」

うわ言のように呟く雷夢。その目はやはり焦点を失っており、半開きのまま緩んだ口端からは涎が垂れている。

「突きたい、飛ばしたい、弾きたい、打ちたい、殴りたい、蹴りたい、

切りたい、刺したい、剥ぎたい、潰したい、折りたい、抉りたい、削ぎたい、千切りたい、焼きたい、潰けたい、挽きたい、溶かしたい、挽ぎたいい……」

肺の酸素を全て使い切った雷夢は、大きく息を吸う。

「すー……ふー……、すー……ふー……」

雷夢はギョロ目で手を震わせながら、深呼吸を繰り返す。ぐりん、と目が狼牙の方を向く。彼は思わず一步後ずさってしまった。ギョロ目は次第に落ち着きを取り戻し、理知的な光を宿す。

「……ヒヒツ……」

区切りをつけるように雷夢が怪しく笑うと、彼女はまた仏頂面に戻った。

「だから私は強くないといけない。塵芥共クズを私の意志一つでいかにようにも左右できる程に」

「そ、うか……」

垂れた涎を拭う雷夢に対して、狼牙は生返事をする事しかできない。彼は雷夢が脱ぎ捨てたジャージを拾い、彼女に渡した。

「お前は？ どうしてこの学園に来た？」

ジャージを着直しながら雷夢が問う。シヨックから立ち直れていなかった狼牙は返答が少し遅れてしまった。

「あ、ああ……。俺は、強くないといけないから……」

「……どうして強くないといけない？」

抽象的な狼牙の返事に、雷夢は少しだけ不機嫌に聞き返してくる。

「強くなりたい理由は……」

言葉が出てこない。

強くなりたい理由は確かにある。しかし、それを言語化する行為に抵抗があった。言葉にしてしまえば、自分のコンプレックスを改めて自覚する事に繋がりがねないから。

「……っ」

「言いたくないなら別に良い」

狼牙が言葉に詰まっていると、雷夢が打ち切る。

「昼休みがそろそろ終わる。今日は解散だ」

雷夢は狼牙に背を向けて歩き出す。

「また明日」

校舎の角を曲がる間際、それだけ言い残して去っていった。

8話 はじめての遊山

雷夢らいむと狼牙ろうがが逢瀬を交わし始めてから約3週間。

今は放課後。狼牙は柄鎖つかさの研究所、もとい修練場に足を運んでいった。

「站椿たんとう」

柄鎖の一言を受け、狼牙は腰を落として構える。

……ピー、ピー、ピー

ややあつて、狼牙の横にある物々しい機械が警告音を吐き出した。

「左大腿四頭筋、力をお抜きになつて」

大きく深呼吸をして自然体に。すると警告音が収まる……が、一時のもの。すぐにピーピーとわめき始める。

「右腓腹筋、体重をかけすぎですわ」

少しだけ重心を移動させる。すると警告音が収まる……が、やはり一時の静寂。再び機械がさえざり始める。

「今度は左上腕三頭筋。あちらを立てればこちらが立たず、ですわね。一度休憩致しましょう」

柄鎖が機械の電源を落とす。狼牙は筋肉の動きを測定していた電極を体から全て取り外した。

さつきまで狼牙がやっていた稽古は站椿たんとうというもの。膝を曲げ、腕を上げて静止するだけだが、これが中々難しい。

ポーズを取るだけなら模倣が得意な狼牙にとっては朝飯前だ。しかし、ポーズを取りつつ無駄な力を抜くとなると、途端に難易度がある。

バランスを僅かでも崩せばどちらかの脚に余計な力が入ってしまう。かといってバランスの意地に意識を割くと、今度は腕が疎かに。

「無駄な力みは動きの硬さにつながりますわ。骨で立つ事を意識して筋肉は出来るだけ使わないように」 というのが柄鎖の言だ。

現にこの練習をするようになってから、狼牙の技と技の繋ぎが少し滑らかになった。そのため、続ける価値ありと判断して今も行っている。

狼牙が電極を纏めて片付けていると、柄鎖が声を掛けてきた。

「流石のアナタも筋肉の動きまでは模倣できませんのね」

「当たり前だろ。俺の目はMRIじゃない。皮膚の表面だけ見て筋肉の動きまで完璧に把握できねえよ」

狼牙は観測したもののしか模倣できない。型なら動きを見る必要が、^{キュリア}異能の応用技——「金剛不壊」や「無勁」なら実際に技を受ける必要がある。そして筋肉なら…

「だからお前の筋肉に触らせてくれ」

「…まあ、別に構いませんが…」

そう、実際に筋肉に触る必要がある。ということ、彼は柄鎖にポーズを取ってもらった。まずは前腕に触れる。

「…」

「ここがこうで…こつちがこうで…」

柄鎖の腕に触りながらリアルタイムで模倣していく。

「……」

「…ああ？　この力抜いたらこつちに力入れねえと腕が下がるだろ…。他の部分で補ってるのか？」

腕の上で指を滑らせていく。

「……こつ」

「おい、力入ったぞ。ちゃんと脱力してくれ」

「……貴方が触るからでしょうに」

「触らずにどうやって模倣すんだよ」

「もう少しじっくり触ってくださいさ？　くすぐったいんですの」

「良いのか？　じゃあ遠慮なく」

狼牙は撫でる様に動かしていた指を柄鎖の肌にしみ込ませる。彼女の筋肉は指を柔らかく受け止めた。

「良い柔軟性だ。なるほど、奥の筋肉はこうでこうか…」

指をズラし、二の腕から脇にかけての筋肉を揉む様に調べる。

「……こつ」

「この筋肉のラインがミソか…。よし、次は表側を…」

次は上半身。そのまま手をスライドさせ、三角筋、小胸筋、大胸筋

の境目を…

「くく…っ！ これセクハラ扱いしても良いものですよ!? セクハラ扱いして良いですわよね!？」

急に柄鎖がキレた。

「なに怒ってんだ。力みは硬さを生むんだろ？ ほら、早く力抜け」

「胸は普通避けませんこと!?! 何をナチュラルに揉みにきているんですの!?!」

「は？ 触って良いって言っただろ？」

「限度という者がありまして！ とにかく胸は止めてくださるかしろ!!」

狼牙に有無を言わせぬ大声。しようがなく彼は柄鎖の胸から手を離し、背中に触れた。

「まあ胸は余計な脂肪のせいで筋肉の動きが分かりづらいから別に良い。次は下半身触るぞ」

「…お尻には触らないように」

「分かった。そこは試行錯誤で補う」

こんな調子で今日の稽古をこなしていった。



時刻は夜の9時。稽古後のストレッチを終えて以降は解散するだけ。…という所で狼牙のスマホから通知音が鳴った。

通知はメッセージアプリから。狼牙がホップアップをタッチすると、フシみんとのトーク画面が表示される。

『明日、ショッピングモールにでも行かないのです?』

遊びの誘い。狼牙は表情にこそ表さない物の内心、テンションを上げていた。幼少期は親父との特訓詰めどろくに遊んだことが無く、ショッピングモールにも行った事が無いためだ。

別に親父との特訓が嫌だったというわけでは無い。むしろその時

はとても充実していた。単純に初めての場所に他の誰かと遊びに行ってみたという欲求が溢れて止まらないだけだ。

しかし、稽古をサボって遊びに行くというのは少し後ろめたい気持ちもある。それが彼を手放しで喜ばせない枷となっていた。

「…画面を覗いたご無礼、お許しください。その上での助言ですが、体と心を休めるのも大事な事ですわ。気にせず遊びにいったらいかがでしょう」

狼牙の思考を読んだかのような発言をする柄鎖。

「…なら」

狼牙はその言葉に容易く流された。少しだけ自己嫌悪に苛まれるが、明日へのワクワクがすぐに塗りつぶしてくれる。すぐにフシミンへと連絡。

『行く』

『じゃあ、明日の8時に正門前に集合なのです』

(よし、今日は速く寝よう)

そう心に決める狼牙の隣で柄鎖が頭を抱えていた。

「どうした？ 頭抱えて」

「いえ…その…。貴方と二四三様ふしむでショッピングモールに行かれるのですよね？」

「そうだが」

「そこはかたなく嫌な予感がするのは私の気のせいでしょうか…」

「…いや。合ってると思うぞ、その予感」

狼牙とフシミン、問題児の二人だけで遊びに行く。何か問題を起こそう、というのはいたって普通の考えだろう。

加えて狼牙はショッピングモールに初めて行く。つまりショッピングモールでの作法を知らない。そこが完全にフシミン頼りになるわけだ。彼女の知識が非常識なものであれば、めっちゃめっちゃな一日にもなりかねない。そして彼女の普段の言動からすると、まともな常識が備わっているようには思えない。

「心配ですので私も同行したいのですが…よろしいでしょうか？」

「俺は構わない。というかこっちから頼みたいくらいだ」

「後は二四三様の了承を得るだけですわね」

スマホでメッセージを送る。

『明日、柄鎖も来るけどいいか?』

『良いのです。人は多い方が楽しいですから』

すぐに了承の返事が来た。

「一安心ですわね」

「だな。じゃ、また明日」

「ええ、また明日。今日はお疲れの出ませんように」

こうして狼牙はワクワク気分のまま、一日を終えた。

◇

翌日。朝8時から狼牙、柄鎖、フシみんの三人でバスと電車を乗り継ぎ、ショッピングモールへ到着。異能者の身体能力なら公共交通機関を使うよりも走った方が速いのだが、汗をかくのを嫌った。

「…デケエ」

そして狼牙は人生初めてのショッピングモールに気圧されていた。この世にこれだけ大きい建物が存在するとは思ひもしなかったのだ。(7階建ての駐車場ってなんだよ…。いったい何人収容する想定なんだ?)

ショッピングモールの入り口が無限の胃袋を持つ巨大な化け物の口に見え始めたころ、フシミンが狼牙にしなだれかかり、背中を押してくる。

「入り口でボーっとしてたらもったいないのですよ。ショッピングモールは中に入ってなんぼなのです」

「二四三様の言う通りですわ。外は暑いですし、早く中へ入りましょう。」

学園の正門ほども横幅がある大きな自動ドアをくぐると、中にはSF世界が広がっていた(狼牙にとって)。

吹き抜けの巨大なエントランス。上を見上げてても何階立てなのかすぐには分からない。

そして各階層を繋げるエスカレーターも巨大で複雑。人の血管を機械で再現した現代アートなのかと思ってしまう程。

壁や転落防止の柵はなぜかガラス張り。そのため透明感に溢れており、透けて見える向こう側の細かい景色に圧倒される。

結論。めっちゃテンション上がる。

見渡す限り壁に埋め込まれたような店、店、店。わけの分からない英語からお馴染みの日本語など、様々な看板を掲げた店舗がただ一つの施設に凝縮されている。

エントランスの中央には巨大なステージがあり、そこでは何かイベント事もやっているようだ。

とりあえず、エントランスの景色を上から眺めてみたい。そう思った狼牙は足に力を溜め、吹き抜けの最上階まで跳躍しようとする……

「お待ちなさい」

柄鎖に肩を掴まれた。

「何だよ」

「貴方、今最上階までジャンプしようとしていませんか？」

「それがどうした」

「公共の場で無暗に目立つ事をなさらないでくださる？ エスカレーターがあるのですからそちらで上がりましょう」

「ジャンプした方が速いだろ……」

柄鎖に叱られ、狼牙はしぶしぶエスカレーターに乗る。逸る彼にとっては何かが止まってしまいそうな速度だが、退屈はしなかった。ゆっくりと流れるショッピングモールの景色を隅から隅まで堪能している、いつの間にか最上階までたどり着いている。

下を覗くと、まるで螺旋階段の様な景色が目に入って来る。

見上げた時は巨大さを十分に感じたものだが、見下げると今度は深さが際立つ。今いる場所が一階で、地下に無限の空間が広がっているかのよう。地下に広がる空間といえば秘密基地。勝手に連想して勝手にワクワクし始める狼牙の脳。まったくもって嫌ではない。

狼牙が階下を眺めてニヤニヤしていると、フシミンが口を開いた。「せつかく最上階まで来ましたし、一階まで下りながら色々なお店を見て回るのです」

提案に異論はない。狼牙は上機嫌で返事をする。

「分かった」

「承知しましたわ」

「それじゃあ、早速行くのです」

最上階には自販機があるだけで、店が無い。フシミンの先導に従って一つ階を降りた。

◇

「…で、寄る店寄る店、服屋ばかりなんだが？」

柄鎖とフシミンが大量の衣服を吟味している後ろで圧をかけるようにロウガが呟く。

「服屋、嫌いなのです？」

「嫌いというかやる事が無い。家具とか家電とかならまだしも、服を長時間眺める趣味は無い」

狼牙は、シヨップिंगモールにはありとあらゆる商品が売られていると聞いていた。しかし、先ほどから服屋にしか立ち寄っていない。最初の方は彼も楽しんでいたが、流石に飽きているようだ。

「では眺めるだけではなく、試着してみたらいかがでしょうか。例えばこちらの服とか」

そう言っつて柄鎖が狼牙に渡したのは、どう見ても女性用の服。

「は？ これ女用の服だろ」

「いえ、至って真面目でございますわ。狼牙様は目つきこそ鋭いですが、幼い顔つきで、肩幅も狭いので女性用の服も似合うかと」

「そうなのです。他にもこういうのとかも似合いそうなのです」

フシミンも適当に見繕った服を狼牙に押し付ける。

「…本当か？」

「ええ、天地神明に誓って」

「きつと良く似合うのですよ」

「…試しもせずに否定するのは違うか」

狼牙は押し付けられた服を手に、試着室へと入った。

◇

とりあえず渡された服を着た狼牙。鏡で自分の姿を眺める。

色素が薄く、上と下が繋がっている一枚布の服。長袖にも関わらず、なぜか肩の部分に穴が空いている。しかも袖が長すぎるせいで手の部分に布がかぶさって少し邪魔だ。

「とはいえ、普段の運動着とか無地のシャツに比べればマシか…？」

「着替え終わったのです？」

狼牙が鏡の前で一回転してから感想を呟くと、カーテンの外からフシみんの声が聞こえてくる。

「二応。着方間違っていないか？」

狼牙がカーテンを開くと、彼の姿を見たフシみんと柄鎖が固まった。

「…おい、何か言えよ。」

(やはり女物の服は似合わないか。それにこんな着てたらまた女と間違われてトラブルの種になりかねない)

そう思った狼牙は着替えるためにカーテンを閉める。が、その途中でフシみんと柄鎖がカーテンを閉じさせまいと阻止した。

「は？ 何だよ、今から着替えるんだ。その手を離せ」

「そうなのですか。ではこっちの服に着替えて欲しいのです」

「いえ、狼牙様にはこちらの方がお似合いかと。股下とヒップのサイズは何センチでしょうか？ 脚が細く見える黒ストッキングを今から買ってまいりますので」

二人はカーテンの隙間から服をねじ込む。

「これもこれも女用の服だろ!? 男用の服を渡せよ! あつちのカツコいい奴とか!」

狼牙はマネキンが着ている服を指差す。しかし、フシみんと柄鎖は首を横に振った。

「ああいうのは高身長の子にしか似合わないのです。狼牙君が着てもちんちくりんにしか見えないのです。服に着られる状態なのです」

「ええ、それにあちらの服はMサイズ以上しかありませんわ。XXS、良いところXSサイズのお可愛い狼牙様が着られるような服ではございません。身の丈にあったファッションをされるのがよろしいかと」

「なんか急にボロクソ言い始めるなお前ら! 似合わないかどうかは着てみねえとわからねえだろ!」

二人の制止を振り切り、狼牙が指差した服を手を試着室へともる。とりあえず着替えてみたが:

「:何か横長に見えてダサいな」

「加えてベルトの位置が低いため、ただでさえ低い身長に加えて短足が際立っております。やはりスカートを高めに履き、脚を長く見せるべきかと」

「しかも配色がダメダメなのです。インナーとまったく合っていないです。やっぱり黒白で統一したこのゴスロリ服を着るべきなのです」
「色は知らねえよ、色覚異常なんだから。けどこの服が似合わないってのは分かった。俺の審美眼が悪いのもな。だから二人が似合いそうなもの持って来てくれ。女用でも構わねえから」

狼牙は後にこの言葉を後悔する。まさか2時間も着せ替え人形にさせられるとは流石に思っていなかった。

9話 暴動

「…疲れた」

「あら、まだ午前中でございましてよ。お疲れになるには早いのでは
なくって?」

「そうなのです。まだ半分も階を降りて無いのですよ。それに似合う
服が見つかって良かったじゃないですか」

今の狼牙の服は狼牙が初めて試着した薄緑のワンピースだ。柄鎖
が着せ替え人形にしまったお詫びという事で、狼牙に数着服を
買った。それからタグを取ってもらい、今着ている状態だ。

「それに今の服、初めの半袖短パンの正直隣を歩いて欲しくないレベ
ルのコーデからは見違えるほどなのですよ」

フシみんの言葉の槍が狼牙にぶっ刺さった。

「…そこまでだったか?」

柄鎖の方を向くと、彼女は扇子で口元を覆い狼牙から目を逸らす。

(…:今後はもう少しファッションに気を付けよう)

狼牙は密かにそう思った。

「そんな事よりそろそろ飯食おうぜ。腹減った」

誤魔化すように話題を逸らすと、フシミンが乗ってくれる。

「そうですねえ。じゃあフードコートに行くので…:わっ、と」

狼牙達の方を振り返り、前を見ずに歩くフシミン。前方不注意の代
償として彼女は他の客と衝突してしまう。

ぶつかった相手から離れるその瞬間、フシミンの手が相手のポケッ
トから財布を抜き取った。そのまま自分のポケットへと収める。

(…:いやいや。こんな白昼堂々? 気のせいかな?)

とても自然に、まるで呼吸をするように行われたスリ行為に思わず
我が目を疑う狼牙。

「ごめんなさいなのです」

「気を付けるよ…:って、え、あ…:」

ぶつかられた男は悪態をつこうとしたが、フシミンの赤く光る眼を

見て愕然とする。

「な、あ、そ、その……こ、こっちこそ、すみません、でした…」

男はそのまま、人ごみに紛れるように逃げていく。

「やっぱり異能者シンギュラリティは怯えられちゃいますね。…さ、早くフードコートに行くのです」

「いや、お前…」

「二四三様」

何事も無かったかのように振舞うフシミンをロウガが問い詰めようとしたその時、柄鎖がドスの効いた声で彼女の名前を呼ぶ。

「私の目がおかしくなっていないければ、貴方が先ほどスリを行ったように見えたのですが？」

「私ですか？」

とぼけたように自分を指差すフシミン。彼女は怪訝そうな顔をしながら服のポケットを叩く。すると、先ほどすり取った財布を押し込んだポケットに手が。

「あ、本当なのです。やるつもりは無かったのですが……ついうっかり」

窃盗犯は少し恥ずかしそうに笑った。まるで爪を噛む悪癖を見られてしまった、ぐらいの軽さで。

「……くっくっ！」

言いたいことがありすぎて渋滞したのか、しばらく固まる柄鎖。

「…とにかく！ 財布をあの方に返すように！ 疾く、早く、すぐに！！」

とりあえず事態の收拾に向けた発言することに決めたらしい。

「はい。…すみません。これ、さつき落としたのですよ」

窃盗犯はさつき逃げた男を人ごみの中からの確に探し出す。そして肩を叩き、いけしやあしやあと声をかけた。

「うえっ！ え、あ、ありがとう、ございます。……し、謝礼は何割ほどで……？」

「別にいらなのですよ」

フシミンは財布を返し終えると、再び人ごみの間を縫い、狼牙と柄

鎖の元に戻って来た。

「返却終了なのです」

まるで良い事をしたかのようなニコニコ顔。その顔は柄鎖のゲンコツで歪められた。

「…痛いのです。どうして殴ったのです?」

「貴方も分かっているでしょうに。本当に分からないのなら、むぎむぎ私程度に殴られる貴方では無いでしょうか?」

「それはそうなのですが…。しようがないじゃないですか。もちろん私も頭では理解しているのですよ? 人の物は盗んじやいけないって、ちゃんと習いましたし」

フシみんはバツの悪そうな顔から一転、口を尖らせて不満げに。

「でも、私は昔からずつとこういう事をし続けてきたのです。誰も私の悪事に気づいてはくれなかったのです。誰も私の事を叱ってくれなかったのです。だから人の物を盗むのは悪い事だ、と今更言われても心が納得してくれないのです。心が納得してくれないから悪癖を直そうと思えないのです」

彼女の言い分を聞いた柄鎖は頭を抱える。それからフシみんに対して説教を説き始めた。

「貴方の生い立ち、多少なら知っております。納得するのが難しいという事も分かりました。ですが、*“納得できない”*では世の中済まされません。頭で理解しておられるのならば、せめて少しでも抑えようという努力をですね…」

グウウウ…

「お腹空いちやいました。早くフードコートに行くのです」

説教を喰らった当の本人はお腹が鳴ったのを良い事にするりと逃げ出したが。

「二四三様!」

「ひゃー!」

追加の怒鳴り声を受けて全力で逃げ出すフシみん。人ごみの中を縫うように進んでいく。

「すごい身のこなしだな」

「まったく…追いましょう。きちんと注意しておかないと再犯しかねません」

「注意してもやりそうな感じだが…」

ぼやきつつもフシみんの後を追う狼牙と柄鎖。しかし、休日のショッピングモールというものは非常に人が多い。すぐに彼女を見失ってしまった。

「見失ったか」

「どういたしましょうか。お腹が空いていると言っていたので、フードコートに向かっている可能性が高いとは思いますが…」

「そんな回りくどい探し方は必要ない。俺の鼻で探す」

「鼻…？」

疑問符を浮かべる柄鎖を他所に、狼牙は目を閉じて鼻から息を吸う。すると多様なにおい成分が鼻の受容体を刺激した。

服屋から匂う樟脳しょうのう、店内に設置されている観葉植物の青臭さ、空調の僅かなカビ臭さ、フードコートの食べ物の匂い、人の汗、皮脂等の体臭。無数の臭いの中からフシみんの体臭だけを嗅ぎ分ける。

「こつちだ」

「まさか臭いで…？ …少し、気持ち悪いですわね」

「聞こえてるからな」

自慢の耳で小声の悪口を拾いつつも、狼牙はフシみんの匂いをたどっていく。スポーツ用品店、玩具屋を通り過ぎると、匂いが強まっていく。

そうして行きついた先はゲームコーナー。中へ入ると、ピカピカ光る機械がけたたましい音を立てる中、微かに聞こえる話し声が。

（おい、静かにしろ）

（ん、ん…！）

（いいから早く金を出せ。この騒音だ少しぐらい暴れたぐらいじゃ誰も助けに来ねーよ。おっと、力づくでこの場を切り抜けようなんて変な気は起こすんじゃないぞ。）

俺とこいつの赤い目を見れば分かるだろ？

シンギュラリティ

異能者ってのがな

（そーなのです。…とはいえ、私はどうしてここへ連れてこられたん

でしょうか)

(お前も異能者だ。あの掲示板見て来たんだろ？ 一緒に楽しもうぜ)

フシみんの声。それとは別にもう二人いる。

二人が声がする方へ足を進めると、そこには大柄な男が、中肉中背の男の胸倉を掴み上げる光景が。その横でフシミンが不思議そうに首を傾げていた。

「これは…どういう状況なのでしょう？」

柄鎖の疑問も尤もだろう。狼牙が問いかける。

「フシミン、そっちの二人は知り合いか？」

「違うのです。さつき出会って、ここまで連れてこられたのです」

「知らない奴について行くなよ…。ほら、さつきと飯食いに行くぞ」

狼牙がフシミンの手を掴み、この場から立ち去ろうとする。

「いえ、ちよつと待って下さる!?!」

「そうだ！ ちよつと待てよお前ら！」

なぜか柄鎖と大柄な男の声が調和した。

「失礼、お先にどうぞ」

「え、あく…じゃあ失礼して」

手番を譲られた男は粗暴そうであったが、柄鎖のお嬢様な雰囲気には？まれたのか、律儀に頭を下げてから口を開く。

「お前ら全員異能者だろ？ 目も赤いし間違いないねえ。だったらあの掲示板見て集まってきたんじゃないかねえのか？」

「掲示板…?」

柄鎖が顎に手を当てて疑問を態度に表すと、男が答える。

「ネットの掲示板だよ。異能者でオフ会しようって話だったろ？ …その様子だとお前ら部外者か？」

狼牙、フシミン、柄鎖の三人は一樣に首肯する。

「なんだよ…。まあ良い、これもなんかの縁だ。お前らも参加するかな？」

柄鎖は、今まで蚊帳の外であった胸倉を掴まれている中肉中背の男の方に目をやる。その男には異能者特有の目の輝きが無かった。

「そのオフ会とやらが一般人を恫喝する集いであれば、そのお誘いをお受けするわけにはいきませんわね」

「はあ？ お前真面目ちゃんか？ そっちの二人はどうなんだよ？」

「これから飯だ。オフ会…？ とやらに参加してる暇はない」

「私もお腹減っちゃったのです。不参加でお願いするのです」

「けっ、せっかく仲間に入れてやろうっていうのによ」

男の悪態を背に、狼牙とフシみんはその場を去ろうとする。

「ちよ〜つと、お待ちくださる？ もう少しだけ」

しかし、柄鎖はまだ用があるようだ。

「なんだよ。さっさと済ませろ」

狼牙の言葉に、柄鎖は大きなため息をついてから大柄の男に向き合った。

「そちらの一般人の方から手を離してくださいさるかしら」

「…ああ？ 真面目ちゃんを通り越して正義の味方ごっこか？」

男の声が低くなる。

「正義の味方…というよりも目の前で恫喝が行われていれば止めるのが普通でしょう」

「恫喝の何が悪い。強い奴が弱い奴から搾取する。それがこの世の常だろうが！」

「間違つてはいませんが…単純な腕力で搾取するのは法律違反ですよ」

「国が決めた法律なんか知った事かよ！ 持つてる力を好きに振るって何が悪い!? 雑魚の一般人は異能者の俺に従ってれば良いんだ！」

今にも掴みかかって来そうな程ヒートアップする男。そこに油を注いだのはフシみんの一言。

「力を振るうのは別に悪くないと思いますけど… 弱者は強者に従う」。その理屈でいくと君は柄鎖ちゃんより弱いので、柄鎖ちゃんに従う必要がありますけどね」

「誰が…この女より弱いだつてえ!!?」

激昂した男が柄鎖に殴りかかる。びっくりするぐらい鈍^{なまく}らな拳を、

柄鎖は容易く受け止めた。

「暴れると周りに被害が出るので、力比べをしましょう」

柄鎖と男が手四つの形でくみ合う。

「お前みたいな細い女が俺に勝てるかよ！ 異能者だからって筋肉が関係無いとでも思ってるのか？ 異能による強化は元の筋肉量に比例して……ッ!!?」

単純な力比べで負けるわけ無いと思っていたのか調子づく男。しかし、その顔はすぐに困惑に染まった。

「確かに強化は元の筋肉量に比例して効果が上がります。しかし、貴方はあまりにも異能による強化がお粗末です。10×5と5×10では後者の方が強いに決まっていますでしょう?」

拮抗していた状態から徐々に押し込まれる男。

「こつ、こんな……ッ！ 俺はッ、選ばれた異能者で……ッ!」

「いいえ、あなたは選ばれてなどいません。その気になっていただけの凡人。いえ、同じ異能者からみればただの『落ちこぼれ』。取るに足らない存在……」

男を壁際まで追い込んだ柄鎖は奴の耳元に口を寄せる。

「所詮、あなたは自分より下を見て勘違いしていただけでございませわ。亀がナメクジを見て、『あいつは自分より遅いノロマ』だとイキがっていただけ。

いかがでしょうか、初めてチーターを見た気分は?」

えぐい事を囁いていた。サディストの部分が漏れ出ている。

「くつそがああアアア!!」

男は吠えるが、それだけで状況が改善すれば誰も苦勞しない。最後の抵抗空しく、男は地面に膝を付く。

「はあっ……はあっ……くそ……つ、何で俺が負ける……っ!」

「それともう一つ。筋肉量が多すぎても、異能による強化効率が下がる事が知られています。バランスの良さが大事ですよ。

……さて」

柄鎖は怯えている一般人の方に近寄る。

「怪我はしておりませんか?」

「っ、あ、ありがとうございますっ!!」

しかし、一般人はダッシュで逃げて行ってしまおう。

「あーあ、怯えられちゃったのです」

「い、一応お礼は言ってくれていたんで、怯えられたという事はないのではないのでしょうか!？」

「何でも良いだろ。それより解決したんなら早く飯食いに…」

事態は解決したと、三人は雑談を始める。その時、狼牙の耳が衣擦れの音を捉えた。ポケットから何かを取り出すような音。

「どこに連絡しようとしたのです?」

「ぐう…っ」

衣擦れの音に反応して狼牙が振り返ると、フシミンが先ほどの男をすでに抑えていた。彼女がねじりあげた腕にはスマホが握られており、痛みを耐えかねたのか手からこぼれ落ちる。

狼牙は床に転がったスマホを拾い上げた。

「人のスマホを勝手に見るのはどうかと思いますが…」

柄鎖の抗議をスルーしながら狼牙がスマホを操作すると、画面にはいくつかの書き込みが。

(今到着)

(こっちはもう三階におるで。生まれて初めて万引きしてみたけど意外とバレんもんやな)

(俺はもう三回目やぞ。何か楽しくなってきたわ)

(俺は今エスカレーター。前に可愛い女性おるけど、スカートの中盗撮しても良いか?)

(聞く暇あるならはよせえや)

「なんだこれ…? 分かるか?」

狼牙は画面の書き込みの意味が良くわからなかったため、柄鎖に画面を見せる。

「これは…: ネット掲示板の実況でしょうか? 恐らくこのショッピングモール内で不特定多数の方が行っている行為や感想をここに書き込んでいるものだと思いますが…」

「そういえばオフ会とか言ってたのです。君みたいな異能者が他にも

来ているのです?」

「…つああ、そうだよ！俺みたいなのが集まってシヨツピングモ―ルで滅茶苦茶やってやろうってんだよ!」

「それはまた…生産性の無い…」

柄鎖が頭を抱えてそう呟くと、男が額に青筋を浮かべる。

「うるせえ！ テメエらはどうして俺らの邪魔をする!? 同じ異能者のくせに一般人の方を持つのか!？」

「別に異能者同士だからといって仲間という訳ではないでしょう」

「だとしても一般人を助ける必要はねえだろ！ あんなクソ共をどうしてかばう!？」

「…先ほどから、貴方は異能者でない普通の人間に悪しき感情を抱いているように思えるのですが…それは一体どうしてでしょうか?」

「あたりのめエだろうが!! アイツらはいつも俺ら異能者を差別しやがる!! 小、中、高いつだって!! テメエらだってそうじゃねえのか!」

力もねえくせに群れる臆病者共に差別された事は無かったのか!？」
「小、中は学校行つてないので分かんないのです。高校は周りの人皆が異能者ですし」

真つ先に答えたフシみんは、さらつと凄い事をカミングアウト。しかし、狼牙がそれに驚く暇も無く柄鎖が続ける。

「私の場合、異能者というだけで差別をしてくるような調子に乗ったお人は、あの手この手で立場を理^わ解^からせてやりました」

二人の視線が狼牙に集まる。

「…俺の場合はぶん殴つたらそれ以降絡んでこなくなった。先生にはやたら怒られたが、それは無視した」

「少々雑では…?」

「当時の俺の目的は面倒くさいちよつかいを止めさせること。雑でもそれは達成したんだから良いだろ」

「まあ、貴方がそうであれば良いのですが」

「なんなんだよお前ら…」

ぼそりと呟いた男に狼牙たちの視線が向く。

「…俺だつてその目つきの悪い女みたいにしたさ。ムカつく奴をぶ

ん殴って事を解決しようとした」

“その目つきの悪い女”、で指差されたのは狼牙だった。女用の服を着ているせいだろう。

「けど待っていたのは更なる排斥だ。手を出してくる奴はいなくなつたが、俺は徹底的に無視された」

「なら良かっただろ」

「良くない!! 俺は…ただ普通に接してほしかつただけなのに…」

「要するに、お前は手段を間違えたわけだ。仲良しになりたかつたなら他の方法を探すべきだったな」

狼牙がそう言うのと、男は再び額に青筋を浮べる。

「じゃあどうすりや良かったんだよ!? あの時どうすれば俺は普通に暮らすことが出来た!?!」

「知らん。そんなうまい方法があるなら当時の俺が実行してる」

「狼牙様は少し黙っていただけですか。ややこしくなりますので」

狼牙の言葉で額の青筋を増やした男を見て、柄鎖が制止をかけた。

「とにかく、今は事態の收拾が先でしょう。ひとまずこの方を警備員に突き出しましょう」

「異能者を普通の警備員に突き出しても意味無いと思うのですが」

「大型施設には一人以上異能者の警備員を置く決まりがありますわ。その方にお任せすれば大丈夫でしょう。後は中に散らばる異能者達をどうするかですが…」

ガグオン!

建物全体を揺るがすような大きな音。少しして悲鳴のような声が聞こえてくる。

「…後手に回ったようですわね」

「どうする? 大騒ぎになりそうだし帰るか?」

「えー…面白そうですし、もうちよつと居ませんか?」

「この騒ぎを放置しておくとも異能者の立場がますます悪く一方なので、事態を收拾するべきです。二対一の多数決で居残りということ」

「民主的なのです」

「俺にとっては衆愚だよ、くそ……っ」
三人は事態の収束に向けて駆けだした。

10話 鎮圧

狼牙^{ろうが}達は項垂れている男を連れ、ゲームセンターを出る。すると、通路は大量の買い物客でごった返していた。

「おいどけよ!!」

「バカ押しんじゃねえ!」

「これどうなってんの!?!」

「知るかバカ!」

「早く行けって! 巻き込まれて死んじゃうぞ!」

パニックになっていている客も少なくないようで、このままでは早々に怪我人が出てもおかしくなさそうだ。

「人の波がすごい。どうする?」

「――雑にいきましようか」

そう呟いた柄鎖^{つかさ}が長く、長く息を吸いこんだ。狼牙とフシみんは彼女が何をするのかを察し、耳を塞いだ。

「全体、止まれ!!」

直後、柄鎖の口から想像絶する大声が発せられる。賢明な読者諸君は小学校の頃、オルガンのスピーカー部分に腹を当てていると、音の振動で気持ち悪くなったことがあるだろう。今現在、その時の数倍の衝撃が周囲に伝わっていた。よく見ればガラス窓にはヒビが入っている。

突然の音テロに、全ての買い物客が耳を塞いで立ち止まっていた。

柄鎖は客たちの聴力が戻るのを待つてから口を開く。

「――皆様、落ち着いてくださいませ。まずは倒れている人を起こすようにお願いしますわ」

爆音で意識をかき乱された客たちは、一種の催眠状態にあるのか、柄鎖の通る声に良く従う。

「非常階段はあちらです。エスカレーターやエレベーターは使わないように。移動の際は走らずゆっくりと。では、進め!」

パン! と柄鎖が手を叩くのと同時に、客たちはゆっくりと歩き出す。数分もすると、この階の避難は完了した。

「さて、警備員の方は…」

柄鎖達は誰もいなくなつた通路を悠々と歩く。吹き抜けから体を乗り出して下を覗くと、一階中央のステージが見える。そこでは店の外に出ようと思つた客たちが、押し合い圧し合いの様相を呈していた。

「二階にいた客の数に対して出入口が狭すぎるようですわね」

「一番広いメインエントランス側で異能者が暴れてるみたいなので。裏口しか使えないんじゃないやあ渋滞を起こしちゃうのも当然なんです」

「誘導を行っている警備員の中に異能者は……一人しかいないぞ。半グレ異能者集団がどれだけ束になつても、訓練を受けてる異能者なら負けないだろうが、このシヨッピングモールは広すぎる。上の階でも暴れてるようだし、手が足りないんじゃないか？」

「……とりあえず、あの警備員の元に行つてプロの判断を仰ぎましょう。そもそも私達で勝手に動く法律に触れかねません」

柄鎖と狼牙は手すりに足を掛け、警備員の近くに飛び降りる。フシみんは大柄な男を蹴り落としてから自分も飛び降りていた。

狼牙達が着地した音を聞いて警備員が振り返る。

「君たち……も、アイツらの手合いか？」

「いえ、異能学園の者です。私は上戸鎖かみとくさりの次女でございます」

「上戸鎖…、御三家か」

柄鎖の苗字を知つた警備員は体から力を抜く。

「悪いが力を貸して欲しい。普通の警備員を異能者が暴れている所に送り出すわけにもいかないんだ。4人で上階に逃げ遅れた避難者がいないか確認して来てくれないか？」

「こちらの方は頭数に入れないでございます。暴れているのを私達が抑えただけです」

「そうか。なら…」

警備員は男に対して手をかざす。すると男の周りの空間が歪んだ。柄鎖と狼牙が決闘した時の結界に似た素能。

「これで一応捕縛した。」

上階の探索だが2, 3階に一人、4, 5階に一人、6, 7階に一人の分担で頼む」

「承知しました。暴れている異能者と遭遇した場合は？」

「…出来れば無力化して欲しい」

無力化しろと言う警備員に狼牙が食って掛かった。

「無力化ってのは両足の骨を折るぐらいの事はしても良いのか？ 気絶させるなんて器用な事は出来ないぞ」

「…分かった、許可する。応援を読んだが、来るまでに2時間はかかるらしい。ここはそこまでしてでも対処する必要ありと私が判断した」

「了解」

暴力の許可を得た狼牙は脚に力を込める。

「俺は2, 3階担当で」

そのまま二階目掛けて跳躍した。手すりに手を掛けて、通路に乗り込む。

「うお…っ！ 何だお前!?!」

「待て待て、目え見ろ。こいつもお仲間だ」

「なんだ驚かせるなよっげえツツ!?!」

通路から見える所に異能者が二人。まずは一人の頭を掴み、床にたたきつける。

「な、ぶげえツツ!!」

もう一人には肩口へ踵落とし。どちらも大幅に手加減したため死んでは無い。狼牙はどちらも蹲っているのを確認した後、耳を澄ませる。こいつらの叫び声に反応した奴がいなかを確認するためだ。

（おい、何の音だ?）

（知るかよ。誰かが一般人いたぶってんだろ）

（なんか叫び声みたいなのが…）

（同士討ちでもしてんのか?）

三か所に四人。まずは一番近いところから。

「お、こんな女の子もオフ会にぐげえツツ!」

鎖骨に手刀。折れた感触。

「また悲鳴つごぼおツツ!!」

急所を外した上、手加減した腹パン。豆腐みtainな腹筋を貫く感触。

「こいつ敵だつうぎいイツツ!!」

「てめつぎいやあアツツ!!」

一人の脛にローキック。もう一人の腿にローキック。毛細血管を叩きつぶす感触。

狼牙が攻撃した異能者は全員、床に這って呻いていた。

(骨が折れたわけでも臓器がつぶれたわけでもないの大げさな奴らだ。

とはいえ、痛みによる無力化が上手くいって良かった。こいつら全員の骨を折るのは骨が折れるからな。

痛みに悶える嘆きの声をBGMに狼牙は二階を探索するが、逃げ遅れた人は居なかった。

続いて三階。さつきと同じような蹂躪劇を繰り返した後、逃げ遅れた人がいないかを探索する。結局、狼牙の担当階に取り残された人はいなかった。

無駄足+戦いとも呼べない作業を強いられた狼牙は、大きいため息をつく。その時、上の階から気になる声が聞こえていた。

「動くな! こいつがどうなっても良いのかあ!」

「人質、ですか」

誰か知らない男の声と柄鎖の声。どうやら4、5階は柄鎖の担当で、面倒臭い事になっているようだ。

「こいつに危害を加えられなくなったら大人しくしてるんだなあ!」

「…承知しました。人質に危害を加えられたくはないので大人しくしまししょう!」

柄鎖の声。狼牙に聞こえるよう大声で、状況を反復する。

(そんなに気を回さなくても聞き逃さねえよ)

狼牙はこっそりと階段で上階へ上がる。

(人質を取られている以上気づかれると面倒だ。ここからは気配を消

して行動する必要がある)

気配。それは人が立てる僅かな音であつたり、人が存在するだけで生まれる空気の流れの総称。それを消すのはあまりにも難しいように思える。しかし、狼牙の身近には気配を消す達人が一人。

フシミン。彼女の一挙手一投足を思い出し、模倣した。

音を立てない歩法。空気に波を立てない体捌き。

狼牙は商品棚に隠れながら人質を捕まえている男との距離を詰める。

「散々好き勝手しやがって…。そのまま動くんじやねえぞ」

狼牙が気配を消して移動している間に、人質を捕まえている男とは別の男が柄鎖の目の前へと。

「武道の心得があるようだがな、まともな防御も出来ないまま腹パンを喰らったことはあるか？」

拳を作り、これ見よがしに柄鎖の腹に押し当てる男。

「俺の素能は“硬化”だ。異能者の頑丈な拳を更に硬くした一撃。みぞおちにぶっこんでやろうか？ それとも肋骨をへし折られて肺にブチ刺されたいか？」

男の脅し文句に対して柄鎖は好戦的な笑みを浮かべるのみ。

「その顔…最初の一発を喰らって持てば良いがなあ!!」

男が大きく振りかぶりアッパー気味にボディーブローを繰り出す。

狙いはみぞおち。柄鎖の腹に勢いよく拳がぶつかる。

ガイン!

「いつてえ…!」

金属質な音の後に、男が手を殴った手を抑える。相打ちですらない。男が一方的に拳を痛めただけ。

「あら、素人がグーで殴ると指を痛めますわよ」

「うるせえ!! テメエも硬化の素能持ちかよ、くそ…っ!」

二人がわちゃわちゃやっている間に狼牙は人質のすぐそばまで来た。この距離なら一足で飛び掛かれる。

物陰から飛び出しようとしたその時、柄鎖が狼牙に向けて手振りで合図を送った。

“少し待て”

何か懸念事項でもあるのだろうか。狼牙はとりあえず指示通りに待機する。

「俺より硬くなれるからって調子乗りやがって…！ ならこいつはどうだ!!」

男が腕を突き出す。指はチョコキの形。彼の人差し指と中指は柄鎖の両目へと近づき…勢いよく額にぶつかった。

「いであ…っ!」

「…目つぶしは意外と難しくくてよ。素人が勢いづいて放つものではありませんわ」

「ぐっ…！ いちいちうるせえ!! もう頭に来た! 直接抉り出してやるよお!」

男は柄鎖の頭を掴み、親指をまぶた瞼を閉じた瞳に押し付ける。瞼越しとはいえ眼球というデリケートで傷付きやすい部分に指をめり込ませる行為。それは容易く柄鎖の視力を奪う…はずなのだが。

「っ…！ かつ、てえ…!!」

果たして、男の指は柄鎖の眼球を潰すこと叶っていなかった。

「硬化は表面だけのはずだろ…っ! 何で眼球が潰れねえ!」

「自分の尺度で人の力を測るべきではありませんわ。あいにくと私は体の全て…臓器、毛細血管、髪の毛、なんなら脳みそまで硬化して固定可能」

柄鎖がつつらと金剛不壊の能力を語る間に、男は反対の手で柄鎖のもう片方の瞳を潰しにかかる。

今度は瞼が間に噛んでいない。裸の瞳に指がねじ込まれる。

「これなら…っ?! バ、バカなっ!」

しかし、男の指は柄鎖の瞳を撫でるだけ。

「訓練も受けていない貴方の様な異能者では私の眼球にすら傷をつける事叶いませんわ」

目玉に指を突っ込まれながらも平然としている柄鎖に、男は恐れおののく。

「ぐっ…ば、バケモンがよお…!」

「あら、こんな可憐な令嬢を捕まえて化け物だなんて失礼なお方。先ほどの勢いはどういたしました？ 私のみぞおちに一撃を決めて悶絶させるだの、肋骨を折って肺に刺さらせるなどとおっしゃっていたようですが。現実において貴方は私に傷一つ付けられていない」
人質を取られているはずの柄鎖がなぜか優勢。彼女は蠱惑的な笑みを浮かべたままゆっくりと男の方に近付く。

「他の手段も気が済むまで試してみればどうでしょうか？ 目がダメなら耳。中指を立てて耳孔に押し込めば脳にまで達するでしょう。とはいえ、恐らく鼓膜すら破けないでしょうが…っ！」

ノリノリで男を煽る柄鎖だったが、突然前につんのめる。後ろから鉄パイプでぶん殴られたのだ。

(…あいつ、素能で透明化した奴が後ろから近寄ってたのに気づいてなかったのか)

内心呆れる狼牙。彼であれな鼻と耳が良いため背後からの接近に気づけただろうが、普通なら気づかないのはしようがないのかもしれない。とはいえ油断しすぎだったのは確かだが。

「ヒューッ！ フルスイング直撃イ！」

「バカがッ!! 硬化してないとところにモロに食らいやがったッ!!」

異能者の体は鉄パイプよりも丈夫だ。そのため、頭蓋が割れたりなどの致命的な損傷を負う事はない。しかし、殴られた衝撃は無視できないダメージとなる…はずなのだが。

「…悪い癖、ですわね」

殴られた当の本人はケロっとしていた。油断して奇襲に気づけなかったのが恥ずかしかったのか、頬が若干赤い。

「な…っ!! ノーダメージ…?!」

「完全に不意打ちが入ったはずだぞ!!」

「あいにくと、私の金剛不壊は自動で発動しますのよ。気管にご飯粒が入ればむせるように、目にゴミが入れば涙を流すように、攻撃を受ければ硬化する。気の遠くなるような反覆練習で身につけた防衛反射はいかがでしたか？ 貴方がたの一縷の望みを断絶できたのであれば、練習した甲斐があったというものですが」

余裕の表情を見せる柄鎖が、こっちに合図を送って来る。

“もういい”

(……始めっからそうさせろよ)

狼牙は内心で悪態をつきつつ、物陰から飛び出す。人質を取っている男の膝裏に蹴りを入れた。

「うぐうあつっ!!」

体勢を崩した男が人質を離れたのを確認した後、男の服の襟を掴んで容赦なく引きずり倒す。最後にサッカーボールキックを腿にかまして一段落。

「仲間か…っげえ!!」

「おぐうっ!!」

突然現れた狼牙に気を取られた二人をすかさず柄鎖がのした。それを確認した後、人質に声をかける。

「大丈夫か」

「は、は、はい!」

「悪いな、あいつの趣味が悪いせいで助けるのが遅れた」

狼牙が柄鎖の方を指差すと、彼女は珍しくバツの悪い表情に。

「その…申し訳ありません。生まれ持つての性さがというのはどうにも抗いがたく…」

「申し訳ありません、つてのは “申し言い訳が無い程、全面的に自分が悪い” って意味じゃないのか?」

「み」

変な嗚咽を漏らしたのを最後に柄鎖はうなだれてしまった。狼牙はそれを放っておき、人質になっていた男に向き直る。

「非常階段は向こうだ。さっさと避難しろ」

男は狼牙が指した方向を見た後、不安げに表情を浮かべる。

「なんだよ?」

「あ、いや…その…」

はつきりしない男に狼牙が眉を吊り上げそうになっていると、再起動した柄鎖が口を挟んでくる。

「二人で避難させるのは危険ですし、何よりそのお方が不安でしょう。」

私がついて行って行って差し上げます」

「ああ、そういう事」

「狼牙様は二四三様の様子を見てきていただけませんか？」

「見てくるまでもないだろう？ あいつなら正面切って戦ってもこんな半グレ共に負けるわけはないし、その気になれば気づかれずに全員を無力化することだってできるはずだ」

ライムの突進を受け止めた技量や、聴覚に優れる狼牙に気づかれず背後を取った隠密性を評価しての発言。

「実力に関しては疑いようも無いのですが…。私と同じく悪い癖が出ていないかの確認ですわ。お願いできますか？」

「…分かった」

気になる柄鎖の言いぶりに、狼牙は少しだけ興味が湧いた。了承して上階へと向かう。その途中で後ろから声が。

「避難は少し待っていただけですか？ さつき目を触られてからずっとゴロゴロしていますので洗眼薬を…」

(…あいつは印象よりポンコツなのかもしれない)

狼牙がそう思いつつ上の階に耳を傾けると、戦闘音が聞こえてきた。人が人を殴打するような音。

(随分と長引いているようだ。もしかして数が多かったのか?)

フシみんの優勢を疑わない狼牙が目的の階まで到達する。そして、瞳に映った光景に目を疑った。

フシみんがいいように殴られていたのだ。頭からはドクドクと血を流しており、左腕は折れているのか力なく垂れさがっている。

なぜ？

被虐癖？

強いやつが紛れていた？

流れる思考とは裏腹に狼牙の体は動く。近くにあった商品の炊飯器を手に取り、投擲体勢に。しかし、そこでもう一発殴られたフシミンがよろけ、射線上に割り込んでくる。

このままではフシミンに当たる。そう思った狼牙だが、直後に感じたほのかな殺意。彼は一瞬の身震いの後、炊飯器を投擲する。

放たれた炊飯器は、当然射線上のフシミンへと高速で向かう。だが直撃する寸前、彼女はしゃがんで回避した。

「へ？ うぼえっ!!」

代わりに、奥にいた男へとクリーンヒット。そのまま男は仰向けに倒れた。それきり、フロアは静寂に包まれる。

狼牙は嫌に荒れる心臓に手を当てながら、座り込んだフシミンにゆっくりと近づく。背後まで近寄った時、不意に彼女は頬を膨らませた。

「私が射線上に立ったのにどうして投げてきたのです、これ？」

フシミンが半壊した炊飯器を持ち上げ、狼牙の方へと放ってきた。彼はそれを受け止めながら彼女の疑問に答える。

「…お前、そいつを殺そうとしただろ」

「ありや、気づかれちゃいましたか？ 久しぶりですから、殺気を抑えられなかったのですかね。それとも狼牙君が特別に敏感とか」

驚いた表情を見せるフシミン。しかし、すぐに不機嫌そうな表情に戻った。

「それにしても酷いのです。満身創痍の私目掛けて炊飯器を放るなんて。血も涙もないのです」

「…わざと殴られてたくせに」

死角から投げられた炊飯器を寸前で避けたあの技量。そして直に見た結果、フシミンの戦闘相手はロクな使い手で無かったことも狼牙は確認している。

「ここまでくれば確信的だ。彼女は意図的に殴られていた。とはいえ、どうしてそんなことをしていたのかは分かりません。」

「どうしてされるがままにしていた？」

「だって、ただこの人を殺しちや私が悪者じゃないですか。正当防衛が成立するぐらいには手負いにならないといけないのです」

フシミンの発言にツッコミどころが多すぎるせいで言葉が出てこない狼牙。しかし、彼女が男を殺そうとしたことは確実だ。

「…そんなに力を入れなくても良いのですよ。もうこの人を殺す気は無いのです。気絶しちやってますから、手を出したら過剰防衛なので

す」

フシみんの言葉で無意識に力が入っていたことに狼牙は気づく。深呼吸をして自然体へ近づいた。

狼牙が落ち着いている合間にフシミンが立ち上がった。しかし、足取りがおぼつかない。フラフラとその場でよろめき、彼の方へと倒れ込む。

「お、おい……」

狼牙が咄嗟にフシミンを抱きとめると、耳元に顔を寄せられ、囁かれる。

「流石に殴られすぎました。しかも殴られ損ですし。それもこれも狼牙君のせいなのですから、せめて私を病院まで運んでいくのです」

「あ、ああ……」

未だにフシミンの頭からは血が流れ続けているし、左腕は骨折しており力なく垂れさがっている。ここまでの怪我を負ってまで、あの男を殺そうとした理由が狼牙には分からなかった。

「……怪我が治ったら手合わせするのです。聞きたいことがあればその時に」

それきりフシミンは本格的に気絶してしまった。狼牙は動かなくなった彼女を背負い、フロアに逃げ遅れた客がいなか確認する。

その道中でフシミンが無力した異能者たちがポツポツと見える。誰もが一撃で倒されており、彼女の技量の高さがうかがえた。

狼牙が階段で一階まで下りると、すでに客たちの避難は終わっていた。異能者の警備員と柄鎖、そこら中に倒れている異能者集団が見える。

警備員はボロボロのフシミンを見るなり、彼女の方へと駆け寄った。

「その子は大丈夫か!？」

「死んでは無い。この怪我也わざと受けたものだ、気にしなくて良い」

「わ、わざと……?」

「どうしてそうなったのかは分かりませんが、とにかく悪い癖が出てしまったようですわね」

柄鎖が諦め気味のため息を漏らす。

「ともあれ、これで全て片付いたようですね」

「三人がいたからこそ、怪我人が少なく済んだ。協力感謝する」

警備員のお礼に対して、柄鎖は軽く頭を下げて、狼牙は軽く手を上げて答えた。

その後、狼牙はフシみんなをソファに寝かせる。彼女の応急手当は警備員に任せ、彼はその場で大きく伸びをした。

「やっつと終わった…。にしてもどうしてこんな大騒ぎを起こすんだ、こいつらは？」

「日頃の不満・鬱憤を晴らしたかったのではなくて？」

「不満ね…。そういえば昔にもカツアゲや置き引きをした異能者を見かけたことがある。異能者は反社会的な性格を持つ奴が多いのか？」

「性根はともかくとして、環境がそうさせるのではないでしょう。異能者が一般人のコミュニティで暮らすと基本的に迫害されるため、そこでひねくれた性格になってしまうのかと」

「だったら一般人は一般人同士で、異能者は異能者同士で生活すれば良いだろ。分別がつく頃になってから交われれば良い」

「事はそう簡単でもありませんのよ。異能者の仕事は基本的に暴力絡み。例えば、暴動の鎮圧など。とはいえ普通の暴動であれば警察でも対処が可能ですわ。同じ異能者に暴れて貰わなければ異能者の需要が生まれてこない」

「…だからわざと反社会的な異能者を生み出すシステムを作っているのか？」

「ボディガードや警備を主な仕事としている異能者のお偉方にとってはそのうちの方が都合が良いでしょう？ 文部科学省などは義務教育課程における異能者と一般人の分離政策を推し進めているようですが、それも握りつぶされているようですね」

「はっ、大した生態だ。自分達が有利に生き残れるよう、環境を悪化させて他の生物がまともに住めないようにしているなんてな」

「ま、そもそもの話として、人間は分別がつくようになって自分たち

と違う存在を迫害するものです。それが自分達より優秀であるのならば尚更。

ですので、私は将来全世界の人間を異能者にしようと考えています」

「……は？」

「全員が異能者になってしまえば、少なくとも『異能者』だからという理由で差別や迫害が起きる事はないでしょう」

「それは……そうだろうが……現実的に無理だろ」

「あら、世の中の進歩というのは常に『無理』という言葉を覆しながら行われてきてよ。現在、科学者チームに一般人を異能者に変える方法を研究させていますわ。

それに、『人間に差別を行わせない』よりは、『全世界の人間を異能者に変える』方が遥かに簡単だと思いますが」

「そんなもんか……？」

「とはいえ、全人類が異能者になれば、また別の理由を付けて差別や迫害をおこなうのでしょうか。……ああ、考え始めると今やっていることが意味の無い行為に思えてきましたわ」

「流石に人類に対して信頼なさすぎだろ」

「ま、異能者に対する差別や迫害を無くそうとしているのはお嬢様としての義務ですので、意味の有無を考える必要はなかったですわね」

「義務を抜きにすれば、お前は迫害する側だしな」

「人聞きの悪い。私は天狗の鼻をへし折るのが好きだけです。多様性の鼻を折る趣味は無くてよ」

二人が雑談を行っていると、ショッピングモールの外からサイレンの音が聞こえてくる。

「警察の……到着。事情聴取で、今日一日は終わってしまいそうですわね」

「げ、マジかよ……そんなことに時間取られるのは面倒だな……」

「……でしたら、貴方と二四三様は先に帰られますか？ 事情聴取は私一人でも事足りますし」

「先に帰れるのはありがたいが……フシミンはどうするんだよ。あいつ

は病院行きだろ？」

「学園には休日でも保険医が常駐しております。貴方が二四三様を背負って帰り、そこで治療してもらえばよいでしょう。その方が入院するよりも手っ取り早いでしょうし」

「休日出勤とは保険医も大変だな。とんだブラック学園だ」

「またしても人間きの悪い。休日出勤は保険医が望んでやっている事ですわ。お給料もきちんと出ているようですし」

狼牙はフシみんの容態を軽く窺い、問題が無さそうなのを確認する。そして彼女を肩に担いだ。そのまま去ろうとする彼に、警備員が声を掛ける。

「ちよ、ちよっと待ってくれ！ 事情聴取は事件にかかわった人全員が参加する必要がある。一人で事足りるとかそういう問題じゃ…」

「この事件は、ショッピングモールの平穏を守る優秀な警備員と上戸鎖家の子女である私の二人で解決した。そうですね？」

「い、いや…」

「御三家の子女である私の発言に何か間違いがありましたでしょうか？」

「……分かった。そういう事にすれば良いんだろ」

「そういう事にするも何も、初めからそうでしょうに」

うなだれる警備員と扇子で顔を扇ぐ柄鎖。二人のやり取りを見た狼牙は何とも言えない顔をしていた。

「……名門って肩書は便利なんだな」

「義務があれば権利もありましてよ」

「権利の行使が雑すぎだろ…」

事情聴取は任せる。ありがとな」

「どういたしました。ペットに配慮するのは飼い主の義務ですし。その内ペットに対する権利を行使させていただきましようか？」

「……」
狼牙は逃げるようにショッピングモールを後にした。

病闘編

11話 五文銭の力

柄鎖つかぎから逃げるようにシヨツピングモールを飛び出した狼牙ろうが。彼は怪我をしたフシみんを保険医に預け、校舎裏で稽古を行っていた。休日にも関わらず、校庭や中庭は他の生徒たちが稽古や決闘などで使用中のためだ。

狼牙の額に汗が浮かび始める頃、彼の後ろから近寄る影が。

「おはよう、なのです」

「っ……フシみんか」

フシみんは風下から近付いたため、音も匂いすらも感知出来なかった狼牙。彼は冷や汗で汗の上塗りをさせられる。

「怪我は大丈夫なのか？」

「保険医に治してもらったのです。栄養補給もきちんと言いましたし」

フシみんは少し膨れたお腹をさする。

「あそこはもう保健室じゃなくて家庭科室に名前を変えた方が良いでしょう？ 中にキッチンまであるし」

「だったらあの人は保険医じゃなくてシェフなのです。あの人の料理はとっても美味しいのです」

「料理も出来る保険医か。どういう経緯でこの学園の保険医に……」

「わざわざ休日出勤してくるのも不思議ですしね。色々と複雑な事情を抱えてそうなのです」

フシみんはポケットから飴の入った缶を取り出し、一つ頬張る。

「それより……『手合わせ』、しないのですか？」

「今か？ 確かに手合わせの約束はしたが……お前は治療してもらったばかりだし、その上満腹だろ」

「戦う時と場所と場合を選ぶほど私はお上品じゃないのです。低血圧で頭が冴えてない朝だろうと、お風呂上がりで眠たくなった夜だとしても敵は待ってくれないのですよ」

「……俺程度は万全の状態じゃなくても十分だと？」

「んー…それもあるのです」

フシみんのその言葉が開戦の合図だった。

狼牙の裏拳が二四三の顔へ。彼女は一步退き、寸での所でそれを躲す。

狼牙は回転の勢いそのままに回し蹴りを繰り出す。二四三はそれもない。彼女は動作の大きな回し蹴りで体勢を崩した狼牙に肘打ちを命中させた。

しかし、狼牙もただでは攻撃を貰わない。金剛不壊でダメージを防ぎつつ、肘打ちを喰らった瞬間、自分から仰け反り衝撃を受け流す。それと同時にサマーソルトキックを二四三へお見舞いする。

だが、二四三は下から迫る狼牙の脚を横へと逸れて躲す。それと同時に縦回転する彼の脚を絡めとり、そのまま自分ごと体を捻る。

回転方向を無理やり変えられた狼牙。あわや無防備に地面へ叩きつけられる寸前、素能を発動させる。底上げた身体能力で無理やり受け身を取り、二四三から距離を取った。

ガリ、ゴリ、ボリ

二四三は口に含んでいた飴をかみ砕き、口中に広がる糖の甘さに舌鼓を打つ。余裕そうな彼女の表情に、狼牙は眉間にしわを寄せた。彼は息を整え、二四三へ突撃していく。

そこから先は壮絶な攻防が繰り広げられた。

狼牙の猛攻を二四三が的確に裁く。二四三後の先を取りカウンターを狙えば、その攻撃に対してさらにカウンターを繰り出す狼牙。しかし、それでも彼女は崩れない。ギリギリで打撃を交わして距離を取る。

そうしている内に二四三は次第に手を出さなくなった。カウンターも狙わず、狼牙の攻撃を凌ぐだけに。

それをチャンスと見た狼牙は一気に勝負を決めに行く。蹴り…と見せかけたフェイントから、お得意の正拳突き。

完璧な体勢から繰り出された、必殺の一撃。勝ちを確信する狼牙。口角を僅かに持ち上げる二四三。

「〃柳雪折無〃」

果たして、狼牙の正拳は空を切った。優しく添えられた二四三の手によって、軌道を変えられたのだ。渾身の一撃をいなされ、大きくバランスを崩した狼牙。

(不味……ッ!!)

しまった、という表情を浮かべる狼牙とは対照的に、二四三は更に口角を持ち上げ、

「私の勝うぷ」

急に動きを止めた。

「お、おい……」

困惑する狼牙を放置して、顔を真っ青にするフシミン。峠を越えたのか、安堵のため息をついた。

「……派手に動きすぎたのです。ゲロ吐いちやう寸前でした」

フシミンはそう言いつつ、空の口に飴を放り込む。

「狼牙君のこと、少し悔っていたのです。戻しかけるぐらい動かされちゃいましたし、〃柳雪折無〃も使わされちゃいました。私の負けなのです」

「……ふん。俺の負けだろ。お前が飯食ってなければ確実に……」

狼牙はその場で地面に座り込む。溢れそうな涙を何とか堪え、大きなため息をついている。二四三も彼の隣に座りこんだ。

「戦いに〃たられば〃は無しなのです。さっきの戦いは私の負けなのですよ」

フシミンが慰めの言葉を掛けるが、狼牙は体育座りのまま体を縮こませる。

「……俺の攻撃が一切当たらなかった」

「私、受けが得意ですから。相手の体勢が崩れた所に一撃を叩き込むのが気持ち良いのです」

「それにお前は素能を使っただけでなかった」

「だから狼牙君が私より数段劣っていると思っただけですか？ 素能なんてものはあくまでおまけで、本当に強い人は体術を重んじます。体術という点で狼牙君の攻めは良かったのですよ。最後の正拳

突きにはヒヤリとさせられたのです。

そもそも素能に関して使った、というより使えないのですが」

「使えない？」

「そういえば言っただけでなかったのですね。私の素能は発動条件が厳しいので、そうやすやすとは使えないのですよ」

「……具体的にどんな能力か聞いても良いか？」

「んー、そうですね……いや、やっぱり秘密なのです♪」

フシミンは唇に人差し指を当てて言う。切り札となり得る素能のネタ晴らしをする程お喋りではないようだ。

「なら別の事を聞いても良いか？」

「なんなのですか？」

「お前の生い立ち」

フシミンはこの前、シヨツピングモールで白昼堂々スリを行い、あまつさえそれが悪い事だと納得できないと言う。加えて、わざと殴られてでも殺人を行いたいとまで。どうしてそんな精神性になったかについて狼牙は好奇心が湧いていた。

「それならお答えするのですが……面白い話じゃないのですよ？」

フシミンはそう前置きをして話し始める。

「記憶がはつきりしている所から語ると……1番昔の記憶は両親に捨てられた記憶なのです」

初っ端から重いジャブが飛んできた。

「捨てられたのは5、6歳の頃でしたかね？ 一応物心はついていたので、どうにかして衣食住を確保しないといけない、と考えて行動したのです。衣食はお店から万引きして確保、住は適当なお家にお邪魔して寝泊まりしてました。最高で1か月ぐらい居候していた時もあったのです」

「万引きも不法侵入もバレなかったのか？」

「不思議と。多分、私には才能があったのです。人の視線やカメラの視線から隠れて万引きできたり、同じ家に隠れても家主に気づかれないうような気配を消す才能が。」

そんな風にその日暮らしの生活を1年ぐらい続けてたらですね、突然私の前に謎の覆面集団が現れたのです」

「覆面集団？」

「犬とか猫とか狐とかの覆面を被った怪しい集団なのです。その人たちは私の前に現れるなり、「付いてこい。働き口と衣食住を保証してやる」って言うてきたのです。正直勘弁願いたかったのですが、大人の異能者3人に囲まれて当時の私は逃げられなかったのです。」

「渋々その人たちについて行くと、やれ「暗殺者」だの「鍛錬」だの「殺人マシーン」とかわけ分かんない事をハイテンションで言い始めるのですよ」

「…ちよつと待て、展開についていけん」

現代日本で起きたとは思えない展開に、狼牙は頭の中を整理する時間をもらう。

「…つまりなんだ？ 万引きと不法侵入生活を続けてたら、お前が異能者だと知った覆面暗殺者集団がお前を攫って育て始めたって認識で合ってるか？」

「おおむねその通りなのです。ちなみにその暗殺者集団の名前、^{ナイトメア}悪夢”って言うらしいのですよ。くそダサですよね」

「…そうだな」

狼牙は少しだけカッコいいと思った自分に嘘をついた。

「その後はブラックな暗殺者集団で最低の研修を行った後、福利厚生最悪な職場で暗殺の仕事をやってたのです。」

…研修、今思い出してもムカつきます。別に24時間格闘訓練をし続けたり、三日間飲まず食わずでいさせられたりとかは大したこと無かったのですけど。ひどいのは痛みに耐える訓練なのです！ 見てほしいのです、この傷！」

フシみんは上着をシャツごと捲りあげ素肌を狼牙に見せる。そこにはひどい火傷跡が。

「爪はいだり指折ったりはまだ良いのですよ！ …いえ、ちよつと指が不格好になっちゃったので良くはないのですけど。焼きごて押し付けるのは流石にひどくないですか!? 乙女の肌にこんな傷跡残し

て!! このせいで露出の多い服着れなくなっちゃったのです!!」

珍しく声を荒げて怒りの感情を露あらわにするフシミン。口に含んだ飴をガリガリとかみ砕いている。

「あまりにムカついたので、力を付けた後で隙を見て暗殺者集団を半壊させたのです。やれる上司は全員殺して、トップも出来る限りボコしたので組織の維持が難しくなっただんじやないですかね。いい気味なのです」

そこまで語ってようやく落ち着きを取り戻したらしい。フシミンはポケットから缶入りの飴を取り出し、再び口に含んだ。

「暗殺者集団を半壊させた後、また万引きと不法侵入生活を続けていたのです。そこにスーツを着こなしているちゃんとした人たちが現れたのです。その人たちは異能者を管理している機関の人たちだっただけで、私の生活を保障してくれる代わりに異能者学園に入って欲しいと提案してきたのです。」

私は学校に興味津々だったので、二つ返事でOKしたのです。そして、今ここにいるというわけなのですよ」

フシミンが語り終えた後、彼女の突飛な話を狼牙はどうか頭の中で咀嚼する。

万引きを悪事だと思っていない。

生きる為に万引きと不法侵入を繰り返していたため、それが悪い事とは思えないのだろう。悪事が一度もバレていなければ尚更だ。誰も注意してくれないのだから。しかもその後には不道德の権化みたいな集団で生活していたのも手伝っているのだろう。

暗殺者集団で鍛えられた。

フシミンとの初対面を思い出す。勘と耳の良い狼牙が彼女の接近にまったく気づけなかった。あの技能もそうして身に着けたのだろう。模擬戦での並外れた実力にも納得だ。

狼牙はそこまで考えて、フシミンのあるフレーズを思い出す。

(そう、私と同じ——人殺しの匂いです)

ドクドクと脈が波打つ。狼牙は深呼吸で落ち着こうとしたが、浅い呼吸を何度か繰り返すだけだった。

「——お前は、初めて人を殺した時、どう、思った？」

狼牙が恐る恐る問いかけると、フシみんは笑みを深めた。

「私が……とと、その前に。そこ語らせちゃったら長くなる上に喋り散らかしちゃうと思うのですけど大丈夫ですか？」

「構わない」

「なら遠慮なく」

フシみんは嬉しそうに話し始める。

「私が殺人処女を失ったのは、上司から命令されてとある政治家を殺した時。」

——最初はとてつもない後悔と罪悪感が襲ってきました。私みたいな万引きと不法侵入の常習犯でも、人の命を奪う事の罪深さは理解できていたようなのです」

フシみんの瞳からぽろぽろと涙が溢れだす。

狼牙は正直驚いた。初対面の時から今までの態度からして、彼女が泣くところを想像できなかったため。

「覆水盆に返らず。一度失われた命は完全に不可逆で二度とは元に戻らない。」

私があの人のもっとに取り返しつかない終止符を叩きつけてしまったのです。一つの知的生命体の活動を止めてしまった事実には打ちひしがれました。落涙と嗚咽と慟哭に溺れかけたほどです」

フシみんは自分の体を抱えて、出来るだけ体を小さく丸めている。「けれども、悲しみの裏側には確かな喜びがあったのです」

一転、フシみんに瞳からは涙の流出がピタリと止まり、彼女は胸の前に両手を持っていった。

「万引き、不法侵入生活を1年続け、更にはめんどくさいだけの訓練を繰り返すつまらない日常に押しつぶされそうだった私には、殺人という刺激は望外な甘露でした。例え、もたらされたものが身を引き裂かれる様な悲しみだったとしてもです。」

それに感じていたのは悲しみだけでは無かったです」

今度は体を掻きむしり始めるフシみん。

「殺人という私の様なゴミクズでも理解できる絶対的な悪を為してし

まった背徳感。ドクドクと心臓が暴れ、呼吸は荒れ、口角が上がるのを禁じえなかったのです。

変ですよ、人間って。悪い事をして興奮するだなんて。でもいけない事をして盛り上がる人、ネットでも良く見かけられるのです。深夜にお菓子をドカ食いして背徳感に浸りながら気絶するように眠るのが気持ち良いらしいですよ」

ぐるぐると渦巻くフシみんなの特徴的な目から狼牙は視線を外せない。

「初めての殺人で膨大な刺激と感情に脳を焼かれて以降、灰色だった私の世界に色が付いたのです。ファツションや甘い物にも興味を持たたのですし、学校にだって行ってみたいと思えたのです。きっと火傷跡に怒りの感情を抱いたのも、その経験あってこそなのです。私は殺人のおかげで生存活動を続けるだけの虫から、思想と感情を持つ人間へと昇華できたのです。

そういう意味ではあの暗殺者集団にも感謝しているのですよ。私に処女を失わせてくれたのもそうですし、殺人の免罪符もくれました。：火傷跡を残したのは許せないのですけれど」

「：待て、免罪符ってのはどういう意味だ？」

「そう、免罪符。殺人によって人間として目覚め、殺人の背徳感に魅せられた私なのですが、それでも無差別に殺人を行うような真似はできなかったのです。

なぜなら殺人は絶対的に悪い事だからなのです。私は悪人にはなりたくなかったのです。良い子ちゃんのままでもいいかったですよ。でも殺人は行いたい。人を殺してまた脳を焼かれない。

——そんな相反する感情に折り合いをつけてくれたのが免罪符なのです。

「私は上司に命令されただけ」 反抗すれば殺されてしまうから仕方なく」 殺人なんていう決定的に絶対的に悪い事をしていなければならない、それは私の意志で決定していることじゃない」 —— だから、私のせいじゃない」

いつも飄々（ひょうひょう）としているフシミン。狼牙は彼女を捉

えどころのない奴だと思っていたが、今この時だけは彼女の実態に触れられているような気がしていた。

「そうやって自分を誤魔化して人を殺していたのです。免罪符を隠れ蓑に嬉々として人を殺す。最低で…最悪で…劣悪ですよ。私はゴキブリにも劣るゴミクズなのです」

そう自虐するフシミン。しかし、その顔には笑みが浮かんでいた。「とはいえ、そんな自分が大好きなんですけどね。誰にも愛されない性格をしている私だからこそ、私だけは私を愛してあげないと可哀そうなのです」

「ま、そうしてダメな自分を肯定しているのが一番クズな部分なんですけどね。それだけ付け加えてフシミンは黙ってしまった。」

「……」

一方で狼牙は何と発言するべきか困っていた。それでも、真摯に自分の事を語ってくれたフシミンに対して無言というのは少し気まずく、何とか言葉を探して発言する。

「…免罪符の話は少しなら分かる。俺もショッピングモールに行く時に免罪符を盾にしたばかりだ。最強を目指すなら稽古をサボってショッピングモールに行くのは合理的じゃない。けど、俺はショッピングモールに行つて遊んでみたかった。」

その時、柄鎖が「体と心を休めるのも鍛錬の内」と言ってくれた。俺はその言葉に流されたんだ。ショッピングモール行きたきにな。だから免罪符の話には共感できる」

狼牙がそんな感想を述べると、いつもニコニコしている二四三が珍しく真顔になった。

「…ど、どうした?」

「いえ、ちよつと驚いただけなのです」

そう言つて二四三はすぐにニコニコ顔に戻った。指を三本立てて説明を始める。

「私の話を聞いた人の反応は大体3パターンなのです。」

一つ目は理解できないと排斥するパターン。

二つ目は顔を引き攣らせて距離を取るパターン。

「三つ目は共感か同情を浮かべるパターン」

「俺は三つ目か。レアだったか？」

「それは違うのです」

その声には強い否定の意志が込められていた。

「二つ目の人も、二つ目も三つ目の人も。根底には同じ思いを持つているのです。『理解出来ない、あり得ない、同じ人間とは思えない』……みたいな思いですね。」

一つ目の人はそれを態度に表し、二つ目の人はそれを押し殺し、三つ目の人はその気持ちに嘘を付いているだけなのです」

二四三は遠くを見つめていた。目の焦点がぼやけて虚ろに。しかし、それも数瞬の事。すぐに狼牙の顔を見つめる。

「けれども狼牙くんは違うのです。他の皆にあるような拒絶の想いを感じられなかったのです。万引きも、不法侵入も、殺人も。狼牙君は道徳という色眼鏡を通さずに見ているのです」

「なんだそれ。俺が不道徳な人間だとも言いたいのか？」

「違うのです？」

「……否定はしない。」

俺は昔から親父以外との付き合いがほとんどなかった。世の中にほとんど触れてこなかった。だから万引きが悪い事だとか、殺人が悪い事だとか、頭では理解しているが、心では納得できてない。

万引きも殺人も、国から罰を定められているだけのただの行為だ。そこに道徳とか、悪とか善とか言われてもピンとこない。人には目的があつて、それを達成するため行為を実行するだけ。

お前は生きるために万引きをして、楽しむために人を殺した。それだけだろ」

二四三は狼牙の言葉を聞いて一瞬、真顔になった後、呆れたようにため息をついた。

「……ちよつと訂正するのです。狼牙君は不道徳ではなく、道徳未履修なのです。相当レアモノなのです」

フシみんは再びポケットから缶入りの飴を取り出し、一つ口に含んだ。

「私の退屈な話を最後までちゃんと聞いてくれた上に、感想まで言ってくれて嬉しかったのですよ。お礼に飴ちゃんあげるのです。次は何味かな…つと、ありゃ？」

フシミンが手に持った缶を振るが、音がしない。さっきのが最後の一つだったようだ。

「むく…切らしちゃったのです」

残念そうな表情で頬を膨らませるフシミン。しかし、何かを思い付いたのか、すぐにいつものニコニコ顔に戻った。

「狼牙君。あれ、何なのですか？」

狼牙の背後を指差すフシミン。彼はその指に釣られて振り返る。しかし、特に変わった物は見えなかった。

「別に何も…」

狼牙が振り返ったその時、彼の唇に柔らかい物が触れる。彼のすぐ目の前にはフシミンの渦巻く瞳があった。

同時に何かが口の中に押し込まれる。一拍して、狼牙の味蕾は甘さを捉えた。

狼牙が突然の事に呆けていると、フシミンの顔が離れていく。彼は遅れて飴を口移しされたと気づいた。

「飴ちゃん、プレゼントなのです」

「お前の食いかけかよ」

「嫌だったのです？」

狼牙は悪態をつきながらも、口の中で飴を転がす。

「…ブドウ味は嫌いじゃない」

「なら良かったのです」

その日は狼牙が飴を舐め切ってから、解散の流れになった。

12話 臆病者

飴を食べる狼牙ろうがを眺め終えた後、フシみんは彼の元を去った。

一人になった狼牙はフシみんとの模擬戦を思い出しながら稽古を行う。

「柳雪折無、か…」

彼の渾身の正拳突きを逸らしたフシみんの奥義。僅かな力で大きな力の流れを変える受けの技。

狼牙は一度だけしかその技を受けていないが、その本質を理解していた。同時に再現の仕方にもある程度見当がついている。

とはいえ技の性質上、一人では技の稽古が難しいため、少し困っていた。

バチバチツ！

その時、けたたましい音と共に校舎の灯りが消えた。辺りは少し薄暗くなっていたため、光度の変化にすぐ気づく狼牙。停電だろうか。

彼はひとまず音がした方に向かう。校舎の角を一つ曲がると、異音の原因を視界に捉える事ができた。

そこには学校の高圧受電装置の蓋を開き、配線を引きずり出している雷夢らいむが。そんなことをすれば感電必至。事実、彼女の髪の毛は帯電し、逆立っているうえ、あまりの高電圧に体全体が青白く発光していた。

「な、なにしてんだよ…」

狼牙の至極真つ当な疑問。それに対して雷夢は目線を合わせずに答える。

「稽古」

「…いや、何の?」

「見て分からないか? 電気を操る稽古。自家発電出来ないからこうするしかない。…もう6000Vでやる意味は無いな」

雷夢は手にしている配線を元に戻し、配電盤の蓋を閉める。

「一応、お前のせいで停電したんだが」

「それがどうした、私には関係ない。それよりこの前の続きだ」

雷夢は校舎の壁に触れ、体に蓄積された電気を逃がす。放電しても、なお逆立っている髪を乱暴に押さえつけ、正拳突きを構えを取った。

狼牙は一切悪びれない雷夢に何ともいえない視線を向けながら、彼女の隣で構えを取る。

示し合わせたわけでもないのに、二人は同じタイミングで突いた。異能者の並外れた身体能力から繰り出される正確無比な突きは音を置き去りにし、辺りに衝撃波をまき散らす。

とはいえ、雷夢側の衝撃波の方が弱く、彼女の側に風が吹き込む。

「今のは良かった。ほとんど完璧だ」

「ただのまぐれだ。今の感覚を忘れない内に繰り返す」

それから狼牙と雷夢は二人きりで稽古を続ける。言葉は最小限に、衝撃波の音だけが辺りに響く。夕焼けが沈み、停電から復旧した校舎の灯りだけが視界の頼りになる頃、ようやく二人は稽古を終えた。

二人は流した汗の分だけ水分と電解質を補給する。その後、全身の汗を拭こうとしたが、狼牙はショツピングモールからの帰って来たばかりのため、タオルを用意していなかった。

汗だくのまま寮に帰らなければいけないのかと、顔を顰める狼牙。そんな彼を見た雷夢は鞆からタオルを取り出し、彼へ目掛けて無言で放る。

「…使って良いのか？」

「二つ余分に紛れていた」

「…使って良いんだな」

狼牙は受け取ったタオルで全身を拭いた。そして、彼は汗を吸収して役目を終えたタオルを手に、どうしたものかと立ち尽くす。

「これ…」

「返すな。やる」

返事を受けて、狼牙は首にタオルを掛ける。

その時、狼牙は忘れていた事を思い出した。

「……あ、そうだ。最後に一つ付き合ってくれ」

「なんだ」

「俺に正拳突きを放ってくれれば良い」

「分かった」

フシミンから盗んだ『柳雪折無』りゅうせつむを試そうとしての発言だった。堂に入った構えを取る雷夢の真正面に立つ狼牙。

雷夢の正拳突きはまだ完璧でないとはいえ、その破壊力は折り紙付き。その射線上に立つ狼牙は無意識に息を呑む。

直後繰り出される命中必死の正拳突き。狼牙の鳩尾目みぞおち掛けて繰り出されたそれを、彼は大きく横跳びで躲していた。

「……はっ……はあっ……」

瞳は収縮、血管は膨張。自律神経を乱れに乱された狼牙は、たった数秒にも関わらず、ひどく消耗していた。

「何の技を試そうとしたのかは知らないが、止めておけ。お前には向いてない」

「……っ」

雷夢の忠告に、納得できない表情を浮かべる狼牙。そんな彼の態度を雷夢は妙に思った。それをきっかけに、彼女は少し前から疑問に思っていたことを彼にぶつける。

「お前は戦うには向いていない性格だ。なのにどうしてこんな学園に来た？」

「……な、何だと？」

「さっきの回避行動。技を出さないにしても、もっとギリギリで避けるべきだ。そうすればカウンターのチャンスも生まれる。だが、お前は臆病だからそれが出来ない」

「っ、お、俺は臆病じゃない!!」

『臆病』という言葉に反応して声を荒げる狼牙。

「入学早々、柄鎖つかさに喧嘩も売った！ お前にだつて！ この学校の奴らとも決闘をした!! そんな俺のどこが臆病なんだ!」

「……」

雷夢は同調するでもなく、反論するでもない。ただ少しだけ困った顔を浮べる。『こういう時どうすれば良いのだろう』……そんな顔

を。

「…な、何だよ…何か、言えよ…」

そんな雷夢の様子を見て、さつきまでの勢いを失う狼牙。彼の言葉にも彼女は無言のまま。

そのまま数十秒ほど無言の時間が続く。先に口火を切ったのは狼牙の方だった。

「…お、お前は避けられんのかよ、俺の正拳突きを、ギリギリで」

「来るのが分かっていたら」

「…やってみせろ」

先ほどとは反対に狼牙が構え、その前に雷夢が立つ。

「お前、片目だから距離感つかめないんじゃないのか？　なのに…」

「それはもう解決した。早くしろ」

あくまで余裕そうな雷夢に、狼牙は強く口を結ぶ。そして渾身の正拳突きを繰り出した。

先ほどの雷夢の正拳よりはるかに強力な一撃。手加減されていたとはいえ、雷夢自身もその身に味わい、十分知っているであろう致命の打撃。

彼女はそれを紙一重で避ける。同時に狼牙の腕にクロスさせるように腕を繰り出し、彼の顔面を掴んだ。

その瞬間、雷夢から殺気…と呼ぶにはあまりにも粘着質すぎるドス黒い気が漏れた。狼牙はそれを認識するより先に、無意識に雷夢を突き飛ばして距離を取る。

数拍遅れて、大量の冷や汗と鳥肌が彼の皮膚に浮かんだ。

「私程度の圧に押されるぐらいだ。やはりお前は戦いには向いてない」

「っ…るせえ！　ほっとけ！　俺は強くならなきゃいけないんだよ!!」

何にも負けないよう強く…！」

狼牙の歯が咬合こうごうによって今にも折れそうな音を立てている。

彼がそこまでして強くなるうとする理由は何なのだろうか。雷夢はそのことが気になったが、深くは聞かない。代わりに助言を残す。

「…私も昔は臆病者だった。塵芥チリカス共の暴行に怯えるだけの毎日を

送っていた。けれど、ある日を境に死ぬ事すら怖くなくなった。心に狂気を抱いたあの日から。

あいつの腹をアイロンで焼くためなら。あいつを実家のプレハブ冷蔵庫に閉じ込めるためなら。あいつの皮を剥ぐためなら。あいつの肌を薬で焦がすためなら。私は死んでも構わない。私が死んでそうなるなら焼死でも溺死でも何でもやってやるうううう……ッ！」

雷夢はしゃべっている内に興奮が抑えられなくなる。顔に手を当てて、何度か深呼吸をして無理やり落ち着いた。

「……理由を見つけれ。自分の命を懸けても惜しくない理由を。できないなら死ぬ前にここを去れ」

雷夢はそれだけ言い、その場を去る。残された狼牙は彼女の背中を見送った後、全身に込めていた力を抜いてうなだれた。

「……今の理由じゃ、足りねえってことか？」

眩きの直後、狼牙は近くに生えていた木を殴り、へし折る。

「……ふざけんな、ざけんなざけんなッ！ 今の理由で足りないって事があるかよ!? 親父は……親父はそんなに軽い存在じゃあ……！」

狼牙の叫びは薄暗い夜の闇に吸いこまれる。

校舎の灯りは彼の背中を照らす、代わりに反対側には長く濃い影が差していた。

13話 病気

真っ黒に濡れた手。1型糖尿病患者特有の甘ったるい血の匂い。冷たく、心音のしない体。その光景、匂い、触感、音は狼牙ろうがの悪夢。脳の防衛本能か、その夢はすぐに打ち切られた。

◇

目を覚ました狼牙は寝汗と頭痛に悩まされていた。ひどく怠い体を動かし、まずはシャワーを浴びる。それから固形栄養食を胃に入れ、頭痛薬を飲んだ。そして床に膝を付き、ベッドに頭を預ける。そうしている事数分。

「……今日は、柄鎖つかさの所で稽古か…」
呟いた後、狼牙は家を出る。日課の仏壇へのお参りは行わなかった。

◇

「貴方、このままだと30手前ぐらいで死にますわよ」
「……は？」
狼牙に告げられた余命宣告。受けた本人はあまりに突然な事に目を丸くしていた。

「…は？ な、え、あ、ど、どういうことだよ…？」
狼狽する狼牙を見て、柄鎖は面白そうに笑う。
「言葉通りの意味ですわ。先日、貴方には健康診断を受けて貰いましたが、病気がみわかりました。それが悪さをして、30手前ぐらいで死ぬということですね」

「健康診断を受けたのは1か月以上前だろ!?　そういうことはもっと早く言いやがれ!!」

「あら、異能者特有の病気は過去の症例が少なく、発見が困難ですよ。これでもかなり早く宣告出来た方ですが。」

病名は「異臓厚壁症」

「…な、なんだよそれは」

「異能者には一般人とは違い、異能を生成する臓器、キュリア「異臓」が存在している事は貴方もご存じでしょう。普通であれば、生成された異能は異臓の壁に浸透し、体へと出ていく。私達はそれらを活用しているわけですわね。」

しかし、異臓厚壁症の患者は文字通り異臓の壁が厚く、異能が体へと出て行きにくい。そのため、異能がじわじわと異臓に溜まっていく。それが臨界点に達した時…」

「時…?」

「パアン」

柄鎖は握った拳を開く。

「異臓が破裂し、すぐ隣にある心臓も巻き込んで the endですわ」

「…た、対処法はあるのか?」

「簡単なことです。手術で異臓にメスを入れるだけ。その古傷から異能が浸透するようになります」

「そうか…」

「とはいえ、異能者の体は頑丈すぎて普通のメスでは刃が通りません。ですので、病院に行っても無駄ですわね」

「っ、じゃあどうすんだよ?」

「工業用ドリルで手術でもしてみますか?　それか工場に行つてウォータージェット加工でも?」

「…:職人がやってくれるんだろうな?」

柄鎖の冗談に対して、狼牙は至極真面目な顔で答える。柄鎖は彼の表情を見て少しだけ驚くが、すぐに顔つきを柔らかいものに変えて、彼の頭を撫でた。

「安心なさってください。異能者の手術を行う名家がありましたよ。黒葛原家。あなたもご存じでしょう?」

「この前の三家会で会った……確か、黒子だったか?」

「ええ。彼女に依頼を出すべきでしょうね。費用に関しては私の方で負担しますし、私からも彼女に頼んでみましょう」

「費用まで出さなくても……」

「費用は億単位ですけど、払えますの?」

「……」

「私にとっては安い金額ですし、あげる気もありませんわよ。将来貴方が稼げるようになってから返していただければ結構です。学生の内は金利も無しにしてあげましょう」

「…助かる」

「とはいえ、一番の問題は黒子様が依頼を受けるかどうかですわね。彼女の事ですし、一体どんな代価を要求してくる事やら……」

「代価は金じゃないのか?」

「プラスチックアルファ、ですわね。異能者の手術……というより現代の医療全般に黒葛原家の息がかかっているのです、かなり無茶な要求をされる可能性も……」

しばし考え込む柄鎖。狼牙は不安そうに彼女の言葉を待つ。

「——とりあえず、狼牙様の方から黒子様に頼んでみてください。何を要求されるかはその時に分かるでしょう。」

彼女も貴方では払えない物を要求はしないでしようし、何とかはなるかと」

「わ、分かった」

「それと……」

柄鎖は少しだけ寂しそうな表情を見せる。しかし、それはすぐに引っ込んだ。

「私に義理立てはしなくともかまいません」

「……? それはどういう意味だ?」

「その時になれば分かりますわ。さ、稽古の続きをしましょう」

柄鎖はそこで話を打ち切った。二人は稽古へと戻る。

「さて。確か、新しい奥義の練習でしたか。私が貴方に打ち込めば良いのでしたわね？」

「ああ」

狼牙目掛けて何度も手を出す柄鎖。彼はフシミンから盗んだ柳雪折無で柄鎖の攻撃をいなす。

(…これは良い。最小限以下の動き、小さな力で相手の攻撃をいなせる)

柳雪折無は相手の攻撃のタイミング、角度、パワーに合わせて奥義を発動する必要があるため、かなり難易度が高い。しかし、使いこなせば強力無比な手札となる。

狼牙が柄鎖の攻撃を弾き、寸止めのカウンターを繰り出した所で彼はそう確信した。

「受けの奥義、素晴らしいですわね。モノにすれば確かに強力なカードとなり得るでしょう。…ええ、モノにすれば」

「…なんだよ、その言い草は」

「その奥義、相手の攻撃に合わせなければいけないため、かなり難しいでしょう。そしてミスをすれば相手の攻撃をまともに喰らってしまう」

柄鎖は眼前に迫っていた狼牙の腕を弾き、一瀉千里いっしやせんりに攻める。今まどとは違う本気の攻撃に、狼牙は柳雪折無りゆうせつむを使えず、ガードで凌がざるを得ない。

そんな所に、大ぶりの一撃が繰り出される。威力だけはあろうが、当たる方が難しいと言う鈍なまくらな拳。

柳雪折無りゆうせつむで弾き、カウンターを決める絶好のチャンスであった。狼牙自身もそう認識していた。

しかし、結果として彼はバックステップで距離を取る。拳が当たらない範囲まで逃げ、やり過ぎしたのだ。

「今の攻撃に合わせられないようでは…いえ、合わせようとしてもしないほど臆病ではその奥義を実戦で使うことなど不可能です。ハツキリ言いましょう、その技は貴方が練習しても無駄に終わるだけですわ」

雷夢に引き続き、柄鎖からもダメ出しをされる狼牙。

「…やってみなきゃ、分かんねえだろうが。俺の好きにさせろ」

狼牙自身も柳雪折無りゅうせつむが自分には向いていないと自覚し始めていたが、あくまで意固地に振舞う。

「人間の本質はそう変わらない。これは私の持論です。貴方の臆病さもその例に漏れない」

「……」

「とはいえ、変わろうとする意志までは否定いたしません。気の済むまでお付き合いしましょう」

「……助かる」

柄鎖の言葉通り、気の済むまで狼牙は稽古に励む。とはいえ、その日を全て費やしても柳雪折無りゅうせつむをモノにすることは出来なかった。

◇

翌日。狼牙は異臓の手術を依頼するため、黒葛原黒子つづらはらの元を訪れていた。

場所は三家公司が行われていた小会議室。彼は少し緊張した面持ちで扉をノックする。

「入りましたえ」

許可を貰った狼牙が会議室の中に入ると、中には椅子に座り、医学書を読んでいる黒子がいた。彼女は相も変わらず真っ黒の軍服チツクな服を着ている。

ちなみに異能学園は服装自由だ。

「そこに座って少し待っていてくれ、お茶を淹れよう。緑茶で良いかな?」

「ああ」

黒子は茶の準備をしながら、話を続ける。

「一応柄鎖君からも聞いているよ。『異臓厚壁症』なんだって? それで私の一族に手術を依頼したいと」

「そうだ。柄鎖から借りる予定だが、金も用意する。異能者を手術できる医者数は少なく、予約がいっぱいとも聞いているが、俺が死ぬまでにどこかで手術してくれれば良い」

「そうだねえ。異臓厚壁症は異臓にメスを入れるだけで対処できる。手術に時間はかからない。すぐに死ぬことは無いといつても不安だろう、君が望むならすぐにでも手術をしよう」

「本当か？」

「ああ、本当だとも。…とはいえ、手術の代価についてはもう少し話し合いが必要かな？」

黒子は準備したお茶を机の上に置き、狼牙の対面に座る。彼女の表情は能面を付けたように、アルカイツクスマイルで固定されていた。しかしその目つきだけはまるで得物を狙う蛇の様。

狼牙はその視線に眉を顰めながらも言い返す。

「相場は1億と聞いた。まだぼったくる気か？」

「いやいや、勘違いしないでくれたまえ。その逆さ。君からお金は請求したくない。

実家がお金持ちでもない学生の君から多額の金銭を受け取るのは私としても心苦しいからね」

「億単位の価格設定にしているくせに良く言う」

「耳が痛いね。とはいえ、異能者を手術できる能力は非常に希少で安売りするわけにも行かないんだよ。家格を下げることもつながってしてしまう」

「だったら、どうして俺からむしり取らない。家格を下げるのか？」「お金」は「請求したくないと言ったんだ。もちろん代価はいただくよ」

「……1億に匹敵するようなモノは何も持ってないぞ」

「それは自己評価が低すぎるねえ。君はお金なんかでは決して買えない希少なモノを持っている。あえて値段を付けるのなら、そう……百億」

黒子は指を一本突き立て、狼牙の眼前へと突き付ける。

「もし君の持っているそれをお金で買えるのなら、私は喜んで百億を

払う。…それでも安いぐらいかな?」

「…正気かよ」

「いたって正気さ。正気じゃないのは自分の価値に気づいていない君の方。無自覚のまま学園で過ごしていたらとんでもない騒ぎに巻き込まれていたやも。」

この場で自分の希少性を教えて貰えてよかったねえ。私に感謝するんだよ?」

「…それで? 結局お前は俺に何を望む? 俺の何が欲しいんだ?」

狼牙の問いに、黒子は笑みを深めて宣言する。

「――『金剛不壊』と『無勁』…その他にも知っている奥義の技術を全て私に渡して欲しい。君は雷夢君との手合わせの時に彼女の奥義を盗んでいただろう? だったら、柄鎖君や、下手したら他の人物の奥義も盗んでいるはずだ」

「…それだけか?」

溜めて言った割にはしよぼい内容だ、と思った狼牙は少々肩透かしをくらっていた。一方で、黒子の方は狼牙の察しの悪さに呆れている。

「……『金剛不壊』や『無勁』などの奥義は非常に強力だ。だからこそ名門は自分たちの一族にしか奥義を伝授しない。一般企業で例えれば奥義は企業秘密、それもトップシークレットと言えるだろうね。まあ、雷夢君の無勁は彼女が創造したもので、一族秘伝の奥義というわけではないが…。」

とにかく、君はその企業秘密を容易く盗み出す能力を持ち、現に複数保有している。それをこっそり教えて欲しいと言っているだけさ。値段をつけたのもそう。他社の企業秘密を知るために百億というのは酷く安いと思わないかい?」

「その金銭感覚は分からないが、お前の要求はハッキリ分かった。」

俺に柄鎖や雷夢を売れ、と言いたいんだな?」

「人聞きが悪いねえ。君の知識と経験を少しだけ拝借したいというだけさ。…して、その返事は?」

決断を迫られる狼牙。彼は目線を彷徨わせ、奥歯を噛みしめてから

喉を震わせる。

「……金じゃ、ダメなのか？」

「ダメだね。君に与えられた選択肢は二つ。奥義の知識を私に明け渡しして手術をしてもらうか、短い余生を精一杯楽しむか」

「……少し待つてほしい。柄鎖と雷夢に許可を取つてから…」

「時間の無駄だ。止めておいた方が良い。実家との関係が悪い雷夢君はともかく、柄鎖君が許可を出すはずはない。彼女は俗っぽいところもあるが、名門上戸鎖家の子女だよ」

「……」

その時、狼牙は柄鎖の言葉を思い出していた。

(私に義理立てはしなくともかまいません)

彼女はこの展開を予測していたのだろうか。狼牙の模倣能力の価値に気づいており、その上で黒子が手術を盾に奥義の横流しを要求してくる事を。

黙して語らない狼牙。その様子を見て黒子は立ち上がり、彼の側へと寄る。そして彼の肩へと手を置き、優しく囁く。

「そう悩むことはない。君にとつては自分の命がかかっている事だ。彼女たちを裏切ったとしてもしょうがないことだとは思わないかい？」

「…」

「そもそも君が奥義を私に教えてくれたとして、裏切りとは呼べるのかな？ 君と彼女たちはいったいどんな関係なんだい？ 恋人か？

友人か？ それともそれ以下か…。二人とはたった1, 2か月ほどの交流だろう。その間にどれだけの信頼を育んだ？」

「…」

「それに君も柄鎖君に付くよりかは私の側に付く方が良い。——どうせ彼女は一年後には死んでしまうのだからね」

「……は？ そ、それってどういう意味だ!？」

急に告げられた事柄に狼牙は思わず立ち上がり、黒子へと詰め寄る。

「言葉通りの意味だよ。彼女は一年後に死ぬ。平和を保つための礎いしずえと

なるためにね」

「もつと詳しく説明しろ！」

「そうだねえ…。君は『禁断箱』バンドラボックスを知っているかい？」

「知らない」

「ならこの昔話は？ 異能者が現れた黎明期、大暴れしていた異能者集団『N』ニユーのリーダーを三人の異能者が封印したっていう」

「それなら知ってる。以降、リーダーを失ったNは散り散りになり、複数の名家がけん制し合う今の均衡状態に落ち着いた所までなら」

「そうそう。まあ、ここで大事なのはNのリーダーが封印されたという部分だね。『禁断箱』バンドラボックスというのはそのリーダーが封印されている箱の事を指すんだ」

「そんな物があるのか？」

「一般には知られていないけれどもね、名門の間では常識だよ」

「それとさつき、封印『されている』って言ったが…」

「現在進行形で間違いないよ」

「封印されたのは100年ぐらい前の話だろ？ とつくの昔にくたばってるんじゃない？」

「Nのリーダーは細胞の老化を遅らせる奥義が使えるようですね。加えて仮死状態になれる奥義も。飲まず食わず、呼吸もせずに500年以上は生きられるらしい」

「なんだよそれ…」

「不思議だよねえ。老化を遅らせる奥義はともかく、仮死状態になれる奥義なんてほとんど役に立たないだろうにどうして身に着けているのか。まあ、現に役立っているわけだけでも」

「…話を戻すぞ。寿命じゃ死にくいつて分かっているのに、どうしてそのリーダーを封印したままにしている？ 封印するぐらい疎ましい存在なら引きずり出して殺せば良いだろ？」

「それができないから封印したんだよ。Nのリーダーは他人の素能エレメントを奪う素能を持っていてね。奪った力の中には不死の能力もあるらしい」

「不死…？ 反則だろ、そんな素能…」

「とはいえ、素能を使うには異能キユリアを消費する。完全な不死ってわけではないだろうがね。

話を戻すが、とにかくNのリーダーを殺害を不可能だと考えた当時の人たちは、封印して拘束する事を選んだんだろうね。彼は今も禁断箱バンドラボックスの中で眠っているわけだよ」

「…待て。長々と語ったが、それが柄鎖とどう関係ある?」

「さっきからNのリーダーを封印、と何度も言っているけれどもね。一体どうやって封印していると思う?」

「封印って…確かに、どうやって…?」

「まずは物理的な封印。厚さ30メートルの鋼鉄の箱に閉じ込めているんだ。これで物理的に脱出することは不可能だね」

「それで終いしまじゃないのか?」

「それがそうでもないんだ。Nのリーダーが奪った素能の中には瞬間移動もあるらしくてね。普通に閉じ込めただけでは簡単に脱出されてしまう。だから柄鎖君のように素能を無効化する力を借りているんだよ」

「…待て。確か、Nのリーダーは不死の素能を持っているんだろう? だったらそいつを無効化して殺せば良い。昔の人間はなぜそうしてない」

「…それは…確かにその通りだ。とはいえ、殺せるならその時殺しているはずだ。今、封印されている以上は封印せざるを得ない事情があったと考えるのが自然だろうね」

「……」

狼牙は納得がいかないのか、眉間にしわを寄せる。黒子は咳ばらいをしてから話題を軌道修正。

「話を戻すよ。とにかく、封印を続けるためには素能を無力化する力が常に必要なだ。しかし、その力は非常に燃費が悪い。生身の体じゃまず、ガス欠してしまう。

じゃあ、どうすれば良いかな?」

「…まさか」

「おや、察しが良いんだね。生身がダメなら改造すれば良いのさ。」

——生贄システム」

「…なんだそれは？」

「簡単に言うくと人間を解体して、素能を発動させるためだけの生体兵器に改造するんだ。この研究は医学・生体の分野にも関わる事だから、我が黒葛原家つづらはらも関わっていてね。詳しい事までよく知っているよ。

素能の発動のメカニズムは未だ良く分かっていないが、心臓と脳があれば機能することは分かっているんだ。その部分を摘出して活性化機械と組み合わせ、素能発動のためのアクチュエータが完成。

動力はもちろん異能キユリアになるわけだから、それを生み出すための異能も必要だね。それもじゃんじゃん異能を生産してもらおう必要があるから、かなりの改造が必要…。最終的には点滴を受けながらその栄養を異能に変換するだけのエンジン兼コンバータとなる。このエネルギー変換効率が凄くてね？ 個体差はあるが、驚異の85%だそう

だ。一度実物を見た事があるけれどね、あれはまた何とも…。あれが人のなれの果てとはあまり思いたく…」

「もういい!!」

黒子の語りを中断させる狼牙。突然の大声に黒子は少しだけ身をすくませる。

「…そのくそつたれな改造を柄鎖が受ける予定なんだな？」

「その通り。先代にもうガタが来ていてね。そろそろ部品交換の時期という訳だよ」

「……」

狼牙は重力に従い、椅子に座り込む。そのまま歯をギリギリと鳴らしながら俯く。

「そういうわけだ。柄鎖君は近い内に死ぬ。沈む泥船にわざわざ乗る必要は無いだろう？ 黒葛原という大船に乗っていれば君も安泰というもの…」

「うるせえ!!」

振り下ろされた狼牙の拳は木製の分厚い机を半分に割った。その

まま彼は扉の方へと向かう。

「お、お帰りかい？ 取引の返事を聞いていないが」

去り行く狼牙の背中に声をかける黒子。彼女は少しだけ狼狽していた。

一方で狼牙は彼女の言葉に立ち止まり長考する。

「……断る」

「良いのかな？ そうすれば君は将来確実に死ぬ」

「柄鎖や雷夢を売ってお前に与するぐらいならそっちの方がまだ」

「合理的じゃないねえ。二人に義理立てして死ぬ気かい？」

「勘違いするな。二人に義理立てするのが一番の理由じゃない。

初めてお前に会った時からそうだったが…今は特にそうだ。――

お前の事が妙に気に食わない。嫌いだ」

「それは残念。縁が無かったという事かな」

肩を竦める黒子を尻目に狼牙は会議室の扉を開ける。

「今日の君は感情的になりすぎだ。落ち着いて、考えが変わったのなら再び私の元を訪れると良い。いつでも私は待っているよ。」

君はそのままでも30までは生きられる。一生には短いが、悩むには十分な時間だろう。よく考える事だね。ああ、柄鎖君が死ぬのを待つというのも良い手かも…」

狼牙は乱暴に扉を閉じた。

14話 復讐者

感情のままに会議室を後にした狼牙^{ろうが}。初めの内は肩を怒らせて歩いてきた彼だが、その足取りは次第に勢いを失う。ついには完全に足を止め、校舎の壁に額を押し付けていた。

「どうすりゃ良いんだ…」

黒子^{くろこ}の誘いを断った狼牙だが、当然死にたいわけでは無かった。技を盗み、自らの師となった柄鎖^{つかさ}や雷夢^{らいむ}を裏切る事を良しとしない気持ちや、初対面の時から感じていた黒子への嫌悪感の方が勝り、衝動的に飛び出してきただけなのだ。

加えて柄鎖が一年後に死ぬという話を聞いて彼の脳がキャパオーバーとなってしまうたのもある。

ドグツ、ボグツ

狼牙が途方に暮れていたそんな時。彼の優れた耳が鈍い殴打音を捉える。

今の彼は諸問題について考えたくない気持ちであった。そのため、音の刺激に釣られてそちらの方へ足を運ぶ。

果たして、彼が向かった先では隻眼・紫髪の少女が中肉中背の男に殴る蹴るの暴行を加えられている場面であった。

「ああ、何だお前？ 見せもんじゃねえぞ」

狼牙には男と言葉を交わす間も、気もない。地面に伏せている雷夢を足蹴にしている男目掛けて一気に詰め寄り、容赦のない腹パンを繰り出す。

——そのはずだったのだが、突如として襲ってきたドス黒い殺気に思わず足を止めた。

「前の集会をサボりやがってよ、…このボケがあ！ おかげでこんなところまで来る羽目になっちゃっただろうが」

無防備な腹にフリーキックを貰う雷夢。彼女は呻く気力も無いのか、最低限の生理反応だけを示す。

「チツ、もうだんまりか。オラ、その有象無象。このゴミを片付けと

け」

男は雷夢を狼牙の方に蹴り飛ばす。しかし、狼牙は転がって来る雷夢から無意志に距離を取っていた。——ドス黒い殺気の発生源から。男がその場から去ってから、しばらくが経つ。倒れ伏せる雷夢と、少し離れた所で立ち尽くす狼牙だったが、彼女の方が先に動いた。さつきまで狼牙に向けていた殺気をおさめ、ボロボロの体を何とか起こす。

しかし、受けたダメージが相当大きいのか、腕や足が言う事をきいていない。立ち上がる途中で何度も膝や肘を折り、その度に床へと突っ伏している。

「お、おい……」

先ほどまで殺気を向けられていた狼牙は恐る恐る雷夢へと近づき、彼女に肩を貸す。彼にしがみつくようにして起き上がった彼女の顔は、ひどく愉しそうなものであった。

「……ツヒヒ……」

容赦のない蹴りを腹に喰らった雷夢。笑うたびに腹が引きつり、激痛が走るであろうに、そんなことは意にも介さず、引き笑いを何度も繰り返す。そんな彼女の様子に気圧されながらも、狼牙が声を掛ける。

「どうして良いようにやられていた？ お前の腕ならあの程度の奴に負けるはずは……」

「お前はあれか……？ 最高級コース料理の……スープだけを先に味わうタイプか……？」

違うだろ……？ 前菜からメイン……最後のデザートまで……全部一気に堪能してこそだろ……？ つまみ食いなんて……はしたない真似は……するもんじゃない……ヒヒツ……！

それに、こうして憎しみを溜め込むほど……来た時はきつと……：……な？」

雷夢はいつになく饒舌に語り、狼牙へと理性を失ったギョロ目を見せる。それを見た狼牙は諦めたように目を逸らした。

「……とりあえず、保健室行くぞ」

狼牙が雷夢を保健室へと牽引する。その道中、雷夢はうわ言のようにブツブツと呟いていた。

「……2022年9月23日……。腹に……17発。背中に5発……。指の骨を……4本……」

何度も何度も。歴史の年号を覚える受験生のように。己の体を受けた仕打ちを忘れまいと。

「……」

そんな雷夢を支えながら、狼牙は保健室へと向かった。

◇

保健室へとたどり着いた狼牙が扉を開けると、保険医が二人に視線を送り、呆れたようにため息をつく。

「先生……」

「あー、説明は良いよ。どうせまた無茶したんだろう。こっちのベッドに寝かせといて」

狼牙は保険医に言われた通り、雷夢を奥のベッドへと寝かせる。保険医は雷夢に触れて治癒の素能を発動させ、最低限の治療を済ませる。その後仕切りのカーテンを閉じ、保健室に併設されているキッチンで料理を作り始めた。

「邪魔した」

「……待つてほしい。少し話をしていってくれないか？」

役目を終えた狼牙が保健室を出ていこうとすると、保険医が呼び止める。

「彼女……雷夢君が誰かの肩を借りてここまでくるのは初めてだ。君は彼女とどういう関係なんだい？」

「どういう関係って………しいて言うなら、師匠と弟子……？」

「どっちがどっち？」

「どっちもどっち」

「……どういう意味だい？」

「そのままの意味だ。お互いに師匠で、お互いに弟子」

「教え合う関係という訳か。……いいね。彼女には良い交流になる」

保険医はフライパンに油を引き、火をかける。

「今から君に質問するけど、答えたくないなら答えなくても構わない。

君を治療した時に体を見させてもらったよ。体中にある傷跡……それはいつ、どうやってついたものなんだい？」

「……」

狼牙はシャツのボタンを外し、肌着ごと脱衣する。上半身裸の彼の肌には所々、紫の痣や古傷が見える。

「体の傷は親父に貰った」

「……虐待でもされていたのかい？」

「違う。親父は持病の治療も碌にせず、持てる技の全てを付きっ切りで俺に教えてくれた。人の技を盗む術も、正拳突きも、苦痛に対する耐性も。……この傷は、俺のために自分の命すら削った親父の愛の証だ」

そう言いながら、傷跡をなぞる狼牙の表情はとても穏やかで、嬉しそうだった。

「……そうか。良い、親父さんだったんだね」

「ああ。俺なんかにはもつたいない親父で……」

そこまで呟いて、狼牙は眉を歪めた。嫌な思考から逃げるように頭を振ってから服を着なおす。

「俺の傷は親父の愛が証となって残ったものだ。だが……」

狼牙は雷夢の眠るベッドに視線を送る。

「あいつの体の傷は憎悪の対象から付けられた傷らしい。負の感情の証を体に刻まれたあいつは……」

「今の彼女にとっては体の傷は生きる糧だ。そう悪いものではないよ」

「……復讐か？」

「ああ。自分の体に傷をつけた奴に復讐をする。それだけのために今の彼女は生きている。私の様な傍観者からするとひどく痛ましいが、

彼女にとってはそれが全てなんだ。否定できるはずもあるまい」

保険医は鶏肉を熱されたフライパンに入れ、炒め始める。油が音を立てて爆ぜるため、会話の音が少々大きくなった。

「1つ、君に頼んでも良いかな？」

「なんだ？」

「雷夢君とできるだけ一緒に過ごしてやってくれ。彼女が復讐を終えた後、君が彼女の生きる理由になって欲しい。彼女は復讐を終えたら、生きる意味を失って自殺しかねない危うさがあるからね」

「…分かった」

「ありがとう」

保険医は火を止めて、短く切った青ネギをフライパンに入れる。

「代わりに俺の頼みも聞いてくれ」

「なんだい？ 私にできる事ならなんでもするよ」

「お前は異能者で医者なんだろ？ 異能者の手術をできたりしないか？」

「…：悪いけど、異能者の手術はできないよ。私にできるのは一般人の手術と、素能で傷を治癒する事だけ」

「そう、か…」

「何か病気なのかい？ なら黒葛原家に頼むと良い。確かこの学園にクロが在籍しているだろう」

「…：クロ？」

「黒葛原黒子。名前を略してクロ。…：つい昔の癖だね」

「お前、あいつと知り合いなのか？」

「一応親戚筋でお姉さん面してたよ。もっとも、今は絶縁状態だが」

「何があったんだ？」

「医療性の違い、かな？ 私はどんな異能者でも治療を受けられるように治療の値段を下げるべきと主張した。一方で当時の黒葛原家当主——クロの父親は家の家格を下げるわけにはいかないと、私の提案を却下した。」

前当主の判断は正しい。彼は家の事を考えて正しい判断を下した。けれど、当時の私は青くてね。自分の理想だけを追い求めて、ついに

は家を追放された。今じゃ素能の力だけを買われて、学園のしがない保険医さ。いや、コックかな？」

保険医は完成した鶏肉とネギの炒め物を狼牙に見せる。

「話が逸れたね。とにかく、手術して欲しいならクロに頼むと良い」「もう頼んだ。だが、手術の代価として俺にとって難しい条件を突き付けられた」

「……やはりそうか。父親の意思を受け継いだクロも……」

しばらくの間、目を閉じる保険医。その眉はハの字に曲がっていた。

「私に出来ることは無いが、どうにかできるかもしれない知り合いはいる。その人に相談してみよう。」

何か進展があれば電話をする。連絡先を交換しよう」

「…助かる。ありがとう」

狼牙が深く頭を下げた後、二人は連絡先を交換する。

「少しのつもりだったが存外に長くなってしまった。引き留めてしまつて悪かつたね」

「いや、お前のおかげで突破口が見えた。感謝している」

「頭を下げなくてもいいよ。私にとつても君が生きていてくれないと困る。雷夢君のためにも、何より君を病気で死なせたくはない」

保険医の台詞に、狼牙は少しだけ引つ掛かるものを感じた。

「…どうしてお前は雷夢の事をそんなに気に掛ける？ いや、その前に俺もだ。気絶して運び込まれてきたぐらいの俺にどうしてそこまで味方する？」

「雷夢君も君も同じだよ。目の前で助けを必要としている患者がいれば、世話せずにはいられないのさ」

「赤の他人だとしてもか？」

「赤の他人だとしても」

「……生きづらそうだな」

「ハハハハッ…、違くない。そのせいで勘当までされてるんだからね。さ、もういいだろう。私も料理の続きをしたい。早く帰らたまえ」
そう促され、狼牙は素直に部屋を去る。保険医は彼が扉の向こうに

消えるまで小さく手を振った後、スマホを取り出した。

「私にとっては目の前の患者が最優先だ。——昔の妹分よりも」

13 桁の番号を入力し、何度かのコールの後、通話が繋がる。

「久しぶり、剣つるぎ。いきなりで悪いんだけど、少し頼みたいことがあるんだ。

……ん？ …いや、マルチの誘いとかじゃないよ!!? 昔の知人からの電話は全部マルチって偏りすぎだからその考え!」

狼牙と黒子、当事者の二人が知らぬ間に事は進んでいく。

15話 PTSD

保健室を後にした狼牙ろうがは少しだけ晴れやかな気分で廊下を歩いていた。手術の件に関してアテが出来た彼には精神的な余裕が生まれたのだ。

そんな彼が職員室の前に通りかかる時、突然扉が開く。出てきたのは柄鎖つかさ。

「あら、狼牙様。奇遇ですわね」

「柄鎖…」

「何でしょうか、その幽霊でも見たような表情は。流石に失礼でなくって？」

狼牙がそんな表情をしたのもしようがないだろう。柄鎖が一年後に死ぬと、黒子に聞かされてから初めての遭遇なのだから。

「……少し話良いか？」

「そうですね…。今は職員室の模様替えを手伝っている所ですので、狼牙様もご一緒にいかが？ その間に話ができるかと」

そう言う柄鎖は左手で台車を引きながら、右肩に事務机を背負っていた。

「…生徒が手伝う必要あるのか？」

「ありませんけれど。まあ、頼まれてしまったので」

「舐められてるんじゃないのか？」

「あら、そんな素振りを見せれば私のセンサーが即座に反応しますわよ。私、侮られるのは大層嫌いなのです」

そんなことを話しながら、狼牙は柄鎖から台車を受け取った。二人は通行人の邪魔にならないよう、狼牙を先頭に縦陣で歩く。

「そういえば、黒子様とのお話はどうになりましたか？ 手術は引き受けて頂けたので？」

「……俺の方から断った」

柄鎖は意外そうに目を丸くする。

「手術してもらえなければ将来死ぬのですよ？ 断られるならともかく、貴方のほうから断るとは……いったい何を要求されたので？」

「俺の知っている奥義を全て差し出せと言ってきた」

「……ええと……。それだけでしょうか？」

「ああ」

「全然無茶な要求では無いと思いますが。私の想像通りですし」

「やっぱり予想してやがったか」

「でなければあんな発言は致しませんわ。」

それで、いったいどうして断ったのですか？ 私に義理立てする必

要はないとおっしゃいましたが」

「義理立てするかどうかは俺が決める事だ」

「まあ、そうではありますが……」

「それに、断ったのはその理由だけじゃない。……ムカつくんだよ、あいつと話してると」

「黒子様がですか？ 確かに、彼女は人の神経を逆なでする発言する節がありますわね」

「それもそうだが……それだけじゃないんだよ。初めて会った時からそうだった。何か無性に気に入らない、あいつの存在が」

「ふむ……嫌いな理由が言語化できないというのは良くある話ですが。とはいえ、そのような場合の理由は大抵一つ。——同族嫌悪」

「同族……って、アイツと俺のどこが似てるんだよ？」

「さて。黒子様とは深い交流ありませんし、具体的にどこが似ているかまでは申せません。私は経験に基づくと主観を述べたまでですわ」

そうこう話している内に、二人は空き教室までたどり着いた。柄鎖は担いでいた机を降ろし、狼牙は台車に乗っていた小物をその机の上に置く。

「なににせよ、貴方は嫌悪感と私や雷夢様への義理立てのために手術を受ける事を拒んだ。馬鹿な真似をしましたわね。死ぬのが怖くないのですか？」

「それはこっちの台詞だろうが」

「？ それはいったいどういう……」

「お前、一年後に死ぬんだってな」

「ああ、その事ですか。どこで聞きました？」

「黒子から」

「まったく、お喋りですわね」

狼牙は柄鎖に目の前まで歩いていき、至近距離から彼女を見上げる。その目つきはいつもの2倍増しで鋭かった。

「さっきの言葉をそのまま返してやる。死ぬのが怖くないのか？」

「怖くありません」

あっけらかんと答える柄鎖に、一瞬言葉に詰まる狼牙。

「…な、何で…」

「理由を聞かれましても…。感情に理屈をつけるのは非常に難しいことです。お化けを怖がる人と怖がらない人がいるように、死を恐れる人と恐れない人に分かれてもおかしくないでしょう。そういう理解をしてくださいませ」

「…：つ、にしてもだ！ お前が死ぬのは不治の病とか寿命とか、どうしようもない理由じゃないだろ!? なんだってお前が生贄になって封印を続ける必要がある!？」

「私しか生贄の役目を果たせないからです。昔から生贄の役目は上戸鎖の一族から選ばれるものでしてよ。素能を無効化する素能は上戸鎖家の血筋からしか生まれませんので。今代は私しかその力を持つて生まれませんでした。まあ、外れを引いてしまいましたわね」

「外れ、つて…：なんでそんなに開き直れる…。怖くないとしても、死なないに越したことはないだろ…?」

「それはまあ、そうですが。しかし、私は我儘を言える立場では無いのです。幼い頃から特権階級として権利を行使してきました。そのくせに義務を放棄するのは道理が通らないでしょう?」

私が死なねば世界の秩序が乱れに乱れる。であれば、私は役目を果たしましょう」

「…：」

初志貫徹、表情を崩さない柄鎖に狼牙は数歩後ずさり、後ろを向いてしゃがみ込む。

「私が死なねば狼牙様とて危ないかもしれませぬのよ。封印されている方は大層強くて暴れていたそうですし」

「……」

柄鎖は何も喋らない狼牙に近寄り、頭の上に手を置く。

「どうせ一年後に私は死ぬのです。黒子様と手術の取引を行うのはその後にしたらいかがでしょうか。雷夢様は奥義の流出など気にされないでしょうし、私からOKサインを出すことは出来ませんが、死んだ後であれば義理立てをする必要も……」

「黙れ!!」

柄鎖の手を跳ねのけ、眼前に指を突き付ける狼牙。

「その件は俺が決める事だ!! これ以上ガタガタ喋るんじゃない!!」

あーだのこーだのうるさいんだよ!! ひっ、人の気持ちも考えねえで……クソツツ!!」

狼牙は窓を乱暴に開き、校舎から飛び降りる。そのままグラウンドを疾走して学園を出て行ってしまった。

その背中を窓から眺めていた柄鎖は懐から扇子を取り出し、口を覆う。

「…存外に、好かれたものですわね」

意外そうに呟く柄鎖。扇子の下の口は笑っていた。



狼牙は気づけば寮の自分の部屋にいた。どう帰ってきたのかは彼自身あまり覚えていない。今日は色々とありすぎたらしい。彼はベッドに突っ伏し休息を取っていた。

顔だけを横に向けた彼の視線の先には、父親の遺影が。写真と目が合った彼は、すぐに顔をそむけた。

しばらくそのままの体勢でいたが、ふと飛び起きる。父親の遺影を壁の方に向け、それから再びベッドへ。数分後、彼は眠りに落ちた。

木、木、木。そこはまさに森。

樹齢2千年はあろうかという巨木の前で、二人の人間が稽古に励んでいた。

「997…、998…、999…、1000!」

一人は中学生の頃の狼牙。彼は空に向かって拳を何度も突き出す。

「…：良し。正拳突きも完璧にモノにしたな」

もう一人は壮年の男性。狼牙の父親はやや不健康な肌を携え、狼牙の横で腕を組んでいた。

「これで、俺が教えられることは一つを除いて無くなった」

「本当か？」

「ああ。ここまでよく頑張った」

父親は狼牙の頭に手を置き、乱暴に髪を搔きむしる。それは不器用な彼にとつて最大限の愛情表現であり、狼牙もそれを素直に受け取っていた。

「稽古も今日で最後だな。最後の心得をお前に教えて終わりだ」

「それさえ学べば来月から異能学園に通つて良いんだな？」

「ああ、思う存分最強を証明してこい。狼森おいのもりの名を轟かせる時だ」

狼牙は拳を握りこみ、喜びに体を打ち震わせる。

「親父！ 早く最後の稽古を付けてくれよ！」

「…：ああ」

父親はしばらく時間をかけてから腕を解き、ゆっくりと狼牙の方に近寄る。

「…：親父？」

直後、狼牙の腹に拳がめり込む。

「ガ…ッ!!? ゲホッ!!? ゲホ…ッ!!?」

突如として父親に殴られた狼牙は咳き込みながら、膝を地に付ける。

そんな彼への追撃は上段からの振り下ろし。こめかみを正確に捉

えたその一撃は、彼を地面にたたきつけ、容易に平衡感覚を奪った。まったく事態を掴めていない狼牙は四つん這いの体勢でなんとか父親を見上げる。

「お、親父……？」

「何を呆けている。敵は待つてくれんぞ」

太ももへの蹴り。手加減の無い一撃は彼の毛細血管を潰し、大きな痣を作った。

そこまでされて狼牙はようやく防御行動を取る。地面を転がるようにして父親から距離を取り、巨木へと背中を預けた。

実践訓練というにはあまりに容赦のない攻撃。今までの稽古では寸止めか、当てるにしても急所を外していた。しかし、先ほどの攻撃は鳩尾^{みぞおち}、こめかみと的確に急所を狙ってきた。

——まさか、本当に？

殺されるかもしれないという疑念を抱いた瞬間、狼牙の脳辺縁系が活発化し、恐怖を全身に伝える。涙腺は緩み、脚は震え、歯がカチカチと打ち鳴る。

無様を晒す狼牙を気にする事も無く父親は間合いを詰める。正確無比な型から繰り出される正拳突き。狼牙は太ももを蹴られた側の膝を折り、ギリギリで躲す。

壊すべき対象を見失った拳は後ろの100mはあろうかという巨木を叩き、強大な質量を揺るがした。

当たれば死んでいた。

狼牙は確信する。父親が自分を殺そうとしている事を。

理由は分からない。けれども、対応しなければ確実に死ぬ。

その瞬間、彼の脳は防衛本能を発揮し、神経細胞を活発化。普段の数倍の周波数で電気パルスを発し、その結果彼の思考力が底上げされる。加えて、先ほどまで恐怖で制御を離れていた体が驚くほど従順に。

逃走？ いや、太もものダメージのせいで現実的ではない。

迎撃？ いや、先にダメージを受けすぎた。勝算が低い。

父親を突き飛ばし、思考の時間を作る。

攻勢？ …そう、こちら打って出る。それも一瞬の切れ味が肝要。一瞬の隙を突いて……殺す。

死なないために——殺す。

父親の正拳突きの子で巨木が揺れた。その結果として、樹上から虫やら葉っぱやらが降り注ぐ。葉っぱ、その一枚が父親の右目を塞いだ。

それを予期していた狼牙は父親の右側に踏み込む。葉が視界を塞いだのは一瞬。さりとて、それで充分。

相対する敵を一瞬とはいえ見失った父親は、狼牙の初撃に対応が遅れる。彼は下からの突き上げで父親の顎を跳ね上げた。

そうして作った隙に彼は構える。先ほどの父親の一撃と同じ正拳突きの型。

決着。

立っているのは狼牙。数百m吹き飛ばされ、伏しているのは父親。それを境に狼牙の集中が切れる。窮地から脱し、我に返った彼は体を震わせていた。肋骨を折り、内臓を潰した感触に。

「ち、違う……。ここまでする必要は……」

興奮が冷めた彼の脳は今までの痛みを思い出し始めるが、意にも介さず歩き始める。

「そんな……そんなつもりじゃ……」

向かわねばならない。しかし、行きたくない。状況と心の不一致が彼の脚を遅らせていた。

数分かけて彼がたどり着いた先には遺体が一つ。すでに事切れていた。

遺体の側には血で書かれた文字が。

「死に臨みて応戦しろ、狼牙。お前の最大の武器だ」

「……うう……ううううおおおおあああああああツツツ
!!!!」

彼は父親を抱いて叫ぶ。

死の恐怖に負けて親を殺してしまった自分に。親の最後の言葉すら聞けなかった自分に絶望しながら。

◇

ブーツ！ブーツ！ブーツ！

スマホの着信音で狼牙は目覚めた。彼はベッドに寝そべったまま手探りで画面を触り、通話を繋ぐ。

「…もしもし」

「……」

「…？もしもし？」

「黒葛原つづらはらに手術をして欲しいのなら、その権利を懸けて決闘をしろ」

「……誰だ？」

狼牙はスマホの画面を見るが、黒背景に非通知という白文字が浮かぶだけ。

「決闘を吹っ掛けても初めは断られるだろう。その時、お前はこう言え。『黒葛原は寒門からの決闘を断る臆病者か』…とな」

「何を…」

「そうして起こった決闘でお前が勝つ。それがお前の道理を通す唯一の道だ。メモはとったか？ 必要があれば繰り返し返す」

「内容は分かった。…それとお前は誰だ？ 保険医の知り合いか？」

「詮索はするな。非通知でかけている理由を良く考えろ。声だつてボイスチェンジャーを通して。今、お前に掛けているスマホも廃棄する予定だ」

「使い捨てとは気前が良い」

「無駄話は無しだ。切るぞ」

ブツ

通話の切れたスマホを前に狼牙は頭を抱えた。

「……つい分かったって言ったが、決闘吹っ掛けて煽ってどうにかなる問題なのかよ……。アイツからしたら受けるメリツトが無いだろ……。直情的な性格でもなかったし……。」

……いや、結局やるしか無いのか。俺には」

唯一見えた突破口。狼牙はそれに賭ける他無かった。

16話 黒葛原 黒子の華麗なるアフター5

黒葛原^{つづらはら} 黒子^{くろこ}。親を早くに亡くし、高校生ながら黒葛原家の当主となった彼女。ここではそんな彼女の私生活に触れていこうと思う。

時系列は黒子とロウガの取引が破綻した後。彼女は寮に戻り、自分の部屋でパソコンの前に向かっていた。

彼女は名門黒葛原。学園に許可を取り、寮の一部を改造している。広く快適な部屋の中でモニターに映る報告書を眺めていた。

「…またいざこざを起こしたのか。まったく血の気の多い…。今は内輪もめをしている場合ではないだろうに…」

苛つきからか、黒子の目つきが鋭くなった。

黒葛原家とひとくくりにされるが、実際には大きく分けて二つの家が存在する。

「黒葛原」と「剣先^{けんせき}」。

Nのリーダー^{ニユー}が封印され、群雄割拠となった異能者の界限で二つの家は手を組んだ。腕っぷしに長ける剣先と一族に固有の素能で医療を行える黒葛原。

二つの家は同盟関係によって確固たる地位を確立した。その規模たるや、二大巨頭といっても差し支えない程。

しかし、時間が経てば関係性も変わる。群雄割拠の時代が終わり、秩序が安定してきた頃、異能者の医療を行える黒葛原はその株を大きく上げた。一方剣先は平和の中でその勢いを失う事となる。優勢になったと判断した当時の黒葛原家当主は一強となるべく剣先家を潰しにかかった。

その結果起こった抗争によって黒葛原は剣先を取り込むことに成功したが、剣先はもともと荒事得意とする家。勝てぬまでも必死の抵抗により、両家の戦力は大きく削られた。

その間隙をついて、浮上したのが上戸鎖家と雷家だったりするのだが、今は関係の無い話なので省略する。

なにせよまとめると、剣先を取り込んだ歴史のある黒葛原は、何

かにつけて内輪もめが絶えない名家であるのだ。

内輪もめの対処に1時間ほどかけた黒子は、他の書類にも目を通す。

「どうしてこいつの報告書はこんなに読みづらいんだ…？ 剣先の一派だからか…？ 私への当てつけか…？ 中学生でももつとまじな報告書を書く…！」

半分正解。加えて、先の抗争で優れた幹部や一門が多く亡くなったため、全体的な人材の質が下がっているのも理由だ。

黒子は小学生のクラスを受け持った担任の気分を味わいながら、長い時間をかけて報告書を読んでいく。それが終われば、各部門への指示だ。報告書の内容を頭の中で統合して最善と思われる施策を伝達する。

とはいえ、内輪もめをするような家だ。内部の情報伝達ネットワークが整備されているはずもない。そこでもたつぷりと時間をかけて仕事を終わらせる。

そうこうしている内に時計の針は10時を指していた。モニターの灯りに照らされる黒子の表情は、いつもと変わらないアルカイックスマイル。しかし、内に秘めた何かがいつ爆発してもおかしくない印象を受ける。

家の仕事を全て終わらせた黒子はマウスを操作し、ビデオチャットアプリを起動する。連絡先は「けんざきつるぎ 剣先剣」。何度かのコールの後、通話が繋がった。

「もしもし。どつたの？ こんな夜に」

パソコンのモニターに一人の女性が映し出される。

彼女は白い髪を短く切りそろえており、中世的な顔つきも相まってボーイッシュな印象を受ける。

「悪いね、遅くに連絡して」

「別に、私たちの仲でしょ。…また、ストレス溜めてきた？」

「…どうだろう。勝手に涙が出たり、しゃっくりが止まらなかったり、熱くも無いのにやたら汗をかいたりすることは無いから、多分大丈夫だとは思うけど」

「いや、そんな症状が出たらさうとう手遅れだよ……。はあ、クロは真面目だねえ。当主の仕事なんて適当にやっただけでいいのに。どうせ報告書にも全部目を通してるんでしょ」

「何か見落としがあつてはいけないうら」

「見落とさせる報告側が悪いって。見にくい報告書は多分ウチの部下の報告書だろうし、ちゃんと教育しておくから。…まあ、改善の時間すら取れないのが現状だけだね。」

「とはいえ、黒子もそのままじゃいつか倒れちゃうよ。手を抜くことを覚えたら？」

「そんなことはないさ。これぐらいの仕事はツルもこなしているだろう。剣先家の当主として」

「まあそれはそうだけどさ。クロは学校生活もあるし、医者になる勉強もやっつてるでしょ？ 自由時間なんてほとんどないんじゃない？」

「それがどうかしたのか？」

「いや、そういう仕事とかのストレスは自由時間に好きな事して憂さ晴らしするもんなの。その時間が無いと溜まっていく一方でしょ」

「そうか…。そういう事なら私にとっての好きな事はツルとこうして話すことだな」

「私と？」

「ああ、何か爆発しそうになるたびに、こうして通話を繋ぐぐらいだ。きつと、ツルとの会話が私にとってのストレス解消方法なんだろうな」

「……そっか」

「思えばツルとはもう2年の付き合いか。丁度同じ時期にお互い当主になって、それからお互いに苦労したな」

「そうだねえ…。元々黒葛原と剣先で仲が悪かったところに、ダブルで当主が亡くなるなんて事故があつたもんだから、それはもう荒れに荒れたよね」

「それを抑えられたのもツルのおかげだ。感謝しているよ」

「別に私は何にもしてないでしょ？ ほとんどクロが収めたじゃん」

「確かに私が指揮を執った。しかし、一番の功労者は昔の因縁に囚わ

れず、当主として私に協力してくれたツルだよ。それが無ければ最悪、黒葛原と剣先の分裂もあり得た。本当にありがとう」

「まあ、因縁って言っても私が生まれる前の事だしね。知った事じゃないっていうか。それより部下にバレないようにクロに協力する方が難しかったよ。私達がこうして仲良く通話してるなんて知ったら、お互いの部下が怒り狂って脳の血管切らしかねないぐらい険悪だからね」

「違いない。…どうしてお互いに協力できないのだろうか。そうした方が効率的なのは明確にもかかわらず…」

「さあ？ 部下に直接聞いてみたら？」

「よしてくれ。そんなことを聞けるわけもあるまい。」

「…ああ、そうだ。この前話した彼について覚えてるかい。狼森おいのもり狼牙ろうが」

「ああ、奥義を盗めるとかいう。何か進展あった？」

「彼との交渉が難航しそうなんだ。途中までは良かったと思うんだけど…やはり、ツカサ君について煽りすぎたのが良くなかったのか…」

「煽ったって…交渉相手に何やってんのよ。そうした方が有効な事もあるけど、限度があるでしょ？ やっぱりストレスたまってるんじゃない？ 悪口言い過ぎちやうくらいにはさ」

「いや、違う。ストレスじゃない。」

「…私は本来当主になるような人間ではないんだ。多くの人を導いていくような勇氣も能力も無いと自負している。けれど、今は当主としての役目を果たさなければならぬ。皆を率いる強くて優れたリーダーとして。」

その矛盾からだろうか、強い言葉を使ってしまう事がある。弱い自分を指摘されそうになると良く…」

「確かに。初めて会った時も結構辛辣なこと言われたしね」

「あ、あれは本当に本心じゃないんだ！ 本当に虚勢で、自分でも何を言っているんだと思う事が多々ある…」

「分かっているって。じゃないとこうして仲良くなんてしてないし」

「良かったよ…。とにかく、狼牙君との取引は必ず成功させなければいけない。黒葛原と剣先をより発展させるために」

「そうだね。とはいえ、私は何にも出来ないからクロに任せつきりだけど。ま、クロなら大丈夫でしょ。とつても優秀だから」

「そう買ひ被らないでくれ。私は優れた人間なんかでは無いよ。毎日毎日、何とかやり過ごしているただの凡人さ…」

「分かった分かった、そういう事にしといてあげる。…どう？ ストレス発散は十分？」

「…ああ。今日はありがとう。またいつか」

「うん。またいつか」

黒子はボイスチャットアプリを閉じる。そして机の上に顔を伏せる。

「〃自らの組織に所属する者の利益が最大となるよう行動する。それが当主としての最低限の責務〃…：だったな、ツル」

そう呟いた黒子は鞆から医学書を取り出し、しおりの部分から読み始める。

「後20ページ。それで今日は何とかやり過ごさせる…」

その疲れた声は部屋の壁に吸いこまれて消えた。



場所は変わって剣先家。当主である剣先 剣（いさむら）は黒子との通話を切り、ベッドの上で休憩を取っていた。

そこへいきなりのノック音。

「…：…入れ」

休憩を邪魔されたツルギは不機嫌そうに入室許可を出す。

「失礼しますー！」

「何の用だ」

「この報告書をどうしても今日中に当主の目に入れるようにと上司

が」

夜も遅い上に自分の僅かな休息時間を邪魔してまで、目に入りたい報告書。いったいどれほどの内容だろうか。

そう思いながら報告書を受け取るツルギ。しかし、その顔が一瞬で脱色された。報告書にはどうでも良いような内容が無駄に長く綴られていたからだ。

「……お前は、これがどうしても今日中に私の目に入らないといけない報告書に見えたのか？」

「いえ、私は上司から言われただけです。内容についてはなにも……」

「ああ、そうか。そうだな。そうだった。そういう組織だったわ。

……良く知らせてくれた。お前の上司は誰だ？ 名前が知りたい」

「はい！ ○○です！」

「よし。もう帰っていいぞ」

ツルギはそう言うなり扉を乱暴に閉める。しかし、何かを思い出したように扉を再び開く。

「待て。最後に聞きたいことがあった」

「なんででしょうか？」

「黒葛原と和解するか、死ぬか、どっちか選べって言われたらどっちを選ぶ？」

「何言ってるんですか。そんなの死ぬにきまつてるじゃないですか。あんなのと仲良くするぐらいなら、腹搔っ捌いた方がマシですよ」

「理由は？ どうしてそこまで黒葛原を嫌う？」

「理由は……あいつら気に入らないじゃないですか。傲慢で、不遜で、何か一緒に空間にいるだけで気に食わないですよ」

「具体的にどんなところが傲慢で不遜なんだ？」

「え？ あー……んー……すぐには思い出せないですね」

「——良く分かった。今度こそ帰っていいぞ」

ツルギは再び乱暴に扉を閉めた。そして枕を持ち上げ何度もベツドに叩きつける。

「エピソードも！ 出せないくせに！ どんだけ！ 黒葛原のことを

嫌ってんだよオ！ びっくりするわ！ そのバイタリティーはどつから来てんだ!!」

ツルギはひとしきり愚痴をこぼした後、叩きつけた枕に顔を埋める。

「マジで和解は無理そう…。黒葛原の当主が死んで、小娘に代変わりしたから今が反逆のチャンスだつて部下はうるさいし…。そろそろ押さえつけるのも限界そうだし…。こっちも平々凡々な小娘に代わりしてんだつて！

はあく……。神様は私にどうしても茨の道を歩かせたいらしい」

しばらくベッドに寝転んでいた剣。しかし、突然跳ね起き、スマホやらボイスチェンジャーやらを用意し始めた。

「『自らの組織に所属する者の利益が最大となるよう行動する。それが当主としての最低限の責務』。あんなアホ共が対象でもね…」

ボイスチェンジャーの調子を試しながら、剣はとある番号に電話を掛ける。ややあって、通話が繋がった。

「…もしもし」

「……」

「…？…もしもし？…」

「黒葛原つづらはらに手術をして欲しいのなら、その権利を懸けて決闘をしろ」
歯車は動き始める。

17話 そんなことより

13

「何？ 私と決闘を？」

異能学園の小会議室。そこには、珍しく驚いた表情を浮かべた黒子がいた。

「俺が勝てば無償で手術をしてみよう。お前が勝てば俺の知っている奥義を全て売り渡す。その条件で俺と決闘しろ」

「……君は感情的にはなりやすいものの、正しく論理的に物事を考えられる人間だと思っていたのだがね」

黒子は呆れた顔で語る。

「私にはその決闘を受けるメリットがほとんど無い。君の病気、『異臓厚壁症』の手術は簡単なものだ。かかるコストは、せいぜい数日の入院費用と手術費用程度。それだけのコストを節約するために、万が一負けた時のリスクを背負う必要があるのか？」

「ある。お前がこの決闘を受けなければ俺は取引を放棄するからだ。奥義が手に入らないのは困るだろうか？」

「…死ぬ気かい？」

「死なない。工場用ドリルかウオーターカッターで施術してもらおう。異臓の壁に傷をつけるだけで良いんだろ？」

「……ふふふっ！ ははははははははっ!!」

狼牙の突拍子もない発言がツボに入ったのか、黒子は声を上げて笑う。

「…いや、すまないね。工業用ドリルでか…ふふっ。

医者のおとしてオススメはしないよ。施術自体が難しいのもそうだし、傷跡の縫合はどうするつもりだい？ 医療用ホチキスも針も異能者には通らない。

…おっと、治癒系の素能（エレメント）を当てにしているならやめておいた方が良く。あれは体を再生しているというよりは、復元していると言った方が近い能力だ。傷跡ごと無くなって、手術の意味も無くなる」

「……でまかせ言うなよ」

「でまかせかどうかは工場のライン上で目を覚ましてから確認すると良いさ」

余裕の態度を崩さない黒子。狼牙は耳を立てて彼女の心音を聞くが、乱れは一切なし。嘘を付いている様子は無いと確信する。

他にどうしようもなくなった狼牙は、怪しげな電話から貰った札を切らざるを得なかった。

「……黒葛原（つづらはら）ってのは寒門からの決闘すら受けられないのか？ とんだ臆病者だ。これが御三家だつてんだから拍子抜けしちまう」

「……」

黒子の心音が少し乱れた。それを聞き逃さなかった狼牙。こんな簡単な煽りで効果がある事に驚きつつも、追撃の手を止めない。

「かつては二大巨頭とまで呼ばれた姿は見る影もない。『上戸鎖』や『雷』が台頭してくるのも当然。」

それもしようがねえか、現当主がこれだけ臆病なんだ。歴代の当主も臆病だったんだろうな。守りの策ばつか練って肝心な所で他の家に先行されちまう。どっかで聞いたことあるよなあ？ 変化を恐れず時代の波に取り残された大企業とそっくり。ベンチャーにぶつ潰されるオチまでそっくりにするつもりか？」

「……」

黒子は相変わらずのアルカイツクスマイルを浮かべたまま、湯呑みを机に置く。しかし、その心音は平常時をはるかに上回る速度で脈打っていた。

「…野良犬が随分と大口を叩く。いいだろう、受けてあげようじゃないか、君との決闘を」

狼牙はその言葉を聞いて安堵のため息を吐く。そして、ポケットからボイスレコーダーを取り出した。

「言質は取った。証人もな」

狼牙の言葉に呼应し、キャビネットの引き戸部分が勢いよく開く。「確かにお聞きしました。上戸鎖家の子女である私、上戸鎖柄鎖がこ

の決闘の立ち合いをさせていただきます」

冷静さを取り戻したが、言い逃れの出来ない状況を作られた黒子は、少しだけ顔を引きつらせる。

「……ずっとそこに隠れて出歯亀(でばがめ)とは。名門のお嬢様にあるまじきはしたなさだ。恥ずかしいとは思わないのかな?」

「あら。私のお嬢様としての責務の一つは、助けを求められれば可能な限り助ける事」。そのために必要な事をしたまでするので、恥は一切ありませんわ。

それをおつしやるなら、家の権威を振りかざして一般人を虐めるような真似をする黒子様の方こそ恥を感じるべきでは無くて?」

「私の当主としての責務は、自らの組織に所属する者の利益が最大にするよう行動する事」。そのためならいたいけな子供だって虐めてみせるさ」

「…ま、今は私達で問答する時間ではありませんわ。とにかく、狼牙様と黒子様の決闘はここに誓約されました。

狼牙様が勝てば、異臓厚壁症の手術を黒葛原家から無償で受ける。黒子様が勝てば狼牙様が会得している奥義の技術を全て差し出す。よろしくつて?」

「……1つ懸念点がある。狼牙君が負けた時、しらばつくれて代価を払わない事も出来るわけだ。金剛不壊を流出させたくない柄鎖君も同時にね。つまり、君が証人になる事は私にとってあまりに不利じゃないかな?」

「その点は心配なさらないよう。立会人に、平等院(びようどういん)の者を召喚致します。一応狼牙様に説明いたしますと、平等院家とこののは約束事を違えないよう制限できる素能を持った一族の事です。

他に不明な点はございますか?」

「…私が勝った場合について、一つ条件を追加したい。決闘中盗んだ黒葛原の奥義を今後一生使用せず、漏洩もしない事」

「狼牙様、よろしいでしょうか?」

「構わない」

「よろしい。他にご不明な点は？ ……ないようですわね。

決闘の時間は明日の放課後17:00、場所は旧体育館。決戦の場、刻にて確かに相まみえるよう。

お二人に勝利の女神が微笑まん事を」

軽く祈りを捧げた柄鎖は部屋を後にする。彼女に続いて退室しようとする狼牙だったが、背中から黒子に声を掛けられた。

「がむしゃらに決闘へと持ち込んだ気概は評価しよう。しかし、私に勝てなければ全ては無意に帰(き)す。いや、無意どころか君は手術すら受けられなくなるのだから、マイナスだ。

せいぜい、勝った時のことを夢想していれば良い。それか異臓に穴を開けて貰うために工場の予約かな？」

狼牙は、やはり乱暴に扉を閉めた。

◇

狼牙が会議室を後にすると、すぐ近くで柄鎖が待っていた。

「黒子様とは表面上の話しかしてきませんでした。先ほどの会話で少しだけ本質が分かった気がしますわ。同時に狼牙様が彼女に対して無性に腹が立つ理由も」

「…今はそんな事どうでも良いだろ。それよりアイツに勝つ事に全力を注ぐべきだ。アイツの戦い方について知っていることを全て教えてくれ」

「そうですね。本日は明日に備えて稽古場で対策会議と行きましようか。さ、参りましょう」

目的地へと向かうため柄鎖が歩みを進めるが、狼牙はその場で立つたまま動かない。それを不審に思った柄鎖が振り返る。

「どうかなさって？」

「これは前にも聞いて、お嬢様としての責務 〴〵って答えも貰った。けど、どうしても納得できないからもう一度聞かせて貰うぞ。

なぜ、俺にこんなに良くしてくれる？

わざわざ決闘の証人になってくれたのもそうだし、そのためにわざわざ狭いクローゼットの中にまで隠れた。掃除したとはいえ埃っぽかっただろ、あそこ」

狼牙は柄鎖の袖や裾についている埃を払う。

「今も黒子の対策に付き合おうと約束してくれた。納得できないんだよ。義務や務めでそれだけの労力や時間を割けるものなのか？」

「……その質問に答える前に、狼牙の方が先ではなくって？ どうして貴方は黒子様を取引を受け入れず、ここまで拗らせたのでしょうか？ 私に義理立てをするためだけに自分の命を危険に晒せるものなのですか？」

柄鎖にしては珍しく、非礼を承知で質問に質問を返した。その問いに、狼牙は戸惑いながら答える。

「……お、俺自身も不思議なんだ。人のために命を懸けるなんて、それも義理なんかのためだけに……」

けど、俺はそうでありたい。そういう強い人間でありたい。恐れを知らない最強の戦士でありたいんだ……」

渴望。狼牙の絞り出すような声からはそんな印象を受ける。

「けど、今の気持ちはほんの一時の感情かもしれない。だから意地を張っている。今の俺が永遠のモノになれば良いと……」

今の狼牙からはいつもの強気さが全く見て取れなかった。それどころか、ほんの僅かに体を震わせてすらいる。それを見た柄鎖は、懐から扇子を取り出して広げた。

「私もお答えしましょう。私が狼牙様の事を気に掛けるのは、上戸鎖のお嬢様としての責務ですわ。困っている人を助けるのは当然ですから。」

それに貴方から黒子様へと奥義が流出するのは上戸鎖の子女として避けなければいけませんし」

柄鎖はそこで扇子で口と鼻を隠す。唯一外から窺い知れる目元は、狼牙から視線を逸らしていた。

「……そんな事より、柄鎖として貴方を助けたかった。命を懸けてま

で私に義理を立てようとする貴方を」

俯いていた狼牙は僅かに顔を上げ、上目遣いで柄鎖を視界に捉える。

「……さき、お互いの疑問に答えましたし、早く修練場へと向かいましょう」

目を逸らしていた柄鎖は狼牙の視線に気づかず、慌てたように振り返る。そのまま速足で廊下を歩こうとしたその時、声が聞こえた。

「ありがとう、柄鎖」

「……どう、いたしまして」

それ以降、修練上に付くまでの間、二人の間に会話は交わされなかった。しかし、二人の歩調は一糸も乱れず、同じペースで進んでいった。

◇

「もしもーし。数日振りだけど、また嫌なことあった？ クロ」

「……やっぱり私は、日々を何とか凌いでいるだけの凡人だよ、ツル」

「えー、何よいきなり。今日、何か失敗でもした？」

「……失敗も失敗さ。私の不用意な一言でしなくても良い決闘をすることになってしまった……」

「決闘？」

「…件の奥義を盗める狼牙君とだよ。私が勝てば奥義の技術を明け渡ししてもらい、彼が勝てば黒葛原は無償で手術を行うという取り決めだ」

「それは…確かにしなくても良い決闘だね。私達としては奥義の技術を明け渡して貰う事が一番。手術どころか健康診断とエステとネイルとヘアサロンまで付けてあげても、コスト面ではエビでタイを釣るどころか、無で石油の鉱脈を掘り当てるぐらいなのに、それが0か1になっちゃったんじゃないかねえ……」

「……やはり私は当主に相応しくないと。一時の感情で組織にとって大幅に不利となる間違いを犯してしまった」
「まあ、間違いは誰にでもあるって。それより肝心なのはこれからどうするか。」

当主としての最低限の責務は自らの組織に所属する者の利益を「最大とする事」じゃない。「最大となるよう行動する事」だよ」
「……そう、だったね」

「まずはその決闘に勝つ事を考えよう。勝算は？」

「……断言はできない。けれど8、9割は」

「そりやまたかなりの勝算だ。根拠は？」

「狼牙君、彼の戦いを一度だけ見た事がある。彼がその時のままだったら、勝算は10割だ。けれど彼は成長凄まじいタイプと見た。どれだけ成長しているかに勝算は左右されるかな……」

「そればかりは出たとこ勝負だね。……とにかく今日は明日の決闘に備えて早く寝た方がよいよ」

「そうだね。話を聞いてくれてありがとう。それじゃあ……」

「あ、ちよつと待って!! その前に一つ連絡！」

この前言った部下の育成について仕事の合間合間に考えてみたんだ。資料を添付したメールを送ったから届いてるか確認してこない？」

「メール、メール……うん。確かに届いているよ」

「添付の資料、開いてみてくれる？」

「ああ……ん？ “喫茶 猫屏風”……？ これが部下育成の資料……？」

「え？ ……あー、その……ごめん。送る資料間違えちった。」

今再送したから確認してくれない？」

「………？ 届いていないよっ」

「あつれえ？ ……ああ、間違えて携帯のEメールに送ってるわ。ごめん、そっちの方で確認してくれる？」

「分かった。……これか。確かに部下育成の資料だ。ありがとう、こんなものまで作ってくれて」

「良いって事よ。お互い助け合わないとね。それじゃ、今日はここらへんで」

「ああ。お休み、ツル」

「お休みー、クロ」

◇

剣先家当主、剣先ツルギ。彼女は黒葛原（つづらはら）黒子との通話を終えて、イヤホンを耳から抜く。そして隣にいる男に声を掛けた。

「送ったウイルスは？」

「——問題ありません。PC、スマホ共にこちらで制御可能です。」

にしても不用心ですね。メールの添付ファイルをウイルス検査もせず開くとは。黒葛原の当主はネットセキュリティに疎い間抜けのようで」

「相手が私だったからこそだ。……本当に信頼されてるよ、まったく」
「信頼を得るためとはいえ、黒葛原なんかと仲良くしないといけないとは……。当主様の心中お察しします。お疲れ様です」

「……少し黙れ。それ以上余計な事を言う口を縫い合わずぞ」
とにかく作戦の決行は明日、黒子が決闘に負けた瞬間からだ」

「奴が決闘に勝った場合はどうするのでしょうか？」

「一度だけなら決闘を有耶無耶にしてやり直すプランも考えてある。それでもだめだった場合は……強引に行くしかないだろうな。」

「ここまで来て引き返せば、お前らの行き場を失った恨みつらみはどこに向かう？ 結局暴動を起こすに決まってる……違うか？」

「まあ、その通りですね」

「そこは嘘でも否定しろ、阿呆が。」

「……学園に在籍している我が家の者との連絡は？」

「問題ありません。密に連携を取っております」

「……いまいち信用できんが、まあ良い。作戦は迅速に、黒子の連絡手段を奪えている内が勝負だ。制御を奪った黒子のPCから学園に在籍する黒葛原家の者にもウイルスを飛ばせ。

アナログな連絡手段を防ぐためにも、学園の周りに腕自慢の者を配置しておけ。とはいえ怪しまれないよう十分な注意を払えよ。学園側も間抜けじゃない」

「承知しました」

「よし。黒子のスマホとPCは24時間体制で見張っておけ。今日はもう解散だ」

ツルギが部下に向けて手を払う仕草を見ると、部下は素直に部屋を出ていく。一人になることができたツルギは、ため息をつきながらベッドへ寝転がった。

「……心が折れてくれれば良いんだけどね」

ツルギは胃に手を当てながら、重たく呟いた。

18話 黒の刀

午前4時半。黒子の部屋でスマホのアラームがけたたましく鳴り響く。余りのうるささに、眠たい目をこすりながら黒子がベッドから体を起こした。

「うっ…」

黒子がアラームを止める為にスマホの画面を見ると、過剰なぐらいの光量が彼女の目を刺す。真つ暗な部屋の中で、その光を真正面から見てしまった彼女は思わず目を閉じてしまった。

同時に強い光を浴びた黒子の体はお休みモードからおはようモードへと徐々に移行していく。彼女は目を細めながらスマホの光量を落とす。

「なんでこんな時間に…？ アラームの設定を間違えたのか…？」

とにかく、寝直すのも難しそうだ。今日は大事な決闘だというのに…。昼寝を取るしかないか」

気だるい体を引きずりながら、彼女は朝の支度を始めた。

◇

午前8時。早くに目が覚めた黒子は残っていた仕事をパソコン上で片付け、学園へと登校していた。その道中、彼女はしよぼしよぼする目を擦る。

「目が、乾く…。朝にパソコン作業をしたのが良くなかったのか…？ それともストレスのせいか…」

彼女は立ち止まり、目薬を差した。

◇

12時30分。食堂で昼食を食べ終えた黒子は小会議室で仮眠を取ろうとしていた。棚から枕を取り出し、机に置いた後、そこに伏せる。目を閉じると、ゆっくりと意識が溶けていき――

ガラッ

「黒子様!!」

突然の闖入者によって、現実へと引き戻された。

「……何だい？」

「つい先ほど剣先の一派が難癖を吹っ掛けてきたんです！ こっちも売り言葉に買い言葉で……。このままだと乱闘に発展しかねません！ 至急来ていただけませんか？」

「……分かった。すぐ向かう」

結局、彼女に昼寝の時間は与えられなかった。

◇

そして時刻は17時。旧体育館の真ん中で二人の男女が睨み合う。

男――狼牙ろうがの方は動きやすいジャージを着ている。しかしジャージの膝や肘の部分が擦り切れている。昨日は相当に稽古をしたことが見て取れた。彼は靴と靴下を脱ぎ、裸足で体育館の床を踏みしめている。

女――黒子の方はいつもと変わらない全身真っ黒の制服姿。しかし、肩の部分が普段の制服よりゆったりとしており、さらに黒タイツを脱いでいる。彼女も狼牙と同じく、裸足で決闘に臨んでいた。

真ん中で見合う二人を複数人が外野から見つめている。

黒葛原に与する者が数名。二人が決闘をする情報を掴んでいた耳聡い生徒が数名。この決闘の立会人に呼ばれた「平等院」の人間が

一人、残りは柄鎖と雷夢だった。

「……どうして雷夢様がここに？」

「決闘を見に来た」

「いえ、その理由をお聞きしたかったのですが……。人の戦いを見るぐらいなら稽古をしている方がありましたと以前おっしゃっていませんでしたか？」

「そうだ。……じゃあ、どうして私はここにいる？」

「いえ、それを先ほどから私が聞いているのですが……」

二人が意味不明な会話を繰り返していると、その後ろから忍び寄る影が。完全に気配を消し、二人の死角から近寄るのはフシミン。彼女は雷夢に狙いを定めて、その背中に思い切り飛びついた。

しかし、雷夢は軽く身を捻ってその体当たりを躲した。勢いの受け止め先を失ったフシミンはそのまま床へと倒れ込む。

「むー……どうして分かったのです？ 完全な忍び寄り方だと思ったのですが。もしかして後ろにも目があるのです？」

「無い」

「だったらどうして気づいたのです？」

「お前は視界の中でゆっくり近づいてくる人間に気づかないのか？」

「……ちよつと会話が成り立たないのです。柄鎖ちゃん、翻訳頼めるのです？」

「雷夢様とはある程度付き合いますが、流石の私も今のやり取りの意味は分かりませんわ。」

……そろそろ始まりますわよ」

柄鎖が目線を体育館の真ん中に戻すと、狼牙と黒子の間に進み出る男性が見える。その男性は体育館には似合わないスーツ姿で丁寧にお辞儀を行う。

「私、決闘の立会人を任されました、びょうどういん平等院 たいち平良」と申します。若輩者ですが、平等院としての責務は必ずや果たさせていただきますのでご安心を。」

今回の決闘、狼森狼牙様が賭けるのは、そ所有する奥義の技術を黒葛原に明け渡すこと、加えてこの決闘中に学んだ黒葛原家の奥義を今後

一生、使用・漏洩しないこと”。

黒葛原黒子様が賭けるのは”狼森狼牙様の異臓厚壁症を手術にて治すこと”。

相違ありませんか？」

「ない」「相違ないよ」

「決闘における敗北の条件は”「降参」と言うこと”、”気絶すること”、”決闘中、誰かの手を借りること”。

”この三点で相違ありませんか？」

「ない」「相違ないよ」

「それでは…」

立会人は手から光の球を生み出し、二人の間に滞空させる。

「両者、この光の球にお触れください」

狼牙と黒子はその言葉に従い、光に触れた。

「最後の誓約の前に今一度確認を。平等院一族の血に受け継がれる素能^{エレメント} ”自縄自縛^{セルフバインド}” は、口にした誓約を期間内…：今回の場合は3ヶ月以内に達成するか、誓約した相手と同意の上で誓約を破棄しない限り、誓約者を死に至らしめる能力です。

自らの発言をトリガーとして発動するため、誓約を誤魔化すことは自分を誤魔化すことと同義。それは何人たりとも不可能。記憶喪失にでもならない限り、誓約を誤魔化すことは出来ません。

本当によろしいでしょうか？」

「くどい」「問題無いよ」

「それでは誓いの言葉を。^{アセント} 誓約^{アセント}”」

「誓約」

その瞬間、光の球は弾け、二人の体内へと吸い込まれていった。

「これにて終了です。お二人がよろしければ、僭越ながら開始の合図も担当させていただきますが」

「頼む」「頼んだよ」

「神聖なる決闘の合図を任せていただく…。過大な使命をいただき、大変恐縮です」

綺麗に直立していた立会人が、腕を構える。それと同時に狼牙と黒

子も構える。

狼牙は半身に。黒子は膝を緩く折り、何かを握る直前かのように指を曲げている。

「――決闘開始イーーーーッツ!!!」
デュエル

立会人が腕を天に掲げ、開始の宣言を行う。

瞬間、狼牙は傍に置いていた自分の靴を足の指で掴み、黒子の方へと投げ飛ばした。

常人では捉える事すら難しい速度で飛んでいく靴。それが黒子の制空圏を犯したその時、靴は真つ二つに切断される。

「……おそらく柄鎖から聞いているんだらうね。隠す意味も無いから早々に“抜刀”させて貰うよ」

いつの間にか黒子の手には漆黒の日本刀が握られていた。

◇

「刀……なのですか？ いったいどこから？」

何の前触れもなく現れた武器に、フシミンが首を傾げていると柄鎖が解説する。

「黒葛原の血に受け継がれる素能、エレメント “正夢”マニフェス。」

思い描いた形を具現化することができる、まさに夢ゆめまぼろしを現実のものとする力。…とはいえ複雑な機構は具現化出来ないようですが」

「あの刀、異能者の体も切れるのです？」

「ええ、それはもうスパリと」

「だとすると、狼牙君はかなり厳しいのです。ただでさえ武器の分リーチで負けているのに、防御する事も許されない…」

「それはどうでしょうか？ 確かにリーチでは負けていますが、防御は可能ですわ」

◇

虚空から抜刀した黒子はリーチの長さを活かして一方的に狼牙へと攻撃していた。

狼牙は大きく距離を取って、刀から逃れる。何度も剣筋を見る内に彼の目が慣れていく。速さ、深さを測り終えた狼牙は回避行動を小さくし始めた。

数にして34撃目。黒子の踏み込みに合わせて狼牙も踏み込む。しかし、拳と刀、先に届くのは刀であった。

喉元へと迫る凶器に対して腕で防御する狼牙。傍から見れば無謀。万人の予想通り、彼の腕はジャージと皮膚を裂かれ、肉を切られ、骨を断たれる……はずだった。

ギャリンツッ!

金剛不壊こんごうふえで硬化した腕は、金属質な音を立てて凶刃を防ぐ。同時に狼牙は剣の力強さに押され、弾き飛ばされる。

(クソツ……! 何て力だ……!)

金剛不壊で刀を防ぎ、その隙に手が届く範囲まで踏み込む。それが狼牙の第一プランだった。しかし、彼の想像を上回る黒子の剣撃によって、そのプランは阻まれてしまう。

……だったら次だ。

狼牙は今立っている体育館の床を思い切り踏みしめた。

◇

「黒子様の剣が防がれた!?!」

「金剛不壊!?! あれは上戸鎖の奥義じゃ!?! あんな野良犬がどうして!?!」

「これは不味いのでは? 黒子様の素能と金剛不壊は相性が悪すぎる……!」

野次馬の一角、黒葛原の一派がやいのやいのと騒ぐ。一方でフシみんたちは冷静に事態を分析していた。

「確かに防御はできていますけど……あれじゃジリ貧なのです」

「この距離でそれが分かりますか」

「音を聞けば何となく。あんな「メツキ」じゃ黒子ちゃんの刀は受けきれないのです」

◇

狼牙は相も変わらず防戦一方。避けるだけでなく、金剛不壊による防御も合わせて、何とか凌いでいる……ように見えた。

その実、狼牙は黒子を誘い込んでいる。気づかれないよう、できるだけ自然に。

先ほど彼が強く踏みしめた床。壊れる寸前まで力をかけられた木板は後少しの衝撃で抜けてしまうだろう。

その甲斐あつてか、狙い通りの所まで黒子の誘導に成功する。狼牙は直前の黒子の一撃をワザと防ぎ損ね、大きくバランスを崩した。

黒子からすれば絶好のチャンス。渾身の一撃を叩き込む垂涎の機会。

——しかし、黒子はそれをあつさりとフイにした。

彼女は刀を逆手に持ち替え、床に突き刺す。そこは狼牙が事前に踏みしめておいた床板。当然、床板は音を立てて抜ける。

「随分と回りくどい事をするねえ。小細工を弄さなければ勝てないと思つたのかい？」

「……フン。そっちの方が速く片付くと思つただけだ。

お前こそさっさと降参した方が良いんじゃないか？ お前の刀は俺に傷をつけられないようだしな」

「それはどうだろう。君が一番良く分かっているんじゃないかな？」

…ま、ギャラリーにも分かるようにしてあげようか」

黒子は先ほど開けた床の穴を避けながら、上段の一撃を繰り出す。それを腕で防ぐ狼牙。金属質な音が響いた瞬間、黒子は手首を返して狼牙のジャージを撫で斬りに。

袖を切られ、露わになった狼牙の腕には、生々しい痣がいくつも広がっていた。

◇

「見て！ あの痣!!」

「全然防げてない！ これなら押し切れる！」

「やせ我慢してるだけよ、あの野良犬は！」

黒葛原の一派がやいのやいのと騒ぐ一方で、柄鎖たちはやはり冷静に事態を分析していた。

「本来、金剛不壊は難しい異能キユリアのコントロールが必要とされる技。狼牙様は奥義をコピーできるとはいえ、その練度は低い。そのため実戦で咄嗟に金剛不壊を発動するとなると、皮膚表面しか硬化できない。

そんな状態で刀を受ければ、皮膚が切られるのは防げますが、体内へのダメージは無視できない」

「本家の柄鎖ちゃんはどうなのですか？」

「私は攻撃を受けた瞬間、反射的に全身を硬化いたします。それこそ皮膚表面から毛細血管の一本まで。一定値以下の衝撃は、ほぼ無効化できますわ」

「それはまた……すごい足切り性能なのです。黒子ちゃん 対 柄鎖ちゃんって詰んでる組み合わせだったりするのです？」

「ええ。前に戦った時は私が一度剣撃を受けただけで降参されてしまいました。黒子様も私にダメージを通せないと悟ったのでしょう」
「なるほどなるほど…。」

それはともかく、狼牙君はこの状況をどうするのです？ 打つ手な

しって感じですけど」

「打つ手なし……そう見えるのが良いんじゃないやありませんか。もとよりまともにも戦っても勝てる見込みは薄かった。

勝機は一瞬。今の不利でその時の油断が買えれば儲けものです」

その時だった。体育館に血が舞う。

床を汚す赤い雫は、ぱっくりと割れた狼牙の額から滴り落ちていた。

「ついに一撃入ったわ！」

「野良犬でも血は赤いのね！」

盛り上がる黒葛原陣営とは裏腹に、柄鎖の内心は動揺に満ちていた。

(……油断を誘うにしても、やりすぎでは？ 額から血が流れれば目に入る可能性もある……)

不幸中の幸いと言うべきか、極度の興奮状態にある狼牙はアドレナリンの恩恵を受けており、出血はすぐに止まっていた。

(それに、狼牙様の表情も少々変。何というべきか……真に迫りすぎているような……)

今の狼牙は気遅れした表情だった。黒子を油断させるための演技ではなく、まるで本当に打つ手が無いかの様に。

(貴方にはまだ切り札があるでしょう。昨日、私と考えた最終手段が……)

いえ、一つだけ不安要素が。黒葛原の奥義、これだけは私も存じていない情報……)

柄鎖が考え込んでいる間に、いつの間にか保険医が体育館に到着していた。

「まさかこんなことになってるとは。ツルギの奴も連絡をよこせば良いのに」

「保険医様、一体どうしてここに？」

「雷夢君に呼ばれたんだ。緊急を要する治療が必要になるかもしれないからって」

どうやら保険医を連れて来たらしい雷夢は、泰然自若といった様子

で決闘を眺めている。

(緊急を要する治療。つまり出血を伴う刀傷……異能者は輸血が難しいために……)

柄鎖の嫌な予感はなく拭えない。

◇

額を切られてから数合。狼牙は体育館の壁に追い詰められていた。すでに腕は痣だらけで、小さく痙攣している。ダメージは限界のようだ。

その様子を見る黒子は、いつも通りのアルカイツクスマイルを浮かべている。

「これは善意からの忠告だよ。君はもう降参した方が良い。私の獲物は刀だ。手加減がしにくくてね。——弾みで殺してしまう事もある」

「……ッ」
狼牙は苦渋の表情を浮かべている。しかし、降参とは言わなかった。

「最後に足掻こうとしているようだが、止めておいた方が良い。君も感じているだろう？ 私に筒抜けなこと」

「……」
「君はバカじゃない。私が即席の落とし穴に気づいた事と、先ほどフェイントを織り交ぜた攻防で君の額に傷をつけた事。その二つを『決闘の始めから私が使用していた奥義』と結び付けるのは容易い。そうであれば、我が黒葛原の奥義にも見当がついているはずだ。だからこそ君は絶望しかけている。違うかい？」

「……」
「……言ってあげようか。——『上』だろうか？」

黒子がそう呟くや否や、狼牙は目に見えて体を揺らした。

「……っ、はあっ……はあっ……はあっ……」

次第に息が荒れていく。しかし、一際大きく息を吸い込み、覚悟を決めた。

狼牙は壁の木板を引つpegし、黒子の方へと放り投げる。彼女はそれを刀で払った。

その隙に狼牙は一気に飛び上がった。壁の近くにだけある体育館の2階の床を蹴り壊しながら、今度は急降下。

頭上。それは人体における完全なる死角。加えて迎撃の難しい位置。完全に有利な位置から踵落としを繰り返す狼牙。

「――弧月閃」

黒子の眩きと同時に二人が重なる。

果たして、狼牙の踵は床へとめり込み、黒子の刀はどす黒い静脈血で濡れていた。

「頭上へと対処する技だ、さっき考えた。来るのが分かっていたら対応は容易いさ」

黒子は刀に付いた血と油を振り払う。

一方で狼牙は、再び体育館の壁を背にしていた。胸の刀傷から大量の血を流しながら。

19話 臨死応戦

黒葛原の奥義、〃心眼しんがん〃。異能を物体に伝わらせ、その情報をスキャンする技術。人体に使用することで、筋肉の収縮等を読み取り、動きを先読みする事も可能。

この力を素足から床に行使することによって黒子は落とし穴を見抜いたのだ。加えて、刀越しに狼牙の体をスキャンすることで、彼の奥の手を推察する材料を得ていた。

狼牙には意図的に温存していた筋肉がある。それは上へと飛び上がるための筋肉。それが分かっただけでしまえば次の一手を想定することなど黒子にとっては容易かった。

「さ、降参すると良い。その傷では早く治療しないと出血多量で三途の川を渡る事になる」

肩口から腹にかけて大きく切られ、血を流す狼牙に降参を進める黒子。彼女は少しだけ疲労を感じていた。

（保険医も近くにいた事だし、本当なら立つ事すら不可能なぐらいの深手を負わせるつもりだったのだが…。やはりキチンと眠れていないのが原因か？

まあ良い。ともかくこれで決闘は終わりだ。やっと仮眠を取る事ができ……）

スツ…

僅かな衣擦れの音。それは狼牙から発せられたもの。彼は素能エレメントを発動し、脚を狼のような構造に変化させ、四つん這いに。

「……おいおい。まだ続けるつもりかい？ その傷じゃあ……っ」
黒子は狼牙の目を見た。見てしまった。

例えるなら虫の目。虚ろ、それでいて遺伝子に刻まれた使命を果たそうとするかのような、根源の意志を奥に携えた虫の目だった。

「決まった!!」

「あの傷じゃもう続行は不可能よ!」

完全なる勝利を予想し、色めき立つ黒葛原陣営。

「……っ」

一方で柄鎖はギリギリと歯を擦り鳴らしていた。

「ありやりや、あれじゃあ続行不能なのです」

「かなり悪い想定に偏ってしまったな……」

二四三ふしみと保険医も諦めムードを漂わせる。

そんな中、心配されている当の本人は傷をかばおうともせず、素能を発動させて四つん這いの体勢に。

「…狼牙様?」

続行。

その姿勢を見せる狼牙に柄鎖が目丸くする。彼女から見て、彼の目は虚ろで冷静な判断力を失っているように見えた。

「…流石に無謀なのです」

「おいおい…、それはヤバい…」

柄鎖と二四三と保険医の三人は、狼牙の狂行を止めようとする。その時だった。

「ぐっ……!」

真つ先に駆け出そうとした柄鎖が腹を抱えて蹲る。

「邪魔をするな」

柄鎖に正拳突きを食らわせたのは雷夢。彼女は正拳突きのフオロースルーから構えへと戻しながら毅然と言い放つ。

「雷夢…様、な、何を…?」

「それはこっちの台詞だ」

二人が言葉を交わす間に、保険医が雷夢の死角、視力の無い左側を通り抜け、狼牙の元へ駆け寄ろうとする。

しかし、雷夢は闇が広がっているはずの左側へと腕を突き出し、保

険医の進行を止めた。

「なっ…！　ぐっ！」

突如突き出された腕に怯んだ保険医の膝を崩し、地面に組み伏せる。

雷夢が保険医に対応しているその時、フシみんは雷夢の背後に周り、気配を消していた。そして雷夢を昏倒させるべく、こめかみに掌底を繰り出す。

完全なる奇襲。

しかし、雷夢はそれにすら対応する。掌底を受け流し、ほとんどないフシみんとの距離を更に詰めた。僅かなスペースで体を捻り、渾身の寸勁。

フシみんは防御を間に合わせたものの、攻撃に押され、数歩後退する。

三人を制した後も、油断も隙も無く構える雷夢。彼女は片目が見えないにも関わらず、難攻不落の様相を呈していた。

「今の狼牙様は明らかに前後不覚！　早く手当をしなければいけない！　それがお分かりになりますか?!」

「アイツのどこが前後不覚なんだ？」

「見て分かりませんか？　あんな虚ろな目で…」

「そうだ。虚ろな無意識の状態にも関わらず、アイツは戦おうとしている。死にたくないなら、そのまま倒れておけば良いものを」

「なれば、早く助けないと…」

「無意識とは心の最も深い部分が表出した状態だ。にも関わらず、臆病なアイツが無意識下で戦おうとしている。その気概を侮辱することとは決して容認しない」

「それで狼牙様が死んでも良いと!？」

「アイツを助けたいというお前の自己満足を通したいなら私を殺してからにすれば良い。…もつとも、すでに決着したようだが」

重症の狼牙と無傷の黒子。二人の決着は外見的なダメージに左右されなかった。

かたや命懸け、かたや仕事の一環。その認識の違いが決定的。

素能^{エレメント}で狼のように脚を変形させた狼牙は体勢を低くし、突進に特化した構え。それを見た黒子は、自分の間合いに入ってきた瞬間、迎撃できるよう大上段に構える。ただし、狼牙を殺さないように刀背^{みね}を向けて。

結果的に言えば、二人が見合っていたのは十秒にも満たなかった。しかし、当の本人たちからすれば、永遠に続くのではないかという長い見合い。

狼牙は瞬き一つしない。決闘の最中に壊れた床板の破片屑が、目に入るが、涙に処理を任せる。

一方で黒子の集中力は限界だった。体調が万全でないのに加え、真剣勝負の最中に“これで終わりだ”などと、勝手に区切りをつけてしまったため。

彼女も命懸けの心意気で決闘に臨んでいれば、そんな甘い見切りはつけなかっただろうに。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ！

その時、観客の方から着信音が。

決闘の最中によそ見をするという、あまりに邪^{よこしま}な黒子。代償は敗北だった。

彼女が意識を逸らした一瞬の隙に、持てる全ての力で跳躍した狼牙。敵の頭を掴み、床に叩きつける。

拳が振り下ろされた。

黒子の気絶によって、狼牙の勝利。

しかし、ダメージが大きいのは狼牙の方だった。両者とも保健室に運ばれたが、先に目覚めたのは黒子。

「保健室……。私は……」

手を額に当てて、気絶する前の記憶を思い出す黒子。

「負けた、のか……」

そうしていると、カーテンで仕切られている隣のベッドから会話の音が聞こえてくる。柄鎖やフシみんの声。隣では恐らく狼牙が寝ているのだろう。

対して、黒子は一人だった。

「……」

黒子はフラフラと立ち上がり、保健室を後にする。

◇

保健室から下駄箱まで歩いてきた黒子。ガラス戸の外では雨が降っている。天気予報をきちんと見て、雨が降るかもしれないと予想していた黒子は、きちんと傘を持ってきていた。

夜遅い今、他の生徒はいない。傘立てを見ればすぐに自分の傘を爰見できるはず。

しかし、そこには何もなかった。誰かが、彼女の傘を盗んでいったのだろうか。

「……………」

黒子は通学カバンを頭の上に掲げて、外へと歩き出した。

◇

学園から寮へと向かうため、黒子は校門の外に出る。その時、ひどく慌てた様子で走って来る人影が。

「黒子様ツ!! こんな、所に……!」

その男は肩で息をしている。良く見れば衣服は所々擦り切れ、怪我すらしているようだ。

「いったいどうした? いや、その前に君の怪我は……」

「電話は……!? どうして電話に……出てくれないのですか……!? いったい何を……!? なさっておられたので……!? 何度もおかけしたにも関わらず……!」

「電話……?」

「とにかく、至急の報告が!」

—— 剣先の襲撃です! あいつら急に反旗を翻して……しかし、計画的! 既に分家の医者が3人殺されました! その上……」

「待て……ちよつと、待て……」

「どういたしますか!? 黒子様!」

「ちよつと待て!!」

いつになく声を荒げる黒子。頭に手を当てて、頭皮に爪を立てて、ゆっくりと掻きむしる。

「ど、どうしてそんな事に……? ツ、ツル……剣は……?」

「その剣です! 剣先 剣を筆頭に襲撃が行われてるんですよ!!」

「……は……?」

黒子にとって最もあり得ない人物の名前を聞き、彼女は一時フリーズする。その横で報告に来ていた男が、色々と騒ぎ立てるが、彼女の耳には一切入っていないかった。

ようやく動き出した黒子は、震える手でスマホを取り出し、名前が

拳がった人物へと電話をかけようとする。定まらない指先で何度もタップミスを引き起こしながらも、何とか操作を終える。

黒子にとつては無限に思えたが、実質的に通話が繋がったのは3コールもしない内。

「…もしもし」

電話から聞こえる声が無二の親友であることを確認し、ひとまず安堵する。

「ツ、ツルか!? い、今…部下から伝令が来て……。そいつが、何か…変な事言つてて……。と、とにかく、今、君は何してるんだ…?」

「……………」

重たい沈黙。黒子は胃液を吐き出しそうだった。

「はあー……もう包囲網を抜けた? それは100歩譲って良いとして、どうしてこっちに連絡が来ていない? 包囲している相手からの連絡が先とかわけ分かんねえだろうがよ!」

「ツ、ツル……?」

「とりあえずそこのお前、包囲網を敷いた奴らには撤退命令を出せ」

「な、何を話してるんだ……?」

「ああ、悪い。こっちの話だ。」

それで、〃お前〃の質問は私が今何をしているかだったか?」

「え……? あ……う、うん……」

「今は黒葛原の医者を一人一人殺してる所だ」

「……………あえ?」

「お前とは違って、医者や奴らは弱くて楽だったよ。奴ら、医療だけにかまけて異能者に一番大事な腕つぶしを忘れてるらしい。護衛の方が面倒だった」

「……な、何で…そんなこと……」

「〃自らの組織に所属する者の利益が最大となるよう行動する。それが当主としての最低限の責務〃。」

目の前の大きな得物を狩って、部下の飢えを満たそうとするのは当主としてなら不自然じゃないと思うが」

「…」

「今回の獲物を実に狩りやすかった。なにしろ頭がポンコツだ。スマホとPCにウイルスを送られた事も気づかず、なんなら寒門の野良犬に負ける始末だ。しかもその決闘が自分の失態で起こったってんだから、笑いものだろう？ なあ？」

「…」

「ま、そういう事だ。」

「…面倒だったぜ？ お前との友情ごっこ。いきなり夜に通話かけてくるわ、その内容がまた陳腐。これでせいせいしたよ」

「…」

「私も忙しい、次に行かなきゃいけないんだ。じゃあな、『黒葛原』」
プツツ、ツ、ツ、ツ…

通話の終わりからしばらくして、黒子の腕が力なく垂れ下がる。その衝撃で手からスマホが零れ落ち、水たまりに水没した。

心はダムだ。

一定量なら、怒り、悲しみ、ストレスなどの負債を溜め込むことができる。

しかし、あまりに多くの負債を溜め込むことはできない。
急激に嵩かさを増した圧力に堪えきれず、決壊するだけ。

20話　じがほうかい

黒子くろこが無慈悲な宣告を受けているその頃。保健室では狼牙ろうがが目を覚ましていた。

「あ、目え覚ましたのです」

狼牙の目の前にはグルグルお目目。

「……フシミン…？　決闘…決闘は…？」

「狼牙君の勝ちだったのですよ。まだ記憶が曖昧なのです？」

狼牙は額に手を当てて記憶を掘り起こそうとする。

「……思い出せない」

狼牙は自分の肩口から腹にかけて——黒子に切断された箇所を手でなぞる。

「勝った、のか…？」

「ええ、狼牙様の勝利でしたわ」

仕切りのカーテンを開いて現れたのは柄鎖つかさ。その手には大量の料理を載せたお盆を持っていた。

「俺はどうやって勝った？」

「少しゴタゴタしたので決着の瞬間は見逃してしまいました。申しわけありません。

しかし、ギリギリの状態からの逆転勝利であった事は間違いありませんわ」

「…そうか」

問答をしている間に柄鎖はお盆を脇のテーブルに置く。狼牙がベッドに付属しているテーブルをセットしたにもかかわらず。

「おい、こっちに置いて…」

文句を言いかける狼牙。しかし、柄鎖に抱擁されたことに驚いて、言葉を失ってしまった。

「……いきなり何だよ」

「いいから黙って抱かれてくださいませ。お望みとあらば頭も撫でて差し上げますから」

「それは止めろ」

十数秒、たつぷりと抱かれた狼牙は、ようやく解放して貰えた。しかし、直後にフシみんが喉元に手を当ててくる。

「……お前まで何だよ」

「いえ、なんとなく。……どくん、どくん、って。ちゃんと生きてるのです」

「死んでたらこうして喋ってないだろ」

フシみんは数秒ほど。狼牙の鼓動を確認した後、あっさりと手を引く。そこに丁度保険医もやってきた。

「保健室は不純異性交遊する場所じゃないんだけどね」

「不純異性交遊？ 別にSEXなんかしてないぞ」

「……周り女性だらけで、良く口にできるねそのワード」

呆れた顔をしているのは保険医と柄鎖。フシみんは意味が分からないらしく、頭に疑問符を浮かべている。

「まあ、とにかくだ。早く栄養補給をした方が良い。刀傷だったから目覚める前にほとんど治させてもらった。そのせいで栄養失調気味のはずだ」

「言われてみれば、かなり怠い……」

手を握ったり開いたりして体調を確かめる狼牙。柄鎖は彼の前の簡易テーブルに料理の乗ったお盆を置いた。

狼牙はそれに手を付けながら、合間に保険医に言葉をかける。

「先生、今回の件は本当に世話になった。ありがとう」

「よしてくれ。確かにキツカケを作りはしたが、最終的に頑張ったのは君だ。おめでどう、これは祝いの品さ」

そう言って保険医がベッドの横に置いたのは、傘だった。

「……傘？」

「今、外は土砂降りだよ。傘、持ってきてないんだらう？」

「それはそうだが……どうして知っている？」

「先に帰った雷夢君が教えてくれた。曰く、傘立てに一つも傘が無かったから持ってきてないだらう」との事らしい。

実はこの傘も彼女が持ってきた物さ。ほら、柄鎖君にも」

「……あれ？ 私には無いのです？」

「……無いねえ」

「まあ、折り畳み傘持ってるので大丈夫ですけど」

フシミンがカバンから折り畳み傘を引きずり出している間、柄鎖は何か引っかけりを感じていた。

普通、傘立てには置き傘なども含めていくつか傘が残るのが普通だ。にもかかわらず、一つも傘が無いという。

しかも一つも無いということは、上戸鎖の刻印が入った柄鎖の傘が盗まれたということになる。そんな御三家の傘と知りながらバカをやらかす人間がいるというのも妙だった。

「…ま、ともかく私はここらで帰らせていただきますわ。修練場の方に用がありますので。今日はゆっくりお休みください」

「狼牙君の目も覚めましたし、私も好きにするのです。また明日」

「ああ、また明日」

柄鎖とフシミンが保健室を後にする。残った狼牙はゆっくりと食事を食べ進めた。

◇

栄養を補給してすぐ、驚異的な速度で体力を回復した狼牙は寮の部屋に戻ろうとしていた。

「本当に泊まっていかなくて良いのかい？」

「ああ、もう回復した。そっちの方こそ大丈夫なのか？ もう日付を跨ぐのに保健室にいて」

「家のペラペラ布団より、ここのベッドの方が寝心地が良いものでね」

「……もう少し給料を上げて貰ったらどうだ？」

「冗談だよ、冗談。さ、子供は早く帰んなさい」

誤魔化すような口ぶりで狼牙を保健室から追い出す保険医。狼牙もそれ以上は追及せず、素直に退室する。

しかし、追い出した当の本人も一緒に保健室から外に出ていた。

「こんな夜中に外出か？」

「ああ、そうだ。一ついいかい？」

「なんだよ。最後に何かあるのか？」

「クロ…いや、黒子君くろこを知らないかい？ 呼び出されて留守にしている間に帰ってしまったようなんだが」

「寝てた俺に聞くな。柄鎖かフシミンの方がよく知ってるはずだ」

「…それもそうだ。いけないねえ、二徹で頭が回ってなくて」

「ちゃんと夜は寝ろよ。夜更かしは体に悪いぞ」

「医者がその言葉を一般人に言われたらおしまいだね」

疲れた顔ではにかむ保険医に呆れながら、狼牙は保健室を後にした。

◇

降りしきる雨の中、透明なビニール傘が移動する。その庇護下には狼牙がいた。

彼はゆっくりと積乱雲の下を歩く。その間、考える事は今日の決闘の事だった。

(重傷を負ってからの記憶が無い。どうやって勝ったのかも…。死にかけた俺は、いったいどうした？)

俺は変わったのか？ あの時の弱い俺から…
そんな事を考えながら歩く彼は、いつの間にか校門をくぐっていた。

校門周りでは街灯が僅かに辺りを照らしている。そんな中、黒い塊がほんの少しだけ光を反射していた。

「黒子…か？」

それを見た狼牙は思わず足を止める。

「なんでこんな所で膝ついてんだ。風邪ひくぞ」

ついさつき決闘をしたばかりだったが、大雨に降られる姿を見て心

配の言葉をかける狼牙。しかし、黒子は俯いたままブツブツと呟く。狼牙の耳の良さでなければ聞き逃すほどの音量で。

「……私の心の弱さが君との不必要な決闘を招いた」

「？ 何を……」

「そして君に負け、奥義を手に入れる機会を失った。自分のミスの後始末すら出来ない無能は……」

家の危機に駆けつける事すらせず、ここで膝を付いているような無能は……。

私を疎ましく思っていた相手を無二の親友と思いこんでいた、人の心も分からない無能は……」

黒子は振り返る。その表情はいつものアルカイックスマイル。しかし、瞳からは堰を切ったように涙があふれていた。

「——いったいどうすれば良いと思う……？」

いつも微笑を浮かべ、余裕で強気の状態を浮かべていた黒子が今は見る影もない。

「……っ……」

狼牙はその姿から思わず目を逸らしてしまう。

（……どうしてこいつに嫌悪感を抱いていたのか分かった。同族嫌悪、柄鎖の言った通りだ。

弱い自分を隠すため、強気に振舞って……。どこかで折れてしまえば俺もこんな風に……）

今の黒子に対して自分の最悪の姿が重ねた狼牙は、逃げるように彼女の横を通り抜ける。

しかし、数歩走り、そこで足を止めた。

（……だからこそ、目を逸らしたらいけない。そんな気がする）

狼牙は恐る恐る振り返り、黒子の前まで歩み寄る。

狼牙の傘の下に入った黒子。雨に晒されなくなったため、瞳から溢れる涙の量が良くわかる。眼球が萎んでしまうのではないかという程。

「ねえ…私、どうすれば良いのかなあ……?」

「……とりあえず、寮に戻れ。そのままだと風邪ひくぞ」

「うん、分かった……」

黒子は立ち上がり、狼牙の言葉に従って寮の方向へと歩き始める。しかし、その足取りは不安定で、いつ倒れてしまってもおかしくない。

「真つすぐ歩け」

狼牙は黒子に肩を貸す。

「ご、ごめんなさい……ごめんなさい……真つすぐ、真つすぐ……歩くから……」

黒子は親に縋るほかない子供のように弱弱しかった。

◇

引きずるようにして黒子を彼女の部屋まで運んだ狼牙。これで目は終わりだと、その場を去ろうとする。

しかし、黒子が扉の前で立ち尽くしているのを見て、足を止める。

「何やってんだよ。早く中入ってシャワー浴びろ。本当に風邪ひくぞ」

言葉自体は荒々しいものの、狼牙は気遣うような口調で語りかけた。にもかかわらず、黒子は身をすくませる。

「え、あ、と、扉、開けて、良いんだっけ……?」

「……? 当たり前だろ」

「そ、そそそ、そうっ、だよね……。当たり前、だよね……!」

黒子はドアノブに手を掛けて扉を開けようとする。しかし、鍵がかかったままの扉は当然開かない。

「あ、あれ……? な、何で……? ま、待って……す、すぐ……すぐ開けるから……」

一向に開かない扉に対して無用に焦り、ドアノブを捻る力はどんどん強くなる。

「お、おい！ 無理やり開けたら警報鳴るぞ！ 鍵持っていないのか!？」
「あ、鍵…鍵、そっか、鍵……！ 鍵は……、ど、どこに……！」

鍵を探して自分の体をまさぐる黒子。しかし、鍵はカバンのほうにある。いくらまさぐっても見つかるはずもない。

「か、鍵……！ 鍵、鍵、カギ、かぎっ……！」

「カバンの方じゃないのか？」

狼牙が黒子のカバンを軽く漁ると、鍵はすぐに見つかった。

「ほら」

「あ、ああ……ごめん、ごめんなさい……！ す、すぐ、開けるから……！」

鍵を受け取った黒子は鍵穴にキーを差し込もうとするが、手の震えでそれすら上手く出来ない。カチカチ、とつつかえる音が何度も響く。

「はや……っ、早く……早くっ……！」

黒子の肌と目からは汗と涙が漏れ出し、ますます手の震えがひどくなる。見かねた狼牙は黒子から鍵を奪い、自ら鍵を開けようとする。

「はっ……はっ……はあっ……！ ダメ、だ……私は、やつぱりっ……！
なんっ、何にも……っ、無能……っ！」

その時、鍵を奪われた……いや、役目を奪われた黒子は自分の髪を掻きむしりながら発狂しかける。

「……落ち着け」

「えっ……お、落ち着く……おち、落ちつく……っ？ オチつく……!？」

ゲシユタルト崩壊を起こす黒子に、狼牙は鍵を握らせた。

「一つ一つ手順を踏めば必ずできる」

黒子の手に自分の手を被せて、誘導する。

「鍵穴を見ろ」

「み、見るっ……」

「そこに鍵を差すんだ。手の震えは俺が抑えてやる」

「さ、差すっ……」

「そう……そして、右に手を捻る」

「捻る、右……！」

カチ

時間をかけて、ようやく扉の鍵が開く。

「で、でき……できたっ……!」

「そうだ、一つ一つ手順を踏めばできる。だから落ち着け。…次は扉を開くぞ」

「う、うん……っ!」

黒子は少しだけ落ち着きを取り戻していた。

◇

狼牙に指示をされながら風呂に入り、着替えを終えた黒子。今はベッドに臥せっている。

狼牙の方も濡れた服を脱ぎ、黒子の私服を借りていた。

「それじゃあ、俺はもう帰るぞ。この服は明日返す」

そう言つて狼牙が帰ろうとする。黒子も引き止めない。引き止めないのだが……。

「……はっ……はっ……はあっ……はあッ……!」

狼牙が遠ざかるたびに呼吸を荒くし、枕に指をめり込ませる。ついでに涙もボロボロと零れている。

「こ、呼吸……っ、こきゆうっ……! はあ、はア、ハあ、ハアッ……!」

「……落ち着け。俺の手を見ろ。グーで吸つて、パーで吐け」

狼牙は踵を返して、黒子に呼吸の指示を飛ばす。それに従い、黒子は何とか息を取り戻した。

本格的に帰れなさそうだと悟った狼牙は、黒子が寝ているベッドに腰かける。

「何があった? どうなればそうなる?」

「な、何が……? ど、どうなれば……? え、えつと……え、つと……ど、どつちからあ……!?!」

「……俺の質問が悪かった。校門でお前の身に何があったんだ?」

その質問を聞いた黒子は、頭を抱えて苦しそうに呻き出す。

「こ、校門で……、愛想をつかされて……。とにかく……っ、私が悪くてっ……！ 何にもできてなくてっ……！！」

「お、おい……。話したくないなら話さなくても……」

「は、話さなくても……？ で、でも、何があつたつて、き、聞かれて、答えなきや……？ いううううううううう……っ！！」

「も、もういい！ とにかく寝てろ！」

「ね、寝る……？ 寝る、寝る……」

矛盾を抱えた瞬間に自我を崩壊させかける黒子を黙らせるために、単純明快な命令を下す狼牙。それを聞いた彼女は、安心したように枕に顔を埋めた。

「本当にどうしちまつたんだ……」

狼牙は呟いた後、黒子の様子を窺う。狼牙が黒子から目を離していたのは僅かな時間だったにもかかわらず、彼女はすでに寝息を立てて寝ていた。その気になればすぐ眠るあたり、相当疲労していたのだろう。

自分が離れただけで過呼吸に陥る黒子を嫌でも思い出してしまふ狼牙は、部屋から出ていくこともできない。

その内、今日の決闘の疲れがここに来て現れたのか、彼もベッドの余ったスペースで眠り始めた。

21話 悪夢

大きな病院の一角、院長室で行われた惨劇は後のニュースでこう報道される。

「昨夜未明、東京都品川区の黒葛原病院つづらはらにて院長、他4名が死亡しているのが見つかりました。遺書などは見つかっておらず、集団自殺の背景は未だ分かっておりません」

その事件を引き起こした張本人——けんざき 剣先 つるぎ 剣。彼女は死体の積み重なった院長室でキャスター付きの椅子に座り、偉そうにふんぞり返っていた。

剣の対面では5人の医者^が彼女の部下に取り押さえられている。

「二度は言わん。選べ。死体か、奴隷か」

「ふ、ふざけるな！ 誰が剣先の野郎なんかに…！ それより、こんな事してどうなるか分かつてるのか？」

「昔の抗争に負けて吸収された負け犬が何のつもりよ!」

「そうだ！ 今に見てろ！ 応援が来たら、お前らなんかすぐにミンチだからなあ!」

最初の一人に触発され、一人、また一人と声を荒げる。しかし、剣は何も喋らない。野次への返答は肉体言語で行われた。

手の空いている部下が騒いだ医者を容赦なく蹴り上げる。その後も殴打、殴打、殴打。

「お、おい！ 止めさせろ！ 死にてえの、ぐげエツ!!」

声をあげた者へと暴力がシフトする。これで計3人が殴られ、現在進行形で一人が殴られている状態。しかし、余計な事を喋った者が殴られるのだから、誰も言葉を発せない。

被害に遭っている一人を除いた四人は、そのまま沈黙を続けている。だが、一人への暴力は一向に止む気配を見せない。

「お、おい…そのままじゃ本当に死ん、gぼっ!!」

見かねた1人が声をあげると、また矛先がシフトする。

他の4人はともかく、先ほどまで殴られ続けていた医者は確信していた。剣たちが自分たちを殺すことに一切躊躇を抱いていないと。

「わ、分かった!! 俺は……!」

「待てっ!」

死の恐怖に負けた医者が音を上げようとするが、5人の中で一番の年長者が制止した。

「こいつらは私達を殺さない! 狙いは異能者を手術できる医者の確保のはず!」

その言葉に、医者たちの空気が少しだけ弛緩する。

そうだ、冷静に考えればそのはず。さっきのはパフォーマンスだ……と。

その時、剣が椅子から腰を上げ、年長の医者の前へと歩み寄った。そして医者顎下に人差し指を突き付ける。

指、その皮膚が突如として割れた。メキメキと音を立てながら、割れ目から血まみれの骨が浮き出てくる。その先端は血を弾く程ほど鋭利。

剣は奥義 てつずいるこつ “鉄髓鏤骨” で作り出した骨の刃で、年長の医者顔の皮膚を薄く剃り始める。

そして反対側の手で針の形をした骨を作り出し、破れている白衣の簡易な留め具とした。

それで医者たちは嫌でも理解する。目の前の奴らは我々の素能に頼らなくとも手術が行えるような奥義を開発したのだと。

骨の刃が年長の医者喉元に突き付けられる。そして、ゆつくりと皮膚を裂き――

「分かった! 私を下る! そちらの軍門につ! ぐ、う……っ!」

刃は止まらない。迷いなく進み、頸動脈へと――

「ど、奴隷だ! 奴隷になるっ! それが望みだろ!」

刃はようやく停止した。剣は部下から消毒液を受け取り、年長の医者への傷跡にぶちまける。乱暴な消毒を終えた後、元座っていた椅子に腰かけ直した。

「げぶうツ!!」

そして再開される暴力。

その瞬間、我先にと命乞いが始まった。

「お、俺も奴隷になる!!」

「わ、私もっ!!」

「俺も…俺も!!」

「おぶツ！ お、俺げグウツ！ ツ俺もだツ…！」

全員からの返答を聞いた剣は部下に合図を送り、医者たちを連れて行かせた。暴力を振るっていた部下と二人きりになる。

「……い、ったア……！」

その瞬間、剣は指を抑えて顰め面を浮かべた。

「大丈夫ですか？」

「ンなわけあるか…！ この奥義、痛覚が消えるわけじゃないんだよ…！ マジ、いつてエ…！ 指裂けてるってエ…！ やっぱり事前に用意したナイフ持ってくれば良かった…！」

「奥義にしては結構欠陥あるんですね」

「やかましい！ こいつのおかげで反逆できてるんだろが！ もうちよつと敬え！」

「そんなに怒らないでくださいよ…。いつになく機嫌悪いですね」

二人が言い合っている最中、剣の携帯に着信が入った。

「もしもし」

「黒葛原黒子の様子ですが、変わりありません。狼森狼牙おいのもりに連れられて部屋に戻ったきりです」

「そうか。夜遅くまで悪い、本当に助かる」

「いえ、それでは」

プツツ…

「…はあく、ちゃんと仕事してくれるだけなんかもう癒される。末期だよこれ…」

「私もちゃんと仕事してますよ」

「い、ま、は、なあ!? 何かやらかしそうで気が気じゃないんだよ!! ……とにかく、黒葛原当主の心は完全に折れた。連絡もそうだし、未

だに動き一つないのが良い証拠だ。乗っ取りは順調か」

「どうして心を折るなんて回りくどい方法を取ったんですか？ ぶっ殺せばそれで良かったのでは」

「……お前、黒子に勝てると思ってるのか？」

「さあ……？ 見た事すらないので何とも。とはいえ、しよせんはひよっこ学生ですし、袋叩きにすれば簡単でしょう？」

「お前、異能学園出じゃないな。だからそんな呑気な事が言える。」

「……あそこは化け物の巣窟なんだよ。受験で言えば灘！ 甲子園で言えば中京大中京！ いや、それ以上だ！ 現役より強い奴がゴロゴロいる！ 黒子はそこで二番手。まともにやり合ったら、どれだけ被害が出ると思う？」

「そうなんですネ……、じゃあ、刺客を送ったのは不味かったかなあ……」

部下の発言。その一節に、剣はフリーズした。

「……………お前今なんだった？」

「え？ 刺客を送ったのは不味かったかな、と」

「誰に？」

「話の流れから分かるでしょう？ 黒葛原当主にですよ。完全に息の根を止めるべきと思って……」

ゴガッ！

突如、剣の拳が部下のこめかみを襲った。

「な、何を……!!? 間違っていましたか!? 私の判断!? 確かに結果だけ見れば間違いですが、私の知識の限りでは正しい判断を……!」

「そうだなあ！ 間違ってるねえよ！ なんら間違ってるのが間違ってるんだよ！ なんでこんな時だけ正しい判断下してんだお前はあ!!?」

そのくせ上司に相談はしません、と！ そこはしっかりと間違えてんじゃないねえよ!!」

本気の叱咤を受けて怯える部下をよそに、剣は頭を抱える。

（クロを殺したくないからこんな回りくどい革命起こしたにも関わらず、全部無駄にしゃがって……!!）

どうする、どうする……！ 普通の状態ならともかく、鬱になってる

今なら本当に殺されかねない……！ 今からでも理由をでっち上げて、止めさせれば……！)

「でも、腕が立つって評判の悪夢ナイトメアに頼んだから返り討ちにされるってことはないと思うんですけど……。というか弱ってる今ならあっさり殺せるんじゃない……」

(んのやろ……！ 外部に頼んでやる……!! もう金を払って契約が完了しているだろうし、キャンセルは無理だ……！ どうすれば……！) キャンセルは無理だが、殺しを止めてもらうだけなら、連絡するだけ事足りる。依頼された側も殺さずに依頼料を貰えるのなら丸儲け、断る理由は無い。そんな事をすれば、部下から不審がられるだろうが、剣の目的を達成することは出来る。

しかし、パニックになっっている剣はそれに気づけなかった。焦りは人から冷静な判断力を奪い、視野を狭くする。

(刺客からクロを守る？ …バカか、ウチの部下にそんなこと命令出来るわけがない。仮に命令したって、首を縦に振らないような奴らばかりだ。

唯一、学園に在籍してる奴らは黒葛原への恨みを抱いておらず、私の指示にも従順。だが、アイツらは滑り込みで異能学園に入学出来たような奴らだ。むざむざ死地に送る事になる)

纏まらない考えにイライラを募らせ、頭を掻きむしる。

(他に使える手駒は……っ！ アイツだ！)

思い立ってすぐに携帯を手に取り、その人物へと電話をかける。

(狼森狼牙おいのもりろうが。ギリギリとはいえ黒子に勝った奴だ。実力は申し分ない。)

そして取引の材料もある。反逆が成功した今、異能者の手術を行える者は今こっちの手元にしかない。その権利を盾にすればある程度言う事を聞かせられるはず……！)

通話はまだ繋がらず、コール音が鳴っている。

(……いや待て！ 反逆が成功したという事実を電話越しにどうやって信じ込ませる？ そんな時間も材料も無い。この方法は厳しい……。

他の手段、手段……。狼牙にとってクロが死ぬと、困る事象は無い

か…？ クロが死ぬと決闘の約束が…)
「もしもし」

タイミング悪く、そこで通話が繋がった。

◇

黒子の部屋で寝ていた狼牙。彼は携帯の着信音で目を覚ました。
眠たい目をこすりながら、応答する。

「もしもし」

「くくくつ、頼まれてくれないかあ!？」

いきなりの大声に、狼牙の寝ぼけた脳みそが一気に覚醒する。

「……何だよ、いきなり。というかお前は誰だ？」

「前に連絡しただろ？ ほら、手術の件で！」

「ああ、その節は助かった。…というかボイスチェンジャーを使つてないが、大丈夫なのか？」

「今はそんなことどうでも良い！ クロの元に刺客が行った！ そいつをどうにかするか、今すぐクロを連れて学園から離れてくれ！」

「クロ？ …黒子のことか？」

「そうだ！ だから早く…！」

「少し落ち着け。その話は秒単位を争う話なのか？ 10秒深呼吸する時間すら無いのか？」

「……」

携帯から呼吸音が響く。しばらくして落ち着いた声が聞こえてきた。

「悪い、落ち着いた。人を落ち着かせるのが上手いんだな」

「パニックを起こした奴の相手はもう予習済みだ」

「……それは、黒子の事か？」

「ああ。変な発作を起こして部屋の鍵を開けるのにも苦労していた。

パニック障害持ちだったりするの？」

「……とにかく、今は状況を伝えるぞ。疑問点もあるだろうが一旦は無視してくれ。」

黒子の元に刺客が向かった。こっちで掴んだ確かな情報だ。そいつらから黒子を守って欲しい」

「その刺客がこっちに到着する時間は？」

「ちよつと待て……………」

約1時間。短く見積もって30分で考えてくれ」

「刺客の数は？」

「7人。悪夢ナイトメアという暗殺者集団からの刺客だ。名前は聞いたことあるか？」

「悪夢…………確かフシミンが所属していたっていう。聞いたことはある」

「昔はどんな依頼も達成すると言われた凄腕の集団。しかし数年前の内部のゴタゴタで弱体化したと言われている。」

とはいえ7人だ。ズブの素人ってわけじゃないし、正面切つて戦うのは無謀。黒子を連れて逃げればそれが一番なんだが……」

「何か問題があるの？」

「今発覚したが、刺客の中には追跡用の素能を持った奴がいる。逃げるのは厳しい」

「迎え撃つしかない、ってことか。そっちからの応援は？」

「……応援は出せない」

「……俺だけで7人を返り討ちにしろって？」

「無茶な事を言ってるのは百も承知だ。だがどうしても受けてもらおうぞ。こっちには取引材料も……」

「受けてやる」

「……え？ 今なんて？」

「受けてやる、って言ったんだ」

「あ、ああ……。なんでまた？ いや、受けてくれるのはありがたいが……お前にメリットがないだろう？」

「刺客と戦うからには、必然命の取り合いだ。」

…俺はそれから逃げたくない。7対1を言い訳にして逃げたくない」

「……だが、現実問題どうするつもりだ。お前の勝ち目は紙のように薄いぞ」

「俺の方で人手を集めてみる。学園には血の気の余った奴らが多い。最悪、俺一人でもやるだけやってやるさ」

「そうか……頼んだぞ」

「ああ。それじゃあな」

プツ…

通話が切れるや否や、狼牙はフシみんなに電話をかける。夜遅いせい
か、かなり遅れてから通話が繋がる。

「……もしもし。こんな夜中に何の用なのです？」

「今から30分後に殺し合いをやる。参加するだろ？」

「…お相手は誰なのですか？」

第一声の寝ぼけた様子が一瞬で失せる。電話越しでも変化がハツ
キリ分かる鋭い声。

「お前の古巣、悪夢ナイトメアの連中が7人。黒子を狙って学園に来ているらしい。大義名分もバツチりだ」

「人を殺しに来る、って事は殺されても文句を言えないのです。それに人を殺そうなんて悪い輩を殺しちやっても……仕方ないのですよね♪」

発言内容とは裏腹に喜色満面の声が響く。

「腹が決まったなら、すぐに黒子の部屋まで来てくれ」

「あいあいさー♪」

プツツ

狼牙は続いて、雷夢らいむに電話をかけようとする。……が、そう言えば連絡先を交換していない事に気づいた。彼女と彼の接点は学校での共同稽古だけ。

当然、寮のどこに住んでいるかなども知らない。残された時間は約30分。しらみつぶしに探す時間も無い。加えて、協力してくれるかどうかかもあやふや。

狼牙はすぐに思考を切り替え、柄鎖つかさの元へ着信を送った。すぐに通話が繋がる。

「狼牙様、こんな夜遅くに非常識では？」

「悪い。だが、すぐに電話に出たって事はお前もこんな時間まで起きてたって事だろ？ 何してたんだ？」

「貴方と別れた1, 2時間後に、実家から今すぐ帰ってくるようにと連絡がきたのです。今は移動中ですわ。まったく、こんな夜遅くにどうして呼び出しを…。っと、今は貴方の要件が先ですわね。いったいどんなご用件で？」

「仮に学園にUターンするとしたらどれくらい時間がかかる？」

「本気で走れば1時間」

「…それじゃ仮に間に合ってもへとへとか。要件については無しで頼む。悪かったな、こんな夜遅くに」

「いえ、移動時間は退屈でしたし。なんならこのままお喋りでもいたしますか？」

「いや、止めておく。それじゃ」

「はい、ご機嫌よう」

プツツ…

「…結局二人、か」

7対2。先ほどより状況は良くなったものの、依然として広がっている人数差。狼牙は不安を隠し切れないのか、スマホを持つ手が僅かに震えている。

「…逃げるかよ。ここで怯えたら昔と同じだ…！」

震える拳を、反対の手で上から握りこんだ。その時、部屋の空気が流れが変わる。狼牙が風の吹く方向を向くと、そこには窓から不法侵入しようとするフシみんの姿が。

「流石にバレちゃうのですね」

「何で窓から入ろうとしてんだ」

「鍵が開いてたので」

「…まあ良い。それより良く来てくれた、入ってくれ」

「呆れた顔してますけど、黒子ちゃんくろこちゃんの部屋にもかかわらず、私が家主

ですと言わんばかりの態度を取ってる狼牙君も私とどっこいどっこいなのです」

お互いの行動に思う所ありながらも、二人は腰を据えて話し合いを始めた。

22話 執着

黒子を暗殺しに来る刺客を返り討ちにするため、狼牙とフシみんは作戦を立てていた。

「二人で連携すれば…」

「あ、それは嫌なものです。私、人を殺す時はあんまり他の人に見られないくないので。一人で黙々と感傷に浸りたいので」

「……それ抜きにしても、即席の連携は危ういか。個別に戦おう。フシみんは何人いける？」

「私の古巣が相手なら、幹部クラスが何人来るかにも依りますけど……5はいけると思うのです」

「そんなに大丈夫か……つてのは野暮だな。頼む。」

なら俺は二人。それなら何とか……」

「そんな事より、心配なのは刺客に私達が無視された時です。正面切って戦えば勝算はありますけど、3人が足止め、残りが黒子ちゃんに……とかされると流石にどうしようもないのです」

「確かにそれをされるとどうしようもない。……やっぱりこいつにシヤンしてもらえないか」

狼牙はベッドに近寄り、寝ている黒子の方を揺する。僅かな揺れだったが、黒子は敏感に反応し跳ねるように目覚める。

「はっ……はっ……はっ……」

「大丈夫か？ 呼吸できるか？」

「だ、だい、大丈夫……」

かなり怪しかったが、黒子は一人で呼吸を取り戻す。時間を置いて大分落ち着いたようだ。そんな彼女に対して、狼牙は至極単純な命令をする。

「黒子、詳しい説明は省く。とにかく、この部屋に知らない奴が入ってきたら殺せ。分かったか？」

「知らない奴が来たら……殺す？」

「ああ、その知らない奴は刺客だ。殺さなきゃ殺されるぞ。」

良いか？ 知らない奴が部屋に入ってきたら、殺す。復唱してみてくれ」

「知らない奴が、部屋に入ってきたら、……殺す」

黒子の言葉に意志はない。狼牙の言葉を復唱しただけだ。しかし、その手には正夢^{マニフエス}で生み出した刀が握られていた。

「できそうか？」

「……う、うん。やれる…私でも、きっとやれる…。一つ一つ落ち着いてやれば…」

ぶつぶつと呟きながら、刀身を眺める黒子。それを見て、狼牙はフシミンの方に向き直る。

「黒子は強い。これで数人に抜かれても大丈夫だ」

「大丈夫そうには見えないのですが…。まあ、そういう事にしておきましょう。」

とはいえ、出来るだけ抜かせないようにはするのですよ。黒子ちゃんにはお菓子の義理もありますし」

「俺達は向こうが襲ってくることを事前に知っている。襲撃を待つのではなく、こっちから奇襲を仕掛けるのが効果的だ」

「それには賛成なのです。学園に籠って戦おうとすれば、向こうは仕掛けてこないのです。学園の生徒を敵に回しかねませんから。」

そうなれば黒子ちゃんは四六時中付け狙われるのです。それよりかはここで全滅させた方が楽なのです。

恐らく刺客がくるのは学園の東に広がる森から。私の古巣は暗くてジメジメした所が好きですから。それに、向こうはこっちが刺客に気づいていない前提ですから、隠密モードじゃなく高速移動しているはず。狼牙君の耳ならすぐに見つけられると思うのです。

とはいえ、相手も手練れですので狼牙君の奇襲は見つかる前提で……」

二人は作戦を深めていく。

「知らない奴が入ってきたら…殺す…」

もう一人は刀を片手に殺意を深めていた。

場面は変わって、異能学園周辺の森。先ほどまで降っていた雨は止んでいる。木々が鬱蒼と茂り、雨でぬかるんだ森にもかかわらず、高速で移動する7人組の姿があった。

7人組はそのほとんどが黒装束に身を包んでおり、誰もが動物や虫を模した覆面を装着している。

「あーもう……疲れてきたあ！　ここらへんで休憩しなーい？」

「ガキみたいな事言ってるじゃねえ。標的はすぐ近くだ」

「だってもう2時間はマラソンしっぱなしじゃん」

「スタミナないね。普段の稽古サボってる証拠」

「はあ!?　サボってないし!?　これぐらいぜんっぜん余裕だし!?　後

4時間は走れるけどお!？」

そういう八咫鴉はどうなのよ?　さつきからちよつとペース遅く

ない?　最後尾走っちゃってさあ!」

「後ろで警戒してるだけ。それも分からない蛭は低脳」

「はあ~~~~!!?　人の名前間違える馬鹿に低脳って言われたくないんですけど!?　私、蛭から蛞蝓に昇進したんですけど!?　あんたと同じ幹部格!　偉そうにすんのやめてくれる!？」

7人のうち、二人の口論の雲行きが怪しくなってきた時、狐の仮面をかぶった男が注意する。

「お前ら静かにしろ!　敵に見つかる可能性もあるのに無用に喋るな!」

その瞬間、口論していた二人は一斉に矛先を変える。

「はあ?　なーんか狐が一丁前に喋ってるんですけど」

「うるさいね。脱退者にボコされてボスから一般兵にまで降格した雑魚」

「妖狐ですらないのに私達に注意するなんて生意気。ターゲットの前にアンタを始末しよっか?」

「……」

「あつはははは！ 黙っちゃった！ 雑魚ダウウン!!」

狐と呼ばれた男は、仮面の下でため息をつく。

（これが今の幹部たちか……レベルが低すぎる。昔の奴らも曲者くせものぞろいではあつたが、少なくとも任務中に無駄口を叩くような連中じゃなかった。私語を注意しない周りの奴らもどっこいどっこい。

実力も怪しい。こうして移動の姿を見ても、強そうな奴はたったの二人。残りは昔の幹部の最底辺と比べても劣る。

こんなメンバーで黒葛原の当主を暗殺……？ ほとんどギャンブルみたいなものだ）

狐——彼は昔、悪夢ナイトメアのトップを務めていた。しかし、フシみんの脱退事件で彼女に襲撃され、異能キユリアの操作をつかさどる神経と右腕に後遺症を患い、今はトップの座から引きずり降ろされている。

（くそ……。幹部が総入れ替えになったのは、五文銭ごもんせんが昔の幹部を殺しまわったせいだ。それも腹立たしいが、何よりも後進が全く育っていないのがヤバイ。

このレベルが幹部になっているという事は、このレベルを幹部にするしかなかったという事。下が育ってないのは元トップの俺の責任もあるとはいえ、この組織はもう駄目かもしれんな……。

せめて五文銭が残っていれば……と思ったが、アイツは人の上に立つような人間じゃない。やっぱりダメだ）

元社長が自分の組織に見切りを付けているその時、一人が声をあげる。

「右方、併走されてる。1人、距離は20」

「意外と早く見つかったね。敵に位置バレ」

「併走？ あーあ、狐みたいな雑魚が居なければもっとペースアップして千切れるのに。いっちばん遅い奴に合わせなきゃいけないの辛いわー!!」

（うるせえよ。こちとら後遺症持ってんだ。文句なら俺をこの仕事のメンバーに選んだリーダーリーダーに言え。というか見つかったのはお前らが騒いでたからだろうが）

狐は心の内でひとしきり文句を言った後、冷静に分析を始める。

(夜鷹よたかの索敵網に引つ掛からず、ここまで近寄られたか。

敵は黒葛原の護衛。気配を消す技術よりも戦闘が専門のはず。かなりの手練れと考えた方が良く。単独行動している内に7人で一気に潰せば…)

「隊を分ける。右方の一人を狐と蛞蝓なめくじが潰せ」

「……は、バカか？」

リーダーまへん魔猿の言葉に、狐は思わず悪態をついていた。

「こいつバカって言った！ 狐の癖にリーダーの言葉をバカって馬鹿にした！」

「そりやする！ 戦力を分ける必要がどこにある？ 今のうちに7人で敵を潰せば良い！」

「それだと足止めを喰らう。対象に逃げられると面倒だ」

「逃げられても追跡できる鼻象びぞうがいる！ 逃げられる心配は無い！

そんな事も忘れてるのか!？」

「……逃げられて、応援を呼ばれると困るだろう」

「そんな不確定の話より、今いる一人を仕留める方が確実だ！ それでいて有効！ 手練れを削れる！」

「……決定事項だ」

リーダーはそれだけ言い放ち、一気にペースを上げた。

(くっただらねえ見栄張りやがって…！ なんであんなのがリーダーやってんだ…!!)

狐は歯ぎしりをしながら、何とかリーダーに追いついて陳情しようとする。そんな彼に、いきなりラリアットが飛んできた。

「ぐっ…！」

かろうじて防御するが、バランスを崩し、失速する。狐が顔を上げる頃には、他の五人は先に行っていた。

「リーダーが決定って言ってんだから大人しく従いなさいよ、狐」

狐にラリアットをかました蛞蝓。彼女は覆面と外套を脱ぎ捨てる。

外套の下はほとんど水着。蛞蝓は惜しげも無く肌を露出した格好をさらけ出した。

「つつても敵ぐらい私一人で十分なんだけどなー。狐とか必要ないんだけど。あ、そっか！ 足手まといを置いてったんじゃない!? 私冴えてるうー!」

（その推理が正しいなら、多分お前も俺と同じ足手まとい枠だぞ。

いや、というか不味い…! 今の俺達は格好的…! こつちが逆に各個撃破されるおそれが…!）

狐が焦りを抱いているその時、茂みから影が姿を表す。

影の正体は狼牙。彼は狐の背中目掛けて飛び掛かる。しかし、その奇襲は狐の回し蹴りに阻まれた。

（気配を消せる相手だ。来るなら背後から）

狼牙は地面を転がり、離れた所で体勢を立て直す。

「賭けには勝った。

勝ったが…：…寿命が少し伸びただけか？」

狐は構える狼牙を見て、自虐的に呟いた。

「こんなちつこいのが黒葛原の護衛？ 人手不足なのかなあ？」

一方で蛞蝓は嗜虐的な笑みを浮かべたまま、余裕の発言。

（それはこつちの組織だよ!! 特大ブーメラン止めろ!

お前は構えを見て、敵の力量すら測れないのか…!?)

狐の内心は大荒れであった。

「お前も雑魚ダウン!」

「蛞蝓、勝手に…!」

蛞蝓が威勢良く狼牙に仕掛ける。その後、狐が続く。それに対して狼牙は、木を挟むことで疑似的に一対一の状態を作りながら上手く立ち回る。

「このつ…! ちよこまかと!!」

しびれを切らした蛞蝓が木に向かって蹴りをかます。異能者の蹴りを喰らった樹は、哀れにも真つ二つにへし折れ倒木。狐目掛けて。

「うおっ…!」

木を蹴った蛞蝓、倒木に対処中の狐。

二人に出来た隙を狼牙は見逃さない。蛞蝓の足ががっしりと掴ん

だ。そのまま引き寄せ、ライムから学んだ零距离格闘術を開始——できなかつた。

蛞蝓を掴んだ手がヌルリと滑ったのだ。

蛞蝓の奥義、たいえきふよう「太液芙蓉」。体液の性質を変化させられる技だ。汗腺を操り、自在に汗を生成できる蛞蝓と相性が非常に良い。

「っ—」

あり得ない現象に驚く狼牙。掴みどころを失った手が宙を彷徨う間にはもう、蛞蝓と狐が体勢を取り戻している。

ハイキックとローキック。二種の蹴りが狼牙を襲う。が、彼はエレメント素能を発動させ、向上した身体能力で宙に舞い、二つの蹴りの間を無理やり抜けた。

狼牙は空中で足を開き、狐と蛞蝓への両面攻撃を敢行。そうして着地の間を稼ぐ。

しかし、手を着くべき地面には粘液の溜まりが。

このままでは滑る。それどころか粘液溜まりに全身でつつこみ、粘液にまみれてまともに動けなくなる。

一瞬で判断した狼牙は、手を地面に深く突き刺す。そのまま体を折り、何とか粘液溜まりの無いところに足を届かせ、体勢を立て直した。

「うっそ！ あそこから!?!」

「手は粘液塗れだ！ 畳みかけろ！」

「うっさい！ 狐が命令すんな!!」

狼牙の手はヌルヌルと滑る粘液塗れ。拳を握りこむ事すら難しい。手首から先の力を抜き、襲い掛かる二人を迎え撃つ。

狼牙は真つ先に突撃してきた蛞蝓の顔めかけ、無勁「無勁」で粘液を弾いた。

「うっ…!」

視界を奪われた蛞蝓が怯む。その隙を狙われないように狐は蛞蝓を後ろに引き、カバーに入った。後遺症で反応の遅れる右腕を何とか酷使しながら、やっとのことで狼牙の数を凌ぐ。

(唯一頼りだった蛞蝓の粘液も方法は良く分かんが無効化された。このままじゃジリ貧。逃げ回って釘付けにするしかないか…?) そ

のためにも一度距離を取って…)

腹を決めた狐は狼牙の一撃をわざと受ける。その勢いを利用しながら大きく後退。それと同時に、昨日の雨でできた水たまりに触れる。途端、水たまりが真つ赤に染まった。

(後遺症のせいで奥義がまともに使えない。こんな出来損ないの素能エレメントに頼るしかないとは…俺も堕ちたものだ)

狐の素能、ポマー「赤爆」。触れた物を爆弾化できる。しかし、他者や他の生物は爆弾化出来ない。なお、爆弾化したものは色が赤く変化する。爆発させる際は中指と親指を二度触れ合わせる必要あり。

(欠点てんこ盛りの上に、直撃したって異能者一人殺せやしない欠陥素能だ。だが、初見の奴が赤く染まった水たまりに近付こうって気にはまずならない。陽動には使える。これで距離を取って…)

狐の想像とは裏腹に、狼牙は真つ赤な水たまりに足を突っ込んだ。「なっ…い…ぐっ!!」

驚き、反応が遅れたのに加え、言う事を聞かない右腕側からの攻撃だったため、狼牙の蹴りをモロに喰らってしまう狐。

狼牙はすかさず追撃に。マウントを取り、正拳を振り下ろす。

あわや顔面陥没かと思われたが、狐は吹っ飛ばされた際、近くにあった粘液溜まりに手を突っ込んでいた。そのヌメリを借りて、狼牙の拳をギリギリで逸らす。

狐は腰を反らせ、上に乗っていた狼牙を跳ね飛ばし、何とか蛞蝓と合流を果たした。

「ど、どうすんのよ…あの化け物…」

「さっきまでの威勢はどうした。雑魚ダウンじゃなかったのか?」

「…む、無理よ。アイツ、強すぎる…逃げた方が…」

「いや、その必要は無い。奴には隙がある。大きな欠点か」

「な、何よそれ…」

「時間が無い! 太液芙蓉たいえきふようで俺の手の粘液を水と界面活性剤の混合物に変えろ!」

蛞蝓は何か言いたそうだったが、狐の迫力に押され、言われたとおりにする。狐は蛞蝓が用意した混合物——シャボン玉の原液でシャ

ボン玉を作り出した。

シャボン玉には周りの景色を反映し、土色、葉色に染まっている物もあれば、光を巧みに反射して虹色に染まっている物も。そして赤く染まっている物も当然あった。

狐の準備が完了すると同時に、跳ね飛ばされた狼牙が茂みの奥から姿を現す。彼は突如出現しているシャボン玉に困惑するものの、足元の石を蹴り飛ばし、シャボン玉を一つ破裂させた。

異常が無い事を確認した狼牙は、シャボン玉はブラフだと決めつけ、一気に距離を詰める。

「やはりな」

狼牙が道中の「赤い」シャボン玉に触れたのを確認した狐は、親指と中指を二度、触れ合わせる。

——瞬間、爆ぜた。

◇

森の中にも関わらず、爆発から半径20mは平原と化していた。その周りに狐、なめくじ蛞蝓、狼牙の三人が寝転がっている。その内の狐がゆっくりと体を起こした。

(やはりだ……。アイツは色を識別できていない、色覚異常者……。だから得体の知れない赤い水たまりに何の警戒も無しに突っ込んだ。そして赤いシャボン玉爆弾もまともに喰らった。)

俺の爆弾は破片でダメージを負わせる手榴弾や、炎を吹く焼夷弾なんかとは違う。ただの強力な衝撃波、殺傷能力は低い。とはいえ、至近距離で喰らえばただでは済まない。

平衡感覚を失い、朦朧としているはず。今のうちにとどめを刺さなければ……！)

狐は目を皿のようにして狼牙を探す。爆発で吹き飛ばされていそうな範囲をしらみつぶしに探す。しかし、狼牙の姿は見つからない。

「アイツはどこに…？ …くそっ！ 吹っ飛んだのに何処行きやがった…！」

蛞蝓なめくじも体を起こし、狼牙探しに加勢する。しかし見つからない。まるで煙に巻かれてしまったように狼牙の姿が消えてしまった。

「くそ…、くそ、くそっ…！ 早く見つけないと…！ 消えた…？ 透明になれる素能エレメントか…！」

「落ち着け、蛞蝓なめくじ。事実を元に考えろ。先の爆発でここら一带には木くずや土煙が舞っている。透明になっていたとしても、不自然な浮き上がりが見えるはずだ。加えて、そんな素能があれば最初の奇襲で使っている」

「もしかして瞬間移動したとか…」

「それもまずない。そんな素能があるなら先の戦闘でとつくに使ってるはずだ。それに戦闘中、妙に加速した瞬間があった。恐らく奴は身体能力向上系の素能持ちだ。

つまり、奴は俺達にでもできるような普通の方法で身を隠している」

「じゃあどこに!? どうやって!?!」

「相手の立場になって考えろ。爆発で意識朦朧。恐らく立つ事すら難しい」

狐は地面に倒れ込み、ジタバタと足掻く。狼牙の状態を想像し、再現しているのだろう。

「ほら、お前も寝そべれ」

「やだ！ 何で私がそんな事を…」

地面を這い回る自分を冷めた目で見る蛞蝓なめくじ。そんな目線を胃にも介さず、狐は想像を続ける。

（立てないだけじゃない、恐らく視界もぐちゃぐちゃ。物の輪郭を捉える事すら難しいはずだ。逃げるのは困難。隠れなければいけない。隠れなければ殺されてしまう。…俺ならどうする？）

地面に爪をたて、這いずる狐。地面に爪をたて、地面に爪を、地面に――

（――地面）

その時、狐の腕が「地面から生えてきた手」に捕まれる。

(馬鹿ッ！ 気づくのが遅いッ！)

狐の右腕がぬかるんだ地面に引きずり込まれていく。

(一手遅れた。……だが勝つのは俺達)

狐は右腕に異能^{キュリア}を集中させる。

(どうせろくに動かない右腕だ。——くれてやるよ!!)

渾身の「赤爆^{ボマー}」が地下で炸裂した。

◇

狐の目覚めは最悪だった。右肩から先が無い感覚、それに伴う激痛、ドラム式洗濯機の中で転がされたような気持ち悪さ。

彼がまともな意識を取り戻すために1分。三つ這いになるまでにもう1分。そうして初めて周りの状況を確認できた。

「はい、左腕く!!」

「うぐあああああつ…!!」

そんな彼が復帰早々視界に捉えたのは、狼牙の右腕をへし折る^{なめくじ}蛞蝓の姿だった。

「何、やってる……蛞蝓……!」

「あ、やっと目え覚めた? 今こいつを甚振^{いたぶ}ってる所。脚の骨を折ったから逃げれない。左腕も折ったから、這う事も難しい。このまま全身の骨折ってナメクジみたいにしちやおつかなく?」

「早く……とどめを、刺せ……!」

「何言ってるの? こういうムカつく奴は徹底的に虐めないと私の気が済まないの! 今は意識が混濁してるから、正常な判断を取り戻すまで待つ。」

正気を取り戻したら、芋虫みたいに這いつくばる事しかできない…惨めな自分を見させて絶望させてやる…あっははははは!」

「バカ、が…っ! 遊ぶ暇なんて…俺達にはない…っ! 早く、殺せ

…っ！」

「あ？ 何？ 私に指図するつもり？ そんな無様な姿で？ …ぶふっ、笑っちゃう！ ——あんたもこいつみたいにしてやろうか？」
「蛞蝓…！」

二人が言い争う間、狼牙に変化があった。のたうち回るだけだった動きが、蛞蝓から距離を取るような動きに。動かせる片腕だけで何とか地面を這い、逃げようとしている。

「……はあっ…はあっ…！ はあっ…!!」

「あ、意識取り戻した？ どーよ、今の自分は？ ここからどうやって逆転する？」

蛞蝓が先回りし、狼牙の前に立つ。頭上に差した影に反応し、狼牙は顔を上げた。

涙。瞳からボロボロと垂れ落ち、止まる事を知らない。

涎。震える口の端から零れ、顎で涙と交じる。

表情。嗜虐性質の蛞蝓好みの顔。恐怖と、委縮と、絶望と。

「……あはあっ…！」

それを見た途端、蛞蝓は恍惚とした表情を浮かべる。

「それ…その顔を見たかった！ 生意気なアンタのツ！ あっははははははははははッ！ あー、気持ち良い…！」

ほら、片腕残しといてあげたよ？ 必死に頑張れば逃げられるかもねえ…？ ……這え、這え、這えッ！ 無様にのたうちまわるんだよオツ！ そうして私をもっと楽しませろ!!」

「蛞蝓ッ！ そいつの目はまだ死んでない！ 早く殺せッ！ 手負いの獣が一番怖いのを知らんのかッ!!」

「……うるさい。邪魔すんなよ、狐ごときがッ！」

蛞蝓は追いつがってきた狐を、思い切り蹴り飛ばした。狙ったわけでは無かったが、蹴りは側頭部に直撃。

——その一撃で狐はあっさりと死んだ。蛞蝓なめくじは一つの命が潰えた事すら意識しないまま。

「ほら見ろッ！ 小便漏らしてやがる、こいつッ！ こんなシヨンベ
ン小僧の目が死んでない…？ 死んでんのはお前の脳みそだろ！
狐え！」

小便の次はなんだ？ もしかして大か？ あっははははは!!」
蛞蝓なめくじが上を向いて高笑いする。

「あー…！ お腹痛い…！ ……あ、れ？」

笑いすぎて腹筋を痛めた蛞蝓なめくじが、再び下を向くと、そこに狼牙は居
なかつた。

「じ、地面の下…？ いや、何だこの粘液…？」

アンモニアの匂いがする粘液が地面に線を引いている。

「…し、小便を潤滑油に変えて滑った？ 残った片腕を推進力にして
…？ 何で、私の太液芙蓉たいえきふようをアイツが使える…？」

に、逃がすかよオ!!」

蛞蝓なめくじ地面に残る粘液の線をたどり、狼牙を追う。

「いくら地面を滑るとはいえ、機動力には限界がある。すぐに追いつ
けるはずだ…！ 手間取らせやがって…！」

けど良いねえ…！ もっと足掻け…苦しめ、その果てに死ね…！
追いついたらどうしてやろうか…！」

グシヤ

ぬかるんだ地面にスニーカーが突き立つ。

「柄鎖から連絡を受けて探してみれば」

紫の髪。小柄な体躯。洒落つ気の無いジャージ姿。そして何より
特徴的なのは隻眼。

「雑魚が一匹。練習にもならない」

雷いかづちらいむ来夢なめくじが蛞蝓なめくじの前に立ちはだかる。

23話 無様

雨上がりの森で雷夢と蛞蝓（なめくじ）が対峙する。

「いきなり出てきて何よアンタは…。それにさつき何て言った？

ああ!？」

「雑魚が一匹。練習にもならない」

「片目の障碍者（しょうがいしゃ）があ…。一丁前に吠えてんじやねえ！」

蛞蝓は雷夢の左側から突撃する。視力が無い方面からの攻撃。しかし、雷夢は難なく受け止め、カウンターを返した。

「ぐがっ…。なんで…。そのひび割れた瞳、見えてるのか…!？」

「見えてない」

「なら、どうして避けられる…? そうか…!」

（音で敵の位置を探索するエコーロケーションとかいう技術を聞いたことがある。それに違いない…。そうと分かれば…。）

蛞蝓（なめくじ）は再び雷夢の左側から突撃する。今度は音を消して。彼女は暗殺者、音を立てない歩法はお手の物。

（これで…。死に晒せ…。）

自らの勝ちを確信する蛞蝓（なめくじ）。その夢想は一瞬で覚めた。ギリギリで蛞蝓（なめくじ）の一撃を躲し、反対にクロスカウンターを叩き込む雷夢。

「はがあ…っ!! な、何で…!? 音で探知してるんじや…!!」

「遅い。秒速330mでは秒速30万kmを持つ相手に決して勝てない」

「な、何の話だ…!」

「理解する必要は無い。ただの独り言だ」

雷夢の素能、〃電撃（ヴォルト）〃。電気を発生させ、操る能力。しかし、雷夢は生まれつき素能の出力上限が低く、弱い電流しか生み出すことが出来ない。だからこそ彼女は素能を使わずにいた。

しかし、彼女はとある可能性にたどり着いた。弱い電流でも磁界を生成し、電磁波を発生させられる。その反射波をキャッチすることで、高性能レーダーのように敵の位置を把握可能かもしれない…。と言いは易く行うは難し。いや、行えるかすら怪しい離れ業。だが、彼女はそれを現実のものとしたのだ。

雷夢は今、出来損ないの目を出来損ないの素能で補っていた。

「くそがああああ!!」

顔に凶相を浮かべながら再度突撃する蛞蝓。リーチを生かし、雷夢の間合いの外から攻撃する。

片目で距離感を掴めないはずの雷夢だが、バックスウェー、それもギリギリのところで打撃を躲していた。

蛞蝓が打撃のために伸ばした手を引くのに合わせて、雷夢が懐に潜り込む。そして蛞蝓の顎を跳ね上げた。

「ガッー」

そうして出来た隙。雷夢は致命の一撃を叩き込むべく構える。

それは正拳。突き技の基本。上段でも、下段でもない、狼牙から学んだ通りの中段突き。

「二連掌」

正拳突きとインパクトの瞬間に「無勁」を合わせる、一撃にして二撃の妙技。それは容易く蛞蝓を戦闘不能へと追いやった。

◇

「ッ…！ おぶッ…！ ゲボッ！ ゲホッ！ げほ、げほっ…！
…うえげボッ…!!」

二連掌で吹き飛ばされた蛞蝓（なめくじ）は、血反吐を吐きながらのたうち回っている。余りの痛みに一瞬気絶しかけ、咳き込んだせいで意識を取り戻していた。

ゴギ、

命乞いの暇も与えず、あっさりと蛞蝓の首をへし折った。

「戻るか。怪我をしていた」

死体を一瞥もせず、その場を立ち去ろうとする雷夢。しかし、突然の着信音に足を止めた。音は死体の胸元から。

雷夢は今亡き持主への着信を代理として受けとる。

「…もしもし」

電話を取った雷夢の声は普段の声音ではなく、カエルをすり潰した時に出る断末魔の様なダミ声だった。

「蛞蝓か!? そっちの戦況はどうだ!」

「……くそっ……! 喉を潰された……! けど、敵はぶっ殺してやった、チクショー!」

「だったら狐と一緒に早くこっちに合流しにこい! 敵の襲撃で壊滅状態なんだよ! 5人中4人がやられた! リーダーも相打ち! 生き残ったのは俺だけだ!」

「……敵はどんなやつだった!」

「カーディガン着た女だ! ベージュの髪の毛! 目がぐるぐるしてて気持ち悪い! ……ってか、もう死んだ奴の事を話してもしようがないだろ! いいから早くこっちに合流しにこい!」

「場所は何!」

「ポイントAの4だ! 早く来い!!」
プツッ

(Aの4は知らないが…電波は逆探知した。位置は分かる)

雷夢は携帯を死体の上に放り、逆探知した位置へと走り出した。

◇

茂みを掻き分け、森の中を進む雷夢。彼女はついに逆探知した位置へとたどり着いた。

「……あれ、雷夢ちゃんなのですか？」

そこには五つの死体の真ん中で、体育座りしているフシみんの姿が。来ているカーディガンは泥まみれだ。

「今は殺しの感傷に浸っている所なのです。少し待ってほしいのですよ……」

フシみんは手で顔を覆い、ゆっくりと呼吸している。その頬は少しだけ紅潮し、息も少しだけ荒かった。

「5人、殺しちゃいました……。これだけの数を一気に殺したのは初めてなのです……。久しぶりなのにこれはこたえるのです……。はふう……」

胸に詰まった重しを吐き出すように、息をつく。そのまま何度か深呼吸を繰り返し、落ち着こうとする。

「お前、声真似は得意か？」

しかし、雷夢はフシみんの事など知った事かと言わんばかりに、自分の疑問を投げかける。

「……一応。あんまり役に立ったことはないのですけど」

それに対して、フシみんは不機嫌そうな顔を浮かべながら答える。

その声は雷夢の声そっくりだった。

「そうか」

フシみんの答えを聞いた雷夢は、踵を返す。

「どこに行くのですか？」

「狼牙の所に」

「あ、それなら私も一緒に行くのです」

ふわりと立ち上がったフシみんは雷夢の隣に。二人は狼牙の元へと向かう……。前に、雷夢は死体から衣服をはぎ取った。



二人は、雷夢が蛞蝓を殺した場面まで戻ってきていた。

「これ、雷夢ちゃんが殺（や）ったのです?」

「ああ」

「道理でおんなじ匂いがすると思ったのです。一線超えちゃったのですね。仲間なのです」

「こつちか」

フシみんの相手もそこそこに、雷夢は地面に線を引いている粘液を発見し、その跡を辿る。痕跡は非常に長く、数百mも辿った先でようやく目当ての人物を発見できた。

茂みに紛れる三肢を折られた芋虫。彼は顔を土で、服を自らの小便で汚しながら、醜く、卑しく、無様に生き延びていた。

「雷夢……フシミン……。うゝう……。!」

近寄ってきた人物の顔を確認し、心を弛（ゆる）ばせる狼牙。しかし、すぐに情けない表情に戻り、顔を伏せる。

「これはまた……手ひどくやられたのですね。大丈夫なのです?」

「……うう……! ううゝうゝ……!」

フシみんの問いに、狼牙は答えない。かろうじて動く左手の爪を地面に突き立て、悶えるばかり。

「残りの刺客は全部片づけたのですよ。早く学園に帰って治療してもらうのです」

フシみんと雷夢は刺客からはぎ取った服とそらの木の枝を材料として、骨折の応急手当を進める。

「…止める……止めて、くれ……」

なすすべなく治療された狼牙は、刺客の服で作られた担架に乗せられる。

「放って……放っておいてくれ……!」

「——野垂れ死ぬか?」

雷夢の言葉に狼牙は身をすくませ、再度涙を流し始めた。

「その気も無いのに吠えるな」

「あー、怪我人相手にひどい言い草なのです。刺客にボコボコにされてお漏らしまでして、傷心中なのですからもっと優しい言葉掛けてあげないといけないのです。…1、2の3」

狼牙は二人に持ち上げられ、ゆっくりと運ばれる。

無言の雷夢。たまにすすり泣く狼牙。今、この場に至っては自分しか会話の切り出す役目がないと、思ったフシミンが口を開く。

「あー……そんなに落ち込む必要はないのです。2対1でしたし、負けてもしょうがないのですよ。生きているだけ御の字……」

「違う……」

狼牙は担架の上で身をよじり、顔を見られないように左腕で隠す。それから心情を吐露し始める。

「昔、親父が襲い掛かってきた……。疑いようがないくらい、殺す気で……。俺は怖くて……死ぬのが怖くて……。親父を殺してしまった……」

だからこの学園に来たんだ……！ この学園で強くなれば、死をも恐れない強い心が手に入ると思ってた……。

でも違った……！ 腕つぶしが多少強くなろうが、俺の心は一切変わってない……。あの時の弱い俺のまま……。なんにも変わっちゃいない……。変わっちゃ……いないんだ……」

「……」

「……」

雷夢は喋らない。彼女はこんな時にどう慰めの言葉をかければ良いか知らないため。

フシミンも喋らない。かけるべき言葉を探して、探して……見つからなかったため。

そのまま、傷病者を乗せた担架は学園の保健室へと運ばれていった。

◇

夜中の校舎。雷夢は無遠慮に保健室の扉を開ける。

「ん……ん……ん……？」

ベッドで寝ていた保健室が寝ぼけ眼（まなこ）を擦る間に、狼牙が中に運び込まれる。

「一体何だい、こんな夜に……って、ひどい怪我だね」

「後は任せた」

雷夢は狼牙を床に置くなり、さっさと部屋を後にしようとする。

「あれ、もう帰っちゃって良いのです?」

「コイツをここに連れて来た。それで私の役目は終わり。……そう、終わりだ。だから帰る」

雷夢にしては歯切れの悪い言葉を残して、彼女は退室していく。

「もう少し自覚が合っても良さそうだけどねえ……。ま、今は狼牙君が先か。とりあえず、腕と脚を治して、服を着替えて貰ってから……」

保険医が狼牙に近寄ろうとする。が、二四三（ふしみ）が狼牙に覆いかぶさるようにしていた。

「二四三君?」

「狼牙君は言ってたのです。死ぬのが怖いと」

フシみんの渦巻き瞳がぐるぐると回り始め、狼牙を中心に捉える。

「な、なん、だよ……」

「片腕しか動かない状況。雷夢ちゃんもさつき帰っちゃったのです」

「二四三君、そこを退いてくれ。治療ができ……ぐっ!」

フシみんが保険医の肩を突く。保険医は仰け反り、床に倒れ込んだ。

「体が、動かない……? ツボを突いたのか……!?!」

「少し大人しくしてもらおうのです」

二四三は保険医から目を切り、狼牙に向き直る。

「狼牙君は言っていたのです。死ぬのが怖いと」

「な、なん、だよ……」

二四三は狼牙の左手を掴み、床に押し付ける。

「片腕しか動かない状況。保険医も無力化されて、雷夢ちゃんもさつき帰っちゃったのです。」

——なのに快樂殺人者を前にして、どうしてそんなに落ち着いているのです?」

「……な、え、あ……？」

二四三の顔は至極真面目。少なくとも狼牙からすれば、冗談を言っているようには見えなかった。

「今まで、私が殺してきたのはほとんど赤の他人だったのです。……友達を殺したら、いったいどれだけの背徳感を得られるのか……」

二四三は空いている手を大きく振りかぶる。

「私、気になるのです」

狼牙の喉目掛けて貫手が振り下ろされる。

「ああ“あ” あ“あ” あ“あ” ツツツ！！」

果たして、貫手は喉の一步手前で止まっていた。

「……こんな状況でもしっっかり防御するのは流石なのです」

フシみんは狼牙の喉を爪で叩く。金剛不壊（こんごうふえ）で硬化された肌はコンコン、と硬い音を返した。

「本気じゃないのです。今は大義名分がありませんし。……ごめんなさいなのです、突き飛ばしちやつて」

フシみんはあっさり狼牙を解放し、保険医のツボを再度突き、引き起こす。

二人は狼牙の治療と世話を進めながら言葉を交わす。

「……結局、君は何がしたかったんだ？」

「反応を見たかったのです」

「反応？ いったい何の……」

「人が死ぬ寸前に返す反応を。私調べですが、大体3パターンに分かれるのです。

1つ目は怯え、竦み、動けなくなるパターン。

2つ目は見切りをつけ、諦め、生を放棄するパターン。

3つ目はそもそも死ぬことを何とも思っていないパターン」

骨折を治してもらい、服を着替えた狼牙はベッドに潜り込む。

「……俺は3つ目になりたかった……」

「そうなのですか？ それはもったいない。狼牙君は3つ目よりレアなパターンに属しているのに」

フシみんは狼牙の寝るベッドに腰かける。

「どれだけ命のやり取りを経験して、命懸けに慣れた人でも、いざ死を目前にすると恐怖し、目を閉じる。それほど死の恐怖と言うのは大きくて強烈なものでしょうね。…私は3つ目なのでハッキリとは分からないですけど。」

けれども、狼牙君は絶体絶命の状態でも目を閉じなかったのです。涙を流し、恐怖に顔を引き攣らせようと、絶対に。それって意外と珍しいのですよ。

「死に臨(のぞ)む人」。狼牙君みたいな人は殺すのに苦労します。決して諦めず、紙のように薄い勝ち筋を必死に探し当て、それを通してこようとする。死に相対した極限状態でだけ発揮する底力があるのです」

フシみんは布団越しに狼牙の体へ手を置く。

「あんまり落ち込まないでほしいのです。死ぬことを恐れない人や、諦める人、恐怖するだけの人では決して届かない領域。そこに手を掛ける勇氣を持っているのですから」

「……俺には…勇氣なんか…」

「あるのです。不甲斐ないと思っっている自分から必死に変わろうとしていたじゃないですか。命を懸けて、怖い思いをしてまで」

「怖いってのがもうダメなんだ…！ そんな臆病のせいで…俺は…」

「自分の弱いところから目を背けて、盲目的に自己肯定する。臆病って言うのは私みたいな人を指す言葉なのです。狼牙君はもっと胸を張って良いのですよ。」

自分をもっと好きになってあげるので。私みたいなゴミクズと違って狼牙君は凄い人なのですから」

「……」

「自分をもっと愛してあげるので。仮に自分が粗大ごみ以下の存在だと自認していても。自分だけは自分を愛してあげないと」

「……」

フシみんは狼牙を抱きしめる。

「——それが無理なら、私が代わりに愛してあげるので。誰からも

愛されないのは…耐えられないのですから」

ぐりぐりと布団に頬を擦りつけるフシミン。その目には薄っすらと涙がにじんでいる。

「……ありがとう」

布団の奥から微かに感謝の言葉が聞こえた。

◇

狼牙が運び込まれてから、1時間が経った。狼牙とフシミン、保険医の割り当てでそれぞれがベッドに寝ていると、部屋の外で走る足音が。

耳が良く、加えて死にかけてたせいで精神が敏感になっている狼牙は、その音で一気に覚醒する。

「……っ、ふ、フシミン……！」

隣で寝ている彼女の体を揺らし、戦力を整えようとした狼牙。しかし、フシミンは一向に目を覚まさない。まるで糸の切れてしまった人形の様。

その間にも足音はどんどん近づいてくる。狼牙は不整脈を起こしそうなくらい暴れる心臓を手で抑え込みながら、ベッドから降りる。足音が保健室の前で止まった。狼牙が構えたその時、扉が開かれる。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……！」

「柄鎖（つかさ）……」

「意外と…ゲホッ…お元気、うえほっ…！ そう、でッ、おエッ…！」

喉が渇くのか、言葉を発するたびに咳き込む柄鎖。よく見れば、額は汗にまみれ髪が肌に張り付いている。服も所々に汚れや千切れが。

「ほら、水」

狼牙から水を受け取った柄鎖は時間をかけて喉を潤す。

「はあ……失礼いたしました」

「お前、走って来たのか？」

「ええ。車よりも自前の足の方が速いので」

「実家に呼ばれてたんだろ。どうして…」

「どうして、だと思えますか？」

「…俺の事が心配だったから、か？」

柄鎖は扇子を懐から取り出し、顔を隠す。

「……普通に当てるの止めていただけませんか？ それより、良く恥
ずかしげも無くその答えを返せましたわね…」

「保健室に入って来るなり、むせてまで俺の心配をしたらだろ。客観的
に考えてそうじゃないかと思っただけだ」

「はあ…」明察ですわ。実家を伝手（つて）に黒子（くろこ）様に刺客
が送られた事を知り、その時狼牙様の妙な電話を思い出しました。あ
れは黒子様に向けられた刺客と戦うための人手集めだったのではな
いかと。

普通に考えれば狼牙様が刺客と戦う理由は無いはずですが…何
とも嫌な予感がいたしました。それで念のため雷夢様に様子を見に
行くよう頼みましたら、腕と脚の骨を3本折られたと返信が来まし
て…もう少し詳細に報告していただければ、ここまで慌てる事も
無かったのですが」

「そうか…ありがとう、心配してくれて」

「どういたしまして。…というより狼牙様、少し変わられましたか？」

柄鎖は狼牙の目の前まで近寄り、まじまじと顔を見つめる。

「な、何だよ…」

「どこか弱気になられたような」

「……」

狼牙は柄鎖から目を逸らす。

「そういう所ですわよ。前なら睨み返す…とまでいかなくとも、目を
逸らしたりはしなかったでしょうに」

「……こっちのほうが小便垂れにはお似合いだろ？」

「…本当に何がありました？」

自嘲気味に笑う狼牙。彼は全てを柄鎖に話し始めた。

◇

「そんな事が…」

狼牙が事の顛末を語り終える頃、彼はベッドに寝転んでいた。

「フシみんな言われた、俺は死に臨む者だ。けど、やっぱり俺は恐れを知らない戦士になりたい…。そうしないと俺はまた大切な人を…」

狼牙は布団を巻き込み、うずくまってしまう。

「……とりあえず、今日は寝た方が良いと思いますわ。時間が気持ちの整理をつけてくれる事もありますので。なんなら、添い寝でもして差し上げましょうか？」

「…いいの？」

「ええ。……え？」

柄鎖は冗談のつもりだった。冗談のつもりだったのだ。

「いや、その…汗は引いているのですが、服にしみて匂いが…」

「嫌な匂いじゃない」

「私の方が気にするのですが!? というかこの距離で平然と嗅ぐのは止めてくださいます!? 鼻が良すぎるんですよ!!」

「そうか…。悪い、我儘を言った」

明らかに氣勢を落ち込ませる狼牙。柄鎖はそれを見て、ますます断りづらくなってしまう。

「……くっきり分かりました！ 添い寝いたします！ いたしますが、その前に着替えはさせていただきます。ついでに濡れタオルで体も」

柄鎖は保健室の備品を使って体を拭き、その後備え付けの寝間着を借りて準備を終える。そして、狼牙の寝るベッドの縁に腰を掛けた。

「……それでは失礼して」

柄鎖は意を決して、狼牙の背中側に横たわる。

どくん、どくと暴れる柄鎖の心音。耳の良い狼牙は当然、それを聞きつける。呼応するように彼の心音も荒れ始めた。同時に呼吸を

浅くする。

狼牙の呼吸の変化で、自分の緊張が影響を与えていると悟った柄鎖。目を閉じて鼓動を落ち着ける。それから狼牙の体に腕を絡め、体を密着させた。

「申し訳ありません。落ち着きました」

狼牙は絡められた柄鎖の手を取った。柄鎖は努めて平静を装う。

「……硬くて厚い皮」

狼牙は手のひらを撫でた後、手の甲を撫でる。柄鎖は努めて平静を装う。

「発達した人差し指と中指の第三関節」

その後、指と指が絡み合う。柄鎖は努めて平静を装う。が、ちよつと無理だった。

「みゞ」

変な声が漏れる。しかし、狼牙はそれをスルーして続ける。

「綺麗だな。無駄の無い、良く鍛えられた手だ」

「ど、どうも…」

「それに比べて俺の手は…」

狼牙は柄鎖の手を離す。下手な練習を繰り返して余計な所が発達した自分の手を胸の前に置いた。

柄鎖は狼牙の手を追う。そして大きな手で彼の手を包み込んだ。

「綺麗ですわよ」

「……どこが」

「貴方のがむしやらさが表れている所が」

「ただの無鉄砲だ」

「いつになく自己否定しますのね。」

無鉄砲で結構。あなたは今の自分に満足せず、成長しようとしている。

不格好でも良い…そうして成長すれば、最後に勝つのは貴方の様な才溢れるものなのですから」

「……」

狼牙は答えない。代わりに問いを返す。

「お前は一年後に死ぬんだろ？」

「ええ」

「けど、お前は死を恐れていない」

「ええ」

「……俺は、怖い……」

狼牙の手は震えていた。柄鎖の手にも振動が伝わる。

「……ええ、そのようですわね」

柄鎖はより強く狼牙を抱く。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

会話はそれきり。肉体的にも、精神的にも疲れている二人は朝まで目を覚まさなかった。

24話 そんなことより

午前9時。狼牙^{ろうが}にしては珍しく、遅い目覚め。彼はまず、柄鎖の腕の中にいることに気づく。彼は彼女の腕の中で二度寝を始めようとした。

しかし、すぐにベッドから這い出る。音を聞いて保険医が顔を覗かせた。

「お、やっと起きたか。遅刻だぞ」

「……おはようございます」

狼牙の言葉に保険医は目を丸くする。彼が敬語を初めて使ったためだ。『保健室は逢引き宿じゃないんだがね』、の言葉も喉の奥に引っ込む。

「ペンと紙を借りても？」

「あ、ああ……」

狼牙は借りた道具で書き書きを作り、テーブルの上に置く。そして保健室から出ようとして、まだベッドで寝ているフシみんを見つけた。

彼女は昨日の夜から変わらず、ピクリともせずに横たわっている。呼吸音は聞こえるため、死んではない。昨日の戦闘で相当疲れたのだろうか。

狼牙は彼女に布団をかけ直し、保健室を後にした。



午後9時30分。遅れて柄鎖^{つかさ}が目を覚ます。彼女はまず、腕の中に誰もいない事に気づく。しかし、そこに残る確かな温かさに少しの間浸った。

そして体を起こし、脇のテーブルに置いていたスマホを手取る。

画面には通話着信とSNSの通知が。

「……」

柄鎖は顰め面でメッセージの内容を確認する。

(勝手に戻りやがって。死んでないだろうな?) 1:34

(生存)

(なら良かった。生贄が死んじゃあ、話にもならん) 7:32

「……」

柄鎖はスマホをテーブルに戻す。その時、隣に書き置きが残されているのに気づいた。

それを手に取り、二つ折りを開く。その時、柄鎖が起きたことに気づいた保険医が顔を覗かせる。

「これは…」

「もしかして逢引のお誘いかい? 学校をサボって悪い二人だ」

「……ええ、決闘のお誘いですわ」

「やっぱり……え?」

冗談のつもりで言った言葉を肯定され、保険医は困惑する他無かった。

◇

書き置きを見た柄鎖が向かったのは校舎裏。しかし、そこには誰もいない。狼牙から決闘に誘われたはずなのだが。

直後、脳天に走る衝撃。金剛不壊が自動で発動し、ダメージこそなかったものの、前のめりに体勢を崩す。柄鎖が次に顔を上げた時、そこには完全なる正拳の構えに入った狼牙がいた。

ベギ

両手で腹をかばった柄鎖。彼女はかばった両腕を骨折、あばらにひびを入れられ、衝撃が背中まで突き抜けた。そのまま吹き飛ばされ、背後にあった木の幹をへし折りながら扉に激突。

追撃に飛んできた顔への膝蹴りを額で防御。膝蹴りの衝撃で崩壊した塀、柄鎖、狼牙が一丸となって宙を舞う。二人は学園外の空き地に一定の間隔をもって着地した。

仕切り直しとなった間合いで柄鎖は能動的に金剛不壊を発動させ、折れた両腕を固定する。

（書き置きには「勝った方が負けた方に何でも一つ命令できる」と言う条件での決闘を申し込む旨。そして決闘をする意志があれば、校舎裏に来い、とも…）

校舎裏に来た時点で決闘は始まっていた。そして上からの不意打ち。……本気で勝ちに来ていますわね）

狼牙と柄鎖は油断なく構える。上戸鎖家に伝わる基本の構えが鏡合わせに。

（私と同じ構え。同じに構えれば、相手の攻撃や防御を読みやすい。

その模倣力。やはり貴方は天才……。先の様な不意打ちをしなくとも、私の様な金剛不壊に頼っているだけの凡人には勝てるでしょうに。今は負けたとしても、いつかは必ず…）

柄鎖は内心でばやきつつも、攻めてきた狼牙の打撃を捌く。

（思えば、双子の兄には体術で勝てた事がありませんでしたわ。私の方が倍以上練習していたにも関わらず。勝っているのは金剛不壊の無意識化だけ。……いえ、それが私の才能？ 毎日1000回打たれていれば誰でも達成できると思うのですが…）

狼牙は柄鎖の体を土台に登り、立体的な戦闘を仕掛ける。それに対して、ツカサの対応が途端に杜撰に。

（見破られていましたか。型通りの防御は得意ですが、そこから外れた事を強いられるのは苦手…）

不得手な状況で狼牙の攻撃を防御しきれず、柄鎖は一撃を貰う。しかし、空中からの一撃では金剛不壊を貫く程の勢いはない。

（黒子様ならば、頭上からの一撃にも対応できていた。恐らく私が貰った狼牙様の不意打ちも。

二四三様であればそもそも不意打ちの気配を見逃さないでしょうし、新たな目を手に入れたらしい雷夢様もきつと…）

立体戦闘では決め手に欠けると悟った狼牙は両足を地面につけ、柄鎖に密着する。

雷夢から学んだ超至近距離戦闘。これまた型の外での攻防を強いられる柄鎖は動きが鈍い。狼牙の無勁と寸勁を幾度も喰らう。しかし、これも金剛不壊を貫くことは無かった。

(…悪い癖ですわ。戦いと関係ない事を考えてしまう。こういう所にも才の無さが現れますわね。)

狼牙様の初撃。恐らく、素能の出力最大で放った正拳は防御越しにも少なくないダメージを私に与えましたが、その際に異能を消費しすぎたせいで身体能力が落ちている。

先ほどから攻撃に重さが無い。通常攻撃で傷つけられることはま
ずないでしょう。気を付けるべきは、あの正拳突きだけ。

しかし、今はひとまず距離を取るのが先決)

柄鎖は防御を自動発動の金剛不壊に任せ、タイミングを計る事に集中する。至近距離戦闘の中、僅かに間合いが空く瞬間を狙い、軸足を変更。一步分の距離——ストレートをねじ込める距離を得た。

(狼牙様は生来の臆病。故に致命の一撃となり得る打撃を振るえば、下がるはず…)

型通りに、しかし限界まで大きく振りかぶった柄鎖。しかし、彼女の予想に反して、狼牙は下がらなかつた。防御の構えを取る。

柳雪折無。柄鎖の一撃を逸らし、隙を作って正拳を叩き込む気か。しかし、正拳を叩き込めるのは成功すればの話だ。

恐怖からか、一瞬だけ反応が遅れる狼牙。果たして、狼牙の手は柄鎖の拳の勢いに負けた。柄鎖の拳が彼の鼻面に突き刺さる。

殴られた衝撃で、狼牙は十数m吹き飛ばされる。その距離が、何よりダメージの大きさを物語っていた。

「狼牙様ッ!?!」

今までに感じた事の無い会心の手ごたえ。今の柄鎖にとってはそれが何より恐ろしかった。すぐに狼牙に駆け寄る。

狼牙は近づいて来た柄鎖の体を掴み、倒れた状態から起き上がる。

「どうして…臆病な貴方がこんな、危険な…!」

狼牙は答えず、支えに使っていた柄鎖の体を払いのける。そして、未だに動揺する柄鎖に正拳を叩き込んだ。

磨き抜かれた技は、体が風前の灯火である事などまるで考慮に値しない。必殺ともいえる威力に、柄鎖の体は「く」の字に折れた。そのまま地面をスライド移動する。

「——ゲホッ！　ゴホッ！　カホッ……！」

柄鎖は曲がった体を起こしながら、血を吐いた。

口元を拭い、狼牙の方を見ると、彼はフラフラと近付いて来ている。柄鎖はためらいがちに構えた。

狼牙は意識こそハッキリしているものの、三半規管を揺らされ、平衡感覚を失っている。そんな状態で柄鎖と数合打ち合っても、結果は明々白々。脚をかけられ、簡単にバランスを崩す。

狼牙が頭から地面に激突しかけた所を、柄鎖が腕でかばった。

柄鎖は覆いかぶさる体勢から狼牙の意識を奪うべく、拳を振りかぶる。しかし、怯えた表情ながらも、真つすぐ見つめ返してくる狼牙の目を見て、ゆつくりと拳を降ろした。

「……参りました」

「…俺の勝ち、で良いのか」

「ええ」

狼牙はそれを聞いて安心した表情に。瞳から涙も溢れる。

「じゃあ…一つ、命令だ…」

「何でしょうか」

「生贄になるな」

「……」

柄鎖は思わぬ命令に、口を半開きにしてポカンとあっけにとられる。

「そのために、私に決闘を？　……どうして？」

「柄鎖に死んでほしくない」

「……私が生贄にならなければ、封印されているNニユーのリーダーが復活する。そうなれば、再び封印されないためにも私を狙ってくるでしょう。私に死んでほしくないのであれば、その問題はどうするのですか

？」

「俺が………手段は何でも良い、そいつを殺す」

「封印されるくらいです。Nのリーダーは私たちの想像も及ばないほど強いでしょう。死ぬかもしれませんわよ？」

「分かつてる…」

狼牙の声は少し震え、瞳からこんこんと涙が湧いていた。

「Nのリーダーは、特に理由も無く秩序を乱していたと聞きます。

……私が死なねば、日本が——いえ、世界が危機に陥るかもしれませんのよ」

「そんな事より……、俺のために生きて欲しい……」

「………ふふっ」

その言葉を聞いた柄鎖は、時間をかけて笑みを深める。

そのまま柄鎖の顔がゆっくりと下がり、狼牙と併さった。口内を切って出た狼牙の血と柄鎖の喀血が混ざり、お互いの口腔内粘膜に溶解。唇が離れた瞬間、赤い唾液が糸を引く。

血の口づけを終えた柄鎖は興奮か恥じらいか、頬を染めていた。

「古くは指に傷を付け、それを合わせる事で血の掟を交わしていたそうですね。——狼牙様の命令、柄鎖の血に懸けて必ずや」

「…よかつ、た…」

柄鎖の宣誓を聞いたロウガは目を閉じる。そのまま眠るように気を失った。

◇

「……で、10分もしない内に戻ってきたのかい？ どれくらい怪我までいっさえて」

「お仕事を増やしてしまい、面目ありません」

「いいさ。仕事の虫にとっては、餌が湧いて出てきたようなものだ。

…というか、抱えられている狼牙君より、抱えている柄鎖君の方が

重症に見えるんだが…」

「まあ、私はタフですよのゲホッッッ！」

「うわあ！ 急に血を吐くな！」

「し、失礼エゴホッッッ！」

「弁解は良いから血をまき散らさないでくれ！ 早くベッドに！ 横ばいで！ というか今治せば良いのか！」

保険医は柄鎖の血を避けて、彼女の体に触り、治療をすませる。素能による治療を受け、体内のエネルギーを一気に消耗した柄鎖の体から力が抜ける。抱いていた狼牙を取りこぼしそうになりながらも、膝を付いて堪える。

「…改めて、失礼いたしました。そして治療、感謝いたします」

「どういたしまして、狼牙君をベッドに降ろして君も横になりなさい。

確かここに……ほら、とりあえずの栄養補給」

保険医は、柄鎖が狼牙を寝かせたのを見てから栄養ゼリーを放る。そして、狼牙の容態を確認した。

「……後を引くようなダメージは無さげ、失神しているだけか。いや、異能者じゃなければ失神も十分危険な状態ではあるんだが……どうにもこの学園に来てから危険の基準が下がっていけない」

「医者として正常な判断が出来なくなっではいけませんわね」

「さつき私の基準を大幅に下げた君には言われたくないねえ…」

保険医はぶつぶつと呟きながら、十分な装備を整え、血の処理を始める。

「何にせよ狼牙君に柄鎖君の血がかからなくて良かった。傷口にかかれば感染症の危険が危ない。勢いよく吐き出したのが幸いしたね」

「……………」

ズズズズズ……ベゴツ……！

保険医の言葉を聞いた柄鎖。顔を青くしながら栄養ゼリーの容器を空にする。

「……先生の、ファーストキスは何味でしたか……？」

「いきなり何だい？ 一応しようゆ味だったよ。直前にラーメンを食

べていたのが良くなかった」

「……私は、血の味でした……」

「……？ ……！ ……まさか……！ え、いや……なんで……？」

色々と察した保険医。

察したが、その情報量が多すぎて処理しきれなかった。

◇

保険医から小言を貰った後、彼女の作った料理を食べて栄養補給を終えた柄鎖。狼牙の寝ているベッドに腰かける。

「私の血でロウガ様が何かの病気になってしまいましたら、本当に申し訳がありませんね……。血液由来の病気の診断を受けた事が無いので、大丈夫だとは思いますが」

柄鎖は呟きながら狼牙の髪を撫でる。

「……意外とさらさらですわね。そういえば、シヨツピングモールに出かけてからはファッションや身だしなみに気をつけるようになった、とおっしゃっていましたか」

柄鎖の手が下り、狼牙の額に。濡れタオルで汚れを拭った彼の顔は綺麗そのもの。

「……何というか肌も……」

額から頬へと手が移動する。指が滑ると、肌がすべすべを主張。指が押すと、肉がムニムニを主張。

「スキンケア……というか、このレベルは才能じゃありませんこと……？ こぶとりじいさんのように、頬を奪って私のものにできないものでしょうか……」

指が頬をつまみ、引き伸ばす。その感触すら、えも言えぬ気持ち良さであり、柄鎖は何となく敗北感を覚えた。

「ん……う……」

「あら、失礼」

狼牙が少し呻いた所で柄鎖はようやく手を離した。

「良く眠っていないさる。」

思えば、昨日の放課後、黒子様くろこに殺されかけ、その日の深夜には刺客に殺されかけ、翌朝の今は私と決闘をした…。24時間経たずにそれだけ濃密な時を過ごせば、ひどく消耗するのは当然でしょう」

それから柄鎖は狼牙の手を握る。狼牙は外部からの刺激に反応し、無意識に柄鎖の手を握り返した。その仕草に柄鎖は思わず頬を緩める。

「会って3か月と経っていませんが……案外と惚れっぽいのかもかもしれませんわね、私は」

柄鎖の睦むつびは、しばらくの間続いた。

25話 不憫

柄鎖つかせとの決闘に勝利し、保健室で失神していた狼牙ろうが。彼は先ほどまでとても心地の良い夢を見ていた。

「……ガ……寝て……。あなた……事情……ませ……」
「緊急……叩き……連れて……！」

しかし、保健室の外で繰り広げられる喧騒に無理やり覚醒させられる。ここ最近で危険に晒されすぎた彼の体は反射で動いた。

ベッドから這い出て治療で失った栄養を補給するべく、脇の段ボール箱を漁り、栄養ゼリーを7つ引きずり出す。

狼牙はそこでもうやく我に返った。喧騒の内容に耳を傾け、敵襲で無いと理解する。そして、喧騒の内容の面倒さに顔を顰めた。

栄養ゼリーの容器を瞬く間に空からにしながら保健室の扉から顔を覗かせる。

「話は聞いた、すぐに行く」

突如、会話に割り込んできた狼牙に論争を繰り広げていた面々は驚いて振り向く。

「狼牙様!?! 起きられたのですか?」

安堵と心配を混ぜた声を返すのは柄鎖。

「起きたのであれば話が早い! すぐについて来なさい!」

居丈高に言うのは、狼牙と黒葛原黒子つづらはらくろこの決闘を見学に来ていた黒葛原傘下の生徒。

その態度が癪に障った柄鎖はいつになく噛みつく。

「それが人に物を頼む態度でしょうか」

「こんな野良犬に頭を下げるとでも? 下郎は黙って名家の言う事を聞けば良いのです」

「あら、今はもう名家では無いでしょうか? 黒葛原家は今や配下の者に乗っ取られ、有名無実となってしまったのですから」

「ツ……! それはっ……! 黒子様が正気を取り戻しさえすれば……!」

「貴方の言う所の下郎に負け、まんまと家に乗っ取られてしまった張本人が正気を取り戻した所で何ができると?」

「黒子様を愚弄する気か!」

ヒートアップしていく口論に、狼牙が水を差す。

「関係ない事で盛り上がるな。この話は俺が行くか、行かないかの問題だろ」

「……失礼いたしました」

「ふん。そちらの野良犬は立場を弁えているようですね。殊勝なことで」

その言葉に、収めかけた矛先を再び相手に向けようとする柄鎖。狼牙はそれを手で制止し、黒葛原の生徒に向かって口を開く。

「お前も落ち着け。無用に挑発して何の得がある。俺がへそを曲げたらどうするつもりだ」

「……その時は、力づくで……」

途端に、柄鎖が狼牙の肩を引き、前に出る。それを見て、黒葛原の生徒は口をつぐんだ。

「俺たち相手に2対1で勝てるほどお前は強くないだろ。」

……ついて行くから落ち着け。乗り掛かった舟だ、黒子の事は何とかしてみる」

「……分かりました」

しおらしくなった黒葛原の生徒に連れられ、狼牙と柄鎖は寮へと向かった。



寮の一角。黒葛原黒子の部屋の前には少くない野次馬がたかっていた。

「どいてくださいまし!」

狼牙と柄鎖を連れた黒葛原の生徒が人の波を掻き分け、扉の前へと

到着する。扉は開いており、中が容易に確認できた。

「知らない人……殺す……、入ってきたら……殺す……」

玄関から少し離れた所で刀を手に己に課せられた使命を呟く黒子。

「黒子様……」

黒葛原の生徒が部屋の中に侵入しようとする。その時、刺すような声が。

「寄るなツ!! し、知ってる奴が、は、入って来ると……巻き込まないよようにとか、守らないといけないとか……よつ、余計なこと考えなきや、い、いけない……! だから寄るなツ!」

ぼろぼろと涙を流す黒子。

「たつ、単純じゃないとダメなんだ……。私みたいなのは、た、単純に考えないと……」

誰かが部屋に入る……知らない人か判別する……刀を振るう……殺す……。こつ、これ以上難しくしないでくれ!」

「そもそもどうして黒子様わいのもりがそんな事をしなければいけないのですか! どうして狼森わいのもりの命令に従うのですか!」

「き、きつ、期待に応えないと……! 失敗、したくない……し、失敗したくない……!」

人の可聴域を超えんばかりの奇声を上げる黒子に、黒葛原の生徒は歯噛みする。

「しつかりしてください! いつもの気丈さはどこにいったのですか!?! そんな情けない姿なんて見たくありません……!」

「……違う、ちがう、チガうちガウ! これが私なんだ! 今まで化けの皮が剥がれなかっただけの無能!」

「それこそ違います! あなたいつだって私達を導いてくれたではありませんか!?! 調子を取り戻しさえすれば乗っ取られた家もすぐに取り戻せるはずです!」

その声を聞いて、黒子は息を切らしながら自らの顔に爪をたてる。目の下に爪は食い込み、遂には皮膚をつき破り、肉を裂き始めた。

「止めて……止めてくれ……」

爪を立てる指が痙攣し、血と涙が混じり始めるころ、黒葛原の生徒

を押しつけて狼牙が前に歩み出る。

「黒子、もういい。俺の指示に従わなくてもいいんだ」

狼牙の声に対して黒子は敏感に反応し、ゆっくりと息を整える。

「……もう、いい?」

「ああ」

「……ちゃんと、出来た?」

「ああ」

「……できた。できた、出来た……」

黒子は刀を消滅させ、前のめりにぶつ倒れる。狼牙は更に前へと進んで、彼女の体を受け止める。

「良かった……私にも出来た……」

「悪かった、期限を言っただけでなくて」

「……聞いて、ない。聞いてなかった、私は、無能……?」

再び顔に爪をたて、発狂しかける黒子の腕をつかむ狼牙。

「……ここまでお前に期待してない。俺のミスだ」

「……私、無能じゃない?」

「ああ、お前はよくやった。夜も寝ずに頑張った」

黒子がびくりと体を震わせる。

「……私、役にたった?」

「ああ」

「……ふひッ……」

聞く人が聞けば気色の悪いという感想を抱くであろう笑い声を漏らしながら、黒子は口角を上げる。

「……め、命令。他にない?」

「じゃあ……今は寝ろ」

「う、うん……ね、寝る……!」

言われるや否や、黒子は狼牙に抱きついて目を閉じる。徹夜の疲れが出ているのか、すぐに寝息を立て始めた。狼牙は黒子を起こさないよう慎重にベッドまで運ぶ。

「助かったよ、狼牙君」

保険医が狼牙の肩を叩き、寝ている黒子の体に触れる。その途端、

顔の傷が癒えていった。

「病み上がりの君に任せてすまなかった」

「医者でしょう、どうにかできなかつたんですか？」

「私は精神科医では無い、専門外さ。……それに、私も少々冷静さを欠いていた」

保険医はベッド脇にしゃがみ込み、黒子の肩に手を置く。

「……彼女がこうなったのには、私にも責の心当たりがあつてね。そのくせ、今となつては彼女の心配。……とんだ大馬鹿だろう、笑つてくれないか？」

「そんな気分じゃないです」

「君はいつでも変わらないね。いや、敬語だけは以前と違うか。いつたいどんな心境の変化だい？」

「……虚勢を張るのはもう止めました」

「虚勢か……。まあ何にせよ敬語を使うのは悪い事じゃない。無用な諍いを引き起こさなくて済む」

「とにかく、後は任せます」

「ああ、お疲れ」

狼牙はベッドを背にし、部屋から出て行こうとする。その途中に、下唇を強く噛んでいる黒葛原の生徒と、他にも取り巻きが3人ほど立っていた。

「どうして貴方の様な人の言葉が！ 長く一緒にいた私達ではダメだったのに……」

「長くいたからこそじゃないのか？」

狼牙は怒り、不甲斐なさ、悔しさを滲ませる黒葛原の生徒を諭す。

「何のためかは分からないが、黒子は外面を作っていた。今はそれが壊れて素がでてきているだけだと思う。お前らは外面を見すぎた。だから戸惑った。」

本当にアイツの事が心配なら、今のアイツを受け入れれば良い。

……それが、何よりの気休めになる」

「……っ」

言葉に詰まる黒葛原の生徒。狼牙は俯きながらその横を通って部

屋を出た。

「お疲れ様でした」

部屋を出た狼牙を迎えたのは柄鎖。

「疲れるような事はしてない」

「病み上がりでしょう。それに栄養補給もゼリー飲料で簡単に済ませただけですし」

そこで狼牙の腹の虫が鳴る。

「私が料理を作って差し上げましょうか？」

「…名門のお嬢様が料理出来るのか？ 寮にも食堂があるだろう？」

「したことはありませんが、レシピを見てその通りに作れば大抵のもの出来るでしょう。そのためのレシピですし」

「なら頼む」

「承りました。」

食事の後は今後について話し合う事にいたしました。本来生贄になるはずの私が生き残ろうというのですから、大騒ぎですわよ」

「具体的にはどうなる？」

「——戦争、でしょうね。開戦相手として確実なのは私の実家。それと、黒葛原を乗っ取った剣先も恐らくは。新しく開発した手術が可能になる奥義を上戸鎖家に横流しにし、代わりに補助を受ける同盟を結んでいるようですから」

「…待て、奥義ってのは名門にとって不出の秘密じゃないのか？ それをどうして横流しにする」

「上手くやったようですが、クーデターの際にかなりの戦力を消費したのでは？ 乗っ取られた黒葛原の一門も素直に従うとは思えませんし、しばらくは内政に力を入れたいのでしょうか。」

それに、新しく開発した奥義は術者の骨を用いてメスなどを作り、異能者の手術が可能になると言うのが一番の利点と聞きます。しかし、黒子様の「^{マニフェス}正夢」と違って生み出した道具を自由自在に消せるわけではありません。奥義が流出しなくとも、道具が流出してしまえば意味が無い。そして道具は奥義に比べて容易く流出するでしょう。」

そのため、隠してもしようがないと考えたのでは？ 一般企業に例えると、特許を取る事に似ていますわね。

加えて黒子様の暗殺に失敗していますので、隠したところで独占できらるわけでもありませんし」

「素能じゃなくて奥義か……。俺みたいなのもいるだろうし、ますます秘匿しきれないだろうしな」

「とはいえ、黒子様に更なる追手が来ないのは妙ですわね……。私であれば旗揚げの印となりかねない反対勢力のトップなど、どんな犠牲を払ってでも潰しますが。」

……ともかく、私達がやる事は中立の勢力をどれだけこちらに取り込む事。それらの政治は私の方が慣れているでしょうし、お任せください。その際、狼牙様を利用させていただきますが、よろしいでしょうか？」

「確認を取る必要はない。俺がお前に生きて欲しいと望んだらう。好きに使ってくれ」

「…そうですわね。無粋でした。」

好きに使って良いのであれば、料理を食べた後はお買い物に付き合ってもらいますわよ」

「何か必要な物でもあるのか？」

「……いえ、別に。しかし、私達はこれから戦争の打ち合わせをしようというのです。そういう時は部屋で二人こっそり、というよりは人目に付くところで堂々と話した方がかえって良いものですわ」

「…そういうものか？」

「そういうものです」

狼牙は釈然としない表情を浮かべながらも、とりあえずは従うのであった。

◇

翌日、朝8時。

黒葛原黒子は寮から学校までの通学路を歩いていた。

(登校。)

部屋を出て、通学路を歩いて、校門をくぐって、下駄箱までたどり着いて……。お、多い…)

頭の中で登校の手順を振り返る黒子は、昨日よりかなり落ち着いていた。というのも、あの騒動以降、取り巻きの生徒と時間を共にしたためだ。

自分は外面を取り繕っていただけの無能である事。故に、当主には相応しくない事。そもそも当主の座に付きたくない事。もろもろをぶちまけ、それを受け止めて貰った。

今の彼女は熟睡した事も相まって精神的にはかなり安定している。とはいえ、失敗に対する怯えは拭えていなかったが。

ちなみに取り巻きは、夕方から寝て明け方に目を覚ました黒子をずっと見守っていたため、現在熟睡中である。

(もう当主としての仕事をしなくても良い…。面倒くさい事を考えなくても良い…)

昨日は良かった。何も考えず、ただ狼牙君の言葉に従うだけで…褒めて、くれて…)

「…………ふへっ…」

黒子が威厳も何もない笑いを浮かべていると、後ろから足音が。それに気づき、彼女が振り向くと、そこには狼牙がいた。

「黒子か。おはよう」

「え、あ、お、いい!?!」

突然現れた狼牙の挨拶に、あと一文字で母音をコンプリート出来る返事を返した黒子。

狼牙はそんな態度も気にせず、一步近寄る。その時、狼牙の髪からシャンプーの匂いが香る。

(あつ、柑橘系……良い…)

黒子が妙な分析をしている間に、狼牙は彼女をジロジロと見回す。

「……髪、ぼさぼさだぞ」

「う、え、あ…朝の支度つ、わすれて…!」

「落ち着け」

「ひ、ひゃい…」

失態を思い出し、慌てる黒子。それを一声で制する狼牙。

「石段に座って」

「……ひゃい」

(あ、命令…従えば、多分、褒めてくれる…?)

黒子が脳を焼かれる一方、狼牙はカバンから櫛を取り出し、黒子の毛先をほぐす。

「…ちゃんとトリートメント付けているのか?」

「き、昨日はわすれて…」

「一昨日も雨に打たれてだろう、痛んでいる。せつかくの長い髪だ、ちゃんと手入れした方が良い」

「は、はい…」

毛先のほつれを梳いた後は、手櫛で登頂部からゆつくりと解ほぐしている。しかし、狼牙の指が頭皮に当たると、黒子は奇声を上げる。

「ああ……。ああ……! あーっ!」

「どうした急に。もう少しで終わるから待っててくれ」

最後に髪が跳ねている所を櫛で整えて終了。

「終わったぞ。顔が良いんだから、身だしなみも整えた方が良い」

「はい……え、顔が良い?」

「? ……ああ、俺の主観だぞ。お前自身がどう思ってるかは知らないが」

(顔が良い。つまり存在しているだけ褒められた…?)

「これが、噂のベーシックインカム…」

「…何の話だ? とにかく、それじゃあな」

富の再分配に感動する黒子において狼牙はその場を去ろうとする。呆けていた黒子は、急に我を取り戻し、狼牙を呼び止める。

「……え? あ、す、少し待って」

「何の用だ?」

「私、落ち着いて、石段に座った……よ？」

「そうだな」

「ちゃんと、落ち着いて、石段に座った、よ……？　言われたとおりに……」
「確かにそうだな。……それがどうした？」

その時、黒子の瞳に涙がにじむ。

「何か、間違えた……？」

「何も間違えてない。というか、なぜ泣く」

「だって……褒めてくれないから……」

「褒めるって、それぐらいのこと……で……」

「それぐら」　あたりで黒子の涙腺が一瞬にして決壊する。その姿に狼牙は言葉を失った。その時、狼牙の脳裏に昔の思い出がよぎった。

昔、自分が稽古に励んでいたモチベーションは親父に褒められるためだったな……と。褒められたいがために、本当に些細な言いつけでも律儀に守っていたな……とも。

「……ああ。頑張ったよ、黒子は。すごく偉い」

やや棒読み気味。しかし、先の事件でネジが数本飛んでしまった黒子の頭には十分。

「つふふへへ……。やっぱり給与は段違い……、ベーシックインカムとは違う……」

目の焦点をぼやけさせながら、だらしない笑みを浮かべる黒子。ベーシックインカムや給与というよりは生活保護をもらっている状態の彼女だが、気づいていないだけ幸せなのだろう。

（このまま狼牙君に永久就職したい……。永久就職!?)

き、気が早いっ！　まずは面接通過して、正社員になって……いや、派遣社員から正社員に昇級して……)

黒子の脳がピンクに染まっていく。今までは当主の仕事でいっぱいだったせいで恋愛方面の耐性が無いのが作用した。

（思い出してみれば狼牙君とは一緒のベッドで寝た事もある……枕営業……枕営業!?)　重要取引先ってこと……!?)　何の!?)

黒子が小学生並みの連想ゲームを始めだす頃、通学路の向こうから

柄鎖が合流してくる。

「狼牙様ごきげんよう」

「ああ、おはよう」

「え、あ、お、おおはようう…」

「黒子様もごきげんよう」

挙動不審気味ながらも挨拶を返す黒子に、綺麗なお辞儀を返す柄鎖。その時、柄鎖の髪から柑橘系の匂いが香る。

（シャンプーの匂い。…あれ、どこかで嗅いだことのあるような。確か狼牙君も…？ ……!?!）

閃き一閃。

（狼牙と柄鎖＋同じシャンプーの匂い

Ⅱ 同居 アライアンス 共寝 業務提携 同衾 M & A ）

直後、黒子の脳が破壊された。

「それでは黒子様、失礼いたします」

「またな」

「…あつえ？」

呆けた声を別れの言葉と解釈した狼牙と柄鎖は、黒子を置いて去っていった。

やや遅れて黒子は膝と手を地面につき、呟く。

「派遣、切り…?…」

彼女の受難はまだまだ続く。

ちなみに、狼牙と柄鎖から同じ匂いがするのは、昨日街に出かけたついでに柄鎖が狼牙にシャンプーとコンディショナーをプレゼントしたからである。

幕間

1. 夢毒

1年B組 雷いかづち 雷夢らいむ

蠱毒こじく。それは中国に古くから伝わる呪いまじなの一種。

百足ムカデ、蜘蛛クモ、蛇ヘビ、蠍サソリ、蜂ハチ、蛾ガ、何でも良い。毒を持つ虫たちを一つの容器に閉じ込める。そうすると、虫たちは中で喰い合う。

結果生き残った一匹には神霊が宿るとされ、その毒によって人を害すと、死んだ後も苦しむと言い伝えられている。

生き残ったのが百足ムカデの場合、百足毒サソリ。蠍サソリの場合、蠍毒の呪い。

例えばの話だ。蠱毒の容器の中に蜚ゴキブリが一匹放り込まれたらどうなるだろうか。毒どころか、糸も牙も針も、およそ他生物を害するに有利な器官をもたない蜚ゴキブリが。しかも足がもげているという欠陥付きで。

真っ先に命を落とすだろう。真っ先でないにしろ、まず最後の一匹になる事は無い。

蠱毒こじくの虫は良いよな。死ぬんだから。

蠱毒こじくの虫は賢いよな。殺すんだから。



目が覚める。今日は夢を見なかった。思考が無に帰す時だけが唯一安寧を享受できる。しかし、こうして意識が覚醒してしまえば、暗い感情が沸騰してくる。

沸騰した思いは蒸気にして逃がしてやらなければ、破裂してしまう。私は服を脱ぎ、鏡の前に立った。鏡に映るのは傷痕だらけの体躯。その内の一つ、腹部の火傷痕に触れる。

2013年5月18日。五女が私をアイロン台にして遊んだ痕。

腕の裂傷に触れる。

2017年8月2日。八男が私を素能エレメントの実験台にした痕。腹の痣に触れる。

2015年10月17日。四男が私をサンドバックにした痕。

傷痕に触れるたび、その原因となった出来事が鮮明に蘇る。暗い思いはますます募るが、加害者と被害者を頭の中で入れ替えて妄想する。

「……ひひっ…」

そうすることで溢れんばかりの想いが悦にすり替わり、どうにか発狂せずに済むのだ。日課を終えた私は、寝間着代わりにしていたジャージを着なおし、家を出た。

◇

午前9時頃。学校に到着すると、校庭には誰もいない。他の生徒は授業を受けているのだからそれも当然。

だからこそ私はこの時間に登校する。校庭を一人で使えるから。

校庭の真ん中で、仮想敵を思い浮かべながら、シャドーを繰り返す。そうしていると、校舎の中から、少なくとも視線が私に降り注いだ。しかし、すぐに興味を失ったように視線が外れていく。私が授業をサボるのは毎日の事。向こうも私も慣れたものだ。

しばらく私が稽古を行っていると、校舎から一人の壮年男性——国語の教師がこちらに歩み寄って来た。

「おーい、雷いかづち！」

自分を呼ぶ声に顔を顰めつつも、一応返事をする。

「……何だ？」

「敬語を使え、敬語を。一応俺のが年上だぞ」

「必要が無い」

「まったく……狼森おいのもりの奴は敬語を使い始めたってのに。雷は相変わ

らずだな。

そんな事より、せつかく学校まで来るのにどうして出席しない？」

「必要が無い」

「このままじやまた留年するぞ。進学するためにも…」

「必要が無い」

「……そればかりだな。とはいえ、本当か？ ほら、こいつを書いてくれただろ」

国語の教師が一枚のプリントを見せびらかしてくる。

「これ一枚にポエムを書くだけで出席日数50日分だ。我ながらこの無茶を良く通したもんだよ、まったく。」

で、進学する必要が無いならどうしてこれを書いてくれたんだ？」
教師の問いかけに、私は即答できなかつた。少し言葉を詰まらせてから口を開く。

「…必要が無い、はず…」

「はず、か。そうだな…何か進学したい理由に心当たりはあるか？」

「無い」

「お、これは即答か。じゃあ留年したくない理由に心当たりは？」

「無い」

「ええ…こつちも即答？ ……ちよつと進めて、退学したくない理由に心当たりは？」

そう言われると、言葉に詰まってしまふ。

「……退学しても、問題無い、はず…」

「そうか…退学が嫌か。その理由まで分かれば良いんだがな」

したり顔で考える教師に、今度は毅然と言い放つ。

「問題無いはずだ」

「……はいはい、問題無い、はず」でございますよつと」

しようがないな、という顔を浮かべる教師に少しだけ腹を立てたが、無視して稽古を再開する。

「ああ、ところでお前が書いてくれたポエムなんだがな」

しかし、教師は私が聞いていようがいまいが関係無いといったように続ける。

「雷らしきが前面に出た、良い作品だと思うぞ。巧拙はともかく、作者の感情と人間性が伝わってくる。他の奴らもこんなを書いてくれれば面白いんだがなあ…。」

あいつら、妙に恥ずかしがって天気だとか風景だとかで小ぢんまりと纏めやがる」

無視して稽古を続ける。

「……なあ、雷。復讐は悪い事だと思うか？」

教師が話題を急に転換するが、無視して稽古を続ける。

「一般的には、復讐には生産性が無い」、とか、復讐をすれば、復讐の連鎖が止まらなくなる」とか言われるよな」

無視して稽古を続ける。

「先生個人としては復讐なんかするよりも、今を楽しく生きた方が良くと思うぞ。苦しい稽古なんかするより、上手い物食べて、好きな事やるんだ。なんなら他人に迷惑をかけなきや、法律を犯しても良い。家で酒でも飲んでみたらどうだ？ 酔うと結構気持ち良かったりするぞ？」

そこで私は稽古を中断し、教師の方を向く。

「雷はどう思う？ 復讐は悪い事だと思うか？ それとも良い事だと思うか？」

「どっちでもない」

「ふむ……そりやまたどうして？」

「復讐は行為。そして、人の行為に良いも悪いも無い。全ては自己満足だからだ。」

困っている人を助けるのも、騙すのも。怪我をしている人を治療するのも、さらに傷付けるも。頑張っている人を励ますのも、馬鹿にするのも。全ては自己満足だ。そうしたいからそうしている。

今、お前が私を気にかけるのもそうだろう」

「……雷の復讐も、自己満足か？」

その問いに、私は口角を上げる。

「自己満足？ ……違う。これは正義だ。あんなクズ共を生かして置いたら社会に害悪しかない。ゴミ掃除は公共の福祉だろう？ 根絶

やし…根絶やしだ。雑草むしる時みたいに…ひっひひひ…！」

「……」
いつの間にか垂れかけた涎よだれを啜すすり、乱れた呼吸を整える。そうして再び稽古を再開した。腰を落として、狼牙から習った正拳を構える、その間に教師が私のポエムに視線を落としていた。

「……なあ、足のもげた蜚ゴキブリは蠱毒を生き残れると思うか？」
「知るか」

言い終わるや否や、拳を突く。私の正拳は終点で衝撃波を伴い、周囲の空気を打ち震わした。

「きつと生き残るさ」

それきり、教師は校舎に戻っていった。

◇

時間は過ぎ、放課後。校庭が賑にぎわい始めると、私は校舎裏に移動する。校舎裏は狭いため可能な稽古の種類は少ないが、人がいないのが何より良い。

そして校舎裏にはいつも通り先客がいた。

「雷夢か」

狼牙は私が来たのを認めると、稽古を中断して私を注視する。私は狼牙の目の前で構え、正拳を披露した。

狼牙は90。回り込む。

「もう一回」

正拳突き。狼牙はもう一度90。回り込む。

「後ろ足の蹴りが弱い」

言われた部分を修正し、再び突く。

「突かない方の腕が力みすぎだ。力を抜いて肩を下げろ」

再び修正、突く。それは今までで一番の手ごたえだった。

「よし。俺の目から見て欠陥はなくなった。後はお前の体に合った

フォームに一人で修正すれば良い」

狼牙からお墨付きをもらった私はもう一度構える。そして少しだけ「不完全な」正拳突きを繰り出した。

「おい、腰のひねりが甘いぞ。……しばらくは様子を見た方が良さそうだな」

「分かった」

気づけば妙に落ち着いていた。最近はたまにこうだ。自分でも良くわからない行動を取る事がある。自己満足のために動いているのだらうという事は分かるが、その自己満足がなんなのか言語化出来ないのがモヤモヤする。

そうして私が内省していると、狼牙が渋い顔で私の髪を見てくる。

「前も言ったが、髪をもう少し整えてみたらどうだ？ お前も黒子と同じで顔が良いんだから」

言われて、自分の跳ねた髪に指を通す。途中で引っ掛かったため、指に力を入れて無理やりほぐす。

「ちよつと待て。無理やりやると髪が痛む」

私の腕を掴む狼牙。奴はカバンから目の粗い櫛を取り出して私の髪に触れる。

「……ビツクリするぐらい枝毛ばっかりだな」

狼牙はぼやきながら、私の髪を梳かす。……時間がかかりそうだ。

しかし、私は動けなかった。「必要が無い」と断じて稽古を再開しなかった。

やはりモヤモヤする。今も、さつき国語の教師と話していた時も。復讐のためには必要にない時間だ。日夜、逆襲の時を妄想し、その時を心待ちにしているはずなのに、それとは関係の無い時間を過ごす自分がいる。波の無い平凡な時を過ごす自分が。

……悪くはない。

「終わったぞ。焼け石に水だが、マシになった」

手を髪の上にかざすと、確かにはねっ毛が無くなっている。しかし、かざした手に水滴が当たった。

「雨か…。夜まで降らない予報だったが」

狼牙も水気を感じたようで、荷物の中から折り畳み傘を取り出す。一方で空高くから電荷を感じた私は、校庭の方へと歩き出した。

「おい、濡れると髪が痛みやすくなるぞ」

狼牙の声も無視して、荷電に導かれるまま足を進める。雨で校庭から校舎に避難する生徒たちとは反対に、私は校庭の真ん中に立った。

「雷夢、傘も差さずに何やって…」

「どけ。怪我するぞ」

近くに寄ってきた狼牙を腕で押して、無理やり退かせる。その頃には校庭から他の生徒がいなくなっていた。代わりに保健室から保険医が顔を覗かせる。

「……また無茶するつもりかい」

答えない。雨に目を細めながら空を見上げる。

「狼牙君、もう少し離れた方が良い。というか校舎に避難した方が良い」

「は、はい…」

珍しく真剣な保険医に狼牙も大人しく校舎に避難していった。

目を閉じると、死角だらけの視覚が消える。素能エレメントの制御に集中すると、ざあざあ降りの雨に支配されていた聴覚も解放され、音が消える。

嗅覚と味覚はすでに働いていない。いつ失ったかも忘れた。数分経つと触覚すら消え、体に当たる雨の感覚も消える。

感じるのは積乱雲の電荷だけ。

チリ、と髪が逆立った。

稲光 打雷

電子が私の体を通過しようとした瞬間、素能で堰せき止める。

遅れて雷鳴

私は膨大な電圧を携え、校庭で仁王立ちしていた。

「……………kっひひひ…」

久しぶりに心の底から、気持ち良く笑えそうだ。

「ははhahahaははhahaはhahahaハハ!!!」

景気よく放電する。私の体から雷光が伸び、校舎の壁に触れて地面へとアースされる。

準備は整った。

ショートした脳で考えられるのは、復讐せいぎの事だけ。

◇

数日後、私は実家こえために帰ってきていた。大広間に広がるのは絵画に出てきそうな大きなテーブル。そこには9人分の料理が用意されており、私の他に8人の塵芥クズが席に着いている。

今日は雷家こえために家族クズが集まって、食事エサを喰らう悪趣味な日だ。

「ねえ、前から思ってたんだけど…この会合もう止めにしなくい？意味無いでしょ、兄弟姉妹で顔合わせるなんて…」

「俺だつてめんどくせえよ。いちいち実家に戻らなきゃなんねえのはよオ。けど、親父がそう強制するんだからしょうがねえじゃねえか」

「ま、実家のシェフが作る料理は美味いから俺は気にしないけど」

「ええ、美味しい？この料理。別に普通でしょ」

「テメエも実家を出て不味い料理を喰えば分かる」

家族クズの一人が皿ごと私のスープを奪っていく。

「ほんとそれ。外の料理は不味いつたらありやしない」

もう一人が私の料理皿からメインの海老を奪っていった。

この家じゃ日常だ。私は脚のもげた蜚ゴキブリなのだから。奪うのは当然、奪われるのは当たり前。

「あ！ 海老！ 俺が狙って…」

「何？」

「……別に、何でもない」

「ぷっ、ザツコ。睨まれただけでビビってるの」

煽られた家族クズの一人が机を叩いた。異能者シンギュラリテイの力で叩かれた机は
いともたやすく崩壊。机の上に乗っていた料理が散乱する。

「ああ!? 喧嘩打って…グゲツ!？」

隣にいたもう一人が机を叩いたクズの脇腹を突く。指一本、しかし
的確に急所を抜いた。

「料理、どうしてくれるの？」

「いや…それは…ツぐぶツ！」

言い淀むクズの顔が凹む。鼻からは血が流れだしていた。

「頭に上った血を鼻から抜いてあげたわ。感謝なさい」

「……………グふツ！」

高飛車なクズが黙っているクズを再度殴る。

「返事」

「……ありがとうございます」

高飛車なクズは愉悦の表情を浮かべていた。

私の大嫌いな表情だ。自分より弱い者を虐げ、自らの優越を悟る最
低最悪の表情。何度となく見せられた。

「あーあ、汚れちゃった床を掃除しないと」

その声が聞こえた瞬間、私は後ろから椅子ごと蹴り飛ばされた。さ
れるがままに料理で汚れた床に突っ伏す。

少しだけ顔を上げて私を蹴ったクズを見ると、そいつもやはり愉悦
の表情を浮かべていた。

「はい雑巾。さっさと床拭けよ」

私は蹴られ、さつき殴られたクズのほうに飛ばされる。そいつは悔
しそうな顔をしていたが、自分より弱い獲物を前にして、やはり愉悦
の表情を浮かべた。

「クソが…！ オラ！ ちゃんと綺麗にしやがれ！」

「私も混ぜてよく。こんな大きい雑巾初めて。バスタオル流用かな

？」

「乱暴にするな。汚れが飛び散る」

憂さを晴らすように私を足蹴にするクズ。参加するクズ。野次を飛ばすクズ。それを見て笑うクズ。クズ、クズ、クズ、クズ、クズ、クズ。

雷家は一族の中で最も強い者が当主となる。それが例え10歳のガキだとしてもだ。強ければ一族の舵を取れてしまう。バカげたシテムだ。仮に10歳のガキが当主になったとして、組織のリーダーが務まるはずもないだろうに。

当主という一つしかない席を奪い合う家族たちは皆殺伐としていた。そこに優しさや思いやりなどと言う言葉は存在しない。困っている者がいればそこに付け込み搾取する。傷ついている者がいれば、塩を塗り込み悪化させる。雷家ではそれが「善」であり、「正義」だった。

こんな家はさつさと滅べば良い、誰か滅ぼしてくれ。そう思い続けて3年。私の願いが叶う事は無かった。

だから自分で叶える事に決めた。

◇

だだっ広い自分の部屋。家具はほとんど無い。今日のために用意しておいた道具が入った段ボールとクローゼットの他に唯一ある姿見の前に立つ。

料理で汚れたジャージを脱げば、小さな体躯に刻まれた無数の傷痕が良く見える。そのうちの一つ、全身に広がる凍瘡に触れる。

2011年12月31日。六男が私を裸で屋敷の外に追い出し、無様に生に縋る姿を楽しんだ痕。

背中への火傷痕に触れる。

2013年3月9日。三女が私に薬品をかけ、肉を焼いた痕。体を横断する雷撃傷に触れる。

2012年5月4日。長兄が自分と同じ素能を持った私の力を確認するために、電撃を浴びせた痕。

……大丈夫。思い出せる。全て。

私は体に広がる無数の傷跡に一つずつ触れていく。

1時間経つただろうか。ようやく全ての傷に触る事ができた。そこでノックの音が響く。

「雷夢お嬢様。入室してもよろしいでしょうか」

「入れ」

私の言葉で執事が一人、入室してくる。こいつは昔から私の世話役を買って出る、奇妙な奴だ。クズ共に痛めつけられる私の世話係など、面倒でしかないだろうに。

「身だしなみを整えさせていただいても？」

「好きにしろ」

執事は丁寧に料理の汁で汚れた私の体や髪を拭き、綺麗に服を着せてくれる。とはいってもジャージだが。

その間、私は鏡に映る自分の顔を見ていた。

——とても楽しそうだ。

そうしていると、いつの間にか支度が終わっている。

「行ってらっしゃいませ」

執事の言葉に返事をする事はない。部屋の外に出て、扉を閉めた。

2. 玩具

1人目 五女

スチームアイロンを手に廊下を歩く。そして目当ての部屋の扉を蹴破った。

「誰よ！…なに雷夢？ 雑魚がいきなり扉蹴り飛ばして何のつもり〜？」

扉を破ったのが私であることを知ったクズは途端に高圧的な表情を浮かべる。私は無視して、部屋の入り口付近にあるコンセントにスチームアイロンのプラグを刺した。

「へえ〜無視？ いつからそんなに偉くなったのかしら？」

そうね〜…また昔みたいにアイロン台にでもされてみれば、考えも変わるかも…ねッ!!」

クズの腕が一瞬にして伸び、私の方へと襲い掛かってくる。

このクズの素能は「^{イレイス}護謨」。体を自由自在に伸ばせ、また弾力を持ったため、折り曲げ自在、だったか。

伸びてきた腕を弾く。それと同時に踏み込み、一気に間合いを詰めた。

「なっ…！ つぐー！」

目を剥くクズの腹を殴った。しかし、柔らかい感触が拳に伝わってくる。弾力を持つ体に打撃は今一つか。

「アンタ、片目が見えないから距離感が掴めないはずじゃ…!？」

「それはもう克服した」

だから千切った。腕をつまみ、皮膚を。

「ああああああああああつツツツ!!」

それだけでクズは実に心地の良い声を上げる。どくどくと頭から変な汗が出るのを知覚した。

今までに感じた事のない感覚に浸りながら、皮を立て続けに千切る。クズが叫ぶ。脳から汗が出る。

気づけば、クズの右腕が肉むき出しになっていた。…ああ、いけ

2人目 六男

「おい、雷夢！」

私が次の獲物を探していると、向こうから鴨カモがやってきた。

「くそッ、姉貴の野郎、俺に恥かかせやがって…！ テメエで憂さ晴らししてやるよ！」

私が近寄っていくと、何を勘違いしたのか獲物クズが拳を振り上げる。私はそれが振り下ろされるより先に、クズの腹に拳をめり込ませた。

「つゲホッ!! かは…っ！ て、んメエ…何してやがる…！ ぜつてえ殺す！」

クズにさつきまでの油断は無く、本気で私に向かってきた。しかし、あまりにも遅い。軽々と攻撃を避ける。

「くそ…っ！ 何で避けられる！ 片目の欠陥品が…！ 死ねやあ!!」

またしても大振り。私はそれをかいくぐり、クズの肝臓レバーに掌底を叩き込む。

「うぐッ…！」

それだけでクズは打たれた所を押さえて、膝を付く。

「なんで…、俺の硬化カリングで防げねえ…？」

こいつの素能、硬化は体を硬化することが出来る。発動すれば確かに固い。硬度なら柄鎖こんごうふえの金剛不壊にも匹敵するだろう。しかし、こいつは重要器官までは硬化できない。

だから私は衝撃を離れた所に伝える奥義「一通いっつう」で肝臓にダメージをプレゼントしてやった。

「お前の欠陥素能ぐらい、いくらでも破る方法はある」

「なら……やってみろやア!!」

突撃してきたクズを真っ向から膝で蹴り上げる。硬化されてない脳を揺らされたクズは、一瞬気を失ったらしい。

私はその間に構える。最近体に染みついて来た正拳の構え。

「二連掌」

「つ……おげえええええ!!」

正拳と無勁むけいの合わせ技。クズはその場に崩れ落ち、悶絶する。

良い声だ。ふわふわと精神が定まらない。

「……訂正、硬度も柄鎖以下だな」

無意識に罵倒を垂れ流しながら、クズの腕を掴む。一息にへし折った。

「ぐがああああああ!!」

遅れて掴んでいた腕が硬化する。

「発動が遅い。そんなんで良く威張れるな」

両手両足を折るとして、後3回。

ベキッ!

「あああああああツツツ!!!」

後2回。

数が減る事を、これほどまでに惜しいと思った事は今までになかった。



3人目 九女

私は両手両足の折れたクズを引きずり、庭に向かっていた。その途中、何人かの使用人ハ、エとすれ違う。この程度は雷家こえだめの日常だ。使用人ハ、エも会釈をするだけで何も言っていない。

廊下の角を曲がると、また一人、使用人の格好をしたクズが。会釈をするそいつに近寄り、腹に一撃入れた。

「あぼ……ッ!?!」

殴られたクズはみるみるうちに姿を変え、大柄な男の姿から小柄な女の姿に。

「なん、で……!? 私の『変体』は……形だけじゃなくて、匂いまで変えられる……完璧な変装なのに……?」

「匂いの前に歩き方の癖を変えろ」

追加の獲物。髪の毛を掴み、先のクズと一緒に引きずる。

「痛い……! 髪、止め……っ!」

鴨を絞めたかと思えば、葱も生えていた。鴨葱だ。

庭に出て、何に使っているのか分からないプレハブの大きな冷蔵庫の扉を開ける。すると、中から冷気が吹きすさび、その寒さに思わず身震いした。

そこにクズ二人を放り込む。変身するクズは抵抗したので、固くなるクズと同様に四肢をへし折ってやった。

それから、近くにある水道でバケツに水をくむ。

「こ、こいつは姉さんを、虐めてたけども! わ、私は何にもしてないでしょ……!? 私が姉さんを傷つけたことがあった!?!」

「あつた。お前の隣にいるクズに変身して私をサンドバックにしたのが3回。その他もろもろ、他のクズに変身したのを合わせて計23回」

「なんでバレて……!」

「姿形が似せても癖が違う。……さつきも言ったと思うが?」

バケツになみなみと水を溜め終え、プレハブ冷蔵庫の中に入る。中はやはり寒い。敷設されている温度計を見ると、-1°Cと表示されていた。

「デメエ……! 早く、ここから出しやがれ! うっ……」

動けもしないの口だけは良く回るクズに水をかける。その後、小さいクズの前に立つ。

「ばっ……! こんな所で水なんか……! うぷっ……!」

そいつにも水をかけ、空のバケツを持って、私だけがプレハブ冷蔵庫の外に出る。

「ま、待って……! こ、これ……本当に……し、死ぬ……!」

「お、おい……! ほ、本気、で……! こんな、こととして……! ただで、

す、す、すむと……！」

プレハブ冷蔵庫から聞こえる声は震えていた。

私は入り口の扉を閉め、プレハブ冷蔵庫の前に座り込む。

「ね、ねねえ、さん……！ あ、あ、謝る、から……！ な、何で、も……何、でも、するから……！ たつ、た、助け、て……！」

見なくて良い。クズ共の感じている苦痛は見ずとも分かる。

「お、お、おい……っ！ き、きき、聞いて、て、んのか……！！ こ、殺す……っ！ た、助け、ないと……っ！ マジにこ、殺す……っ！」

大晦日、裸で外に放り出された事があるから。

散々殴打された体は、伏せたまま動くことも出来ない。雪のベッドに吹雪の冷房。

「わ、分か、った……！ お、俺が、おれ、が、わる、かった……！ たす、たすけ、助けて……く、れ……っ！」

寒さは全てを凍てつかせる。体、そして心さえも。

「たす、た、すけて……」

「た、たた、す、け……て……」

だから、見ずとも良い。

声だけで十分だ。

「……」

「……」

声がしなくなつた。それをきっかけに、脳が幸せになる。ごろりとその場で横たわり、快樂の余韻に浸る。

しばらくして刺激が物足りなくなつた脳は、新たな刺激を求めて、体を動かし始めた。その時、地面に広がる草が手に触れる。

草。草むしり。根絶やし。

……何か、忘れていたような気がする。

まあ、どうでも良い事だろう。

4人目 四男

「…あ？ こんなところで何やってんだ？ 雷夢」

私がプレハブ小屋の前で立ち上がると、ちようどそこに別のクズが。

ああ、運が良い。

「クズの冷凍実験」

私はプレハブ冷蔵庫の扉を開け、中から冷凍クズを二つ取り出した。常温クズの前に放る。

「…：はあ、何だア？ 底辺のゴミが、ちよつと位の高いゴミを虐めて悦に浸ってるだけかよ。…何かム力つくなあ、お前が調子に乗ってるのは。またボロ雑巾にしてやるよ。この前学園でやったみたいにな」
こつちに近寄つて来るクズに対して、私は構えた。

「はあくく…：バカが。俺の素能は^{アセクト}“吸収”。受けた衝撃、ダメージを無効化出来る。仮にラッキーパーチ貰ったとしても、無効化できる。これが意味することが分からねえのか？ 分からないから底辺のゴミなんだよ、お前は」

「ダメージを吸収できるからって、吸収し続けられる訳じゃない」

「は？ 何わけわかんない事言ってるんだ？ …：もういい、さっさと死ね」

クズが殴りかかって来る。私はそれを避け、懐に飛び込んだ。そうすればもう至近距离。そこからはずつと私のターン。

無勁正拳から二連掌・寸勁まで密着打撃混成接続。

「ぐ、が…：あつ…：…！」

最後の一撃が、ダメージを吸収しすぎたクズの体をくの字に折る。

「もうキャパオーバーか」

「こ、の…：っ！」

クズの打撃をわざと喰らう。しかし、素能を使いすぎて身体能力強

化の元となる異能キユリアを切らした異能者シンギユラリテイの攻撃など、毛ほども痛くない。「くそ、が…っ!!」

その後も、素の身体能力で私を殴るクズだが、撫でられているに等しい。

「殴るってのは」

「おぐツ!!」

クズの鳩尾に拳をめり込ませる。

「こうやるんじゃないのか?」

膝を付くクズの髪を引っ張り、こつちを向かせる。

「後627発。溜まったツケを返させてもらう」

10 発目

拳が肉にめり込む感触が良い。叫び声もだ。

自分の手で人を下すのは楽しい。

30 発目

顔は駄目だ。相手の意識を飛ばしかけてしまう。腹、腕、脚。このクズもそうしてたな。

それに殴る場所によって叫び声が変わるのも良い。…嬉しい。

100 発目

反応が悪くなってきた。…面白くない、

もっと叫べ、泣け、喚け。

200 発目

何も言わなくなった。

…まあいい。まだあと4つ玩具があるんだ。これはもういらない。

◇

5 つ目 八男

次の玩具がある部屋を開く。視界には誰もいない。しかし、第二の目はしっかりと玩具を捉えていた。

「十爪殺！^{じゅうそうごつ}」

上からの攻撃。

「弧月蹴・落星」

「げぼぐ…ッ！」

黒子の弧月閃からヒントを得た技。玩具を地面に叩きつける。

「こいつは練習し始めて5日目の技。つまり、お前はそれほど取るに足らないって事だ」

そのまま、執拗に腹を蹴り続ける。

動かなくなってきたところで、ようやく止めた。私は玩具の手を取り、爪で皮膚を裂いていく。

「うあ…っ！」

「^{フル}虫食^{ール}」、だったか？ 相手に付けた傷を大きく切り開く事ができる。それで皮を剥がれた事があった」

「…まっ、まさか…！」

丸くなってだんまりだった玩具が急に喚き始める。だがそれで良い。その反応こそ、私が見たかったものだ。

「デイスカバリーチャンネルで剥ぎ方は予習済みだ」

「や、やつ、止め…っ！ つあああああああああああ!!!」

皮膚の裂け目に指を突っ込み、皮を剥がす。しかし、筋組織との癒着が強く、上手く剥げない。

「所見じゃ動画のように上手くいかないか。それともウサギやシカより人の皮の方が剥ぎにくいのもかもしれない」

気分が良い。気分が良いと言葉が溢れて止まらない。私以外の奴は口数が多いと思っていたが、私の口数が少なかつただけなのだ。今理解した。

皮の剥がれる音、玩具の鳴き声、飛び散る血。

ああ、嬉しい。つくづく私は今までの人生を損していたんだな。

6つ目 三女

次の玩具。玩具箱の中は真っ暗だった。次の玩具が持つ素能を考えれば納得だ。

とはいえ、光が無くとも私の第二の目は玩具箱の様子を把握してくれる。玩具が閃光弾のピンを抜いた。それと同時に私は床を蹴る。玩具の後ろで光が爆ぜた。

「……がハッ!!」

この玩具の素能は「影^{スケア}」。影を実体化させ、相手を殺傷する。影の濃さによって強度や速度、射程が変わるため、暗い部屋で強力な光源を作ったのだろう。

おかげで右肩、左腕、右腿、左わき腹を貫かれた。しかし、血はほとんど出ていない。アドレナリンの賜物。

「げほっ! ぐほっ! カハッ……!」

「……ずっと不思議なんだ。どうしてお前らは腹を殴られた程度で膝を付く? 膝やくるぶしの腱を切られたわけでもないのに」

答えは期待してない。気分が良い時に出るただの独り言だ。玩具を足蹴にしながら、腰に巻いたポーチから試験管を取り出す。玩具の抵抗で割れていなくて良かった。

「理科の実験の時間。中学も不登校だったから、これが初めてだ。心が躍る」

ゴム手袋と保護メガネとマスクを付ける。

「ちゃんと準備はしないと。実験は安全が第一らしい」

玩具にも同様の装備を無理やり付けさせる。それから試験管のガラス蓋を開け、中に入っている無色の液体を玩具にぶちまけた。

始めは何かで濡れたという程度の反応を返す玩具。しかし、次第に顔を歪め始めた。

「いつ…だい…!?!」

「塩酸。濃度は16%。お前が私にかけたのとどっちが濃い?」

「いつ、いたゝい…!」

「大げさな。そんなに痛くはない。ソースは私。

……次だ」

続けて試験管を取り出し、塩酸をかけた場所とは別の場所にぶちまける。

「硝酸。これも痛さで言えば、塩酸と似たり寄ったり」

「あああああ! 水…っ!」

薬品を洗い流したいのか、水を求める玩具。私はもう一つ試験管を取り出し、塩酸と同じ場所に撒く。

「水酸化ナトリウム。塩酸と中和して水が出来るらしい。……いや、塩も同時に生成されるから食塩水か?」

化学ってのは偉大だな。人の肌を溶かす危険物がお前の望んでいるものに変身する」

上機嫌だと口が良く回る。前座が終わって、実験本番ともなればなおさら。

「次は本命の硫酸。希硫酸、濃硫酸、熱濃硫酸……わざわざ三つ用意してやった。濃硫酸しか用意しなかったお前と違ってサービス精神旺盛だ。ちゃんとレビューしろよ?」

「ひ……っ!」

試験管を傾けると、粘度の高い液体がゆっくりと零れる。

化学反応で発生する熱と蒸気。肌が焼ける音、声帯を最大限震わした鳴き声。

まさに福音だ。

◇

7つ目 次男

楽しい楽しい実験を終えて、部屋を出る。マスクや保護メガネを廊下に捨て、次の玩具を求めて彷徨い歩く。そこで、実験で遊んだ玩具から受けた傷が塞がり始めているのに気づいた。

1時間ぐらいか。稽古以外でここまで熱中したのは初めてだ。

実験内容を思い出して良い気持ちに浸っていると、次の目的地に着いた。

玩具は後二つか。名残惜しいとは、きっとこの感情を言うのだろう。

そんな心持ちで扉を蹴破る。すると、部屋の中には神妙な面持ちの玩具がいた。

「……」

他の玩具と違って、今回の玩具は無駄に鳴かない。反応がどうあれ、私がやる事はもう決まっているのだが。

一発殴る。

「ぐっ……！」

抵抗しない。もう一発。

「がっ……！」

やはり抵抗しない。やりやすくて良い。そのまま続ける。

「がはっ……！」

……愉しくない。不思議だ。人を殴るのは天上に昇る至福だったはずなのに。

「なぜ抵抗しない。鳴かない。叫ばない」

「……私は、君に対して酷い事をしてしまった。魔が差した……というはおこがましいか。とにかく許されない事をした。だから、甘んじて罰を受け入れているだけだ」

玩具がどうでも良い事をのたまう。抵抗しない理由に答えれば良いものを。

……待て、私はどうしてこんな質問をした？ ほとんど無意識に口から零れたものだが……

顎に手を当てて、少し考える。内省は得意だ。他人がおしやべりし

ている間、私は自分と話すしかなかったのだから。

………そうか。人を殴る事が嬉しいのではない。殴った結果、玩具が苦しむ。それが嬉しいのだ。

しかし、この玩具は泣きもしなければ叫びもしない。だから、殴つてもつまらない。

楽しみにしていた玩具が欠陥品だった。この事実には私は落胆を隠せなかった。最後の玩具に望みを託すべく、私は踵きびすを返そうとした。しかし、そこで踏みとどまる。

……いや、待て。

玩具に欠陥があるんじゃない。もしかして、私の遊び方が間違っているのか？ 道具にはそれぞれ適した使い方があある。ならば玩具にもそれぞれ適した遊び方があるのは道理だ。

問題はこの玩具の正しい遊び方をどう見つけるか、だが…。

考えながらも、とりあえず手が動いてしまった。殴るという間違った遊び方を実行すると、玩具が床に倒れ、胸ポケットから財布が落ちた。そして、その財布から一枚の写真が顔を覗かせる。

なんとなく気になった私は、その写真を財布から抜き取った。

玩具の家族写真。子供は二人いる。

「ロリコン、それに加えて近親相姦趣味を持っていても家庭を築けるものなんだな」

「っ……っ！」

私の率直な感想に、玩具が顔を曇らせた。

…これか？ 今、私はこの玩具の正しい遊び方に近付いているような気がする。

「ちゃんと勃つたのか？ 奥さんを窒息死させなかったか？」

しかし、続く私の言葉に神妙な表情を浮かべるものの、私の望む反応はしない玩具。

間違いだったか、と思い直し、写真を放り捨てる。

その時、玩具が安堵したのを見逃さなかった。放り捨てた写真を空中で再び掴む。

安堵とは恐怖の反対。

つまり、この写真が恐怖の元——つまり玩具の説明書というわけだ。

私は財布を床から拾い上げ、保険証と運転免許証を取り出す。その二つに記載されている住所に相違が無い事を確認し、保険証をポケットに押し込んだ。

「な、何を……」

「住所を押さえた」

「……ま、まさか……っ！」

玩具が血相を変える。ビンゴ。

「か、家族に手を出す気か……!？」

「だったらどうする？」

「妻や子供には何の罪もないだろう!？」

「だったら私には何か罪があったか？」

「………それ、は……」

「しいて言うなら、この家に産まれてきたのが不幸だったというぐらいか。

お前の妻も子も、お前と結婚し、お前の元に産まれて来たことが不幸だった。ただそれだけ……違うか？」

膝を折り、その場にうずくまる玩具。

力を振るうだけでは得られない趣……良い玩具だ。欠陥品と思っ
てしまったのは訂正しなければいけない。

私も膝を付き、玩具の耳元に顔を寄せる。

「住処を変えても無駄だ、必ず探し出す。…震えて眠れ」

そう囁いてから髪を掴み、無理やりこちらを向かせる。

絶望 悲哀

ぐるんと意識が一周したかと思えば、たまらない幸福感に包まれる。意識が安定してくると、不思議な満足感、それと幸福のピークを過ぎてしまったという僅かな寂寥感を感じるように。

先人はこの気持ちをも「侘び寂び」と表したに違いない。

8つ目 長男

ああ、次が最後の玩具か。

一抹の寂しさを覚えながら足を進めていると、前から玩具が歩いて来た。配送サービスとは気が利く。

「随分と暴れているようだな」

この玩具の遊び方は……無力化してから考えるか。

一気に間合いを詰め、正拳を放つ。しかし、その拳は玩具に止められてしまった。予想だにしない現実には、私は目を剥く。

「自分からわざわざ死にに来るか。やはりゴミの思考は解せんな」

瞬間、玩具の体から電子がリレー上に流れ込んでくる。私はその流れを変え、皮膚表面を通らせ外に放電。

「……ほう、驚いたぞ。電撃の出力はゴミでも、操作はできるようになったのか」

うるさい玩具だ。今の私は自分の身に起こった不思議に考える事で精いっぱいだというのに。

「私の電撃ヴォルトを無効化したのは誉めてやろう。とはいえ、体術で勝てなければ何の意味もないが。さっきの突き、蚊が止まるかと思ったぞ」

さっきの突き。……どうして私は「手加減」をした？ 手加減をする必要はどこにも無いはずなのに。

「さっさとくたばれ」

蚊が止まりそうな玩具の攻撃をいなしながら、考える。

…ほら、今も。手を出せばクリーンヒットする隙が見えているのに、どうして私は手を出さない？ さっさと無力化して遊ぶのが効率的だろうに。

「受けはそこそこ上手いようだな。面倒な」

分からない。分からないが、ひとまずは流れに従う。きっと私の無

意識が体に手加減させているのだ。こういう時、無意識に任せておけば案外悪いようにはならない。

……ああ、それにしても浅い攻めだ。触れれば即K.Oの素能持ちとはいえ、もう少し近接戦闘技術を磨けなかったのか。

「…………この程度か」

私の呟きに玩具が顔を歪める。

「もういい——死ね」

見え見えのテレフオンパンチ。——反撃一閃。

私の拳が玩具の顔にめり込んでいた。

「ぶぐ…っ！…く、くそ…っ！」

鼻を押さえて悔しがる玩具。上がる口角。

……ああ、そういう事か。ようやく分かったよ、私の無意識。察しが悪くて悪いな。

「素能だよりの雑魚、か…」

私がそう言うと、玩具は顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけてくる。

「たまたま当たったラッキーパンチでイキがりやがって…！二度はないっ！」

怒りをむき出しにして殴りかかって来る玩具を見ると、何故か愉快的な気持ちになって来る。

こちらからも踏み込み、懐に飛び込む。

「この…っ！」

密着する私にイラつき、引きはがそうとしてくる。その手をのらりくらりと躲しながら、ワザとらしくあくびをして見せる。

すると、玩具は額に血管を浮べていた。

なるほど、自分の身の丈を超えて調子に乗っている奴をバカにするのは嬉しい。柄鎖つかさがそうするのも頷ける。

「舐めるのも…いい加減にしろっ!!」

「分かった」

寸勁。玩具の心臓部分へと的確に繰り出す。

「う……………っ……………あ……………ッ！」

その一撃は玩具の心臓を僅かに停止させる。血液が止まり、酸素の供給が止まった体は当然動きが鈍くなる。その隙に玩具を組み伏せた。

潰れたカエルの様な玩具目掛けて足を振り上げる。そのまま手を踏みつけ、踏みつけ、踏みつけ。グチャグチャにへし折った。

「ぐッ！ ツアッ！ ぐあああああッ!!!」

調子に乗っている奴をバカにするのは嬉しい。

けど、這いつくばる弱者を踏みにじる方がもつと嬉しい。

「今度、柄鎖に教えてやらないとな」

そう呟きながら足を振り上げ、反対の手もグチャグチャにへし折る。

「ギイイイイツツ!!!」

最後の玩具だ。少しずつ、少しずつ、ゆっくり愉しもう。

◇

最後の玩具がついに鳴かなくなった。

「もう……終わりか」

膨大な幸福感から一転、愉しみを失った喪失感が体を襲ってきた。

その心の穴を埋めるために今日の出来事を回想していると、拍手が

二人分聞こえてくる。

「素晴らしい……素晴らしいぞ、雷夢」

「ええ、本当に。正直、雷夢が生き残るとは思いませんでしたが」

手を鳴らしているのは両親おもちやたち。

「ふふふ、一つの容器に毒虫を閉じ込め、殺し合いをさせる……。真の強者を育てるには蠱毒の手法が一番だ」

「私は下馬評どおり長男が残ると思っていたんですけどねえ……。まさかアナタの予想が的中するとは」

「僕は穴が好きだな。わざわざ異能学園にも通わせたいがあつた

玩具で遊んでいた時は鮮烈な幸福感を得ていた。それが無くなっただけでこうも、寂しくなるものなのか。今は柔らかいベッドの上で安楽としているというのに。

昼間の快感が脳裏をよぎって止まない。ドクドクと心臓が脈を打つ。体全身が熱い。

しかし、ベッドからは動きたくない。今日はもう疲れた。今から玩具を探すのは億劫だ。おっくう

だから、私は代替手段を選んだ。

下腹部に手を伸ばし、ズボンの中に手を入れる。

おかずは今日の体験。

初めてするが、思ったより気持ち良い。じくじくと強い快感が脳を焼く。玩具で遊んだ記憶を頼りに悦を貪る。

「……………ふぐっ」

変な声が出た。体が意志に反して跳ねる。視界が白く染まっていく。

正常な意識を取り戻すと、再び虚無感が襲ってくる。

「……………」

その隙間を埋めるように、行為に淫した。

3. 安寧

気づけば昼。私が寝ているベッドは酷く濡れていた。

喉が渇く。シャワーを浴びるついでにシャワーヘッドから水分補給をした。

シャワーを終え、着替えを済ませると、扉がノックされる。

「ご当主様、入室してもよろしいでしょうか」

執事の声。

「入れ……………いや、待て。当主？」

私が違和感に気づくまでに入室を済ませた執事。そいつは丁寧に答える。

「はい。昨日、雷夢様が前当主を倒されました。ですので、雷家の掟に則り、雷夢様が当主となりました。」

つきましてはいかがでしたでしょうか。ご当主様は今後、雷家をどのように運営されますか？」

「興味ない。お前が好きにやれ」

「仰せのままに。…遅まきながらですが、朝食でございます」

執事が料理の乗ったワゴンを私の目の前まで動かす。そして、椅子すらない私の部屋に折り畳み式の椅子を敷設する。

執事が飲み物を用意する間、手持ち無沙汰な私。胸がぽっかりと空いたような喪失感はずいぶん相変わらずだ。

「……………はあ」

柄にもなくため息をつく。すると、食事の準備を終えた執事が口を開いた。

「本日お客様が来ておられます。きつとご当主様の暇つぶしになるかと」

執事はそれだけ言い残して、部屋を出て行ってしまった。



来客。^{おもちゃ}暇つぶしになるらしいそれを求めて、屋敷を歩き回る。すると玄関で運よく鉢合わせた。

「お前か!? 雷臥^{らいが}の兄貴をあんな目に合わせたのは!」

「つ…ね、ねえ…止めようよお…」

分家の玩具たち。それも強気なのと弱気なのが二つ。

「だったらなんだ」

「かたき討ちに決まってるだろ! 俺が相手だ! かかって来い!」

「だ、ダメだって…! 私達じゃ絶対勝てないよ…!」

「うるさい! こんなちっこいのに兄貴が負けるわけないだろ!

きつと何かズルい手を使われたに決まってる! まともによればこ

んな奴、俺でも倒せるさ! 喰らえっげgツ!」

口上が長い。今はインスタントに遊びたい気分なんだ。

「いっつ…! な、何がウツ!! ウグツ! アぐつ!」

吹っ飛んだ玩具を殴る、殴る、殴る。

しかし、この玩具は一方的に殴りつけても、私を睨み返してくる。

遊び方が面倒なタイプの玩具だ。今はインスタントに遊びたい気

分なんだよ。

だから、標的を変えた。強気な方から弱気な方に。きつと、こつち

の方が手軽に遊べる。

「ひっ…、ご、ごめんなさい…!」

「おいつ!! お、俺はともかく、そいつは関係ないだろ!? 殴るなら俺

にしる!」

強気な玩具が慌てる。

ああ、なるほど。この玩具は2つで1セットなのか。

弱気な玩具の頬をペシペシと平手で軽く叩く。痛くもない程度だ

ろうに、それだけで玩具は目じりから涙をあふれさせた。

他人の涙は良い。私を豊かにしてくれる。

そして他人の叫び声はもつと良い。

腕を振りかぶる。

「つ…! この、クスが!!」

しかし、強気な玩具の一言に手を止めた。そう呼ばれるのは心外だ。私が最も嫌う人種とひとくくりになんてはたまらない。

「……クズ？ 違う。クズってのは人を人とも思わず、弱い者を虐げ、怯える様を見て愉悦の表情を浮かべるような奴を指す。それこそ、お前らが慕ってるような兄貴のような奴をな。」

それにひきかえ、私のどこがクズだ？ 私の……わたし、の……」

どこがクズかって？

……全部？

痛い。頭にひびが入ったように。思わず頭を手で押さえる。

同時に浮遊感。無限に落下し続けるような……。

「……違う……ちがう、はずだ……」

私はクズではない。私がしてきた行為には全て正当な理由があるはず。

正義だ。あいつらは社会のダニ。それを掃除するのは福祉に値するはず。そう、根絶やしにしなければいけないのだ。

……だったらなぜ、あいつらは全員生きている？ なぜ駆除しなかった？

大義名分が一つ剥がれる。

復讐だ。あいつらが私にしてきたことをただやり返しただけ。そう、やられたからやり返しただけ。

……だったらなぜ、関係の無い家族や、分家の奴らに力を振るおうとした？

また、大義名分が一つ剥がれる。

それからも大義名分の装甲を纏おうとするが、どれも上手く接着してくれない。ボロボロと剥がれ落ちていく。

気づけば、門構えの前にある大きな噴水に着いていた。溜まってる水を覗き込むと、自分の顔が映し出される。

ひどく醜悪な笑顔。私がこの世で最も嫌いな愉悦のベゴオツ!!

水面に振り下ろした拳が噴水を破壊する。水が無秩序に放水され、私は濡れ鼠に。

「……………くっ…クククク…っ! ハハハハハハ…ッ!」

復讐、正義。その二枚の皮を? いただけで、私の本性はいともたやすく露見した。

ただのクズ。弱者を虐げ、苦しむ顔を見て悦に浸るただのクズだ。

「アツハハハハハハハハハッ!!」

蛙の子は蛙。

私も、所詮は雷家こえだめの人間か。

「ハハハハハハハハハッ!! ハハハ、ハハ、ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…ハ…」

ひとしきり笑い、息を吐ききった私は噴水に顔を突っ込んだ。

私の拳で壊れて水が抜けている噴水だが、呼吸器官を塞ぐ程度の水嵩みずかさはある。

クズを自覚したまま、のうのうと生きるぐらいなら死んだ方がマシだ。

意識が遠のいていく。

頭をよぎるのは、嫌な思い出ばかり。痛み、苦しみ、恐怖、怒り、悲しみ、憎しみ。

体が生を求めて、水面から顔を上げようとする。私は右腕で自分の顔を押さえつけた。

抵抗するな。大人しく死ね。あんな奴らと同類のクズでいたくない。

無に…帰った…方が…マシ……………。

本格的に気が遠のく。体もようやく抵抗を止めた。

ああ、やっと死ねる。

その時、嫌な思い出ばかりの走馬灯が少しだけ変わった。

執事、国語の教師、保険医、柄鎖、狼牙。

……最後に……会って……おき……たか

◇

「……………ゲホッ！ ガハッ！ ゴホッ、ゴホ…っ！」

突如、闇の中から意識が引き戻される。

気分は最悪だ。何もない黄泉よみから、嫌な事ばかりの現世に強制送還されたのだから。

「か、帰って来たっ…！」

声の方に視線を向けると、そこには涙を流している狼牙がいた。

「本当に……死んだかと……！」

この玩具の急所は私か。本当に死んだらどんな顔をするだろう。いや、死んだらその表情も見れない。いったいどうすれば。

——不思議と、そんな黒い考えは浮かんでこなかった。

「……………濡れ……るぞ……」

私に抱き着く狼牙を手で退けようとする。しかし、力が入らない。結局、私はされるがままだ。

「なん、で……ここに……」

「良かった……間に合って、良かった……」

狼牙は私の問いに答えず、泣くばかり。私は震える手を狼牙の背に回す。

「泣く、な……」

しかし、狼牙は泣き止んでくれない。

「もう……死なない……だから……泣く、な……」

そうは言ってもしばらくの間、狼牙は泣き止んでくれなかった。

◇

三途の川を往復した翌日。今の私は異能学園の校庭にいる。

復路を導いてくれた狼牙。最近の私の様子がおかしく、そんな折に実家に帰ったため、気になって様子を見に来たらしい。そして大きな門の外から、噴水に顔を突っ込んだまま動かない私を見つけた。そんな経緯だ。

「おーい、雷！」

稽古の最中、国語の教師の声が聞こえてくる。

「何だ？」

「敬語を使え、敬語を。相も変わらず稽古ばかりだな、雷は」

「こうしていないとクズになる」

「言葉のドッチボールは止めような？　もう少し会話の段階を踏んだ方が良いぞ」

「教室にも一度行ってみた。けど周りの玩具でどう遊ぶかばかり考える。……それは嫌だ」

「玩具って……そんな物、教室にあったか？」

「1クラスに25個。たっぷりある」

「25個、ねえ……。25人の間違いじゃないか？」

「単位なんかどうでも良いだろう」

「おー、荒んでる荒んでる」

そう言いながら、教師はベンチに腰かけた。私はその横に座る。

「何だ？ いつになく距離が近いぞ」

「相談がある」

「お前はいつも突然だな……。で、相談するのは何だ？」

「人はどうやって生きる？」

「……生物学的な事が聞きたいなら、生物の先生に聞いた方が良いでしょう？」

「違う。私以外の人は何を頼りに生きているのか、それが知りたい。」

昨日、死なないと約束してしまった。けど、私にはそれ以外に生きている意味を見いだせない。それは……空虚だ」

「ふーむ……。まあやっぱり娯楽じゃないか？ 人生、辛い事があつたとしても楽しい事をすれば気も紛れるつてもんだ。」

雷夢は何か楽しい事、無いのか？」

「人を虐げ、痛めつけ、苦しめる事」

「……………」

「けど、それはしたくない。クズでいたくない」

「……じゃあ、稽古は？ さつきもやってただろ？」

「稽古の最中は何も考えなくて済む。」

急ぐ社会人の足を折り、この後の予定に遅れさせたらどんな顔をするだろうか。あの親子の子供だけを切り裂いて殺したら、親はどんな顔をするだろうか。

そういう事を考えなくて済むからやっている」

「……………」

「そもそも、過剰な娯楽はいらない。過ぎた娯楽の後には必ず虚無感が襲ってくる。」

脳を焼くような快樂も、天上の幸福も、涎が出るような愉悅もいらない。

代わりに夜も眠れない怒りも、頭からこびりついて離れない憎しみも、無限に落ち続けるような絶望もいらない。

……安寧で居たい」

「おつ、それじゃないか？ 安寧」

「…安寧？」

「そうそう。さつき雷が言った言葉。安寧を目指して生きてみればどうだ？ 他の何でもない、自分から出た言葉だしな」

「安寧……」

「安寧っていうと、落ち着く、癒される、とかそんな感じだよな。そう思った時は何かあるか？」

「……こうして、お前と話している時。

執事に世話をされている時。

狼牙と稽古している時。

柄鎖と一緒に居る時。

他には……」

少し考え、私は自分の手で自分の腕を折った。

「え、ちよ、お、ええ!!? な、何やってんだ!？」

「腕を折った」

「見りやわかる！ 何でそんな事したんだ、って聞いてんだ！」

「安寧のためだ」

私は折れた腕をぶら下げ、保健室へと向かった。

◇

「折れた」

「またかい？ しょうがないねえ……」

腕を折った私は保健室で治療してもらっていた。治癒の素能を受け、ベッドに腰かける。そして、保険医が料理をするのをじつと眺めていた。すると、保険医が聞いてくる。

「一つ聞いても良いかな？」

「何だ」

「さつきの骨折だけだね。外傷というよりかは、自分で折ったように

見えるのは私の気のせいかな？」

「気のせいじゃない」

私がそう言うと、保険医が調理器具を床に落とす。

「……何でそんな事を？」

「お前に治療して欲しかったから」

「い、いや、怪我をしたらもちろん治療するが、自傷してまでここに来る必要はないだろう？」

「必要ある」

私はさっきの国語教師との会話を引き合いに出し、なぜ安寧を求めているかまで説明した。

「私が求めるのは、復讐でも正義でも愉悦でもない。安寧だ。」

この部屋でお前という時は、不思議と落ち着く。だからここに来た」

「……そうか。やっと……」

保険医が突如こちらに近寄ってきて、私を抱きしめた。

「バカ。別に怪我しなくても、ここにきて良いのに」

私の第二の目は保険医の涙を捉える。

「……なぜ泣く」

「ずっと……なんで、だろうね。雷夢君は分かるかい？」

「知るか」

「バカ」

なぜか罵られた。お前も答えを知らないくせに。

そんな不満も、すぐに消え失せる。保険医の腕の中はとても暖かい。私は穏やかな気持ちで保険医の背に手を回した。

「泣くな」

「……優しいんだね。いや、知っていたさ」

抱かれる力が強くなる。暖かい。

「奇跡みたいだよ、本当に……」

安寧。

ハッキリと自覚する。正にこれこそが私の求めていた物だ。

異能学園の日常

雷夢らいむが雷家いかづちの当主となつてから数日。本日は異能学園の1年A組の日常について見て行こう。

ホームルーム前

「正拳チャーレンジッ！」

そう叫ぶのは結界ちゃん。久しぶりの登場である。

「……今度は何だ。前の5重結界もぶち破つただろ？」

面倒くさいのに絡まれたと、げんなりする狼牙に結界ちゃんは指を突き付ける。

「今度のはぜえくくつたい破れないから！ 例の如く3日徹夜よ！！」

「ちゃんと寝ろよ……」

「徹夜3日目！ 限界ギリギリで船をこいでる時にアイデアつてのは浮かんでくるもんなの！ かの有名なアインシュタインだつてお昼寝の最中に相対性理論を思い付いたつて言われてるんだから！」

などと二人が口論している間に、騒ぎを聞きつけたクラスメイト達が寄つて来る。

「さあ今日も始まりました！ 結界ちゃんVS狼牙のエキシビジョンマッチ!! 解説の日輪にちりんさん、今回の勝負をどう見ますか？」

「そうですね。二人のマッチはこれまでに12度行われています。しかし、結界ちゃん選手は全てに戦いにおいて惨敗しているため、9:1で狼牙選手が有利というのが私見です」

「確かに！ 前々回はボートやサッカーゴールのネットにも使われているハニカム構造を模した、ハニカム結界を披露してくれましたが、容易く破壊されてしまいましたからね。」

前回は下手な工夫は止めたのか、5重結界という力技を披露してくれましたが、普通に壊されていました！」

「結界を5重に重ねるといふ発想は良かったのですが、一枚一枚の強

度が弱くなっていたのが痛かったですね」

「その外野二人！ 喧しい！」

今回こそはマジのガチで最強結界だから耳ん穴かっぽじってよく見とけえい!!」

「結界ちゃん選手のビッグマウスが出ました。今回も期待できそうにありませんよ」

「まだ言うか!!」

ぐぬぬと歯ぎしりしながらも、結界ちゃんは腕を前に突き出し、目を見開いて集中する。

「p、ぱ…ぱっぱパワー!!!」

とんでもない掛け声と共に結界ちゃんの素能「盾」^{シルド}が発動する。

「これが…:はあ、新作の…:はあ…:はあ…:多重ミルファイユ結界…:じ、尋常に…:し、勝負…:!!」

「わ、分かった。分かったから少し休んでろ…:」

息も絶え絶えな結界ちゃんに、渋々構える狼牙。腰を落とし、呼吸を整える。

「さあ！ 張った張った!! 狼牙、単勝1.02倍！ 結界ちゃん、単勝67倍だよ！ もう締め切っちゃうよ！」

なにやら賭けも行われているようだ。狼牙は騒音に惑わされない。

「…:フツ！」

「完全な状態から正拳を繰り出す。

ギヤむベキヤにい…:

そして変な音が鳴った。

拳は結界の途中で止まっている。

「つ…:い…:俺の正拳が…:??」

「わ、割れていません…:！ Winner！ 結界ちゃん選手!!」

下馬評を覆し、見事勝利を掴みました!!」

「いよっしゃー!!!」

結界ちゃんが拳を突き上げるのと同時に、野次馬達が慟哭を上げる。

「俺のお小遣いがあーーッ!!!」

「落ちてる金を拾うようなもんだっただろ…!!　なんでこんな事に…っ！」

「通るかッ！　こんなもんっ！」

「ノーカンッ！　ノーカンッ！」

おそらく狼牙に賭けていた者達であろう。野次馬は無視して、解説役の生徒が結界ちゃんにマイクを向ける素振りをする。

「えー、ヒーローインタビューです。結界ちゃん選手、今回の勝因は何だったと思いますか？」

「いやー、やっぱり硬結界と軟結界を交互に重ねたミルフィーユ構造にしたのが良かったね！　もともとグーの正拳は軟結界で防げてたし、手刀の正拳は硬結界で防げてたのよ。そいつを重ねてやれば最強ってわけ!!」

結界！最強！　結界！最強！　オマエらも結界最強と叫びなさい!!」

「結界最強！　結界最強!!」

そう唱和するのは、恐らく結界ちゃんに賭けていた者達だろう。この騒ぎは、先生がやってくるまで続いた。



3 限目　数学

「昨日やった小テスト返すぞ。満点は狼森おいのもりと上戸鎖かみとくさりだけだ」

「相変わらずあいっら頭良いよな……。中間テストもトップ10入りしてたし」

「ああ、学内ランキングも1位と2位だ。文武両道ってやつだ」

「反対に上結かみゆいと五文銭ごもんせん！　お前ら一桁だぞ！　みっちり補修してやるからな！　というか上結かみゆいは寝てんじやねえ！　昨日のテストも半分以上寝てただろ！」

上結かみゆい。結界ちゃんの事だ。

「ええ……。だって昨日2徹目で、今日は3徹目だもん……。お休みなしやい……」

「……上結は明後日、自由時間があると思うな！」

「……五文銭！ お前には今度こそ補修受けさせてやるからなあ！」

「そして五文銭。フシみんの苗字だ。」

「えー……。四則演算出来れば生きてくのに困らないのです。二次関数とか整数の性質とかどうでも良くないですか？」

「良くない！ 論理的思考は数学によって鍛えられる！ それを疎かにすると言う事は人間に産まれたメリットを全て放棄することに等しい！」

「五文銭は特別に今から補修だ！ 数外の事以外考えられなくしてやるからな!!」

「それは勘弁願うのです」

「フシみんは窓際後方の席。彼女は窓を開け、校庭へと飛び降りる。」

「逃がすかツ!! テメエら！ 今度こそ五文銭を捕まえろオ！ 捕まえた奴には小テストの点に色付けてやる!!」

「「うおおオオオオオ!!」」

「フシみんを追って、教師・生徒が一斉に校庭へ飛び降りる。鬼ごっここの始まりだ。」

「わあ。凄い追手の数なのです。質も量も悪夢を抜けた時以上かも」

「校庭の隅に追い詰められたフシみん。しかし、彼女は学園の外に逃げようような真似はせず、追手に向かって駆け出す。」

「捕まえ……てない！ 何だあの動き!？」

「グツ！ バカお前！ ちゃんと動きを封じろよ！」

「バカはお前だろ！ 左に動いてりや詰ませられてただろ!!」

「中庭に逃げたぞ！ 追え追え追え!!」

「校舎の外はけたたましい。」

「……これ、どう解いた？」

「それはこちらの公式を応用すれば……」

「一方で狼牙と柄鎖は次の範囲の予習を黙々と進めていた。」

5 限目 体育

体育は他のクラスとの合同授業だ。今回は1年A組と1年B組の組み合わせ。内容はバスケットボール。

そしてその内容はジャンプ漫画のバスケットものを模していた。

「一本ー。一本じっくりー!」

状況はA組の5点ビハインド。3限、4限、昼休みと熟睡した結界ちゃんがボールを保持している。

何とかして点を取りたいところだが、B組のディフェンスは固く、そうそう点を入れさせてくれそうにない。

そんな状態で何を思ったのか、結界ちゃんはB組の生徒に向けてボールをパスした。

「はいカット…!」

その時、B組の生徒の死角からフシミンが姿を現す。

「げえっ! いつの間にも!」

「でたっ! 五文銭のミスディレクション!」

フシミンはボールを受け取…:ならず、そのまま掌底で弾き飛ばす。そしてゴール下の選手へと渡った。

「からのイグナイトパス! 流石幻の六人目だ!」

ボールを受け取ったA組の生徒は素能“大猩猩”を発動し、まるでゴリラのような見た目に。

特に必要も無い変身を終えた彼はそのままゴールにダンク。

「ウホッ!!」

「決まったーッ! ゴリラダンク!!」

完璧な連携。と、思われたが、B組の生徒が異変に気付く。

「ん? 1, 2, 3, 4…:おい待て! ミスディレクション使った奴マジで6人目じゃねえか!! ズルだぞズル!!」

バスケットは五人でやるスポーツである。

「うるせえ! 選手交代がちよつと遅れただけだろ! 細かい事気にすんな!」

新たにフシミンが入場し、先ほどダンクを決めた生徒がコートを去る。

「くっ……！ とにかく点取り返すぞ！ あの女には気を付ける！ 気配を消すぞ！」

注目されるフシミン。さしもの彼女もこれほどまでに注目されては気配を消し切れない。しかし……

「幻の六人目はもう一人いるんだな、これが」
シックスマン

結界ちゃんの眩きと共に、B組の生徒からボールが奪われる。それを為した影の正体は狼牙。

「でたッ！ 狼牙のパーフェクトコピー！ 五文銭ごもんせんのミスディレクションを完全模倣だ！」

「……おい待て！ あいつも六人目じゃねえか！ 審判止めろ！」

「バカ！ 審判はいねえよ！ 速くディフェンス戻れ！」

「狼牙だ！ 狼牙を止めろ！」

突如ボールを奪われたB組。そのため、シュート体勢に入る狼牙の前には一人しかディフェンスがない。しかし、一人で十分。

「フンフンフンフンフンフン！！」

狼牙の前には壁が出来ていた。B組の生徒が残像を残しながら狼牙のシュートコースを塞ぐ。

「フンフンディフェンス！」

「あんな技を隠し持っていたか！」

だが、狼牙も冷静だった。シュートは打たずに空中でバックパス。そこには完全フリーの結界ちゃんかみゆいが。

「上結フリーだ！ 打てっ！」

A組の野次。それに答え、結界ちゃんは3Pシュートを打つ。

「一本でも多く3Pを決める。それだけなのだよ」

「緑間じゃねえか!？」

かくして、結界ちゃんの手から放たれたボール。

それは放物線を描く前に、体育館の天井にぶつかった。

「……力入れすぎちゃった」

「バカ何やってんだ!？ 入らねえのに3Pなんて打つな！」

「せつかくのチャンス不意にしてんじやねえよ！」

「しかも6対5で!？」

「どあほうが」

「うう……」

責められた結界ちゃんは羞恥で顔を真っ赤に。

これが異能学園の体育の時間だ。漫画の世界の技を再現できる人材がそろっているのがなまじ恐ろしい。もちろんテニスの授業では「波動球」だったり「罨落とし」だったり頻発しているし、サッカーの授業では「スカイラブハリケーン」だったり「タイガーショット」だったり頻発している。

大騒ぎのコートを他所よそに、体育館の隅で柄鎖つかぎと雷夢らいむが並んで座っていた。

「珍しいですわね。雷夢様が体育に参加なされるのは」

「体育の時間は合同授業でお前と狼牙に会える。だから来た」

「あら、私と狼牙様にですか？」

「そうでなければこんな人の多いところには来ない。下手な考えが廻めぐるだけだ」

「そうでしたか。……試合にも出て見たらいかがですか？」

「必要ない」

「案外と楽しいものですわよ、こういった遊戯ついでで体を動かすのも。真剣勝負続きだったでしょう？」

「……」

雷夢は無言のまま立つ。そしてコートの方に足を進めた。

シューズが体育館にこすれ、キュツ、と音を立てる。それだけで、体育館中の視線が雷夢に集まった。誰もが無視できない圧倒的な存在感。

「変われ」

「え、あ…は、はい」

雷夢と比べて体格差が倍以上ある男子生徒が、彼女の一声で素直に下がった。

「寄せ」

「は、はいっ！」

B組の生徒が雷夢へとボールを渡す。彼女は初めてボールに触るのか、感触を確かめるようにその場でドリブルを繰り返す。

ダム、ダム、ダム

ドリブルの音が体育館に木霊こだまするたび、誰かが息を呑んだ。

「そういえば雷夢……さんが何かする所、俺は初めて見る」

「確かに。いつもはずっと授業サボって校庭で稽古してるしな」

「私は手合わせしたことあるけど、やっぱり片目が見えないハンは大きそうだったかな。でも……」

女生徒が言葉を切り、身を震わせる。それと同時に、ボールに慣れた雷夢がゆっくりと歩き始めた。

「……っ、マークにつけ！ 結界ちゃん！」

「おっけい！ 一留してる先輩だからって容赦は無用！ 本気で……」

雷夢の前に立ちはだかる結界ちゃん。その瞬間、蟲の幻覚が。首元には蠍こそり、手足には蛇、耳元では蜂はちの羽音。服の中には無数の百足むかでが這っているかのよう。

そんなおぞましい幻想に囚われるのは一瞬。結界ちゃんはヘラヘラした顔を引き締め、言葉通り本気で雷夢と対峙する。

張り詰める空気、場の温度が下がっていく。

その時、いつのまにか雷夢の後ろに回り込んでいたフシミンがボールに手を伸ばす。しかし、第二の目で360°に視界を持つ雷夢に気配を消した不意打ちは無意味。

雷夢は小さな手でバスケットボールを奪われないよう引き戻す。しかし、そっちはそっちで結界ちゃんがいる。

このままではボールを奪われてしまう。

「1秒後に戻せ」

そこで雷夢はパスをした。無勁むけいで弾く、ノーモーションパス。

ボールという枷を失った雷夢は、結界ちゃんとフシミンを振り切り、コートを駆ける。そして、大きく跳躍した。センターラインから

の大ジャンプ。

ちようど1秒数えて、雷夢にボールを戻すB組の生徒。空中でボールを受け取る雷夢。そこに張り合う狼牙。

果たして空中戦を制したのは雷夢だった。本家の無勁で狼牙に競り勝ち、そのままダンプを決める。

ゴールに捕まったまま、ゆらゆらと揺れる雷夢。振れが収まった頃によろやく床に足を付ける。

「……悪くはない」

雷夢はそれだけ言い、コートを去った。

「すげえ……。ほとんど一人で決めた……」

「バケモンだぜ、ありやあ」

「デیفエンスを吹き飛ばす破壊の鉄槌トルハンマー。彼女もまたキセキの世代だったか……」

「一留してるのに同じ世代って言っているのか?」

「バカ! 留年いじりは止めろって!!」

雷夢は有象無象の言葉に興味を持たない。柄鎖の隣に座り込む。

「お見事でした。楽しかったですか?」

「……少しは」

「で、あれば重畳ちゅうじょうです」

異能学園のとある日の事であった。

災禍希望（パンドラボックス）

30話 説得 黒子の場合

ジャンプバスケットでA組とB組が遊んだ日の放課後。

狼牙^{ろうが}は二年生が在籍する校舎の壁に寄り掛かっていた。彼が思い出すのは柄鎖^{つかさ}との会話。

「色々と考えてみましたが、私が生贄にならないために一番手っ取り早く、尚且^{なおかつ}つ現実的なのは封印を解いてしまう事でしょう。封印を続けるために私が生贄になるのですから、封印が解かれてしまえば生贄になる理由は無くなります。

封印を解くためには嚴重な警備を突破する必要があります。そのため戦力を集めましょう。まずは黒子^{くろこ}様と雷夢^{らいむ}様それから二四三^{ふしみ}様を籠絡したい所ですわね。」

「黒子と雷夢とフシミンを？ どうして？」

「先ほど戦力を揃えるとは言いましたが、有象無象を集めるわけにも行きません。鎖は一番弱い所以上には強くなれない。組織もまた同じ。加えて今回の場合は計画が漏れてしまえば、そこで終わりですし、数を増やせば漏洩のリスクが高まるばかりです。

望ましいのは少数精鋭。その点で言えば、雷夢様、黒子様、二四三様ともにこの学園屈指の実力を持っております。加えて、雷夢様に至ってはついこの間、雷家の当主になられたようです。雷家自体の支援は期待しておりますが、雷家を中立にさせられるだけでも十分なメリットとなるでしょう」

「……理屈は分かった。とはいえ、どうやって協力を仰ぐ？ フシミンに関してはアテがあるが、雷夢や黒子に対しては手持ちの交渉カードがない。」

「そうですね。雷夢様の説得は……正直出たところ勝負でしょう。あの方は何を考えているかほとんど分かりませんから。」

しかし、黒子様に関しては簡単だと思います」

「簡単？」

「ええ、私の言う通りにやってみてください。お耳を拝借」
そうして必勝の策を授けられた狼牙。とはいえ、内容が内容だけに半信半疑のまま、黒子を待ち伏せしていた。

◇

黒葛原黒子^{つづらはらくろこ}。彼女はやや背中を丸めた状態で、廊下を歩いている。
(放課後。いつもだったら稽古して、報告書見て、方針決めて、伝達して、医者になるための勉強して…)

でも、ここ最近は義務が無くなって…自由だ。

けど、やる事…やる事が…無い)

彼女は家に乗っ取られ、党首の座を降ろされ、やる事が無くなってからは大分暇を持って余していた。なにしろ彼女は稽古と仕事と学業に追われる日々で趣味を持ってなかったのだ。結局、稽古と勉強で時間を潰してしまっている。

黒子がそんな事を考えていると、反対側から取り巻きの生徒たちが駆け寄ってきた。

「黒子様！ 今から暇ですか？」

「え、あ、け、稽古と勉強、しようかなって思ってたけど…暇と言われれば、ひ、暇かな…」

どもる黒子。以前までの余裕を持った話し方は見る影もない。そんな様子に取り巻き達は少しだけ悲しそうにするが、すぐに切り替える。

「でしたらご一緒に喫茶でも如何でしょうか？ 近くに新しくパンケーキのお店が開店したようなので！」

「う、うん…。じゃあ、せっかくだから、行こうかな」

「やった！ じゃあ早速行きましょう！」

顔を綻ばせながら黒子の手を引く取り巻きの女子生徒。彼女の楽しそうな顔に、黒子もついつい口元を緩ませる。

しかし、すぐに顔を曇らせた。

(パンケーキ……狼牙君と一緒に行ってみたかったな……)

そう考えた瞬間、瞳に涙が滲む。

先の事件で狼牙に世話をされた黒子は、彼に対して過大な好意を抱いてしまっている。とはいえ、その好意は柄鎖同じ匂いのシャンブーを狼牙に使わせるの予防策によつてぐちやぐちやに破壊されてしまったのだが。

しかし、完全に諦めきれたわけでは無く、こうして何かしらの出来事をトリガーにして思い出してしまうのであった。

「黒子様！ いい加減あんな奴の事忘れたらいかがですか？ 寒門の野良犬なんか黒子様には相応しくありません！」

「そ、そんなことはない！ そんなことは……でも……」

遂にはボロボロと泣き始めてしまった。そんな黒子に取り巻きは何を言えるはずもなく、おたおたするばかり。

そこにタイミング悪く、件の男子生徒くだんが姿を現していた。狼牙は泣き始めた黒子を前に、話しかける機会を失っていた。

そんな彼を取り巻き達が発見する。

「「貴様ア!!」」

刹那、取り巻き達が狼牙に食ってかかる。

「黒子様の何が不満だオラア!!」

「言ってみろオラア!!」

「98・61・87のGカップだぞオラア!!」

「男子はそういうのが好きなんだろオラア!!」

名門の品も何もあつたものではない。ただのチンピラである。

「何の話だよ……。とにかく、俺は黒子に用があつて……」

「はあアア!! 黒子様振つといて何をいけしやあしやあと!!」

「テメエは上戸鎖とよろしくやつてろやア！」

「お泊り楽しかったですか……!!」

「振る？ お泊り？ 本当に何の話だよ……」

「何しらばつくれてんだ、アア!! 上戸鎖と同じシャンブーの匂い漂わせといてよオ！」

「お泊りしなきゃそんな事にはならねえだろうが、あアン!!」

「いや、なるぞ。シャンプーが同じ匂いなのは柄鎖が使っている物を俺に買ってくれたからだ」

「ンなわけあるかコラア!」

「誰がそんな言い訳を信じると思ってるんだ、アア!」

「……えつ、それ、本当?」

ここにいた。

とはいえ、狼牙の言は^{げん}真実であるため、この場合は正しい判断なのだ。

「「黒子様あ!」」

騒ぐ取り巻きを他所に、どこか期待した表情を浮かべる黒子。彼女は狼牙の前に立ち、もう一度訪ねる。

「さ、さっきの話、本当?」

「本当だ」

「そ、そうなんだ…。良かった…。あ、そ、それと今、つ、付きあっている人とか…いる?」

「付き合う、つてのが交際しているって意味ならいないぞ」

「そ、そっか…。へっ…。へへへ、ふ、ふひ…っ」

真実を知り、怪しく笑う黒子。気を良くしたのか、彼女は続けて話す。

「あ、そ、そういうえば、決闘の約束だけ…。ほ、本当に破棄しても良かったのかい? というよりは、破棄してもらわないと私、死んじやうから文句はないんだけど…。その、君の方は…」

黒子と狼牙の決闘。狼牙が勝利を収め、黒子は3か月以内に狼牙の手術を行わなければならないという約束だった。

しかし、家に乗っ取られた黒子としてはもう約束を果たすことは難しくなってしまった。まさか医学生にもなっていない黒子が手術をするわけにもいかない。というより、今の黒子に他人の手術をするなどという重い責任の伴う課題をこなせるわけもない。家のカギすらまともに開けられなかった時期もあったのだ。

「構わない。すぐに死ぬわけじゃない。……。それに、これは切り札にする可能性がある」

狼牙は心臓の横——異能者シンギユラリテイにしか存在しない異臓の部分を手で押さえる。

「そ、そうかい…？ なら、良いんだけど…。」

「ご、ごめんね、約束も果たせない無能で…。と、というか、そもそも、色々、ごめんね…？ 治療を頼まれた時も、何か、色々、悪口言っちゃったし…。いじわる、しっちゃったし…」

再び黒子の瞳に涙が滲む。

「悪口やいじわるに関しては気にしてない。お前の立場上、そうするのが正しかっただけだろ。そんなことに目くじら立てねえよ」

狼牙の言葉を聞いて、黒子が涙を滲ませながら笑う。

「う、うん…。そ、そうなんだよ…。そうするしかなくて…。だから、その…：わ、私の事、嫌いになってない…？」

「別に」

「そ、そっか…！ えへへ…。」

嫌いになっていない。しかし、嫌いになっていないだけだ。黒子を利用するのに躊躇が無いくらいには好きでもない。

その事実気づいていないのは黒子本人だけ。しかし、気づいていない方が幸せなのだろう。

笑う黒子を他所に、狼牙は本来の目的を頭に浮かべ、強引に行くことにした。

「黒子、お前に話がある」

「え、なっ、何…？」

（ま、また命令してくれるのかな…。何にも考えず、従うだけで…：ふへへ…。）

でも、失敗したら…：う、ううん、一つずつ手順を踏めば、きつと…：）

黒子が仄暗い快感を思い出す間に、狼牙は目を閉じ、柄鎖から伝えられた必勝の策を思い出す。

彼は黒子の肩を掴み、壁際へ寄せた。

「は、え、あ、なっ、何を…。」

ドンッ！

からのドン。壁ドン。

「あ、こ、ここのこつ、キ、キョツ……！」

あまりに突然の事態に、黒子は言葉にならないうめき声を漏らす。取り巻きも啞然としていた。

黒子より狼牙の方が背が高いのだが、黒子の腰が引けているため、今は狼牙の方が視線が高い。狼牙は上から押し込むように顔を近づける。

「か、か、かおっ……ち、近ッ……！」

狼牙を見上げる黒子。その右頬に狼牙の手が伸びる。

「あ、あ、あつ、あつ！」

黒子はゆっくりと迫る狼牙の手にバツチリ釘付け。手が頬に触れる寸前まで目だけで追いかけ、頬に手が触れた瞬間瞳が一回転する。

「い……いつ……い……あ……！」

己の柔らかい肌に、固い手が滑る感触。それは頬骨、頬、顎下をなぞり、首元まで緩やかに降りた。

「こ、コケクキ……ッ！」

そのままうなじを指の腹でくすぐられ、カ行コンプリート寸前の黒子。そんな緊張が高まり切った彼女に耳元に狼牙が口を近づける。

「頼みがある」

狼牙の小さな声は黒子の外耳がいじを揺らし、中耳ちゆうじを震わせ、内耳ないじを溶かす。

「ほひよッ……！」

余りの官能におもわず顔を背ける黒子。しかし、首元に添えられていた狼牙の手が再び頬の戻り、黒子の首の動きを制限する。

少しズレた耳の位置に、狼牙の口元が追尾した。

「近日中に俺と柄鎖で局地戦を仕掛けるつもりだ。その時に協力して欲しい」

相も変わらず耳元で鳴る声に。内耳どころか脳をグズグズに溶かされる黒子。ほとんど思慮出来ないまま、彼女は返事をする。

「ひ、ひゃい……！」

「助かる。ありがとう」

ありがとう。その感謝の言葉は黒子の神経をショートさせるのに十分すぎた。

「…………おへあ」

その言葉を最後に、黒子は気絶した。

31話 説得 雷夢の場合

いつも通り校舎裏で稽古していた雷夢^{らいむ}。そこに狼牙^{ろうが}がやって来る。

「雷夢。少し良いか？」

「何の用だ」

「あー……」

〃狼牙様。黒子様はともかく、雷夢様や二四三様を説得する際はきちんと場を整えた方が良いかと。相手の気分しだいで交渉は良い方にも悪い方にも転びますから〃

柄鎖の言葉を思い出す狼牙。しかし、雷夢が気に入る場所に心当たりが全くない彼は、言い淀んでしまう。

「……雷夢は、どこか行きたい所とかあるか？」

代わりに本人に聞くことに。

「行きたい所？ ……ああ、そういえば」

雷夢は少し考えた後、答えを見つけたようだ。狼牙に向き直り、真顔で言う。

「猫カフェ」

「……え？」

「猫カフェだ」



異能学園から距離にして10km。住宅街のはずれにある猫カフェ。喫茶 猫屏風〃。

そこに狼牙と雷夢は来店していた。雷夢が先んじて店の扉を開ける。

「いらっしやいませー！ ようこそ、喫茶猫屏風へ！ 当店のご利用は初めてでしょうか？」

「初めてだ」

「当店は1時間1000円です。延長は30分ごとに500円頂きます。ドリンクは別売りですので、つど注文してください。」

そして猫と触れ合う前にこちらのルールブックを良く読んでください。では、手洗いと消毒を済ませていただいてもよろしいでしょうか?」

「分かった」

二人は店員に案内されるままに、手洗い・消毒を行う。その間、狼牙はずっと思っていた疑問を雷夢にぶつける。

「なあ……どうして猫カフェなんだ?」

「現代の四大癒しを知っているか?」

「え、四大癒し……? いや、知らないが……」

「フワフワ、モフモフ、ぷにぷに、そしてASMRだ」

「……はあ」

「猫はその内の三つを兼ね備えていると聞く」

「……」

「楽しみだ」

「……まあ、楽しそうなら良いけど」

手洗い消毒を済ませ、二人は店の奥へと入る。奥は広間となっており数人の客と、十匹ほどの猫がのんびんだらりとしていた。

二人はとりあえず他に客のいない大きなドーナツ型のソファに座る。

「ルールブックによると……猫を追い回したり、無理に撫でようすると怖がります。そのため、向こうから近寄って来るのを待ちましょう」……らしいぞ。雷夢、座れ」

ソファに座って早々、少し離れた所にいる猫に狙いを定め、立ち上がった雷夢を狼牙が制する。

「面倒な」

雷夢が腰を落ち着けると同時に、狼牙の方へ一匹の雑種猫が寄って来る。毛並みは灰のトラ柄模様だ。

◇

吾輩は猫である。名前はソラ。

どこで生まれたかとうと見当がつかぬ。なんでもフカフカの毛布の中でニャーニャー泣いていた事は記憶している。吾輩はそこで初めて人間というものを見た。

しかも後で聞くと、それは猫好きという人間中で一番チヨロい種族であつたそうだ。猫好きというのは時々、我々を愛でて撫でて癒されるという話である。しかし、その時は何という考えもなかつたから、別段何とも思わなかつた。ただ、彼の^かしまりのない顔を見た時、尻尾が自分の意志に反して左右に揺れたばかりである。

それからというに、生まれた際に尻尾が揺れた理由を追い求めてきた。結果、齡2歳4か月にして分かつた。どうやら吾輩は猫好きの締まりのない顔を見るのが好きらしい。

吾輩がニャーと鳴けば頬が緩み、寝返りをうてば口元も緩み、前足で踏み踏みしてやろうものなら眉が垂れさがる。

初めは純粹な気持ちで猫好きを喜ばせていた。しかし、その内に人間を誑かす^{ほの}仄暗い快感を覚え始める。己の声一つ、仕草一つで人間は吾輩におやつをくれるし、遊んでもくれる。何より、撫でられ飽きてするりと手から逃げる時に見せる名残惜しそうな顔。たまらんではニヤいか。

今日も猫好きがやってきた。しかも新顔が二人。ちよいと^{からか}擲揄つてやろう。

ドーナツ型の椅子に座る二人組。そのうちの雄に^{オス}近寄つた。まずは一鳴き。

「にやあ」

これだけで猫好きは悶える。ふふふ、チヨロい種族よ。

「えつと……猫が近寄つてきたら、まずは指を差しましょう」
しかし、雄は^{オス}吾輩の方を見もせず、何かしら本を読んでいるではないか。

何たる事。この吾輩が無視。

愕然とする間に、雄が^{オス}吾輩の方に指を差し出してきた。

気を持ち直す。何という事は無い、気の無いふりをしておきながらも吾輩に触りたいのではないか。向こうがその気であればこっちのもの。ここの常連になる程、たつぷりしつかりと誑かしてやろう。まずは鼻を近づけて雄の指の匂いを嗅ぐ。

「指を嗅ぐのは猫の挨拶です。それを確認したら、ゆっくりと触つてあげましょう」

吾輩が挨拶を済ませると、雄はゆっくりと手を動かし、吾輩の体に触れる。

ふふふ…、存分に触るが良い、猫好きよ。

雄の手は吾輩の背中を毛並みに沿って撫でてくる。やさしく、ゆっくりと。緩やかなストロークを描くかと思えば、指三本でさすられる。

むう…、新顔にしてはなかなか心得ている…。

吾輩は目を細め、されがままに…いや待て、こんな所で屈するわけにはいかぬ。猫と猫好きとは捕食者と非捕食者の関係。一方的に狩らねばならぬのだ。

吾輩は心を強く持ち直し、額を人間の雄の手に擦り付ける。そして一鳴き。

「にゃあ」

洗練されつくした一声。これに耐えられた猫好きを吾輩は一人たりとも見た事が無い。しかし、今日、初めて相まみえる事となつてしまった。

人間の雄はまったくこちらを見ようともしない。その事実には、吾輩は再び愕然とした。

「あまり猫を見ないようにならなう。威嚇されていると思い、怖がつてしまいます」

吾輩が呆然とする間に、人間の雄の指が吾輩の眉間をくすぐる。

おお、これもなかなか…いやいや、屈してはならん。快感に流されてはいかんだ。

しかし、そこに追い打ち。耳の付け根、肩、前脚の付け根を揉まれる。しかもそれが吾輩の欲しいタイミングでくるのだからたまつた

ものではない。

この、なんとという…テクニシャン…！！

あまりの気持ち良さに転がり、腹を晒してしまう。

支配者たる我々が猫好きなどに屈するなど…！！

しかし、気持ち良さには抗えない。

このような辱め…！！ くっ、殺せ…！！

吾輩は今日、生き恥を晒してしまった。

◇

「ニャア（ほう、赤鷺あかさぎのソラがやられたようだな…）」

「ニャーオ（フッフ：奴は『喫茶 猫屏風』気まぐれ四天王の中でも最弱…）」

「ゴロゴロゴロ…（人間如きに負けるとは猫の面汚しよ…）」

そう密談するのはこの猫カフェのリーダー格の三匹。猫カフェの常連からはあまり触らせてもらえない事から気まぐれ四天王とも呼ばれている。

猫たちが話す一方、雷夢は痺れを切らしていた。

「……猫がこない」

「確かに……この猫を触るか？」

「いや、良い。猫を追ってはいけない。要は呼ぶ分には問題ないはずだ」

雷夢が先ほど密談していた三匹の猫の方を見る。

「……ニャア（あの人間、こつちを見たぞ）」

「ニャーオ（フッフ：私たちの毛並みを堪能したそうね…）」

「ゴロゴロゴロ…（少しぐらいなら遊んでやっても良いのではないか…？）」

瞬間、三匹は身震いした。

「……ニッ……!?!」

まるで氷点下。それが恐怖によるものだと、遅ればせながら三匹は気付く。

「来い」

雷夢が猫を呼ぶ。平坦で抑揚のない声。しかし、猫たちにとっては黄泉よみから響く亡者の声。

体に纏わりつき、自由を奪われる。死の匂いを鋭敏に感じ取っているというのに足が動かないのだ。四本もある足が。

「来い」

再度響く。その瞬間、三匹は自らの惨たらしい最後を想起した。死ぬことが救済と言えるほどの残酷な最後を。

行かなければ残酷に殺される。しかし、行つたとて死ぬ。

とはいえ、少しでもましな死に方を。三匹は全身を泡立たせながら雷夢の方に歩み寄る。行かざるをえない。

死との距離が半分に縮まった時、雷夢が手袋を猫の前に手を伸ばす。その手に、猫たちは尚更震えた。

何とおぞましい手だろうか。今まで自分達に触れようとしてきた人間の手とはまるで違う。造形が狂っている。人間の手とはあれほどまでに変形するのかわい。いや、そもそも人間の手のなのか、あれが。明らかに命を刈り取る形と色をしている。まさに死神の手。

しかし、猫たちは歩かざるをえない。自ら死刑台に立ち、あのギロチンに首を差し出さねば確実に生き地獄を味あわされるのだ。

ついに先頭を歩いていたラグドールの猫に死神の手が触れる。3年間イエネコという立場を享受し、野生を失っていたその猫にもはつきり分かった。

自分は今日、ここで死ぬ。

……しかし、彼にその時は訪れなかった。死神の手は、自分の体を撫でている。とても優しく、緩く、穏やかに。

恐怖からの解放。そして自分の命などいかにようにも出来る程の偉大で強大な御手おんてが自分を愛でている。その落差は猫に多大な快樂をもたらした。

全身を投げ出しての平身低頭。

尻尾、お腹、肉球。普段は触られるのを嫌がる所も今は関係ない。この御手おんてに愛でられるのであれば、他の何をも厭わない。

三匹の猫は順に脳を破壊されていった。

「……なるほど。これは良い」

一方で、雷夢は左手で猫の肉球を、右手で猫の体毛をモフモフしている。しかし、猫は三匹。雷夢の手は二つ。一匹余ってしまった。これは良くない。

そう考えた雷夢は、至って合理的に考えた結果、残りの一匹に顔を埋めた。そのまま首を動かさず、顔の肌でモフモフを堪能していた。

「これが…癒し…」

両手と顔を床に転がる猫に当たっている体勢。そして足は正座。いわゆる土下座の形。絵面が最悪だった。

「お客様アアー…!!?!」

店員が止めに入るのも当然だろう。

◇

店員から注意を受け、猫から引きはがされた雷夢。

「あれをするなら自分で飼うしかないか……」

「そもそも、ああいう行為は猫にとってストレスだから自分で飼った猫にもしない方が良くないんじゃないか？」

「猫の勝手など知った事か」

「ストレスたまると猫も禿げるらしいぞ」

「……それは、良くない。毛が抜けた猫はハダカデバネズミと変わらない」

「流石に言い過ぎだろ……」

などと雑談をしつつ、雷夢は店の張り紙に目を付ける。

“保護猫の里親募集中”

「おい」

雷夢は何とも横柄な態度で店員に呼び掛ける。

「里親になる。だから猫をよこせ」

「え、えっと……」

「募集してるはずだ」

親指で張り紙を指す雷夢。

「その、猫の里親になりたいという申し出ありがたいのですが……
ちゃんと大事にしていただけですか？」

「ストレスで毛が抜けないぐらいには」

「あー……その、猫が飼える環境をお持ちですか？」

「無い。が、用意する。1000万あれば足りるか？」

「いっ……!?! ……と、とりあえず猫を見てみましょうか。異能者シンギユラリテイ
のお客様に良い子がいますから」

雷夢と、ついでに狼牙も店員に案内されて保護猫のいるケージの前
を通る。その瞬間、ケージの中にいた猫たちは奥の方に一瞬で引ッ込
んでいった。

「あれ……? 普段は皆、こんなに怖がらないのに……?」

店員も首を傾げている。この現象の原因は、言わずもがな雷夢。本
能に秀でた猫たちは彼女のどす黒い本性を敏感に察知し、逃げる事を
選んだのだ。

とはいえ、店員が雷夢に勧めようとした猫はこのケージの中にいる
猫ではない。もう少し奥の小さなスペースにいる一匹の猫。

毛は灰色、種別はサイベリアン。やや長毛のモフモフしている。な
お、現在は金魚鉢の中でベストフィット中。

「この子、目が赤いでしょう?」

店員が金魚鉢の中でくるまっている猫を手で回す。そうして雷夢
と狼牙の方に猫の顔を向けると、確かにその目は赤かった。異能者シンギユラリテイ
特有の赤目。

「異能キユリアを持っているみたいで、力が凄く強いんです。お世話している
私もほら」

店員が制服の袖をまくると、包帯が巻かれていた。

「皮膚裂かれちゃったんですよ。猫ちゃんは軽くじやれただけなんですよ。しょうけど。」

初めは私が引き取ろうかと思ったんですけどね。こういう力の差を感じると、この子のためには異能者の人に引き取ってもらった方が良かったって。

この子、凄く寂しがり屋で甘えたりなんですよ。なのに、私みたいな貧弱なのと暮らし始めたら、最悪殺されかねません。猫ちゃんにそんな事とてもさせられないですからね」

「……死ぬのは、良いんですか?」

「猫に殺される以上に幸せな死に方ってあります?」

「……はあ」

「あ、でも出来れば顔の上に乗られて窒息死が一番……」

引き気味の狼牙に店員が熱く語る一方、雷夢は猫の入った金魚鉢をひっくり返していた。にゆるりと床にこぼれる猫。雷夢は猫目掛けて手を伸ばす。

猫は伸びてくる手に反応して、猫パンチを繰り出した。店員の骨にひびを入れた猫パンチ。しかし猫と同じく異能者であるライムにとっては、普通の猫パンチだ。

そのまま雷夢の手は進み、猫の体毛に触れた。ふわふわと柔らかい感触にほんの少しだけ口元を緩める。猫も撫でられてご満悦そうだ。「じゃあ」

「……こいつ、貰うぞ」

即断即決の雷夢。彼女は再び金魚鉢にベストフィットした猫を金魚鉢ごと持ち上げる。それを受けて、店員は我に返った。

「え、あー！ ちょっと！ 流石にその日にお持ち帰りは駄目ですよ！ ちゃんと家に猫を迎える環境を整えてからでないと。それにこの子はサイベリアンという種でして、その特性をもらもろ把握したうえで猫ちゃんと一緒に共生するべく知識を学ぶ必要がありますし」

「分かった。ならまた今度来る」

「あ、勉強するならこの本が良いですよ。こっちが猫を迎える環境を整えるための本で、こっちがサイベリアンの本。それからキャット

フードの本と、猫の仕草大全に、猫の吐いた毛玉大全と……」
ドサドサと積み上がる本、本、本。雷夢はとりあえず本を入れるハンドバッグを貸してもらった。

◇

猫カフェで大量の荷物を増やした雷夢と狼牙。二人は寮への岐路の途中。

「今日は……良かった」

いつになく、無表情に近い笑みを浮かべる雷夢。猫を触った感触を思い出しているのか、手をせわしなく動かしている。

「猫、飼うなら今度触りに行っても良いか？」

「好きにしろ」

「助かる」

そんな雑談をしながら、狼牙は本題を切り出すタイミングをうかがっていた。とはいえ、今の雷夢は過去一番で機嫌がよさそうだ。ここがベストタイミングだろう。

「……なあ。追加でもう一つ、頼んでも良いか？」

「何だ」

「……俺と柄鎖で近い内にある施設を襲撃する。御三家を巻き込んだ戦いになる可能性が高い。その時……その、時に……」

「分かった。力を貸す」

躊躇^{ためら}う狼牙の言葉を読み取り、先に答えを返したのは雷夢。

「良いのか？」

「大方、柄鎖を生贄にさせないため。違うか」

「あ、ああ……」

「柄鎖は私の数少ない安寧だ。それを奪う奴はお前に頼まれなくても壊す」

「そうか。……ありがとう」

お礼を言う狼牙だが、その顔はどこか暗い。

「……何を気にしている。私は首を縦に振った」

「あ、いや……」

狼牙の影を悟った雷夢の問いかけに、彼は少し言い淀んだ。

「……俺は、柄鎖を死なせたくない。大切な人だから。そして、雷夢。お前も大切な人だと思っている。」

けど、俺は柄鎖を助けるための戦争にお前を巻き込もうとした。いくらお前が強いからって当然、死ぬ可能性は十分にある。……つまり、俺は柄鎖とお前を比べて柄鎖の方に重きを置いた。だから……」

「その何が問題だ」

「え……」

「何かと何かを比べて、どっちが大事なのか判断を下す。誰だつてやっている事だ。私も柄鎖と保険医、どっちかを選べと言われたら迷わず保険医を選ぶ。」

お前は私と柄鎖を比べて柄鎖を選んだ。そして自分の命の危険と柄鎖を天秤に掛けても柄鎖を選んだ」

「……」

下唇を噛んで体を震わせる狼牙。

「怖いのか」

「……ああ、怖いよ」

未だに震える狼牙の前に、雷夢は手に提げていた荷物を地面に置く。そしてファア手袋を嵌めた両手を伸ばし、狼牙の両頬に当てた。

「……」

しかし、雷夢は何も言わない。視線を斜め上に泳がせ、思案している。不審に思った狼牙が口を開こうとしたその時。

「フワフワだ」

雷夢はそう言つて、ファア手袋で狼牙の頬を撫でる。頬骨、耳、首筋、顎下。順にさする。

他人に肌を弄ばれる感覚にくすぐったさを覚える狼牙だが、嫌という程では無かった。

「フワフワで落ち着いたか？」

「……少しは」

「なら良い」

雷夢が手を引くその時、狼牙がファー手袋を掴んだ。結果、雷夢の手が手袋から抜ける。突然の事に少しだけ驚く雷夢。

「……フワフワ、欲しいのか？」

「違う。直しかの手で、もう一回して欲しい」

狼牙の言葉に、もう一度驚く雷夢。

「……フワフワじゃなくて、良いのか？」

「ああ」

「変な奴だ」

雷夢はもう一度狼牙の頬に手を当てる。今度は素手。

数多の傷を負い、遮しゃ二無にむ二稽古こしたせいで至る所が変形している死神の様な手。それが狼牙の柔らかい肌の上を這う。狼牙は目を細め、武骨という言葉ですら最大限の配慮となってしまうであろう雷夢の手に身を任せていた。

しばらくして、狼牙がファー手袋を雷夢の来ている上着のポケットに押し込み、それから両頬に触れている雷夢の手に自分の手を重ねた。

「これで落ち着くのか？」

「……かなり」

「妙な奴だ」

フワフワよりズタズタの自分の手をありがたがる狼牙に戸惑う雷夢。とはいえ、彼女にとっては結果が全て。ほんの少しだけ眉を下げて、顔を緩ませた。

「柄鎖もお前も守る。どちらも私の安寧だ」

「……お前は誰に守ってもらうんだ？」

「知るか。私が決める事じゃない」

「……だったら俺が守る。出来る限り」

「好きにしろ」

背景は中秋の夕日。二人はしばらくして、再び帰路についた。

32話 説得 二四三の場合

雷夢と狼牙が猫カフェにいった翌日。狼牙は放課後の時間を利用してフシみんの元を訪れていた。場所は校舎の屋上。その縁にフシみんは腰かけている。

「探したぞ」

「珍しいのです。狼牙くんのほうから私を訪ねてくるなんて」

狼牙はフシみんの隣に腰を下ろす。

「どこか行きたい所は無いか？」

「遊びのお誘いなのです？　そうですねえ……」

フシみんは顎に手を当て、空を見上げる。

「初めての時みたいにショッピングモールに行くのも楽しそうですね、近くにできたパンケーキ屋に行くのも捨てがたいです。他には……」

フシみんは楽しそうに呟く。しかし、彼女が不意に振り返った。

狼牙は一瞬釣られかけたが、前にもこんな事があったと思い出し、寸での所で首の動きを留めた。

「今度は何をするつもりだったんだ？」

狼牙が問い詰めるが、フシみんは明後日の方を向いたまま動かない。

「……フシみん？」

「…あ、いや。何でもないので」

狼牙が疑問に思い始める頃、ようやくフシみんは我に返り、視線を戻す。そして狼牙の優れた聴覚は彼女の動悸が荒れているのを捉えていた。

「嫌なことでも思い出したのか？」

「……少し」

いつもニコニコしているフシみんの顔に、珍しく影が差している。狼牙が何と声を掛けるべきか悩んでいると、彼女の方から話題を切り出した。

「手合わせ、しないのです？」

「構わないぞ」

二人は示し合わせたように屋上の縁へりからお尻を浮かせ、そのまま自由落下する。狼牙は足から、フシみんは頭から。

狼牙がしっかりと着地する横で、フシみんは頭頂部を用いてアスファルトをカチ割っていた。そのまま大地に横たわる。

「髪と服が汚れるぞ」

「……普通の人は、今ので死んじやうんですよね」

フシみんは狼牙の忠告も無視。地面に頬ずりしながら呟く。

「異能者シンギユラリテイは自由落下程度じゃ、逆にどう頑張っても死ねないだろ」

「……異能者は死ぬにも一苦労なのですね」

フシみんは立ち上がり、体に付いた埃や汚れを払う。そして、両手を前に突き出して構えた。

「ん」

フシみんの小さな呻きが開戦の合図となる。

◇

狼牙とフシみんの手合わせは数分に及んだ。終始、狼牙の零距离格闘をフシみんが軽くないなす展開。しかし、寸勁すんけいはともかく無勁むけいは当たれば受け流せない。狼牙はそれを最大限生かす。フシみんの体を渾身の無勁で弾き、正拳突きのスペースを作り出す。しかし、フシみんの方も体勢が崩れたわけでは無い。

万全の正拳突きと万全の柳雪折無りゅうせつむの対決。軍配は柳雪折無に上がった。

全てを込めた突きを流された狼牙は大きくバランスを崩し、そのままフシみんに抱きかかえられる。

「……俺の負けだ」

狼牙が負けを認めると、フシみんは彼を手放し、余った袖の中に手を隠す。そして、その場に座り込んだ。狼牙もその隣に座り込む。

「……」

いつもならフシみんの方から色々話を展開するのだが、今日ばかり

りはだんまり。狼牙はそれを頼りに話題を盛り上がった所で、協力してくれないかと切り出すつもりだったのだが、当てが外れた。

とはいえ、自分から場を盛り上げるような会話術を狼牙は持たないため、直球勝負に出る。

「俺と柄鎖で近い内にある施設を襲撃するつもりだ。その時、フシみんにも力を貸して欲しい」

「施設を襲撃、ですか？」

「ああ。……きつと、人死にも出る」

「……」

フシみんは少しだけ歯を見せる。しかし、すぐに口元を引き締めて真顔に戻った。

「私は止めとくのです」

回答は拒否。この答えには狼牙も驚いた。

「柄鎖を助けるためなんだ。殺しの大義名分も出来る。参加してくれないか？」

「…しないのです」

取り付く島がない。小さく、小さく三角座りをするフシみん。狼牙はその態度を見て、説得を諦めた。

「分かった。話を聞いてくれてありがとうな」

狼牙はポケットから缶入りの飴を取り出し、一つをフシみんに差し出す。

「…貰って良いのです？」

「ああ」

フシみんは飴を受け取った。そして、狼牙の口に押し込む。

「む、な…っ」

「貰ったものをどうしようと私の勝手なのです」

フシみんは立ち上がり、スカートの埃を払う。

「この話、口外はしません。また今度、なのです」

そのままフシみんは立ち去ってしまった。

私は不幸な人間なのです。

物心ついたころには両親に捨てられ。

誰かに助けを求めた事もありましたが、赤目の異能者シンギユラリテイという事で敬遠され。

ならばと一人で生きていけば、変な覆面集団に攫さらわれ。

気を失うまで走らされ、指をへし折られ、焼けた鉄鏝こてを押し付けられ。

とにかく、私は不幸な人間でした。

でも、今は違うのです。

嫌な事はやらなくても良い。

同世代の人達と同じ学び舎に通える。

私の事を受け入れてくれる人もいる。

昔と比べると雲泥の差。

とても幸せな生活をしているのです。

でも、だからこそ、剥がれてしまった免罪符。

こんなにも不幸なのだから、快樂のために人を殺しても許される。

そんな自分への言い訳が無くなってしまったのです。

最近、殺した人たちの幻覚も見えるように。

今までは楽しんでいた罪悪感が。

大きく、大きく、大きくなって。

押しつぶされそうなのです。

私はどうすれば良いのでしょうか。

フラフラと歩いている最中、袖を引き、下に隠していた右手を露あらわにする。

ズキズキと痛む感覚と、あらゆる方向に曲がっている五指。狼牙くんの正拳を受けた結果がこれです。前に受けた時はノーダメージで受け流せたのに。

「……保健室、行くのです」
ひとまずは、現在の事。でもそれが終わったらどうしようか。
答えはまだ見つからないのです。

33話 舞踏会1

上戸鎖家の大きな屋敷、その一室。温白色のシャンデリアやランプ、まるで玉座の様なソファ、壁に埋め込まれた大きな本棚。ヨーロッパ貴族が住むような部屋の中、私は姿見の前でオーダーメイドの稽古着に着替えていた。

服装に乱れがない事を確認して視線を上げると、鏡の中の自分と目が合う。こうしていると昔の事を思い出す。物理的に自分を客観視することで、自然と内省が行われるのだ。

私は上戸鎖家の三女として生を受けた。それ自体は幸せな事なのだろう。生まれてこの方衣食住に困ったことは無い。教育にも自由したことは無い。望めば、全てのものが手に入った。

……ああ。全て、というのは語弊がある。私を必要としてくれる人は、どれだけ望んでも手に入れる事はできなかつた。私の死を必要とする人は、数えられない程いるが。

とはいえ、それも過去の話。

今は違う。望んでいたものは、全て私の手の内だ。

「……………」

鏡の中の私は堪えきれずに笑っていた。側に控えている侍女は変に思ったかもしれない。構わずに思考を進める。

私には二つの転換期があった。一つは自分が生贄になると知り、その上私の事を誰もかばってくれなかった時。もう一つは狼牙様から「生贄になるな」と言われた時。

どちらも私の精神を大きく変質させた出来事。前者はストレスで私に嗜虐心という負の感情を目覚めさせた。そして後者は植え付けられた嗜虐心を消し、代わりに満足と恋心を与えてくれた。

人に惚れるというのは存外大変だ。

基本的には彼を中心に物事を考えてしまう。ふとした時に彼のことを思い出して、顔が緩んでしまう。してあげたい事・して欲しい事が無限に湧き出て止まらない。

心の一部に寄生され、操られているにも等しい感覚だ。しかし、不思議と嫌では無い。これが嗜虐心の場合はやりすぎて後悔する時もあったのだが。恋心の場合、今のところ負の感情とは無縁だ。

幸せ絶頂の今、死んでしまうのがもしかしたら一番幸せなのかもしれない。狼牙様に嫌われたり、私より先に死なれては簡単に発狂する自信がある。

とはいえ、彼は私に生きろと言ってくれた。だからもう少し自分の命を大切にしよう。少なくとも無抵抗で生贄になるつもりはない。

「お嬢様、そろそろ出立しないと間に合いません」
「ええ」

侍女に返事をし、私は胸を張って部屋を出た。

◇

交差点を曲がるのが難しそうな長さのリムジンに揺られること数時間。そうして到着したのはホール施設。今日はここで名家が一堂に集まる舞踏会が開かれるのだ。

身分確認を終え、玄関をくぐる。そして0が六つは付くであろうカーペットが敷かれた廊下を歩き、荘重とした両開きのドアを侍女が開く。扉の向こうにはサッカーコート程の空間が広がっており、私と同じように稽古着で身を包んだ人たちが数多存在していた。会場の真ん中には何も無い空間が広がっており、そこでは数人の男女がペアで舞踊を披露している。

扉をくぐると、多くの視線が私に集中する。その中の数人は私の方に歩み寄って来た。

同じ年頃の令嬢、子息から二回り以上年上のマダム、ムツシユまで様々だ。私は彼ら、彼女らに上辺だけの笑みと言葉で対処する。

季節の挨拶。最近のニュース。家の事情。

盛り上がる会話とは裏腹に、私は心底冷めていた。こんな会話はた

だの作業だ。床の木目を数える方が気を使わないだけまだましだろう。

「いやはや相変わらず素晴らしい、柄鎖殿は。息子の嫁に欲しいぐらい……」

壮年の男性はそこまで発言して、顔を歪めた。己の失言に気づいたのだろう。

「ご冗談を。一年も経てばバツイチになってしまいますわ」

「は、はは……申し訳ない」

私が冗談で返すと、男性は気まずそうに謝罪を述べる。我ながら酷いブラックジョークだと思う。

とはいえ、その甲斐あつてか、それ以降私に話しかけてくる人がいなくなつた。周りを見渡せば、ちらほらと同情の念が窺える。赤の他人とはいえ、生まれの宿命で死なざるをえない人間には情が湧くらしい。

「あら、私のかわいい妹。こんな所にいたのね」

ぼんやりと思考にふけつていると、聞き覚えのある声が。

「ごきげんよう、姉様」

上戸鎖家の次女、上戸鎖 連歌。

私の姉である彼女は、主張の強い派手な赤色の稽古着を身に纏っている。しかも胸には金糸の刺繍。肩には長めのケープがかけられており、稽古着の腰のあたりにも多少のフリルがちりばめられていた。髪は成人式のニュースでよく見るような編み込みのポニーテール。

総じて、目立ちたがり屋である姉好みの格好だ。

「本日も絢爛華麗な姿ですわね」

「当然よ。…比べてあなたは地味ね。黒の稽古着に、髪色と同じ黄金のワンポイント。髪型もいつもと同じじゃない。

このような晴れの場なのだからもう少し気を使ったらどうなの。この場を一年後に死ぬあなたの生前葬と勘違いしているのかしら？」
「明らかかな失言。いや、失言というよりは確信的な発言だろう。先ほどの気まずそうにしていた壮年の男性とは真逆。」

この通り、私の姉は非常に高圧的だ。私に対しては特にひどい。と

はいえ、彼女の性格・境遇を考えればこの対応も当然。私は適当に返事する。

「今日の主役は私ではありませんわ。必要以上に目立つのもよろしくないでしょう」

「……ふうん？」

姉は眉を吊り上げて怪訝そうな表情。

以前の私であれば、噛みつき返していた場面だ。そうしないのを不思議がっているのだろう。

「柄鎖^{つかさ}、呼ばれているぞ。お前が招待した客が来ているとのことだ」
そう言いつつ登場したのは上戸鎖^{はんと} 絆十。上戸鎖家の長男であり、私の兄だ。

爽やかなオールバックの髪型。さっぱりとしたフチなしの眼鏡。稽古着も白と淡いベージュの組み合わせで見ると爽快感を感じさせる姿だ。

兄の発言に私は首を傾げる。

「私が招待した客、ですか？」

誰かを招待した覚えはない。にもかかわらず、私に招待された人が来ているらしい。

「まあ大変。招待客を待たせるようなことがあつては上戸鎖家の恥よ。早く迎えに行つて差し上げないと。ねえ、柄鎖^{つかさ}？」

こちらに視線を送ってくる姉。その口元は嗜虐的に吊り上がっていた。

……姉の差し金か。何を企んでいるかは知らないが、今は流れに従うしかないだろう。

「承知しました。兄様、お伝えいただきありがとうございます」

「……ああ、どういたしまして」

兄はそう言うつてから私からすぐに視線を逸らした。最低限の愛想^{あいそ}は振り撒いてくれたが、私に興味が無いのが見え見えだ。

兄は、私や姉の様な凡人に興味がない。彼が興味を持つのは突出した才能を持つ人物だけだ。

というのも兄が天才だから、なのだろうか。私が習得に5年かけた

金剛不壞も、彼は1日で成してしまった。体術であれば、狼牙様のよ
うに一目見ただけで模倣することが出来る。流石に奥義までは模倣
できないようだが。

少し、姉の話に戻る。

凡人で努力を嫌う姉は、天才の兄と凡人だが努力家の私に挟まれて
さぞ生きにくかっただろう。とはいえ私と姉、昔は仲が良かった。今
のように険悪になったキツカケは、やはり私が生贄だと告げられた日
から。

その日以降、私の中に嗜虐心が膨れ上がり、抑えきることができな
くなった。その嗜虐心は、凡人で努力も嫌いなくせに見栄っ張りな姉
に向かった。そうしている内に、険悪な仲になったという訳だ。

……よくよく振り返ると、我ながら幼稚な事をしてしまったと思
う。姉にも悪い事をした。とはいえ、私の中に罪悪感や後悔の念は無
い。事実として認識しているだけだ。少し前であれば、そんな事は無
かったのだが。

……狼牙様に生きてくれと言われた日、変質したのは嗜虐心と恋心
だけではないかもしれない。彼以外に対する興味が激減したような
感覚。

試しに、視界の端に映っていた父と母に目線を送る。今まであれ
ば、私を見捨てた恨み、見捨てざるをえなかった苦悩を考慮した同情、
声をかけてくれない寂しき、声をかけられない心情を慮おもんばかつての諦
め。

複雑な感情が湧いて来たのだが、今は「無」だ。

抱く感想は「私を見捨てた人種」、それだけ。

今まで、私の世界には「私を見捨てる人種」しかいなかった。だか
ら、その括りの中で好きだったり嫌いだったりを考くえていた。しか
し、今の私の世界には「私を必要としてくれる人種」が存在する。

二元化した私の世界。その世界の中で「私を必要としてくれる人
種」にしか興味を持てなくなったのだろうか。

……至極当然。「私を見捨てる人種」に気を回す必要はないだろ
う。そんな無駄な事に時間を割くぐらいなら、狼牙様の黒子の数を数

える方が数千倍有意義だ。

「ごちゃごちゃとして思考が一本化され、スッキリする。考えている間にも歩みは進んでおり、すでに玄関へと到着していた。そこで私が見たのは、守衛の横で借りてきた猫のように縮こまっている狼牙様だった。」

「えっ、こんなところ!?」

他の客の目が一齐に私に集まる。いけない、アイドルの追っかけみたいいな声を出してしまった。

口元を押さえて、思わず声を出さないように、加えて緩んだ頬を見られないようにする。

どうして狼牙様がここに？

顔が見られる、嬉しい。

なら、黒じやなくて少し綺麗な色の服を着てくれば……いや、そもそもロウガ様は色の判別ができないのか。

色々な思考が行ったり来たり。本当に考えるべきなのは、どうして狼牙様がここに招かれているのか。だが、突然のサプライズが嬉しすぎて集中できない。

そうこう考えている内に眼球が狼牙様の姿をハッキリと捉える。

彼は肩口当たりの長さの髪をローポニーにまとめしており、結び目には大きなスカーフのようなヘアアクセサリを付けていた。余ったスカーフは首に巻き付けており、マフラーのようにも見える。

服は前に私と二四三様と狼牙様で出かけた時に買って差し上げた物だ。内にベージュのブラウス、その上から紅葉色のワンピースを着ている。靴は黒のローファー、靴下は黒の……恐らくサイハイだろう。

表情を見れば、少しだけ眉をひそめて顔をあまり動かさずに当たりの様子を窺っていた。

小動物のようで、いと愛し……。じゃなかった。どうして彼がこの場に？

その疑問が再浮上するのと同時に、狼牙様も私に気づいたようだ。

「柄鎖」

私の姿を確認するなり、少しだけ顔色を良くする狼牙様。すぐには彼の方に近寄り、事情を聞いたただしてみろ。

「狼牙様、どうしてここに？」

「お前の姉の名前を出されて舞踏会に来いと言われた。そして、玄関で柄鎖の名前を出すようにとも」

「それで……まで？」

狼牙様は背伸びをして私の耳元に顔を寄せる。

「いつもならそんな怪しい命令は一蹴する。けど、今は事を荒立てない方が良くと思った」

狼牙様が、目線を後ろに送る。その先には姉の付き人が。彼はこちらの視線に気づき、にこやかに手を振り返してきた。

彼は姉の付き人の中では古参であり、私も彼の事は多少知っているが、相変わらず緩い人だ。

なるほど、事情は理解できた。私達は上戸鎖家に弓を引かんとする立場。決行の日までは怪しまれないようにするのが賢いだろう。監視まで付いているのなら尚更従順であるフリをしなければ。

とはいえ、どうして姉は狼牙様をこの舞踏会に来るよう画策したのだろうか。嫌っている私への意地悪であれば狼牙様を巻き込む意味は……。

そこでようやく狼牙様の服装がこの舞踏会に適したものでないことに気づく。

狼牙様は舞踏会と聞いて、精一杯のオシャレをしてきたのでしよう。確かに、一般的なパーティーや舞踏会であれば今の服装でも問題ない。

しかし、シンギュラリティ異能者の名家が集まる舞踏会においては、稽古着に類する服が正装とされる。最低限、動きやすい服装が求められるのだ。

受付を済ませている周りの人を見ても稽古着やスポーツウェアを着ている者がほとんど。そのような中では、狼牙様の服装は浮いていると言わざるを得ないだろう。

「あの方、どこの家の人かしら？」

「こんな場にあんな格好なんて……」

「誰の招待客かしら？　もしかして…」

辺りからはひそひそと声が聞こえる。

姉の狙いはマナーに疎いであろう狼牙様を私の招待客として舞踏会に参加させ、笑いものにするつもりだろうか。

また遠回しな嫌がらせだ。しかも狼牙様まで巻き込んで……巻き込んで……。

「柄鎖」

「なんででしょうか」

「顔、戻した方が良く」

言われてから気づいた。無表情のまま目だけが細められた状態。チベットスナギツネみたいな顔を手で覆い、すぐにいつもの表情に戻した。

しかし、姉の付き人には写真を撮られてしまった。携帯の画面を見て小さく嘔き出している。…後で姉に見せるのだろうか？

とにかく、今は姉への報復を考えることは後回しだ。この場を切り抜けるためには……。

「…失礼いたしました。どうやら手違いがあつたようですわ。狼牙様を招待したのは一つ先のパーティーでした。大変申し訳ありません」
私が頭を下げると、狼牙様も察してくれたのか話に乗ってくれる。

「あ、ああ…そういう事か。流星に会場が大きいからおかしいと思つた。なら、今日はこれで…」

解散してしまうのが一番良いだろう。姉には私のチベットスナギツネ顔で溜飲を下げてもらおう。そう思つた矢先だ。

「そつちの子は柄鎖のお友達かしら？」

まあ可愛い服装、よくお似合いですわよ。とはいえ、舞踊の相手がスカート裾を踏まないの良いのですが」

面倒くさいのが来た。

34話 舞踏会2

「そつちの子は柄鎖のお友達かしら？」

まあ可愛らしい服装、よくお似合いですわよ。とはいえ、舞踊の相手がスカートの裾を踏まないと良いのですが」

姉は心底楽しそうな表情で皮肉をぶつけてくる。

「ええ、ですので今日はお引き取り頂こうかと。そもそも、何かの手違いで招かれたご様子です」

「あら、上戸鎖家の三女ともあろう者がわざわざ訪ねに来てくれた友人を無手で返すのかしら？ 手違いがあったからこそ、そちらの子に煌びやかな世界を体験させてあげるのが良いでしょう」

「しかし、彼女は舞踏会の礼儀に少々疎いところがあります。加えて慣れてもおおりません。肩肘を張らせてしまうよりは、このまま帰ってもらった方が良いと思います」

「そこは柄鎖が介助してあげればよろしい。そこまで含めて、その庶民への責任を取ることに繋がるのではなくって？」

「…彼の事を庶民というのは言葉選びが乱暴に思いますが。軽蔑的な意図を感じられます」

「それを判断するのは貴方ではなく、そちらの子ではなくって？ それに論点をずらすのは止めていただけるかしら。大事なのはその子を舞踏会に参加させてあげる事で………彼？」

舌戦の最中、急にフリーズする姉。狼牙様の性別も知らなかったのだろう。今の格好だけ見れば、女性と勘違いしてもしょうがない。

姉が戸惑うわずかな隙間時間に、狼牙様が耳打ちをしてくる。

「…俺は大丈夫だ。一時笑いものにされるぐらいは屁でもない。柄鎖が嫌ならこのまま帰るが」

彼が気にしないと言うのであれば、答えは決まっている。むしろ狼牙様と舞踏会に参加できるのだ。その点は姉に感謝しなければならぬだろう。

「承知しました。不肖ながら、柄鎖が狼牙様のエスコートをさせてい

ただきましよう。

それで良いでしょうか、姉様」

「え……ああ……問題無いわ。心行くまで楽しんでいってちょうだいね。ええと……狼牙……君？」

性別の分かりづらさに戸惑う姉だが、自分の思い通りに事が進んで多少は気色を取り戻していた。

「ともかく、舞踏会に参加するのであれば狼牙様には着替えていただきたい所ですが……」

「あいにくだけれど、柄鎖の予備の服はかの……彼にはサイズが合わないでしょう。もちろん私の物も。そもそも男の子なのだから、女性ものを貸すわけにも……いくのかしら？ ああもう紛らわしい！」

勝手に頭を抱える姉は放っておく。狼牙様には稽古着を着てもらうよりも、今の格好の方がよほど可愛い。このまま参加してもらおう。どうせ笑いものに仕立て上げられるのなら開き直ってしまえば良い。狼牙様の手を取り、二人で歩き出す。

混乱していた姉も、狼牙様がそのままの服装で舞踏会に参加するのを見てほくそ笑む。その時だった。先ほどまで居た受付の方が少し騒がしい。

「あの……そちらは……」

「“ねこ”だ」

「えっと、その……」

「聞こえなかったか。 “ねこ”だ」

「にゃあ」

受付には金魚鉢にすっぽりとハマった “ねこ” を片手に抱える雷夢らいむ様の姿が。

「その……猫の持ち込みはご遠慮いただきましたのですが……」

「パーティーの要項にそんなことは書かれていない」

「いえ、それは……書くまでも無いと言うか……と、とにかく！ 猫の持ち込みは禁止とさせていただきますす！」

「……………」

雷夢様は何を思ったのか、金魚鉢の中から猫を取り出す。そして、

猫を首に巻き付けた。

「あの、何を…」

「マフラーだ」

「え？」

「マフラーだ。持ち込みを制限される覚えは無い」

「ま、マフラーではないでしょう!」

「…あっちにも狐のマフラーを巻いたお婆さんがいるだろ。それと同じだ」

「にやあ」

「マフラーは鳴かないでしょう!」

「面倒くさい……しッ」

雷夢様が鋭く息を吐き出すのと同時に、彼女の首に巻き付いていた猫が地面に降り、瞬時に駆け出す。雷夢様もそれと同時に受付を通り過ぎる。

「あつ、猫が! それに雷様! ま、待ってください!」

「後の事は任せた」

「仰せのままに」

猫と雷夢様を追いかけようとする受付の人を遮るように、雷夢様の執事が動いた。雷夢様はそのまま私たちの方に歩いてくる。

「柄鎖…はともかく、狼牙もいるのか。鴨葱^{かもねぎ}だな」

「……俺^{ねぎ}が葱か?」

「すると私が鴨^{かも}でしょうか。とはいえ、狼牙様を背負^{しよ}って来たのは姉ですが」

雷夢様はそこで初めて、姉の存在に気づいたようだ。相変わらず、興味の有り無しがハッキリしている人だ。

姉は雷夢様のことを侮^{あなじ}るような目で見降ろす。雷夢様が雷家の当主になったのは姉も知っているだろうが、突如として当主に上り詰めた彼女の顔までは知らないらしい。加えて舞踏会に猫を持ち込むような礼儀知らずな面を見てしまえば侮^{あなじ}るのも無理はない。

雷夢様は無表情で姉を見つめ返す。そして姉を指差し、絞り出すように一言。

「……鍋？」

「誰が鍋ですって!？」

「なら……出汁？」

「出汁でもないわよ!!」

「……椎茸」

「そもそも例えようとしなくてくださる!？」 あなたの様な礼儀知らずの寒門に揶揄されるなんて……まったく不愉快極まりない!」

怒り心頭の姉を他所に、雷夢様は少しだけ難しい顔を浮かべていた。

「珍しく冗談を言うものではない、か。難しいな」

雷夢様はそう呟きながら、会場の敷居を跨ぐ。私と狼牙様、姉もそれに続いた。

「柄鎖! あなたの知り合いには礼儀知らずの痴れ者しかいないのかしら!？」 世間知らずの高枕もここまでくると甚だしい! あなた、どこの家のものですか!？」

会場の入り口で姉が雷夢様に対して詰め寄る。丁度その時だ、先に会場入りしていたらしい雷夢様の猫がすり寄って来た。

「にゃあ」

可愛らしい鳴き声。しかし、姉にとっては神経を逆なでするものだったのだろう。額に青筋を浮かべる勢いで激昂する。

「主人が卑しければペットも卑しい! 近寄らないでくださいまし!」

姉が猫を蹴り飛ばそうと足を振るう。その足を、雷夢様が踏みつけた。

不味い。そのまま骨の一本でも折る気だ。

狼牙様もそれを察したのか、私と同時に動く。二人がかりで雷夢様の凶行を未然に防いだ。しかし、雷夢様が姉の足を踏んでしまったことに変わりはない。

「この……ッ! 何をしたかわかっているのかしら!？」 この私の足を踏みつけるだなんて……! どこの家の者よ!」

これまでにない姉の大声。会場の視線が一斉に集まる。

「雷」
いかづち

「へえ、雷家の…！ あそこも墮ちたものね、こんな無礼者を一門から排出すなどと！ 所詮は成り上がりの一家！ 底が知れるわ！」
姉の方は「怒髪天を衝く」と言った所だろうか。相手の家を貶めるような不味い発言をしまっている。

「貴方の様なクズ、どうせ雷家の中でも下の下でしょう！ そんなあなたを上戸鎖の次女の足を踏んで良いとでも!? 今すぐに土下座なさい！」

「お前は私の猫を蹴ろうとした。骨を折られなかったただけでした。私を止めた後ろの二人に感謝しろ」

「私は貴方が会場に紛れ込んだ小汚い獣を排除しようとしただけよ！ 武闘会に猫を連れてくるような低脳だから、後先考えずに私に噛みついてくるのかしら!? この無礼は抗争ものよ！ 上戸鎖と、雷の！」

良くない方向に話が進展していると思ったのか、狼牙様が私の方に視線を送って来た。しかし、私は静かに首を振る。姉が抗争を持ちだした時点で、この口喧嘩の終着点はおおよそ分かってしまった。口を出さなくとも問題無いだろう。

「そうか」

雷夢様はそう言つて、私と狼牙様の拘束を解ほどこうとする。

不味い。手を出すのは流石に不味い。ここまで話が発展した上で手を出すのは本当に不味い。

すぐさま雷夢様の耳元で囁く。

「この場は手を出さないでくださいますか」

「それ以外は」

「ご自由に」

すると、彼女は落ち着いてくれた。

……流石に手が早すぎるでしょうに。

私の予想を超える……いや、私が失念していただけか。とにかく彼女の狂戦士ぶりに振り回されはしたものの、ひとまずは安心できた。二人の口論は続く。

「ふ、ふん！ さつき貴方、手を出そうとしましたわね？ そんなことになれば本当に抗争の引き金になりますわよ？ 貴方の様な雷家中でも下の下がそんな大それたことをして良いのですか？」

姉の声は若干震えていた。それもそのはず、姉も抗争を引き起こそうという意図はないだろう。もし、抗争にでもなればどれだけの事態になるのかが分からないバカではない。

姉の最終目標は雷夢様に土下座させること。抗争は脅しか、はたまた口が滑っただけと捉えることができる。

「良い。抗争するも、しないも私の自由だ」

対して、雷夢様は抗争を引き起こすことに躊躇ためらいが無い。とはいえ、抗争が起こった事態が想像できないバカというわけではない。その事態を正しく認識しながら、その上で躊躇ためらいが無いのだ。

「そ、そんなわけないでしょう！ 貴方の様な痴れ者が…」

「少し前に私が当主になった。当主が家をどうしようかと問題無い」

「ま、まさか……貴方が、雷夢……？」

雷夢様はまったく理性的では無い。

ムカついた、だから殴る。

イラついた、だから蹴る。

人間が大人になるにつれて獲得する理性をまったく持ち合わせていない。しかし、彼女は理性的では無いが、合理的ではある。一度本気で目標を定めてしまえば、そこからは合理的なのだ。目標を達成するためには手段を選ばない。二次被害なども一切考慮しない。

「い、いくら当主だからって全面抗争を引き起こしてよいのですか？」

上戸鎖と雷が争った所で貴方に何の得もないでしょう？ 二つの家が弱体化し、他の家に付け入れられるだけ……」

「私の虫唾が収まる」

「……は？ た、たったそれだけのために……？」

そう、雷夢様は「気に食わない奴を叩きのめす」と一度決めてしまえば、それに向かって最短の道を進もうとする。例えば、家同士の抗争になり、親類縁者が絶滅しようとも。

……雷夢様にとっては親類縁者など唾棄すべき対象なので、この例

えは少し不適切かもしれませんが。

「……………」

気づけば、姉は黙りこくっていた。内心、

“もともと抗争をするつもりだったのか？”

“だから、わざと無礼な振る舞いをしてそのきつかけを作った？”

“私はそれにまんまと乗せられてしまったのだろうか”

などと考えているに違いない。

だが、全くそんな事はない。雷夢様は恐らく…………いや、絶対にそんな事を考えていなかったはずだ。

猫を持ち込んだのは、単純に猫と一緒に居たかったから。

無礼な振る舞いは、普段通りに振舞ったらそうなたただけ。

そして、姉についても猫を蹴ろうとしなければ一切の興味を持たないままだっただろう。

気づけば、辺りには遠巻きに見学する野次馬だらけ。これだけ騒がしくすれば当然か。雷夢様は周りの目など気にしないだろうが、姉にとっては強いプレッシャーとなっているだろう。ここで対応を間違えれば、大量の証人の元、抗争が始まってしまうのが目に見えているのだ。

「…あ、貴方の猫を蹴ろうとした点については私にも幾分かの非があったことは認めます。しかし、貴方の振る舞いが無礼だったのも事実」

姉はそう言いながら、辺りを見回す。野次馬達は声にこそ出さないものの、小さく頷いていた。

「であれば、ここはお互い歩み寄るのはいかがでしょうか」

「…………もつと具体的に言え」

「私としては土下座していただきたい所でしたが、一言。一言で良くて。『ごめんなさい』と謝っていただければ水に流しましょう」
今回の件、客観的に見て悪いのは明らかに雷夢様。それをお咎め無しで終わらせてしまえば、周りから侮られてしまうのは必至。

謝罪してもらおう。ここが姉としては最低限譲れないラインなのだろう。

周りの姉への反応は「感心」といった様子だった。

あれだけの無礼を謝罪だけで許す度量、今後の影響も考えた立ち振る舞い等、諸々含めての評価。

反対に雷夢様への反応は、かなり否定的だ。

当主にしてはあまりに短慮、加えての常識知らず等、諸々含めて妥当な評価。

場の雰囲気は姉の方に偏っている。周りを味方につける手腕、流石に上戸鎖の次女として教育を受けているだけある。……結構な頻度でサボっていたが。

「断る」

しかし、雷夢様が周りの視線や場の雰囲気を気にするはずがない。その能力があれば、そもそもこれだけの事態には陥^{おち}っていない。狂人……いや、駄々をこねる幼児と例えるのが正しいだろうか。

「なぜ私が謝る必要がある」

「そんなもの……っ！ 貴方が私の足を踏んだからでしょうが！」

「それはお前が私の猫を蹴ろうとしたからだ」

「それは貴方がこのような場に猫を持ち込むという礼儀知らずを働いたからでしょう！」

「それがどうした。私の猫を蹴って良い理由になっていない」

「……っ！」

姉は苦虫を噛みつぶしたような表情。

今の雷夢様は、周りの目も気にせず床に寝転がり、「玩具を買ってくれなきゃ嫌だ」と喚く幼児と同じだ。自分のわがままを押し通すことしか考えていないため、説得など通用しない。なまじ、話が通じそうに思えるのが厄介だ。

ともかく、このままでは本当に抗争が起きかねない。しかし、こんな小さいざこぎで抗争を引き起こしたなど、悔やんでも悔やみきれない失態。姉としては何としてもそれを阻止したいだろう。

となると、姉に残された道は一つ。雷夢様に頭を下げ、溜飲を下げてもらおう事だ。駄々をこねる子供の前では、常識を知る大人は折れるしかない。

姉が心底納得いかなそうな表情で頭を下げようとしたその時、狼牙様が口を開いた。

「雷夢、その……猫アレルギーの人も居るかもしれないし、公の場に猫を連れてくるのは悪い事じゃないか？」

「……猫、アレルギー」

雷夢様は目をまん丸にして驚愕していた。

「そいつは、猫に触れないのか」

「触れないってことは無いが、鼻水が出たりくしゃみが出たり、喉に炎症が起こったりする」

「そう、なのか……」

そこで、雷夢様はちらりと姉の方に目線を送る。その目は、ほんのわずかに同情的だった。あの傍若無人な雷夢様が、だ。

「悪かった。私の配慮が足りなかった」

雷夢様は頭を下げこそしなかったものの、確かに「悪かった」と謝罪した。あの雷夢様が、だ。

「そうか、猫に触れないのか……」

そして、雷夢様は姉が猫に触れないと勘違いしたのか、噛みしめるように呟く。その声はやはり同情的。

雷夢様から謝罪の言葉を貰い、安心したのも束の間。憐みの目と声に晒された姉のこめかみがピクピクと震えていた。

プライドの高い者にとって一番堪えるのは「同情される」だ。無礼や軽蔑に対しては怒りこそ覚えるものの、結局は「何も分かっている馬鹿が」と相手を見下すことが出来る。その点ではプライドを刺激しない。

しかし、同情は違う。「ああ、この人はこんなにも可哀そうなものね」と相手に思われている状態。自らを上等な人間と信じている人間にとって、これほどの屈辱は他にないだろう。

「この……ッ！」

「落ち着け」

姉の堪忍袋の緒が切れる寸前、突然現れた兄が姉を制止した。

「獣の鳴き声だ。いちいち惑わされるな」

格好良く言う兄だが、その手には雷夢様の猫が伴っており、少し間抜けに見える。

「……ふん」

第三者の介入で落ち着いたのか、鼻を鳴らすだけにとどめる姉。

「猫を持ち込むにしても管理しておけ」

兄は手に持っている猫を雷夢様の方に突き出す。しかし、横から姉が手を伸ばし、猫に触れた。

「ほら見なさい！ 触れますから！ アレルギーではありませんから！！」

「そうか」

アピールする姉だが雷夢様は適当に流しつつ、いつの間にか隣に居る執事から金魚鉢を受け取り、その中に猫を収めた。

「~~~~~……ッ」

姉からギリ、と歯が擦れる音がする。ここまで来ると、少し可哀そうになってきた。やはり狂人に喧嘩を売るべきでは無い事が今回の件で良く分かる。

結局、姉は雷夢様と私を睨みつけた後、どこかに行ってしまった。これで勘弁してくれば嬉しいのだが、さてどうなることやら……。

多少の心配はあるものの、ひとまず解放された私達は自由な時間を過ごす。

「雷夢様、猫を飼われたんですね。しかも、シンギユラリテイ異能者の……」

金魚鉢に収まる猫の目は赤く、異能者の特徴を示している。赤目ならばアルビノの可能性も考えられるが、毛色が真っ白ではないため違うだろう。

「能力が高いせいで風呂に入れるのが面倒だ。昨日は福島まで追いかける羽目になった」

それを聞いて狼牙様が呆れる。

「すごいスケールの嫌がりだな……。とはいえ、こんな所まで猫を連れてきて良かったのか？ 知らないところに連れて行くとストレスたまると聞くが……」

「こいつが勝手に付きまってくる。しょうがないからいつも使って

る金魚鉢に入れて連れて来た。

ストレス……勝手に来て、勝手にハゲるなよ」

雷夢様が猫の額を指でクシャクシャと撫でながら無茶な命令をしていた。

「にしても、自分の縄張りの外まで猫が付いてくるというのは……ふっ」

「何が可笑しい」

「いえ。わざわざ危険な縄張りの外に出てまで雷夢様について行くというのは、そちらの猫が雷夢様の事を守るべき対象として見ているからでは無いかと思ひまして」

「守る?」

「ええ。ほら、今も雷夢様の事を見つめていらつしやいますし」

雷夢様が視線を猫に向けると、ぼつちり目が合う。しかし、猫側がすぐに目を逸らした。敵意が無い事を示すためだろう。

「……飯の催促じゃないのか」

「にやあ」

「養われてる身分のくせに、変な奴だ」

悪態をつく雷夢様だったが、先ほど姉と言いつ争っていたような棘とげのある雰囲気は無い。むしろ、どこか嬉しそう。

「雷夢様は……」

私が発言しようとしたその時、私たちの後ろを見知らぬ女性を通り過ぎた。狼牙様が鼻を鳴らす。

「……黒子か?」

「え、あ、え、お、えどうえ!!」

狼牙様に話しかけられた女性はひどく挙動不審に。

「黒子様、ですか……? この方が?」

狼牙様は「黒子か?」と言ったが、目の前の人はどこからどう見ても黒子様には見えない。

「な、なん、で……分かったの……!?!」

しかし女性の狼狽具合からすると、その通りなのだろう。恐らく誰かの素能エレメントで姿を変えているのか。

「姿も立ち振る舞いも普段と違うが、匂いは黒子だ」

「き、キツイ香水付けて来たのに……」

「それぐらいいじや誤魔化せないぞ。匂いを誤魔化したいなら胡椒とか唐辛子とかの刺激物を振りかけた方が良い」

「……や、やっぱり……ダメだったんだ……！ 皆の言う通り……！ 私みたいな無能が、我儘言つて……！ うう……ツ……！」

「お、落ち着け……！ 俺の鼻は特別なんだ、他の奴は気づかないって。大丈夫だから……」

セツトされた髪をガリガリと搔きむしり、過呼吸を発症する黒子様。狼牙様が腕をつかみ、無理やり宥めている。

その隙に私は雷夢様の肩を叩き、共々少し離れた所に移動した。

「何だ」

「狼牙様に聞かれたくない相談事です。……ひとまず、雷夢様には私達にご協力いただけるのですよね？」

協力というのは、私が生贄にならないために禁断箱バンドラボックスを開ける手伝いの事。人前で大っぴらにいう訳にはいかないので、多少濁している。

「そうだ」

雷夢様は返事をしつつ、執事に視線を送る。すると、執事は空気を読んだのか遠く離れた所に移動した。

これで、心置きなく話せる……かと思つたが、遠くにいる狼牙様がこちらに視線を送って来ていた。流星の地獄耳だ。

「レディの会話に聞き耳を立てるものではありませんよ」

私がそう言うと、狼牙様は黒子様を連れ、私達から遠ざかっていった。これで、今度こそ安心だ。

「仕切り直しましょうか。雷夢様の返事、直接聞いて改めて安心しました。とはいえ、この件は雷夢様だけではなく黒子様と二四三様にもお願いしております。そして黒子様には首を縦に振って頂けましたが、二四三様には断られてしまいました」

「……水漏れの原因は取り除く必要がある、か」

雷夢様は狂人ではあるが、馬鹿では無い。察しが良くて助かる。

「ええ、そうなつては怒られてしまいますから。漏らさないと約束してくれたのですが……それを信じられるほど彼女に詳しいわけはありませんし、お人好しでもありません。」

しかし、狼牙様は彼女に多少の執心があるご様子。ですので、こっそりと……ね」

「人手は？」

「雷夢様はどうでしょうか？」

「私の知る限りで五分五分。力を隠してるならそれより分が悪い」

「そう考えると、協力していただけなかったのは痛手ですわね。さて、どうしたものか……。いっそ触らないというのも手ですが」

「私の家から人手を出すのはどうだ」

「信頼できるのですか？」

「訳の分からない狂人も混ざっているが、当主である私には逆らわれない」

雷夢様に狂人と言われる人物。狂人から見れば常識人が狂人なのか、それとも別ベクトルの狂人なのか……。少し心配になる。

しかし、私の作戦もたった四人では流石に戦力が足りないだろう。どちらにせよ追加の人手は必要だ。

「ではお願いいたします」

私が軽く頭を下げてから顔を上げると、私をじっと見つめる雷夢様と目が合う。

「……本当に良いのか？ 狼牙にバレたら多分、嫌われるぞ」

この言には少し驚かされた。雷夢様が他人の感情の機微に思いを馳せるといふのが、何とも考えられなかったためだ。

「かもしれないですね。しかし、私は決闘の結果として狼牙様に頼まれたのです。『生きてくれ』と。であれば、そのためには何であろうと……」

そこまで話して、自分の口を塞ぐ。これ以上は誰の耳があるかわからない場で発言するのは危険な事を口走りそうだ。

「……ま、バレて嫌われた時は以前に戻るだけです。死ぬまでの僅かな期間を楽しむことにしましょう。タバコ、酒、それから危険ドラッグ」

グ等を一度試してみたいですわね」

「止めろ。体に触る」

「体に触ると言われましても……どうせ死ぬのだからどうでも良いでしょう?」

「狼牙に嫌われた所で死ぬ必要はないだろう」

死ぬ必要はない? ……そんな事はない。

「今の私にとっては狼牙様が全てなのです。一番初めに私が必要だと
言ってくれたあの方が」

「……そうか」

雷夢様はわずかに寂しそうな表情を見せた後、執事に向かって指だけで手招きした。傍に来た執事に指で何かを伝達している。

「引け」

そして、銃のトリガーを引くようなジェスチャー。

……ああ、何とも一般的な感性のジェスチャーだ。銃では異能者を殺せないというのに。だからこそ分かりにくい隠語として機能するのだろう。事情を知っている私でもすぐにはピンとこなかった。

「仰せのままに」

執事は慇懃に礼をし、会場を出ていく。その表情は嬉しさを堪えきれないといった様子だった。

「もしかして、人手というのはあの執事の事ですか?」

「そうだ。他にも執事とメイド、合わせて5人いる」

「5人……。練度にもよりますが、それだけ居れば本番にも足りるやも」

5人の実力を見ない事には何も言えないが、ひとまずは安心だ。心配事が無くなると、気分が軽くなる。

「そういえば雷夢様。この猫はいつから飼い始めたのですか?」

「3日前」

「それにしても懐いていますわね。こんな所まで付いてくるくらいです。家でどのように愛でているのですか?」

「裸になって腹の上に乗せる」

「……ええ……? なぜそのような……」

「猫が腹の上で歩くと肉球の感触が気持ち良い。匂いを嗅がれることもあるが、髭の感触が良い。もちろん毛の感触も良い。それを全身で堪能できる。母乳が欲しいのか、たまに胸を踏み踏みすることがある。なにかこう……良い、仕草が良い」

やや早口で話す雷夢様。……まあ、夢中になれる事が見つかった良かった。最近は多少感情が表に出るようになってきたが、生き物を飼う事でこれらの情緒が培われたのかもしれない。

「多頭飼い……」

更なる高みを目指そうとする雷夢様に思わず失笑してしまった。

35話 舞踏会3

雷夢と柄鎖が密談する一方、狼牙に宥められた黒子はようやく落ち着きを取り戻していた。

「ご、ごめん…取り乱しちゃって…」

「お前が取り乱すのにはもう慣れた。それより、わざわざ姿を……」

そこまで狼牙は口を噤む。姿を変えて参加しているという事は何か理由があるはず。それを軽々に発言して誰かに聞かれるのは不味いと考えた。

「……なんでそんな化粧して来てるんだ？」

彼が考えたなりの隠語。

「……け、化粧？ 化粧はして、ないけど…こ、香水の事？」

黒子にはまったく通じなかった。

「……何しにここに来たんだよ」

諦めた狼牙は、とにかく舞踏会に参加した動機を聞く。

「え、あ…それは……」

分かりやすく顔を曇らせる黒子。しかし、意を決したように口を開く。

「あ、謝りに…来たんだ……。ツル…剣^{つるぎ}っていう友人に…」

「剣^{つるぎ}、っていうとお前が…黒葛^{つづらはら}原家でクーデター起こした黒幕だったか？ なんてまたそんな奴に？」

「ぜ、全部…、私が悪いんだ……。ツルも剣^{けんぎ}先の当主で…きつと、裏切らざるを得ない状況に置かれてて…。いや、そんな事より！ わ、私みたいな無能でつまらなくて、冗談の一つも言えないクズに付き合わせてごめん、って。伝えないと、ちゃんと謝らないと、ダメなんだ……」

大きな胸を掻き分け、自分の心臓を手で押さえながら話す黒子。

「このパーティに参加すればツルにきつと会える…。けど、そのまま参加したら殺されるかもしれないから、って。だから、まだ影響力の残ってる友人に変装させてもらって、代わりに出席してきたんだ…」
「けど、そのままだったらお前が謝ってるって事に気づかないんじゃないや

ないか？」

「き、気づいてくれなくて良いんだ…。私が、勝手に謝りたいだけだから…。それに、向こうは私なんかの顔すら見たくないって思ってる、だろうし……。変な奴に絡まれた、ぐらいの認識で良いんだ…。そうすれば私の中で何かが変わるんじゃないか、って……」

その時、黒子の視界に件の相手くだんが映る。

剣先 剣。彼女は年配の偉そうな人物たちと何事かを話し合っていた。黒子は剣の表情がやや暗いことに気づく。彼女は好きではないが、それにしても営業スマイルが固い。

黒子が観察するうちに、偉そうな人物たちが去っていった。

「……はあ」

「お疲れ様です。お声がけする人物はこれで最後ですね」

「なら私は帰る」

「え、もう帰るんですか？ これからパーティが盛り上がる所なのに……」

「良い……もう疲れた」

どこか重い足取りで会場を後にしようとする剣。それを見た黒子は急いで後を追いかける。

「っ、ツルツ……い」

声をかけられた剣は怪訝そうに振り返った。しかし、彼女の視界に映るのは見ず知らずの誰か。変装している黒子とは気づけない。

剣は面倒くさそうに秘書の方を見る。しかし、秘書はスマホを見るばかりで彼女の視線に気づかない。

「……おい」

声を出してようやく秘書は顔を上げた。そして彼は状況を把握する。

「ん、あれ……？ さっきの人たちで最後だったはずだけどな……見逃しあったかな……？」

状況を完璧に把握した秘書は予定帖をパラパラとめくり始めた。

剣は怒る気力も無いのか、そのまま黒子を無視してその場を立ち去ろうとする。

「ご、ごめんっ!」

しかし、黒子は立ち去ろうとする剣の背中に声をかけ続ける。

「わ、私みたいなクズに付き合わせちゃって、ご、ごめんね…? つ、ツルはいつつも明るくて、私を励ましてくれて、色々助けてくれて…。けど、私は何にも返せてなくて…。だから…ごめん…ツ!」

最後に大きく頭を下げた後、黒子はその場を立ち去る。

「えっと…? ん、あれ? さっきの人は? もう要件が終わりましたか?」

秘書が首を傾げる一方で、剣はある可能性に気づく。

（「ツル」。剣の言い淀みじゃなくて、私の事をツルと呼んだ…?）

彼女の事をそう呼ぶのは黒子だけ。

「まさか…!」

推定黒子の背中を追いかけようとする剣。しかし、二歩目で足が止まる。

（……仮に、あいつがクロだったとして何を話す? いやー、クロの立場乗っ取ってみたけどあんがい大変だねー。やっぱりすごいよ、クロは……バカか?）

友達関係はもうとっくに終わってんだよ。絶対に引き返せない所にまで……)

強く拳を握りこみ、それを見つめる剣。

（……かといって、完全に絆を断ち切ることも出来なかった。クロがああして生きているのがその証拠…）

握っている拳を開く。

（とことん中途半端だ。）

クロの友人ではいられず、剣先の当主にもなり切れず…)

剣が顔を上げると、遠くで黒子と狼牙が話している様子が見える。その最中、黒子は情けない表情を浮かべる事が多かったが、時折見せる嬉しそうな表情も浮かべていた。

それを見ている剣の表情が緩む。しかし、自分の手で殴りつけるようにして緩んだ頬を強制した。

（隣に居るのは……狼牙、だったか? 奥義を模倣出来るとかいう…。

剣先の事を考えればこちらの陣営に引き込むように仕掛けるべきだ。しかし……)

剣はどぎまぎしながら狼牙と話す黒子を再度見る。

(……もう、どうでも良いか)

それきり、彼女は舞踏会の会場を後にした。

◇

計画の口封じのために二四三様を謀殺する話の後、私と雷夢様は適当な雑談で盛り上がった。すると、そこに狼牙様と黒子様が届つて来る。

「レディの会話は終わったか？」

狼牙様の言葉に私は首肯する。

「ええ。そちらも何か用があるご様子でしたが、終わりましたか？」

黒子様に話を振ると、彼女は伏し目がちに答えてくれる。

「う、うん、終わったよ。」

……ツル、ちよつと顔色悪そうだったな……。大変、だもんね。当主はやっぱり……」

黒子様はぶつぶつと何事かを呟く。それを遮るような形で彼女に確認を取る。

「くろ……いえ、貴方様も協力していただけると聞いていますが本当ですか？」

「え、あ……う、うん。な、何より狼牙君の頼みだから……。え、えへへ……。」

皆を巻き込むわけにはいかないから私一人だけ、だけど……」

「いえ、十分ですわ。ありがとうございます」

「う、うん。ふへへ……」

「ほら、狼牙様からも」

「ありがとな」

「ほ、ほひよへ……」

私のお礼に対しては頬を緩めるだけだった黒子様だが、狼牙様のお礼に対しては、喜びの表情に加え、目をぐるぐると回しながら顔を真っ赤にして照れていた。

ひどい入れ込みようだ。どういう経緯で狼牙様にそこまで惚れ込んだのか気になる程。とはいえ気持ちは理解できる。私も性格が内気で褒められ慣れていなければ、ああいった反応を取ってしまうかもしれない。

だからこそ、彼女は決して計画を漏らしたりはしないだろう。惚れた相手を不利にするような行為はしない……というより出来ない。少なくとも私ならそう。恋心とは何とも苛烈な感情だ。

「そ、それじゃっ、私はそろそろ帰るね。もう、用は済んだから……」
締まらない表情のまま会場を後にする黒子様。

「う、にい、あ」

その時、雷夢様の猫が妙な異音を発する。

「どうした?」

「多分ですけど、毛玉を吐こうしているのではなくって?」

「……少し席を外す」

金魚鉢の中でカツコンカツコンとえづき始めた猫を片手に、雷夢様も行ってしまった。二人を見送ると、再び私と狼牙様と雷夢様の三人に。

そこで、狼牙様が辺りの様子を気にし始めた。

「狼牙様、どうかいたしましたか?」

「……いや、視線を感じるだけだ」

視線。そう言われて周りを見ると、遠巻きに私達……いえ、狼牙様の様子を窺っているような仕草が見えた。ああ、なるほど。

「大方、狼牙様の格好が場にそぐわないものなので注意を集めているだけでしよう。先ほどは雷夢様が大立ち回りをしたので、今になってでしょうね」

舞踏会おける正装は稽古着。今の狼牙様は厚手のワンピース、余所行きの服だ。姉から急にパーティーへ誘われ、精いっぱいのおしゃれ

をしてきたのだろうか、それが仇となつてしまった状態。

これも姉が私に恥をかかせようという手出しのせい。そのおかげで可愛い格好の狼牙様とデート紛いの事が出来てもいる。

「やはり視線が気になりますか？」

とはいえ、狼牙様が不快に思われるのであればすぐにでも切り上げて彼を帰そう。それで姉の恨みを買おうが、彼の気持ちを尊重する方が大事。

「少しな。けど、これぐらいで居心地が悪くなるぐらいなら、転校後の恥さらしの数々ですでに首をくくつてる」

「それはまあ……確かに」

狼牙様は転校直後、全校生徒を煽るような発言をしておきながら私に負けるという恥を晒し、負けた約束として私に首輪を付けられるという恥を晒し、二四三様と雷夢様の前では小水を漏らす恥も晒したらしい。

どれだけ恥をかいても良い。どれだけ屈辱的な目に合おうとも、生きて私の隣に居続けて欲しい。

おかしな話だ。私は彼に生を求めるのに、私は彼のためであれば死んでも良いと思っている。ひどく自己中心的。彼のためを思うのであれば、私の方こそ泥水を啜^{すす}つてでも生きべきなのに。

「…………… 柄鎖？」

いや、そもそも狼牙様は私の事をどれだけ大事に思ってくれている？ 私が死ねば狼牙様は泣いてくれるだろうか。そうであれば私が死んだ後、10年は引きずって欲しい。他の誰にも興味を持たず、毎朝私の遺影に線香を捧げて欲しい。墓参りも半年に一回は来て欲しい。

「柄鎖、急にどうした？ 頬に触れて…」

ああ、いつその事このまま生贄になつてしまおうか。素能^{エレメント}を垂れ流すだけの生体機械へと成り果てた私を前に、狼牙様はどれだけの涙を流してくれるだろうか。

コップ一杯？ それともペットボトル一本？ その重さがそつくりそのまま私への愛の重さだ。

「つか、……ッ……！」

「「おおっ……！」」

……ダメだ。彼の事を思うのであれば、私は死んではいけないのに。酷い考えがグズグズと湧き出てくる。貴方に恋をしていながら、貴方を悲しませるような妄想をしてしまう。

申し訳ありません。私は酷い女です。

「なんと……！」

「このような場で……！」

「大胆な……！」

……それにしても周りが騒がしい。一体何事だろうか？

「……柄鎖？ 何、してるのかしら？」

姉の声。それもひどく戸惑ったような。

私が何をしているのか？

いつの間にか閉じていた目を開く。すると、目の前に狼牙様の瞳があった。

………は？

遅れて触覚が働く。

唇には同じく唇の感触。左手には柔らかいほっぺの感触。右手にはごつごつとした固い手の感触が。

多分キスしている。

いや、確実にキスをしている。

しかも頬に手を添えて、余った手は恋人繋ぎをしながら。

「なッ……！」

私は飛びのき、狼牙様から距離を取った。しかし、それだけではキスをしたという事実は消えない。

「な、な、何で……!? こ、こ、こんな場所で……ッ!?」

気が動転した私は狼牙様を指差し、キスの動機を問う。

「い、いや、何でも何も…柄鎖の方から仕掛けて来ただろ……」

「わ、私イ!？」

しかし、狼牙様を指した指はそっくりそのまま私に跳ね返ってくる。

「な、な……ッ……ええ!？」

まさか狼牙様の事を思いすぎて、私の欲望が発露してしまった?
こんな公衆の面前で?

恥と愛と興奮が入り混じり、顔に血が上っていくのがハッキリと分かる。

「柄鎖、こんな公の場でこのような痴態。いったいどんな神経をしてなさるのかしら? ……いや、本当に……」

姉は私の恥をあげつらい、責め立てる。しかし、少し歯切れが悪い。彼女にとつても予想外過ぎたのだろう。

「ち、違います! 私に勝手に! 私が勝手にやっただけです!」

言い訳にすらなっていない、ただの事実が口からもれる。

「それはそうでしょうね」

姉があきれ顔で言った。その後、徐々に口角を吊り上げて私の事を攻撃し始める。

「まったく、恥を知ったらどうなのかしら。求められたのならともかく自分から。卑しいっただけならありはしない」

「いや、それは……む、無意識に……」

「まあ、無意識に! 正体を見たりといったところかしら。無意識に接吻をするほど卑しい性根が透けて見えるようだよ」

「……ッ……」

何の反論もできない。顔から火が出そうだ。

姉は狼狽する私を見てご満悦。気を良くしたまま続ける。

「まさかあのような関門の野良犬に上戸鎖の者が惚れるとは……まったく嘆かわしい。このような“つんつるてん”のどこが良いのやら……」

「それはもちろん小さくて可愛らしい所は当然としてその体で精いっぱい強がりを見せる愛らしさ加えて一緒に居てもまったく気に障らないどころか心が休まるような特別な雰囲気纏っている所ですかね」

自分でもビツクリするぐらいの早口であった。

「柄鎖……あなたそういうタイプだったかしら?」

私の豹変ぶりに姉が呆れていたが、事前に私が恥をかいて上機嫌なのか、あまり突っこむこともせず、話題を次に進める。

「まあいいわ。とにかく、貴方たちに頼みがあつて来たのよ」

「頼み、ですか？」

何にしろ、碌^{ろく}な頼みではなさそうだ。

36話 舞踏会4

「ここにいる狼牙さんは異能学園に転校して1年も経たずに学内ランキング2位に駆け上がったという噂を聞きましてよ。非常に将来有望そうではありませんか」

視線を向けられた狼牙様は少しだけ緊張した面持ちに。

「その実力の一端を是非見せていただきたいと思ひまして。都合よく、舞踏会に参加していることですし、一曲踊っていただけられないでしょうか？」

踊りと戦闘の実力。一見関係無いように思えるが、実は相関関係がある。戦いも踊りも型を学び、それを状況に合わせて適切に披露するという部分は共通している。そのため、実力者は踊りにおいても高いパフォーマンスを発揮する傾向にある。

しかし、それはあくまで踊りの基本を学んでいる場合に限る。いくら戦いと踊り、双方に通じる所があるとはいえ、まったく踊りの練習をしていない狼牙様においては当てはまらない。いきなり踊れと頼まれた所で流石に無茶振りが過ぎるといふものだ。

まあ、姉は無茶振りをして狼牙様が恥を晒し、そんな彼を招いた私を糾弾するというのが狙いなのだろうか。

「お：わ、私がですか？ …分かりました」

急な頼みにやはり困惑している様子 of 狼牙様。しかし、一人称を変え、更に敬語を使ってほとんど間を置かずには承する。

狼牙様がすぐに首を縦に振るとは思っていなかった私は驚いて狼牙様に詰め寄った。

「狼牙様、踊れるのですか？」

「一応。さつき暇な時間に他の奴の奴の踊りを見ていた」

「なるほど、模倣されましたか」

それであれば模倣した人の実力にもよりますが、恥をかくとまではいかないはず。無難に切り抜ける事が出来るだろう。

「曲は分かりますか？」

「確か くくくく♪ みたいな感じの…」

突然の鼻歌にキョンとさせられつつも、曲名は分かったので楽団にそれを依頼する。

「とはいえ、その恰好で踊れそうですか？」

「スリットを入れればなんとか…」

狼牙様は厚手のワンピースのスカート部分に手を掛けるが、そこで動きを止めてしまった。私に買って貰った物だからと遠慮しているのだろうか。

「また今度買いに行きましょう」

「……悪い」

狼牙様はスカート部分を手で裂き、動きやすい格好に。スリットから覗くタイトの足が艶めかしく（男性にこの表現もどうかと思うが）、少し目線に困ってしまう。

狼牙様は舞台上に登り、構える。

「皆様ご注目。異能学園のランキング2位が踊りを披露してくださいませようですね。さぞかし素晴らしいモノをみせてくださるのでしょね」

一方で姉は周りに喧伝し、なおかつハードルを上げていた。

「姉様。狼牙様は戦いには心得がありますが、踊りに関してはてんで素人です。合格基準を引き上げるような印象操作は……」

「さ、始めてくださるかしら」

私の抗議に被せるように、姉が手を鳴らして楽団に指示を出す。ほとんど間を置かずに演奏が始まった。

仕方なく私も舞台の方に目を向けると、曲の始まりに合わせて狼牙様が舞う。異能者シンギュラリティが集まる舞踏会で踊られるのはワルツやタンゴといったダンスでは無い。空手などの武道に見られる演舞に近いもの。そのため稽古着が正装とされているのだ。

演舞とは武道の流派における型の繋ぎと流れ。狼牙様は正拳突き以外の型を持たないため、演武を行うのは難しい。しかし、今は暇な時に見学したという誰かの演武を披露してくれていた。それはまさに、我が上戸鎖家かみとくさりの演武で………え？

なぜ、狼牙様が上戸鎖家の演武を……？ 決まっている、彼が見学

したのが上戸鎖の人間の演武だったのだろう。とはいえ、あれを舞踏会で踊るのは父と母、それから兄と姉ぐらいのものなのだが…。

そこで隣から姉の視線を感じた。私と目が合うと不服そうに目を逸らす。

「いつの間に教えたのやら……。門外不出と言うわけでは無いけれど、口が軽くありません事？」

姉の中では私が狼牙様に演武を教えたことになっていているらしい。しかし構え等は教えたものの、演武に関しては全く教えていないし見せた事も無い。

などと考えている間にも、演武は進む。曲調に合わせてテンポを変えながら次々と型を繋げる狼牙様。多少の粗あらが目立つものの、十分及第点の踊りだ。……粗あらすらも模倣したのであれば、模倣元は恐らく……。

数分して曲が終了した。狼牙様は最後のポーズから気まずそうに目を彷徨わせ、小さく頭を下げる。すると、辺りからはまばらに拍手が上がった。

拍手をしていない人は「こんなものか」という表情。恐らく、異能学園で2位に上り詰めた人物の舞踊にしては物足りなかったのだろう。

拍手をしている人も微妙な表情を浮かべている。まるで、接待でしようがなく褒めている時の様な。

そんな中、姉が声を上げる。

「柄鎖から舞踊を習った割には随分とお粗末なモノを披露してくれましたわね」

「え……いや、しかし……」

及第点の舞踊にケチをつける姉。それに対して狼牙様は明らかに戸惑った様子。それもそうだろう。

「舞踊と言うのは『微びに入り細うがを穿うがつ』必要があつてよ。先の貴方の舞踊ときたら何なのかしら？」

「姉様。十分及第点の舞踊ではありませんでしたか？ それ以上追及するのは……」

「貴方は静かにしていなさい、柄鎖」

私の忠告にも耳を貸さない姉。ならばもうしようがない。姉には特大ブルーメランを投げてもらおう事にしよう。

「指の先まで神経が行き届いていない時もあれば、ステップが僅かにまごつくときもありましたわね。まるで踊ることに夢中で映えを意識していないようではありませんか。その程度の踊りでこの舞踏会の舞台に良く立てたもので……」

「墓穴を掘るのはそれぐらいにしておけ。お前だけじゃなくて俺達家族も入れるぐらいの大きさになるぞ」

したり顔で饒舌に語る姉を制止する兄。私の忠告は無視する姉だが、兄の言葉には多少従順らしい。

「な、なんですよの兄さん。それに墓穴って……」

「お前が貶けなしていた彼の舞踊はお前の舞踊だからだ」

「は……？ それはどういう……」

兄はくつくつと笑いながら狼牙様の事を指差した。

「君、狼牙と言ったかな？ 模倣しただろう、愚妹の舞踊を」

「……それは……」

「まあ、言いづらかろう。さっきこの馬鹿が随分と貶けなしていたからな。君が模倣したと認めてしまえば、その罵倒は全て自虐となって返ってくることになる」

「ん、な……ッ！」

目を見開く姉。兄は楽しそうに続ける。

「とはいえ、狼牙君が認めなくともさっきの舞踊は間違いなく、連歌れんかの舞踊を真似たものだ。それも完璧にな。さっき拍手してくれた人も、模倣を見抜き、その上で拍手をしなければ連歌れんかを貶おとしめるも同義と分かっている行為」

姉が周りの客を見ると、何人かが視線を逸らす。加えてヒソヒソと話声が聞こえてきた。恐らくは姉についての話だろう。

周りの雰囲気を感じ取った姉は、顔を真っ赤にしながら親指の付け根を噛んでいた。どうしようもない時に出る姉の悪癖だ。

一方で狼牙様は緊張した表情を浮かべている。恐らく、姉の舞踊を

模倣すれば姉から難癖を付けられる事もなく無難にやり過ごせると考えたのだろう。それがこのような事態に発展したのだからそれも仕方ない。

「そう緊張するな、君に責はないさ。全てはこの馬鹿妹が勝手にやった事。気にする必要は無い。」

それよりも、だ。恐らく一度見ただけで動きを模倣する君の才。私と似ている……興味を湧いたぞ」

兄は新品の玩具を買って貰った子供の様な表情で、狼牙様に詰め寄る。

……失念していた。兄は何より自分と同じ才ある者に目が無い。一目見た動きを模倣できる狼牙様に興味を抱くのは必然だ。面倒なことになってしまった。

「前にも話だけは聞いていた。転校初日に柄鎖と決闘騒ぎを起こし、最終的には負けたものの、金剛不壊こんごうふえを貫く技を持った生徒がいる、と。

君が良ければ、ぜひ披露していただきたいのだが」

「披露、ですか？」

「ああ、簡単だ。私に向かってその技を放てば良い」

「……その。お恥ずかしい話ですが、その技は手加減が効かず、怪我をさせてしまう可能性が……」

違和感。手加減が効かないというのは変だ。雷夢様との決闘時、狼牙様は手加減した正拳突きを放っていたはず。断る口実にするためだろうか。

「心配しなくとも良い。私の金剛不壊は柄鎖より硬い。安心して本気で打ってきたまえ。」

なんなら怪我をしても問題無いよう、治療の素能エレメントが使える者も備えさせよう。本気を見せて貰わないと意味が無い」

「……わかり、ました」

狼牙様は了承こそしたものの、固い表情を浮かべている。止めた方が良いでしょうか。しかし、止めた所である兄が素直に引き下がるとも思えない。こうと決めたら融通が利かない悪癖は早めに治して欲しかった。

私が二の足を踏む間に、狼牙様が兄の前で構える。

「……いきます」

その声の直後、正拳が放たれ、兄の腹を狼牙様の拳が打つ。しかし、全くの無傷。傍から見ていても、狼牙様の正拳にはいつもの重さとキレがなかった。周りのギャラリーも拍子抜けしたのか、ざわざわと騒がしい。

「……手加減は不要だと言ったはずだが」

兄の声が幾分か重くなる。その声に対して狼牙様が幾分か顔を青くする。

やはり、何かがおかしい。

「兄様。狼牙様は体調が優れないご様子。ここは一旦仕切り直して、また後日にでも……」

「黙っている、愚妹が」

仲裁しようとするが兄は耳を貸さない。しかし、そこで狼牙様が口を開いた。

「……愚妹？」

疑問形のイントネーション。兄が答える。

「これといった才能の無い妹……愚妹と言って差し支えないだろう。何を疑問に思う？」

「金剛不壊の無意識化はどうなんですか？ あれは才能によるものではない？」

「あれか。あれぐらい日常的に修練を積みれば誰でもできるだろう」

「ということは柄鎖のお兄さんも出来るんですか？」

「俺は出来ん。する必要も無い」

「……やった事も無いのに、誰でも出来ると主張するんですか？」

「当然だろう。時間をかければ大抵の事は誰でも出来る。以下に時間をかけずして物事を習得できるか、また、その習得の深さで才能というのは評価されるものだ。」

一目見ただけで動きを真似できる君や、私の様な人物が天才と評価されてしかるべきだろう」

「……そうですね」

狼牙様の最後の言葉は酷く投げやりで、とても同意の言葉とは思えなかった。

「そんな事よりだ。早くお前の本気を見せろ。さもなくて……」
「どうなりますか？」

「言わなくても分かるだろう。頭がお花畑で無ければな」

「……」

「そう暗い顔をするな。私のお眼鏡にかなったのだ。むしろ有難がるべきだろう」

「……そうですね。逃げ道を塞いでくれて、本当に有難いですよ」

狼牙様の妙な物言いに兄は眉をひそめた。その間に狼牙様は再び構える。

その時、私の頭にある可能性が浮かぶ。それは突拍子も無い考え。

狼牙様は昔、正拳で父を殺してしまった事がある。その事が精神的なリミッターとなり、人に放つ時だけ無意識に手加減してしまっていたのなら。

「これで、私は貴方を本気で殴らないといけなくなった」

しかし、最近になって狼牙様の内面に変化が生じ、そのリミッターが外れかけ、そのせいで手加減に手こずっているのだとしたら。

リミッターが緩んだ今の狼牙様は、人間に対して本気で正拳突きを放てることになる。彼が転校してきてすぐ、修練場の壁をぶっ壊した時の威力を人に向かって放てることになる。私が目を疑ったほどの威力を、兄に向かって放てることになる。

「——即死しても、文句は無しだぞ」

瞬間、兄が消えた。遅れてソニックブーム。衝撃波が辺りの物を手当たり次第に吹き飛ばす。

直後、壁に大穴が。轟音と共に会場が軋む。

ギャララーは誰一人として言葉を発していなかった。目の前で披露された殺人的な威力に息を呑むばかり。

「親父、一段落したら墓参りに行くよ」

ポツリと呟いた狼牙様は、悲しさの中にどこか覚悟を感じさせる表情を浮かべていた。

「……キツ、救護に向かえ！」

「早くしろ！」

遅れて治療班が壁の穴の方へ駆けていく。それを横目に私は狼牙様の元へと寄った。

「…悪い」

「どうして謝るのですか？」

「いや、成り行きとはいえお前の兄貴をぶっ飛ばしちまって…。悶絶する声は聞こえるから死んでは無いけど…」

「別に構いませんわよ。あんなの」

「あんなの、って…」

「あんなの」は「あんなの」ですわ。血が繋がっているだけの「あんなの」

私が兄を「あんなの」扱いしていると、狼牙様は戸惑ったような表情に。

「……血の繋がりがりつてのは、必ずしも大切なものじゃないんだな」

「一般的には大切なのでしょうけどね。私や……他には雷夢様が特殊なだけかと」

そこで後ろの方が騒がしくなる。振り返ると、兄がフラフラと揺れながらもしつかりと両足で地面に立っていた。

「絆はんと十様！ 治療した直後です！ あまり無理を為されては…！」

医療班の制止も聞かず、兄は狼牙様を指差す。

「久しく味わったことのない痛み……堪えがたかったぞ。俺が模倣する価値のある良い技だった…。」

俺だけが君の技を真似るのも不公平というものだ。俺の技も何か一つ見せようか？」

「…いえ、代わりに壁の大穴を弁償しておいてください」

「俺の命令で空いた穴だ。元からそのつもりさ。まあ、君がそう言うのであればそうしておこう」

そこで狼牙様は辺りを見回す。それに釣られて私も当たりを見回すと、他の招待客たちがざわざわと騒がしい。

「…お騒がせしました。そろそろ、お暇させていただきます」

小声で断りを入れた狼牙様は、会場を逃げるように後にする。確かにここが引き時として丁度良いかもしれない。

「私は狼牙様を送ってまいります」

私も狼牙様の後を追う。後ろから姉の声が聞こえたが、スルーさせて貰った。

会場から出る途中、雷夢様とすれ違う。

「もう帰るのか」

「ああ。少し騒ぎすぎた」

「お前の仕業か。外まで音が聞こえてきた」

問答もそこそこに、狼牙様は雷夢様と別れて外に出てしまった。私もその後を追う。

その間際、雷夢様とアイコンタクトを取る。二四三様^{ふしみ}を暗殺するという約束を忘れないよう。

37話 執事とメイド

^{いかづち}雷家。現在は御三家に数えられる程の大きな権力を持った一族。古来より大きな権力を持つ者は、その力を分かりやすく示すために多くの使用人を雇った。

当然、雷家にも多くの使用人が仕えている。使用人が多ければ、それを取りまとめる長が必要だ。今回の舞台はメイドや執事をまとめる5人のメイド長・執事長が集まる？部屋。その実態を見ていこう。

◇

部屋の真ん中にある円状のテーブル。そこでは3人の執事・メイドが等間隔で椅子に座っている。テーブルの上には複数の写真が無造作に広げられていた。

「……………」

重苦しい沈黙。3人のうち2人は敵意すら抱いているのではという程の睨み合いを繰り返している。残りの一人はオロオロと視線を彷徨わせていた。

「僕のが絶対一番」

そう言うのは子供と見紛^{みまご}うばかりの小さな小さな青年。あだ名は「リッチ」。ファンタジー作品に出てくる死^{リッチ}霊術師^チが由来だ。

「は？ ワイのが一番に決まっとするんやが？」

続いてネット掲示板で義務教育を終えてそうな口調で話すのは、これまた背丈の小さな執事。あだ名は「ブリンク」、または「ハゲ」、もしくは繋げて「ブリンクハゲ」。あだ名の通り、彼の頭頂部には一本たりとも毛が無い。綺麗な卵型の頭部だ。ちなみに、ブリンクは「瞬き」が語源となっている。

「ガルーはどう思う？」

リッチが残りの一人、巨軀とそのガタイに見合った大きな脂肪の塊を胸部装甲として携えるメイドに話しかけた。メイドのあだ名は「カンガルー」、縮めて「ガルー」。

「い、一番を決めるとなると……その、ハゲさんののは、とても良いですし、リッチさんののも非常に良くて、けど、私のも、すごい良いので……難しいです、はい」

ガルーは非常に歯切れの悪い言葉で返事をする。彼女の優柔不断さはいつもの事だ。話を振った自分が悪かったと、リッチが反省するほど。

「罫が明かないね……このままじゃ、雷夢様の隠し撮り写真でどれが一番素晴らしいのかが決定できない」

この使用人達、あろうことか自らの主人の隠し撮りをした上、その品評をするという始末。

しかし、それも仕方ない。雷家のメイド長・執事長は代々、雷家の者達の中から自らの「推し」を決め、その人物をとことん応援しているのだ。まるでアイドル活動のように。

メイド長・執事長たちはそれぞれ自由に推しを決める事ができるが、今代は雷夢に人気が集中している。

「カツコよさという一点においては僕の写真が一番だよ。瞑想している瞬間。」

瞑想は最近し始めた稽古だけど、「動」の動きが多い雷夢様には珍しい「静」の時……。尊ぶ尊ぶ：自分の好きな人物、または二次元のキャラクターに心を動かされた時に使う「遠い」の変形形。…」

胸の前で手を組むリッチ。頷くハゲとガルー。

とはいえ、ハゲがリッチに反論する。

「エアプ※2エアプ：「エアプレイ」、体験をしたことが無いの意味。」「乙」と合わせて、主に未経験者や習熟度が低い人への煽り文句として使う。ここでは単に、「お前はまだまだ分かってない」程度のニュアンス。乙。最近の雷夢様であれば、ほんのわずかバリエーションの増えた表情に着目するべき。猫が初めて毛玉を吐いた時のややビツクリ顔。これで決まりや。」

それにリッチの写真は逆光で撮つとるから少し暗くなつとる、論外や。ワイヤガルーみたいに順光で撮るのが無難やで。特にお前みたいな素人はな。ちなワイ、高校の時写真部」

したり顔で話すハゲに、歯を噛んでイラつくリッチ。そこでガル―が口を開いた。

「……あの、私のは一応、逆光で撮ってます…。補正をかけてるので、明るくなってますけど……」

「……」

「ほぅ？」

申し訳なさそうなガル―。黙るハゲ。口元をニヤつかせるリッチ。

「あれ？ ガル―は逆光で撮ったらいいですけど？ なーにが順光だって？」

「……」

「順光、逆光も分からないような腕で無難だの素人だの語ってたってマジ？」

「……」

「ん？ 高校の時、何部だって？ ちょっと耳遠くて聞こえなかったんですが」

「写真部のワイの目をもつてしても見抜けへんぐらいガル―の撮り方が上手いってだけや。それよりお前の方がヤバいんやないか？ それだけ耳が遠いなら耳鼻科にでも行ってこいや」

「はあ!? 耳が遠いってのはただの煽り文句です！ それを真に受けるハゲの方がヤバいに決まってます〜！」

「は？ お前は人を煽るような人間性やったんか？ ワイはガツカリやで。こんなのと一緒に働かないかんとは……」

「お前の方が先に煽って来ただろう！ どの口でほざく〜！」

「ワイは今も昔も事実しか言わん。煽られたように聞こえたお前の心が荒^{すざ}んどるんやで」

「誰の心が荒んでるって!?!」

「お、どうした？ 具体的な反論が無いならワイの勝ちやが？」

二人の口論がヒートアップする頃、部屋の扉が開かれた。そこから一人のメイド長が入って来た。

背丈は成人女性の平均程度。細身で黒髪をツインテールにまとめている。そして何より特徴的なのはクラシクなメイド服をフリル

やりボンで現代風に改造していた。あだ名は見た目通り「ツイ
ンテール」。

「なに言い争ってんのよ。ま、どうせハゲの虚言癖か煽り癖か論点ず
らし癖が出たからだろうけど。リッチもこの馬鹿とわざわざ付き合
わない。会話っていうのは知能と知識に差がありすぎると成立しな
いんだから」

「ま、その通りやな。これに懲りたらもつと程度の低い相手と話すこ
とや」

「なんでお前が上みたいなの言いなんだよ!」

「だから付き合わない。論争になったら上げ足獲る事しか考えてない
んだから、そのハゲ」

「ぐ、ぐぐぐ……!」

ツインテールに制止されたリッチは何とか怒りを収める。そして
話は写真の件に戻る。

「それでガル、元々は何の話をしてたの?」

「えつと、この写真の中で、どれが一番素晴らしい写真かを議論してい
たんです……」

「どれどれ……」

ツインテールが視線をテーブルに落とす。しかし、その瞬間彼女は
奇声を上げて仰け反った。

「くきいいいイイツ!!!」

すぐさま耳に手を当てて、床に転がり込むツインテール。

「私の前で雷夢様の話をするなアア!! 脳がツ! 脳が壊れ
るウウウツツ!!」

「出たよ、ツインテールの同担拒否同担拒否・自分と同じ対象を応援す
るファンと交流を持ちたくないという姿勢。」

「発狂してて草草: “笑った”、 “面白い” を意味するネットスラン
グ。」

呆れるリッチとハゲの一方で、ツインテールは床を転がり続ける。

「私のツ! 私の超愛する尊き雷夢様は私だけの主人ツ! 偶像ツ!
あいせろ

押しッ!! それを私以外の奴が口にするなツ!

私が信じる雷夢様が穢れるッ！ 侵されるッ！ 解釈不一致可能性解釈不一致可能性!!」

「なんでこんなに拒否反応出るんだろ…」

「嫉妬や、これだけは間違いない。推しをまるで自分の物みたいに思つとるから、横からちよつかい出されると気持ち悪くなるんやろ」
「な、難儀ですね…」

「わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。!!」

ツインテールは自分の口に手を当てたり離したりを繰り返しながら奇声を発し続ける。他の人間の声を耳に入れないようにしつつ、立ち上がり、テーブルの上の写真を吟味し始めた。加えて、空いた手でポケットから耳栓を取り出し、自分の耳に詰めている。

「わ。わ。わ。わ。これとこれとこれ!! カラー印刷よろしく!! 電子データも!!」

テーブルの写真を高速で指差した後、ツインテールは再び床に倒れ込んだ。そのまま地面をはいつくばり、部屋の隅っこでうずくまってしまった。

「ちゃんと貰う物は貰うんだ」

「オタクの鏡」

「でもしようがないですよ。写真、良く撮れてますし…」

そこでもう一度部屋の扉が開く。入ってきたのは、舞踏会でライムの側に控えていた執事。身長は180cm程度、茶髪をラフなオールバックにまとめしており、顔つきは端正。執事服が良く似合うイケメンだ。

あだ名は「リーダー」。由来は5人の執事長・メイド長の中で更に長を務めているため。

「お前ら騒がしいぞ。たまに収集かけりや、すぐこれだ」

リーダーは雷夢の側に控えていた時とは打って変わって乱暴な口調で、4人を叱りつける。

「これから仕事の話だったのに…おら、テーブルの上すぐに片づ、けて…」

テーブルの上の写真を見た途端、リーダーの動きが止まった。

「おがああアアツツ!!!」

瞬間、頭を押さえて絶叫する。

「な、なんツ！ なんだツ、その写真はああアツツ!?」

リーダーが指差す写真。それは雷夢がお腹の上に猫を乗せ、リラツクスしている光景が写っている。

「あ、これですか…? 良いでしょうか? 私が撮ったんで…」

「それだけじゃなアイツ!! それも、それも! それもそれもそれもツ!!」

リーダーが指差していく写真。

猫を撫でる雷夢。猫を吸う雷夢。猫を洗う雷夢。そのどれもが、限りなく仏頂面よりの笑みを浮かべている。

「か、可愛いですよね……。すぐく柔らかい表情を浮かべていて……」

「するわけないだろう! そんな顔を! 雷夢様が!!」

目を見開いて、ガルルーに詰め寄るリーダー。

「雷夢様はもつと残忍で暴虐で非道で無常で惨たらしくなくてはいけないツ!!」

「え、ええ……?」

「何かこっちも始まった……。リーダーはこの中で一番まともだと思っていたのに」

「自分の理想を押し付ける厄介オタクで草。本性表したね」

野次を飛ばすハゲを無視して、リーダーは続ける。

「俺は雷夢様が幼い頃から執事として傍に仕えてきた…。だからこそ分かる!」

雷夢様は「悪」だツ! それも性善説や性白紙説を真つ向から否定する真性のなツ!! しかし力が無いばかりに周りの子悪党共に抑圧され、雷夢様の「悪」は復讐というノイズに汚されてしまったのだ…。

その時の俺の悲しみがわかるかツ!? ええ!?

「え、ええ……」

「利いた風な口をきくなーツ!!」

「ええつと」と困惑の言葉を話そうとしたガルルーだが、言い切る

前に「ええ」という肯定の言葉のタイミングで割り込まれてしまった。

「絶望の最中にいた俺だが、それでもくじけずに雷夢様の側仕えを続けた。いつか真のお姿を取り戻すと信じて……。そしてつい最近！ ついに復讐という化けの皮を剥いだ雷夢様は真の姿を取り戻されたのだ！ それも抑圧されている間に熟成された濃厚で馥郁^{ふくいく}たる悪を携えて!!」

「は、はあ……」

「しかし、それも一瞬の事だった……。俺がウキウキで仕事をしている最中、ちよつと目を離れた隙に何故か知らんが雷夢様の雰囲気^{きふき}が穏やかなものになってしまっていたんだよッ！」

そこでリーダーはガルーから手を離し、壁に頭を打ち付け始める。

「あのクソガキがああッ！ 雷夢様のストッパーになりやがって！」

あのアマもッ！ 医者崩れも国語の教師もッ！ ダメなんだよ！

雷夢様は他人との繋がりが無くても生きていけるんだよッ！ 悪行を喰って生きていけるんだよッ！ 仙人の粋に達していなきやダメなんだよッ！」

「…何か良く分からないけど、邪魔な奴がいるなら排除すれば良いんじゃない？」

「バカか!? 俺みたいなの他大勢のクソザコボケモブが雷夢様の周りを取り巻く環境に己の意志でメスを入れる事が許される訳ないだろう!? 命令されたのならともかくッ！ もう少し考えてモノを言えよ!!」

「更に厄介オタクで草」

「くそ……くそくそクソッ！ あの害獣もそうだ……ッ！ あの生ごみを飼い始めてから雷夢様の表情が柔和になってしまった……ッ！ 許されるなら焼却炉で今すぐ丸焼きにしてやるのにッ……！」

「ええ……。でも可愛くないですか？ 猫ちゃん……。雷夢様も優しい表情で……」

「キエエエエツツ!!」

リーダーはガルーの手から写真を奪い取り、粉微塵に引き裂いた。

「はあッ…はあッ…はあ…。」

だが、それも今日までだ…！ 俺達が行う仕事が！ 雷夢様を純粹な悪に引き戻してくれるだろう!!」

「僕たちの仕事が？ ……内容を聞いても？」

リーダーは胸元から写真を取り出し、テーブルの上に叩きつける。それは五文銭ごもんせん 二四三ふしみの顔写真。

「こいつの暗殺が俺たちの仕事だ。察するに、何かデカイ抗争の前触れらしい。」

もし抗争が始まれば、血に酔い、暴力に溺れた雷夢様は血の海の中で我を取り戻してくれるだろう！ 俺の理想とする悪が帰ってくる……ツハハハハハハ！」

「あの厄介オタクは放っておいて、仕事の話をしよう。ツインテール、耳栓してないでこっち来て」

リーダーを除いた4人が席に座り、真面目な話を始める。

「目標の素性は？」

「写真の裏にプロフィールがあるわね。異能学園所属の五文銭ごもんせん 二四三ふしみ。学園ランキングは121位…」

「異能学園所属とはいえ、121位程度の奴に僕たち全員を招集する必要あったの？」

「最後まで聞け。…ランキングの割には、周りの生徒からは一目置かれてるように見られる。ランキングと実力が見合っていない可能性大。」

備考：情報収集の際、こちらの尾行に気づいていた。また、その上で見逃されたため要注意…だった」

「ウチの諜報役って結構優秀だったよね？ 元暗殺者のガルーが教育・監修してるし。それを見破られたってのは……それ以外の事が分からないってのも気持ち悪いね」

「あ、あの…。」

そこで、ガルーがおずおずと手を挙げた。

「その、二四三ふしみさん……いえ、蝦蛄シヤコさんの過去なら、わ、私、知ってます…。」

「そうなの?」

「は、はい…。二四三ふしみさんは、私と出身が同じなんです…。悪夢ナイトメアって
いう暗殺集団の…」

「意外と世界狭くて草」

「ハゲうるさい、ネットスラングで喋るな気持ち悪い。…とにかく、尾
行に気づかれたのはそういう理由ってわけね…。それで、蝦蛄しゃこっての
は?」

「その、悪夢ナイトメアでは奥義とか、戦闘スタイルによって動物のあだ名がつ
けられるんです…。私なら袋鼠カンガルー、二四三さんは蝦蛄シヤコって呼ばれてま
した…」

「ふーん…。それなら話が早いじゃない。二四三について知ってる事
を全部話さないよ。それで随分仕事が楽になる」

「それが…。その、良く知らないんです…。あまり関りが無かったです
し、二四三ふしみさんは単独任務が多かったですから…」

「ったく、結局ほとんど情報が無いのは変わらないじゃない…」

「す、すみません…。けど、二四三ふしみさんは悪夢ナイトメアの幹部をほとんど皆殺
しにして、それから組織を抜け出したので強さはかなりのモノかと
…。不意打ちとか、込みにしてもです…」

私も幹部でしたけど、仕事で留守にしてなかったら、多分殺されて
ましたし…」

「なるほどね、ガルーより強いってんなら5人がかりなのも頷ける。
結局は出たとこ勝負な感じ強いけど」

その時だ。あまり話していなかったハゲが、突然懐から写真を取り
出す。それをリーダーの方に指で弾き飛ばした。

「なんだ!? また捏造写真か!」

受け取った瞬間、写真を破こうとするリーダーだが、チラリと見え
てしまった写真の光景に思いとどまる。

「これは、俺が雷夢様の世話してる時の写真…? いつの間に…。い
や、それより、まさか…ッ!」

息を呑むリーダー。何事かと詰め寄るリッチとガルー。

「ウキイイイッツ!!」

…、肩こりに効きそう…」

しばらく壊れ続けるリーダー。しかし、突然止まった。そして一言。

「……死のう。この任務が終わったら迅速に…」

「草」

「笑いごとじゃないでしょ…。まあ、死ぬなら介錯はやったげる」

「だ、ダメですよ…命は大事にしないと…」

「元暗殺者、特大ブーメランぶつ刺さりで草」

「し、仕事以外で殺した事はないですよ…」

3人がじゃれる一方で、リーダーはぽつぽつと独り言を始めた。

「……雷夢様の世話をしている時は、推しを前に冷静な観察眼を失っていたから気づかなかった…。まさか俺みたいなクソゴミボケカスが、雷夢様に安寧を与えてしまっていたとは……許されない…許されない許されない!! うびよびよびよびよツ!!」

再び痙攣するリーダー。そんな時、部屋の扉が開かれる。

「喧しい」
やかま

入ってきたのは雷夢本人。推しを目の前にして全員が姿勢を正す。部屋の隅っこで耳栓をしていて雷夢の声が聞こえないであろうツインテールや、鬱になりかけていたリーダーでさえも。

「特にお前、何を騒いでいた」

雷夢がリーダーに視線を向けると、彼はハッキリと答える。

「己の愚かさを認識し、自殺を考えていた所です」

「死ぬのか？」

「ええ。任務が終われば暇をいただきます」
いしま

「……そうか、寂しくなるな」

そう言うつて僅かに眉を下げる雷夢。ガルーはポケットの万年筆型カメラを起動させ、その表情を撮影した。自分以外の人間にアクションを起こす雷夢を見て、直立不動のまま痙攣を起こすツインテール。
ひきつけ

そしてリーダーは自己矛盾を目前に見せつけられ、再び自我を崩壊させかけていた。しかし雷夢の手前、ギリギリのところ意識を保

つ。

「……もし自殺が思い付きなら止めろ。後任を選ぶのも面倒だ」

雷夢はそれだけ言い残して部屋を去っていった。扉が閉じた瞬間、同担過多で卒倒するツイントール。リーダーは思い付きの自殺を止められ、呆然と立ち尽くす。

「推しに迷惑をかけたまま生きろと言うのか……なんて、惨い事を……」
そしてよろよろと近くの椅子に倒れ込むが、しばらくして再起動を果たすリーダー。

「俺に対してこれ以上ない惨い仕打ち……そうか……雷夢様の『悪』はまだ潰えていなかった……？」

「何か自分に都合良い解釈始まった」

「そうだ……雷夢様が私の心配なんかするはずがない……。さっきの発言は雷夢様が勝手に言ったただけだ……そうに違いはない……！」

「公式が勝手に言ってるだけオタクの爆誕に草を禁じ得ない」

「雷夢様の悪はまだ消えていない……。必ずやこの抗争で息を吹き返すはず……！　そうと決まれば早く任務を成功させるぞ、お前たち！」
かくして、二四三暗殺作戦は決行されることとなる。

※1 尊ぶ：自分の好きな人物、または二次元のキャラクターに心を動かされた時に使う『遠い』の変身形。

※2 エアプ：『エアプレイ』、体験をしたことが無いの意味。『

乙』と合わせて、主に未経験者や習熟度が低い人への煽り文句として使う。ここでは単に、『お前はまだまだ分かってない』程度のニユアンス。

※3

※4 草：『笑った』、『面白い』を意味するネットスラング。

38話 作戦

最近の事です。なぜかは分からないのですが、つけられ始めました。それも尾行の仕方はどこか覚えがあります。古巣からの刺客でしょうか。抜け忍の始末…にしても今更な気がします。

とはいえ、丁度良かったのです。最近は後ろめたい気持ちになる事ばかり…そろそろ過去の清算をする時が来たのです。

◇

尾行がいなくなってから数日、仕掛けてくるならそろそろでしょうか。新月の真夜中。私は特に用事も無いのに登山を初めました。

学園寮の裏山、頂上には街灯が一つとベンチが一つ。野ざらしのまま整備もされていないボロボロの椅子に座りました。眼下には、学園寮と学園の灯りが二つほど見えるのみで、後は山ばかりです。

…見納めの景色にしては少し寂しいですね。

そう思った瞬間なのです。唐突に私の背後に人が現れました。瞬間移動の素能^{エレメント}でしょうか。

迷わず繰り出される延髄蹴り。癖で柳雪折無^{りゆうせつむ}を発動しかけたのを意識的に止める。直後、足が私の頭を蹴り飛ばし、首が折れた。死ぬ間際特有のスローモーション。

勝手に殺して、それが重荷になれば勝手に死ぬ…ああ、やっぱり私は最低最悪のクズなのです。

それにしても、刺客の人はいったい何の目的で私を殺しに来たのでしょうか…気になります。死ぬ前に嫌な疑問が残っちゃいました。

…ああ、そろそろ気が遠くなってきました。痛みを感じる前に死ぬそうです。中々良い腕しているのですよ、刺客さん。

意識が途切れる寸前。

…ちよつと、違う気が……する、のです…

一旦、私は意識を手放しました。

◇

プルルルル……ピッ

「ただいま仕事が終わりました」

「死体は？」

「回収済みです。これから息のかかった火葬場で燃やそうかと。雷夢様も確認に来られますか？ 海に散骨しようと思っっているのですが」

「分かった、すぐ行く」
ブツツ、ツーツーツー……

◇

静かな惨劇があった次の日の異能学園1年A組ホームルーム。

「はい、点呼を取りますね。今日休んでるのは……また五文銭ごもんせんさんですか。誰か、彼女の行方を知りませんか？」

先生の声を受けて、クラスの中が少しざわつく。しかし、先生の問いには誰も答えない。

「はあ……また無断欠席ですか。今度はいつ帰って来るのやら……」

フシみんの欠席は定期的にある事のため、誰も疑問に思わない。何事も無かったかのように一日が進んでいく。

◇

その日の放課後、狼牙、柄鎖、雷夢、黒子、それと執事長・メイド長の5人が集合していた。計画の打ち合わせを進めるためだ。

「……にしても、他に場所は無かったのか？ 柄鎖つかさの修練場とか、雷夢らいむの実家とか、最悪誰かの部屋とか……」

彼ら彼女らがいるのはカラオケ屋の一室。そこに学生とメイドと執事が集合しているものだから絵面が凄い。ギリギリ、コスプレ集団として通らなくも無いかもしれない。

「私の修練場には上戸鎖かみとくさりの人間がいますし、雷夢様の実家も完璧に一枚岩でありません。そして、学生寮にメイドと執事を呼ぶのも変に目立ちます。という事で外部のどこか、それも大人数が集まっても不思議ではなく、尚且なおかつつ急な集まりですので事前の予約が必要でない場所……。

その条件を満たす場所が思いつく限りでカラオケぐらいしかなかったのですが……。9人が一遍いっぺんに集まるのではなく後から合流という形で、外から見ても自然に集まれますし」

「でも、カラオケには防犯カメラが付いてるって話だぞ。……ほら、そこにあるし」

「音声は拾っていないので問題ありません。話の内容さえ聞かれなければ良いのですから。……いえ、仮に話の内容を聞かれたとしても、普通の人からしたら荒唐無稽こうとうむけい。ゲームか創作物の話と勘違いされるだけでしょう。

全員、カラーコンタクトを入れているので異能者シンギュラリティともバレていませんし」

柄鎖が狼牙を納得させた後、続けて本題に入る。

「さて、本日はお集まりいただきありがとうございます。皆さんご存じかと思いますが、私は1年後に禁断箱バンドラボックスの生贄にされる予定の上戸鎖 柄鎖と申します。この度は私が生贄にならないための計画についてお話させていただきます。

なにぶん私だけで考えた計画のため、至らない部分があるとは存じますが、ご指摘いただければ幸いです。何か質問がある際も遠慮なく聞いてくださって結構です」

そう前置きをして柄鎖は話し始めた。

「まず、一番最初に思いつき、そして一番悪手だと思われるのが“話し合い”です。私を生贄にしないように嘆願します。方法として“感情に訴えかける手法”と“論理的に説得する手法”の二つがありま

すが……まあ、どちらでも無理でしょうね。

親でさえ私の事を生贄にしようと決心しているようなので、感情に訴えかけるのはまず不可能。

説得も……ねえ？ 私が稀代の天才とかであれば私を生かすメリツトになるのですが、そうでない以上説得も不可能。私が死ぬだけで余計な混乱が起きないのですから」

ここまでで特に反論や質問はない。柄鎖は続ける。

「である以上、私達に残されたのは強硬手段だけ。しかし、私たちの手勢はここにいる9人だけ、大規模に抗争をするのは避けたい。その上で私が生贄にならないためには、やはり禁断箱バンドラボックスを解放してしまうのが一番かと。そのために禁断箱バンドラボックスを強襲したいと思います」

ガタンッ！

そこで堪えきれないと言った様子で執事長・メイド長の一人、リーダーが立ち上がった。

「何か発言でしょうか？」

「……いや、その……ツんんんんツ……ッ!!」

唸り声を挙げながら痙攣を始めるリーダー。彼としては、小規模な局地戦ではなく雷家の全勢力も巻き込み、大規模抗争を引き起こしたかった。そうすれば雷夢が抗争を通して本来の暴力性を取り戻す可能性が高くなる。加えて、狼牙クソガキや柄鎖クソアマが死んでくれれば、雷夢のリーミッターも取り払う事ができる。

大規模抗争に話を持っていきたい彼だが、ここで発言することは自らの手で推しの物語に介入することになってしまうのではないかと考えてしまった。

しかし小規模な抗争の場合、計画が失敗した瞬間即終了。その点大規模な抗争であれば、ズルズルと引き延ばし、1年後の時間切れも狙う事ができる。そう、自分の意見はまったくもって冷静で客観的だ。リーダーはそうも考える。

いや待て、そう思い込む事で自分の望む方向に持っていこうとしていないか？ 推しの物語に介入する合理的な理由を作り出しているだけなのでは……？ そんな事は許されない。リーダーの厄介オタク

性が顔を覗かせる。

そうして、無限の思考が交錯し……

「ツんんんツくく……ッ！ン。ッ!!」

リーダーはオーバーヒートした。椅子にぐったりと座りこむ。

「…だ、大丈夫ですか？」

「狂人が混ざっていると云っただろう。たまにこうなる」

雷夢推しがリーダーについてほんの少し言及したその時だ。

「コ。ッ!!」

ツインテールが奇声を上げて、仰け反る。

「え、つと……そちらの方も大丈夫でしょうか…?」

「狂人が混ざっていると云っただろう。いいから続けろ」

「……ま、まあ、そういう事なら続けさせていただきます」

柄鎖は気を取り直して本題に戻る。

「では禁断箱バンドラボックスを襲撃し、解放するという計画ですが、ひとまずこちらをご覧ください」

そう言つて、柄鎖は一枚の大きな紙を取り出す。

「私の記憶を頼りに制作した禁断箱バンドラボックス収容施設の見取り図です。正確

な見取り図は嚴重に管理されており、手に入れられそうありませんでした。ですので、見取り図の正確さを黒子様に確認していただきました

いのですが」

「わ、私い……?」

「この中で禁断箱バンドラボックス収容施設に入った事があるのは私と黒子くろこ様だけでしよう」

「そうだけど……き、記憶違いとか、してたら……」

目がぐるぐると回り、呼吸も荒れ始める黒子。そんな彼女を狼牙が宥める。

「落ち着け。お前が責任を取る必要は無い。ただ、おかしい所を指摘すれば良い。後は俺達が判断する」

「う、うん……でも、少しだけ期待して欲しい、かな……。が、頑張ってみるから……!」

気合を入れて、見取り図と相対する黒子。すると、彼女はすぐさま

首を傾げた。

「え、あ…これ…」

「どうしましたか？」

「ん、いや…その…」

歯切れの悪い黒子。しかし、意を決して口を開く。

「私の記憶とは全然違う、かな…。ペン、ある？」

柄鎖が黒子にペンを渡す。すると、黒子は迷いなく紙の上でペンを走らせ始めた。

「書かれている部分は大体合っているんだけど、書かれてない部分が多い、と思う…。このエリアはこっちにもう二部屋。この廊下はもっと奥まで続いてて、非常口まで繋がっている。非常口は外のここに繋がってて…」

見事な手際で加筆していく黒子。瞬く間に見取り図が完成する。

「私の記憶だところ、かな…」

「迷路のような構造をここまで…すべて通られたのですか？」

「え、いや…その、一回見取り図を見たことがあるから…その記憶を頼りに…」

「い、一回見ただけで…」

驚愕する柄鎖。一方で狼牙は記憶の精査を行う。

「見取り図に書かれていた情報、他に覚えて無いか？」

「私が見たのは建設時に使ってた図だったから、確か寸法が…」

黒子は部屋の一辺の長さ、天井の高さなど寸法を細かく書き込んでいく。

「もういい。お前の記憶が確かなのは良く分かった」

「そうですね。これだけ細かく書けるなら疑う必要も無いかと。少なくとも私より正確なのは間違いなさそうですね」

「凄いな、一見でこの精度か…」

「え、お、あ、えう…えつ、えッへへ…」

狼牙に褒められ、だらしなく笑う黒子。その際に涎が垂れ、それを手で受け止め、トイレで洗ってくる羽目になっていたが。

「とにかく見取り図の正確さは保証されました。これを見ながら話し

ていきましよう。まず、私達が目指すべきなのはここです。最奥の機
関室。ここに侵入し、装置を止める事が出来れば作戦成功となりま
す。そのためには…」

そこで、ガルーが手を挙げた。

「あ、その…話を遮ってすみません」

「構いません。何か疑問ですか？」

「一応、前提条件の確認なんですけど…バンドラボックス禁断箱エレメントって、異能を封じる
ガスを流し込んでいるんですよね…？ 瞬間移動で出てこないよう
に…」

「ええ。その通りです」

「だから、ガス装置を止めるのも一つの手段だと思います…。けど、そ
んなことしなくても手っ取り早くバンドラボックス禁断箱を開ければ良いんじゃない
かって、思うんですけど…」

目的達成の手段が二つあれば、作戦の幅も広がりますし…」

そこで柄鎖は少し考える。

「…黒子様、バンドラボックス禁断箱に開閉扉はありましたか？ 私の記憶では無
かったと思うのですが」

「無かったはず…だと思う。扉が溶接された後みたいなのも無かつ
た。そもそもあれだけ大きな鋼の塊に扉を付けるのは建設当時の技
術力では無理な気が…」

あれ？ 出入口が無いのに、封印された人はいったいどうやって中
に入れられたんだろうか…？」

「ガスを入れる空気穴から入ったとか、ですかね…？」

「人が通れるような大きさでは無かったと思うのですが…。何かしら
の素能で液体化させて入れたとか…」

黒子のもつともな疑問にその場にいる人物は首を捻る。しかし、そ
れに待ったをかけたのは狼牙だ。

「そんな事を考える必要があるのか？ 今はどうやってバンドラボックス禁断箱を解
放するかの方が重要だろ。」

出入口が無いのなら、ガス装置を止めるしかない。それだけだ」

「…そうですわね、考えてもしようがない事ですし。話を戻しま

しよう。

ガス装置がある機関室までのルートはかなり複雑です。道すじは全員で記憶し、見取り図を各自撮影するなり、メモを取るなりして万が一忘れた時にも確認できるようにして置いてください。

そして、バンドラボックス禁断箱の警備です。隔壁などは無し、シンギュラリティ異能者相手に生半可な壁があつても役に立ちません。代わりに迷路のような構造で時間を稼ごうという設計です。しかし、私達には見取り図があるので迷う心配も無い。

そして人的警備ですが……正直甘いと言わざるを得ません。人数も少ない、加えて建設から100年の間に防衛意識がゆるんでいるのでしょうか、士気も低い。そもそもバンドラボックス禁断箱を襲う組織というのが今までに存在しなかつたらしいですし。

ここにいるメンバ―であれば突破できるでしょう。

肝心なのはバンドラボックス禁断箱を解放してからだと、私は考えています」

「封印されている奴をどうするか……」

「ええ。封印されているのはかつて狼藉をこれでもかと働いた集団バンドラボックス(ニュー)のリーダー。つまり、バンドラボックス禁断箱は刑務所みたいなものですね。凶悪犯を野に放つて、さてどうしましょうという所です。

100年の間で反省していれば話は早いんですけどもね。十中八九、暴れるでしょう。それも再び封印されないよう、私を狙ってくる可能性も高いですし。一番の対策は、私たちの手で倒してしまう事です……実際、どの程度の力をもっているのでしょうかね」

そこでツインテールが手を挙げた。先ほど急に奇声を上げて仰け反つた実績のせいで、少し嫌な予感に駆られる面々だが、彼女は構わず発言する。

「昔話が情報ソースで頼りないけど、口伝ではこう伝わってる。『他人の素能を奪い、ストックできる素能を持つて』と。奪った素能以で判明しているのは『瞬間移動』と『蘇生』の二つ。そして、仮死になれるという現代でも再現できていない奥義を使いこなしている。客観的に考えて、私達だけの手に負える存在とは思えないわね。

なにより、蘇生の素能以で殺しても死なない——残機があるのが一番

ヤバイ」

狂人の至極真つ当な意見に、気を削がれる面々。

「そうですね……。私の素能以蘇生を阻止できるとはいえ、燃費が良くありません。もって2、3分。その間に仕留められれば……。100年仮死状態になっているわけですし、少しぐらい腕が鈍っていれば良いのですが」

そこでリツチが挙手。柄鎖が発言を促す。

「相手の戦力が分からない以上、出来るだけ戦力は多い方が良いと思うな。だから、僕たち9人以外の手も借りるってのはどう？」

「私達以外、ですか？」

「うん。敵の手を借りる、ってことになるのかな。」

作戦としては、施設を襲撃してすぐに禁断箱バンドラボックスを解放するんじゃないかと、あえて時間をかける。そうすると、敵の方も援軍を出してくると思うんだ。

その状態で封印が解けて中の人と戦闘、ってなったら多分、総力戦になると思う。でっかい外敵が現れたら今までのいがみ合っても協力するのは人間の性だしね」

「なるほど。その作戦は良いと思いますが、敵の援軍が来た後、持ちこたえる必要があるのが問題点ですね。ガス発生装置を止めて、ガスの換気が終わるまでに時間が分かりませんから、援軍到着と同時に即解放とはいきませんから。」

見取り図によると、非常口と正面玄関さえ押さえれば中には誰も入ってこれない。しかし、狭い非常口はともかく、広い正面玄関で防衛し続けるのは難しい気がします……」

「まあ、そこは僕たち執事とメイド達に任せて欲しいかな。誰一人通さないって約束は出来ないけど、前線を崩壊させない程度には頑張れるから。抜けられたら機関室に向かうメンバーで対処してもらおうとしてさ」

そこで、ついでオーバーヒートしていたリーダーが手を挙げる。

「そういう策でしたら、私は雷家から人手を引っ張ってこようかと思えます。事前に準備をすると気取られる心配があるとの事なので、当

日引つ張つてこられる限りですが」

「ええ？ リーダーに抜けられるのキツツいなあ……。まあ、援軍引つ張つて来るのは大事だし、こっちで何とかしてみよう。皆さんもそれで良いですか？」

異を唱える者はいない。話は次へ進展する。

「次は非常口の守りですね。ここは狭いので一人で十分でしょう。しかし、逆に言えば一人で守り切らなければいけない。一番の手練れを配置するべきだと思いますが……。黒子様はいかがでしょうか」

「えつ、わ、私イ……？」

「ええ。残ったメンバーの中で一番実力があるのは黒子様ですから」

「でも、私……。最高でもランキング二位だったから……。一位の柄鎖の方が……」

「私は金剛不壊こんごうふえで固いだけですわ。倒されはしませんが、簡単に抜かれてしまいます。相手を釘付けにできる力がここでは求められているのです」

狼牙や雷夢も柄鎖の言葉に黙つてうなづく。異論はないようだった。

「だ、誰も抜かせなければ、良いんだよね……。分かった。うん、頑張つて、みる……」

「では残りの私と狼牙様、雷夢様で機関室を目指しましょう。私はともかく、突破力のあるチームになりましたわね。」

さて、これで作戦の概要は決まりましたが、何か意見や質問はありませんか？」

全員、黙したまま。

「決まりですわね。作戦決行はいつに致しますか？ できれば早い方が良いですが……」

「いつでも」

「こ、心の準備が……」

「いつでもいける」

「1週間は欲しいかなー」

「3日」

「た、戦いに時と場所は選びません…」

「……まあ、1週間後としましょう。各自、最高の状態に仕上げるように。集合時間は午前6時、場所は禁断箱最寄りのコンビニで」

その日は、それで解散。時間をずらしてそれぞれが退出していく中、柄鎖が狼牙の肩を叩く。

「この後、時間ありますか？」

「問題無い」

「でしたら、学校で待っております。…それでは」

柄鎖はそれだけ言い残し、部屋を出て行ってしまった。

39話 せつ

月がハッキリと見える頃。^{ろうが}狼牙は校舎の光が差す校庭に立っていた。暗いが、校舎の方から薄らと二人の人影が歩いてくるのを見た。「こんな遅くに何の用だい？ もう業務時間外なんだから、少しは休ませてほしんだけどねえ」

一人は保険医。保健室を自宅がわりにしている彼女は、時間にかかわらず学校に存在している。

「申し訳ありません。とはいえずぐに済みますから、お願いいたします」

もう一人は柄鎖。狼牙より先に学校に到着していた彼女は、保険医に何かを頼んでいた様子だ。

「おや、狼牙様。もう到着されていましたか」

「保険医まで連れてきてきて何をやる気だ？ 俺とお前で決闘でもするんじゃないだろうな」

「当たらずとも遠からずですわね」

柄鎖は狼牙の前まで歩み寄り、目の前で立ち止まる。

「さ、兄に打ったように私にも正拳を放っていただけますか？ もちろん本気でお願いしますわね」

いきなりそう言い放つ柄鎖だが、狼牙の方は困惑するばかり。

「いや、何でそんなことしないといけないんだよ…」

「痛みとダメージの最大値を更新しておきたいのです。人間、想像以上の苦痛に襲われた時動けなくなってしまうものです。ですから、私の想像を広げておこうかと」

「俺の正拳でか？」

「ええ」

至極真面目に語る柄鎖だが、狼牙の方は乗り気ではない。

「柄鎖には金剛不壊がある。ダメージを貰う場合はレアケースだろ…」

「あら、レアケース本人が何を言いますか。万が一はいくらでも起こりうるのですから、対策しておいて損はないでしょう。それに決戦の

日にはレアケースと遭遇しそうですし。これはただの勘ですが」

「…分かったよ。ぶっ叩きやあいいんだろ?」

「いつでもどうぞ」

「保険医として、あんまり見過ごせない案件なんだけどねえ…。どうせ止めても無駄だろうから、怪我した後の治療に徹するけど」

保険医が呆れる一方、狼牙は腰を落とし拳を固める。柄鎖も呼吸を整えて衝撃に備える。

しかし、狼牙の拳は一向に放たれない。

「気が引けますか?」

「…少し。大切な人に拳を向けるのは…な」

大切な人。それは柄鎖の事を指しているのだろう。

その考察に至った柄鎖は、自分を心配してくれる狼牙に思わず口角を上げる。

「悪い、時間かけた…行くぞ」

そして上がった口角は一瞬にして歪められた。

鉄骨がへし折れたような音が辺りに響き、柄鎖の体が十数m後退する。

「大丈夫かい!」

口を半開きにしたまま、呼吸すら出来ていなさそうな柄鎖を見て治療しようと駆け寄る保険医。しかし柄鎖は緩慢に、だが確実に手を突き出し、拒否のジェスチャーを保険医に示す。

「……動く、ことをすままなら、ない…とばッ!」

盛大に口から血を吐き出す柄鎖に、問答無用で保険医が治療を施す。

「——ありがとうございます」

「お礼はいいから口元の血を拭きなさい。まったく…無茶してからに」

柄鎖がハンカチで血を拭う間、狼牙が心配そうに傍まで近寄ってきていた。

「大丈夫か?」

「ええ。想像を上回る痛みをありがとうございました。次があれば、

恐らく反撃までいけるかと。正拳の威力が上がるのでしたら、また今度お願いしますわね」

「……そういう意図じゃないのは分かっているが、発言がちよつと気持ち悪いぞ……」

その時、柄鎖がフラフラとよろめく。

「流石にダメージが大きすぎたね。治療でかなりカロリーを消費したようだから、すぐに補給した方が良い」

保険医は白衣のポケットから栄養補給ゼリーと栄養バーを取り出し、柄鎖に放り投げる。

「——重ねてありがとうございます。夜遅くに申し訳ありませんでした」

その場で渡された栄養食を平らげ、保険医にお辞儀をして踵きびすを返す柄鎖。

「栄養食だけじゃなくてちゃんと食材も食べるんだぞ……。……ほら、男の子だろ。送って行ってあげなって」

「は、はい」

背中を押され、柄鎖の後を追う狼牙。結局、二人は柄鎖の部屋まで同行することに。



「送っていただきありがとうございます。……送っていただいて、こういうのも何ですが、躊躇せずに女子寮に入ってきましたわね……」

「男子禁制だったか？」

「いえ、そういうわけではありませんが、雰囲気というものがあってですね……。まあ、そのあたりの感性については狼牙様に説いても

馬耳東風ばしとうふうでしようが。

とにかく、今日はお疲れさまでした」

「柄鎖もな。それじゃ」

「……待っていただけますか？」

別れの挨拶を交わして解散しかけるが、柄鎖が狼牙を呼び止めた。

そして礼儀正しい柄鎖にしては珍しく、自分の髪の毛を弄ぶように手遊びをしながら言う。

「…その、狼牙様が良ければですが…：部屋に上がっていきませんか？」

「構わない、邪魔するぞ」

「…：あ、えっ？」

即断即決で玄関をくぐる狼牙。覚悟はしていたものの、余りの急さに素っ頓狂な声を上げる柄鎖。玄関から部屋までの僅かな廊下を口ウガと共に歩く。

そしてカーペットが敷かれたリビングにストンと座り込んだ。テーブルを挟んで反対側に狼牙も胡坐をかく。

「お嬢様にしては意外と普通の部屋なんだな。フローリングにカーペット敷いてるし」

「…え、あ、その…：たまに、寝転んだりもしますし…：。だっ、だらしない話ですけど…」

気が動転しすぎて話さなくても良い恥部まで語り始める始末。後で気づいて、更に顔を赤くする始末。

「テレビ、あるんだな。俺も実家にはあったけど、こっちに來てからはご無沙汰だ」

「な、何か見ましょう！ そうしましょう…」

恥ずかしさを誤魔化すようにテレビのスイッチを入れる柄鎖。適当な番組が流れ始め、ひとまず沈黙が埋まった。

柄鎖はテレビに視線を向けながらも、自分の部屋、それもテーブルの向かいに想い人の存在をひしひしと感じ、緊張しっぱなしだった。反対に狼牙は親父と稽古終わりにこうして団欒していたことを思い出し、懐かしさに浸りながらリラックスしていた。

どつちが家主か分からない状態で狼牙が不意に提案する。

「…：保険医に食材食べろって言われてた。治療でへばってるだろうし、俺が料理作ろうか？」

「お、お願いいたします…」

狼牙は立ち上がり、リビングで冷蔵庫の中を漁る。

「そういえば自炊するのか？ 使用人に作ってもらうとかじゃなくて」

「流石に寮で使用人を待らす事はしません。いつもは自分で作っていただきますわ。そういう狼牙様は？」

「実家じゃ俺が料理してた。こつちに来てからも同じだ。寮の食堂は……正直不味い」

「大体の生徒がそう言いますわね。改善の陳述が何度も来ているのに一向に変わりませんし。まあ、校舎の修繕とかに寄付金のほとんどが費やされるそうですから仕方ないのかもしれない」

「それなら良く壊す側の俺は何にも言えないな……」

冷蔵庫にはタツパアの煮物、冷凍庫にはラップの冷凍ご飯……。お前、本当にお嬢様か？」

「べ、別に良いではありませんか。毎回ご飯を炊くのも面倒なのは自炊している狼牙様なら分かるでしょう？」

「いや、そうだけど……。お嬢様の口に冷凍ご飯は合わなそうだなと思っただけだ」

「あいにくと兄と比べて舌の才能も無かったようで、そこその味であれば頓着いたしません」

「ハードルが低くて助かる。もう一品ぐらい適当に作るから少し待っててくれ」

◇

十数分後、食卓に並んだのはご飯と煮物と鳥の照り焼きと添え物の千切りキャベツ、そして大根の漬物だった。柄鎖と狼牙、二人分ある。

「いただきます」

唱和の後、互いに黙食。狼牙が早いペースで食べ進める一方、柄鎖のペースは遅かった。何なら、箸で搦んだ食材を落とすこともしょっちゅうあった。最終的にナイフとフォークで食べ始める始末。

そうして食事が終わり、数分だけ皿を食卓に残したまま二人でテレビを見つめていた。口火を切ったのは柄鎖。

「その……、お風呂……入りますわね」

「ああ」

柄鎖が脱衣所へと消えていった後で、狼牙は初めて見る食洗器に戸惑いながらも皿洗いと片づけを終える。

そこから約20分、柄鎖が脱衣所から出てきた。薄手の寝間着姿。彼女はぎこちない動きでリビングの隅に置かれているベッドまで歩き、そこで油が切れたようにドスンと腰を落とした。

「……狼牙様も、どうぞ。お風呂」

そう言われた狼牙は少し考える。そして、脱衣所の隙間から見えたシャワー室（ジムにあるような狭いやつ）に興味を惹かれ、こう答えた。

「じゃあ、入らせてもらう。けど、その前に着替え取って来る」

「え、あ、ああ……そうですわね。いきなり、でしたものね……」

しばらくして着替えを取って来た狼牙が、改めて部屋に戻って来た。そして脱衣所に入っていく。

狼牙がシャワーを浴びる間、柄鎖は部屋で支度をしていた。テレビをOFF、部屋の灯りをオレンジの間接照明に切り替える。とはいっても、やる事はそれぐらい。後の時間はしきりにシーツのしわを伸ばすことに注力していた。

ザー……ツ、バカツ……

脱衣所の向こうから聞こえる。

シャワーが止んだ音。

湿気たシャワー室の扉が開く音。

瞬間、柄鎖の心拍は急速ギアチェンジ。10秒とかからず、ウサギやネズミもビツクリな500「bpm」に到達。シンギュラリティ異能者にだけ許された爆速脈動を刻みながら、ベッドに腰かけ座位不動。

ドライヤーの音……止み。

衣擦れの音……止み。

ついに脱衣所の扉が開いた。寝間着姿の狼牙が首にタオルをかけたまま、柄鎖の方に歩いていく。

「隣、良いか？」

「……」

柄鎖本人は「どうぞ」と言っただけでもりだが、むべなるかな、緊張でまったく声が出ていない。返答を貰えなかった狼牙だが、雰囲気で柄鎖の隣に着席する。

そのまま約十分。狼牙が口を開いた。

「柄鎖」

「……はい」

今度はちゃんと言葉が出たようだ。

「そろそろ帰る。また明日」

「……はい？」

そして素っ頓狂な声も出た。

「……そうですね。狼牙様からに期待するのがおこがましいですわね……」

本当に帰ろうとする狼牙の手を掴む柄鎖。そして自分の大きな胸に押し付けた。

「……どう、でしょうか」

「どう、って……心拍大丈夫か？ 拍を越えて振動してるぞ……」

狼牙のあまりにもデリカシーの無い発言に、柄鎖はベッドへと倒れ込む。

「どうしてここまでして察していただけなのでしょう？」

「な、何をだよ……」

「夜に男女が二人！ 一つ屋根の下でシャワーを浴びればセツ……ですわ！ セツ！」

「セツ、って……ああ、セックスの事か。そうしたいならちゃんとやってくれよ……」

「恥ずかしくて言えないから必死で察してもらおうとしてるんですよに!! 一週間後の作戦で死ぬかもしれないから、その前にやってしまおうと思ったのですが！」

ああ、生贄にされる際も執刀医にバカにされるんですわ、あ、この人処女だ” って……。膜を残したまま死ぬんです……」

「別に処女だからって恥ずかしい事のわけじゃないだろ……？」

「……それぐらいは分かっていますわ。冗談が過ぎました。

しかし、死ぬかもしれないのですから想い人とセツッしておこうと考えるのは普通では？ それとも私がピンクなだけでしょうか」

「死ぬ前に想い人と、か……」

ギシ……。ベッドのスプリングが軋む。

柄鎖が気配を感じて顔を上げると目の前に狼牙の顔が。

「え、あ……」

「……」

じつ、と見つめられて思わず目線を逸らす柄鎖。しばらくして狼牙はベッドから離れ、柄鎖の部屋から出て行ってしまふ。

一人残された柄鎖はベッドの上で丸まって布団を被ってしまった。

(……私じゃ、ダメだったのでしょうか。顔や体には自信があるのですが……)

いえ、そもそも狼牙様って……勃つのでしょうか？ そもそも性に鈍感というか、お子様というか……もちろん知識は持っておられる様子ですが、関心が一切ないご様子。

普通男性であれば私と会話する時、胸に視線が向いたりするのですが、狼牙様はずっと目を見て話されますし。

大切に思ってくれているのは間違いないですし、友愛・親愛の情は大変嬉しい。しかし、性愛を向けられないというのも何か、もやもやとした気分が……)

ピンポン……。

そうして考えを巡らせている間にインターホンの音が。

気が落ち込んでいる柄鎖は、のそのそと玄関モニターを確認する。するとそこには狼牙の姿が。

柄鎖が玄関の扉を開けると、狼牙がその隙間に体を滑り込ませた。

「あの、狼牙様……何か忘れ物ですか？」

「買ってきた」

狼牙の手にはレジ袋が。

「何をですか？」

「ゴム」

「……狼牙様、その気になるんですね……」
「匂いに当てられた。……しないのか？」
「……します、けど……」

この件、女子寮で噂になったとかならなかつたとか……。

◇

そして時は流れ、作戦決行の前日。

その日は平日だったが、柄鎖は学校に姿を現さなかつた。

40話 箱の中にいる

初めは少し疑問に思うだけだった。

「はい、では出席を取ります。——おや、上戸鎖かみとくさりさんはお休みですか？ 事前連絡も無いですし……」

珍しい事もあるものだ、と。

ホームルームが終わった後、狼牙ろうがは一応連絡する。

——ただいま、電話に出る事ができません。ピーという発信音の後……

機械音声の無機質さに、少しずつ嫌な予感が募つる。作戦決行の前日という間の悪さも一際不気味だった。

その時、狼牙の携帯に着信が。相手は非通知。すぐに通話を繋げる。

「もしもし?」

「あ、もしもし? 狼牙君なのですか?」

電話からはフシみんによく似た機械音声。

「お前、学校一週間も休んで何やって……いや、今はそれどころじゃないんだ。悪いが切るぞ」

「緯度37. 148050度 経度139. 660048度」

通話を切ろうとする狼牙の耳に、ひどく詳細な位置情報。彼は再び携帯を耳に当てる。

「…何の話だ?」

「狼牙君が今抱えている問題を解決してくれる魔法の暗号なのです」

「それはどういう…」

「早くメモ取ってください、緯度37. 148050度 経度139. 660048度。十円じゃもう時間が……」

プツ

それきり、通話は途絶えた。折り返しても通話は繋がらない。

位置情報をメモした用紙を手に、狼牙は教室を出た。

いつぞやに御三家の子女が集まり、話をしていた三家会の議会議室。校舎3階の一番奥にあるそこに、再びかつてのメンバーが集まっていた。

狼牙、黒子、雷夢の三人。一人は電話をしてきたつきり、もう一人は行方知れずだが。

「じ、授業をサボって急にどうしたんだい…？ 作戦は明日のはずだけど…」

「柄鎖が学校に来ていない。連絡も無し、こっちから連絡しても返答無しだ」

「それって、つまり…」

「攫われたか」

雷夢の一言に場の空気が凍り付く。

「い、いや、そうと決まった訳じゃ…。何かアクシデントがあっただけかもしれないだろう？」

「どんな？」

「それは…パツとは思いつかないけど…」

「つまりそういう事だ」

あくまで柄鎖が攫われたと仮定する雷夢。その言葉に狼牙も重々しく頷く。

「あまり信じたくはないが、多分そうなんだろうな…」

「え…じ、じゃあ…ど、どど、どうするの…!? さ、攫われたってもう、殺されてるんじゃない…。事前準備さえしておけば、生体機械にする手術はいつでも出来るだろうし…」

「緯度37. 148050度 経度139. 660048度」

「え…?」

狼牙は位置情報を呟きながらスマホの画面を黒子に見せる。

「その手術をする場所はここか？」

画面に映るのは山の中、廃村の中にある廃病院。黒子は首を横に振る。

「こ、こんな所じゃない。普通なら黒葛原病院で行うはず…。仮に

ここで実行するとしても設備を移すのは難しいし、それをするメリットも無い、と思う……」

それを聞いて、狼牙は安堵のため息を吐いた。

「だったらまだ柄鎖は生きてるはずだ。恐らく、ここに監禁されてる可能性が高い」

「な、何でそんな事が言えるんだい？」

「フシミンが教えてくれた」

フシミンという言葉が出た瞬間、雷夢が珍しく体を震わせて動揺する。

「もって回った言い方だったが、たぶん柄鎖の居場所を教えてくれたんだと思う」

「二四三君はどうやって柄鎖君の場所を……？」

「……分からない。ただ、あいつは気配を消すのが得意だ。諜報も心得があるんじゃないか？」

「そ、そうだとしてもだよ。私分からないのは、なぜ柄鎖君を捕らえる必要があるのかって事なんだ。だって異能者シンギュラリテイを捕まえておくのはかなり難しい。

普通の収容施設じゃ物理的に壊される。それこそ禁断箱バンドラボックスレベルじゃないと……。捕らえておくなら収容者が破れないレベルの結界の素能エレメントを張り続けるか、強力な麻酔をかけ続けるか、電撃で動きを制限し続けるか……。

とにかく、そんな手間をかけてまで柄鎖君を捕まえる必要があるのか……。彼女を素能エレメントを発動し続ける生体機械に改造するだけなら、さつさと手術してしまえば良い。わ、私が何か見逃してるだけかもしれないけど……」

「それは……」

「考えても仕方の無い事だ」

疑問符を浮かべる黒子と狼牙をバツサリと切って捨てる雷夢。

「疑問は無限にある。」

なぜ柄鎖が捕まっているのか、計画はバレたのか、そうだとしたら関係者のお前らや私がなぜ無事なのか……。

「そんな事に気を回すぐらいなら一秒でも早く動くべきだ」

雷夢の手には携帯が。すでに執事・メイド達に連絡をしていたのだろう。

「……そうだな。雷夢の言う通りだ……」

狼牙は深呼吸をしながらどう動くべきかを考える。

「——最優先は禁断箱バンドラボックスの解放だ。それさえ達成すれば、向こう側に柄鎖を殺す理由が無くなる。

とはいえ柄鎖の救出にも行くべきだ。禁断箱バンドラボックスの解放をしたとしても、柄鎖の身が保証される訳じゃないと思う。今は道理に合わない事が起きているからな」

「……うん、問題無いと思う。でも、柄鎖を助けに行く役割は誰が……」
「俺1人で行く。向こうにはフシみんもいるはずだ。もしかしたらこっち側につくよう、説得できるかもしれない」

「私たちの作戦が筒抜けだった場合、禁断箱バンドラボックスの防衛は固められてるだろうし、戦力の一人である柄鎖君が欠けている。それを考えると、そっちの任務には狼牙君1人しか割けない、か……」

「ただ、これだと突破役が雷夢しかいなくなるが……大丈夫か？」
「知るか。出たところ勝負だ」

向こうの戦力も定かでない、加えて二人も戦力が減った状態。無責任だが的確な分析を狼牙は少しだけ頼もしく思った。

「そうだな……なるようにしてくれ。そっちの指揮は雷夢に任せただぞ。」

なんなら禁断箱バンドラボックスの防衛に人が割かれてるなら、敵の援軍を待つ必要が無い。全員が突破役に回って良い。そこら辺の判断も任せる」

「分かった」

「それと黒子、素能エレメントでこれぐらいの針を出してくれるか？」

「わ、分かった……」

黒子は言われるがままに、10センチはある大型の針を逆夢マニフエスで作り出し、狼牙に渡した。

「こいつは、黒子が消すまで無くならないんだよな？」

「う、うん……。私の素能エレメントは生成・削除する時に異能キュリアを消費するタイプ

だから時間経過で消えたりはしないよ」

「わかった、ありがとう。…それと禁断箱パンドラボックスの方も頼む」

「う、うん！ ひ、ふひゅへ…」

狼牙に指示された拳句褒められ、だらしなく笑う黒子と、相変わらず不愛想な雷夢を置いて、狼牙は部屋を出て行く。

「後でメッセージを送る。見ろ」

雷夢の最後の一言を最後に、部屋に残された黒子と雷夢。二人は接点こそ多かったものの、あまり親しくない。

「……あ、あの…私達は行かないのかな？」

「人員の到着待ちだ」

「あ、そ、そう、だよね……ご、ごめん…」

——沈黙。雰囲気重い。

黒子がそわそわと目線さまよを彷徨わせている一方、雷夢はスマホのメッセージアプリを開き、指を走らせていた。

「……お前は どうして戦う。動機はなんだ」

スマホを触りながら口を開いたのは雷夢。黒子に問いかけたらしい。

「な、なんでそんな事…」

「お前は人員の中で最大戦力だ。それで…」

「い、いや…！ そ、そんな事は無い！ ろ、狼牙君にも負けた事があるし…」

「それはお前が精神的に不安定だったからだ。だから今その点を気にかけている」

黒子は少しだけ考え、おずおずと意見を述べる。

「……わ、私は、狼牙君のために、かな。その、狼牙君と柄鎖君が付き合っただけとか、私の事あんまり大事思っただけ…というかわしろ下手したら厄介に思っただけとか、そう言うのは諸々織り込み済みなんだけど……」

それでも指示されると何か嬉しくなるし……今は命令されるだけじゃなくて、期待に応えたいって気持ちもあって……失敗した時を考えると手が震えそうになるんだけど……

あ、ご、ごめん、早口で……へっ、変だろう…？」

「別に。その調子で作戦に望め」

「う、うん……」

会話が終わると同時に、雷夢は狼牙にメッセージを送信した。

こつちが禁断箱バンドラボックスを襲撃すれば、そつちの守りが薄くなるかもしれない。こつちの合図を待て。

二四三ふしみには気を付けろ。

こつちの情報ふしみを漏らした可能性が高い。

敵だと思え。

奴の素能は恐らく……

◇

……気が付くと、私は真つ暗な空間で体を折りたたんでいた。

狭い。とにかく狭い。手を伸ばそうとしても、何か壁に邪魔されるばかり。

力を込めて壁を殴る。

……硬質な音が空しく響くだけだった。

異能者シンギュラリティの力でも破れない壁エレメント。異能で生み出された結界、だろうか。

光を通さない箱の中に結界を張って、私を閉じ込めている？ いたい何のために？ そもそも私はどうしてこんな所に……？

確か昨日は上戸鎖かみとくさりの集会のため、実家に戻って……。

「お目覚めかしら」

突然姉の声が閉鎖空間に響く。音源は膝の下から。小型のスピーカーでも置かれているのだろうか。

「…おはようございます。姉様、これはいったい？」

「悪い妹への折檻^{せつかん}」

返答アリ。こちらの声も通じているようだ。

「折檻^{せつかん}ですか。いったいどういう…」

「お仲間と色々企んでいるらしいじゃない?」

気づかれていたのか。しかし、どこから情報が…。

「初対面との距離感がおかしい女の子が親切にも教えて下さりましたのよ」

二四三^{ふししみ}様が? ……時すでに遅し、でしたか。

「証拠はあるのでしょうか?」

「別に。ここは裁判所じゃなくってよ? 疑わしきを罰しても批判する傍聴人はいない。それに生贄がヤケを起こした……動機は完璧でなくって?」

「では、私はなぜ五体満足なのでしょうか。そこまで疑われているのであれば、すでにバラされて生体機械にされていてもおかしくないはずですが」

「どうしてだと思う?」

姉とは一応家族で、長い付き合いだ。そのため、さっきの姉の口調はまともに相手してくれそうにないものである事が分かる。

とはいえ、私が殺されていない点を考慮すると、私の監禁は姉の独断ではないだろうか? 兄や他の家が関わっているのであれば、私はすでに死んでいるはず。

姉は嫌いな私を甚^{いたぶ}振るために周りには知らせず独断で私を監禁した……動機もばっちりだ。

「生体機械にするとは言うけど、貴方の手術っていったいどうするかしらねえ。反射的に金剛不壊が発動するというのに」

「深い昏睡状態であれば反射活動は起こりません」

「あら、そうなのね。だったら箱に詰める前に数発殴ってあげればよかったわ」

なるほど、麻酔か何かで私を眠らせて連れて来たのか。かなりの量盛られたようだ。眠る前の記憶が混濁している。

「ま、しばらくはそこでじっとしていなさい。人は刺激の一部を遮断

されたまま放置されると気が狂うらしいわよ。ねえ、僕ぼくじゆう従？」
「はい、その通りでございます。ソースは幼き頃の私、間違いないかと」

この声は姉の付き人の……。そういえば、彼は結界を張る素能エレメントが使えたはず。

などと考えていると、声が聞こえなくなる。

「……あ、あ、あー、姉様の性格だと、たぶん行き遅れると思いますけれど、その所どうお考えですか？」

——返事はない。向こうの声も聞こえないし、こちらの声も通っていない様子だ。本格的に放置されたようだ。

改めて自分の状態を確認する。

辺り一面の闇。目を開いているのか、閉じているのか曖昧になつてくる。

静寂。音が存在するとしても、自分の立てる音だけ。

閉塞。体は折られたたまれ自由に動けない。恐らく正方形の箱に閉じ込められている。

……空気孔が無い。酸素はどれくらい持つ？

棺桶に閉じ込められる昔の映画を見た時、興味本位で調べた事がある。棺桶でだいたい7時間程度。すると、私が眠らされていた時間も考えると……残りは2〜3時間ぐらいだろうか？ 随分と余裕が無い。

しかし、姉も私を酸欠で殺しはしないだろう。この上なく残酷な殺し方だが、姉にとっては私の反応を十分に楽しむ事が出来ない。それに、どんな後遺症が残るかも分かったものじゃない。生体機械にする際、後遺症が原因で無理です……では話にならないだろう。

姉もそこまでバカじゃないはず。……はず。

何にせよ姉が独断で私を監禁している以上は完全に詰みではない。狼牙様や雷夢様が私を助けに来てくれる可能性も0ではないだろう。私が監禁されていることを知り、その上で居場所まで突き止めるというウルトラCが要求されるが。

……あまり期待しないでおこう。

「申し訳ありません…」

狼牙様、は口に出さなかった。反乱は私の独断で狼牙様は無関係と思われている可能性も無くはない。巻き込み事故のリスクがあるならば、避けるべきだろう。

貴方を残して死ぬことをお許しください。

懺悔の後、思考を切り替える。

残りは約2，3時間、これが私に残された最後の時。そう思う事にして、私は暗闇の中で狼牙様との妄想に耽^{ふけ}る。

遊園地に行ったら。

水族館に行ったら。

動物園に行ったら。

映画に行ったら。

「……………」

死ぬ前にしては贅沢な妄想だ。

41話 強行突破

「……ねえ、僕従^{ぼくじゆう}」

「はい、はい。なんでしょう、お嬢様」

「あれから1時間は経つのに全く反応が無いのだけれど」

「ええ、ええ。そうですね」

柄鎖^{つかさ}の姉と付き人は柄鎖を閉じ込めた箱の前に、会話を繰り広げる。

「箱の中にマイクは入れたのかしら？」

付き人がスピーカーの音量を上げる。聞こえるのは呼吸音だけ。

「入っていますし、壊れてもいないようですよ」

「じゃあなに？ 柄鎖はこんな小さい箱の中で黙ったまま蹲^{うずくま}つていと。そういう事かしら」

「ええ、ええ。そのようです」

「……貴方が光を遮断して、閉鎖空間に閉じ込めればひどい苦痛を与えられると言ったのだけれど？」

「はい、はい。その通りです。」

刺激が無ければ、時間間隔が曖昧になります。1時間を1日、2日と勘違いする人も。そろそろ箱の中の二酸化炭素濃度が高くなって息苦しくなる頃ですし、普通なら泣き叫んでもおかしくないのですが。私が閉じ込められた時はシヨンベンを漏らしましたし」

「僕従、言葉遣い」

「失礼いたしました。私が閉じ込められた時は小水を漏らしましたし」

「だったらどうして、これだけ穏やかにしていられるのかしら？」

「ふむ。察するところ、柄鎖様はこれまで生贄として死ぬことを運命づけられて生きてこられたわけですし、メンタル強者なのではないでしょうか」

「……あなたの精神力が弱いだけでは無くて？ こんな箱に閉じ込めた程度で人間が狂うとはとても思えないのだけれど」

「でしたらお嬢様も入ってみるのはどうでしょう？ 人を痛めつける時は、与える痛みを事前に知っておくことでイメージがしやすくなりますし」

「冗談、そんな面倒くさい事をどうして私が。……そうね、その貴方」

柄鎖の姉が指差すのは、1人の男。柄鎖虐めの舞台である廃病院に諸々の機材を運んだり、姉が不快に思わない程度に掃除をする役目の1人だ。

「この箱に入りなさい」

「は、はい……」

立場の低い男は姉の命令を断れない。予備の箱へと体を滑り込ませる。その直後、付き人は箱の中にマイクを放り込んだ後、蓋を閉じた。

「え、な、何ですかこれ!？」

突然閉じ込められ、驚く男。しかし姉や付き人は何も言わず、そのまま観察を続けた。

「そ、その、出していただけませんか……?」

初めの数分は平身低頭といった様子。

「…だ、出してください! ここから出してくださいよ!」

次第に語気が荒くなる。

「…出せよ! 出せつつつてんだろ!!」

ついには立場の差も忘れて怒鳴り始めた。

「取り乱してはいるけど、全然辛そうではないじゃない?」

「まだ30分経っていません。ここからですよ」

しばらくすると、箱の中の男は叫ぶのを止める。代わりに殴打音がスピーカーから響くように。それも定期的に。

「……何度も何度も、馬鹿なのかしら? 力づくでどうにかならぬ事はとづくに分かっているでしょうに」

「お嬢様、これあるあるです。自分に痛みを与えているんですよ。あつ、今のは壁じゃなくて自分を殴りましたね。どうにか刺激を得よ

うと必死だ」

「暗所監禁あるあるは聞いてない」

「……くくううあああああああああッ!!!」

突然スピーカーから大音量が響いた。

「うるさいわね……」

「……ハツ……ハツ……ハツ、ハツ、ハアツ、ハアツ!」

「あ、残りの酸素に意識を向けましたね。呼吸を落ち着けようとするほど、逆に焦るんですよ。これもあるあるなんです」

「きiiiiiiiiイイイイッ!!」

「多分ここからは退屈ですよ。今まで通り過ぎた状態をランダムに繰り返すだけかと」

男を閉じ込めてから約1時間。姉は付き人に顎で合図し、箱から男を引きずり出させる。男は3日間何も口にしていないのでは、というほど衰弱していた。

「……確かに、かなり苦痛を伴うみたいね」

「はい、はい。それはもうこの通り」

「どうやら柄鎖が異常なだけ……ふん、気に食わない。いつもスカしてて、こんな所でもクール気取ってからに」

姉が手を叩いて合図すると、スタッフの一人が部屋の中に入って来る。目が赤い、シンギュラリティ異能者だ。

「これ、片付けておいて」

「了解なのです」

シンギュラリティ異能者の少女は命令通り、衰弱した男を担いで部屋を出て行ってしまった。

「……あんなシンギュラリティ異能者、スタッフの中にいたかしら? それに柄鎖の反乱を知らせてくれた、初対面の癖に距離感がやけに近かったあの娘に似ていたような……」

「ええ、ええ。似ているのは当然です。本人でしたし」

「……は? 兄や他の家に余計な事を喋られないように始末しておけ、と言わなかったかしら」

「はい、はい。その通り、始末しようと思いましたとも。とはいえあの
人、まあ強い強い。こつちの手勢が全員無力化されました。殺されな
かったんですよ、実力差凄いですよね」

「…どうして報告しなかったのかしら」

「聞かれなかったので」

「……」

姉は天を仰いだ。

「……今、報告しておいた方が良いと思う事は全て私に伝えなさい」

「では僭越せんえつながら……。お嬢様が柄鎖様を攫さらったことが絆十ほんと様にバレ
たご様子です。とはいえ、こここの場所までは知られていないとは思
いますが。私兵を禁断箱バンドラボックスの方に動かしている様子ですし」

「兄さんが……。始末し損ねた子が情報を漏らしたわけでは無い
……。」

まあ、なぜかこちらに敵意はないようだし、放っておきましょう。
そもそも、私達でどうにかできる相手でもなさそうだし。

それより、そろそろ柄鎖の箱の酸素も限界でしょう。出してあげな
さい」

「はい、はい。承知しました」

付き人が柄鎖の入っている箱を開けると共に、展開していた結界を
消す。すると、中から柄鎖が転がり出てきた。

「う……い……」

闇になれた目は瞼越しの光でも悲鳴を上げる。加えて十分な酸素
が無い状態で閉じ込められていたため、頭痛も併発していた。

地面に転がる柄鎖に、姉は二つの電極を当てる。電極は何やら大仰
な装置に繋がっていた。

バチン

「グ……ッ!!」

強力な電気を流され、柄鎖がまるで蛍光灯のように一瞬光った。

「お目覚めかしら」

「……あ……っ……」

「まあ、痺れて返事どころじゃないだろうけど。今の貴方はさしずめ、

まな板の上の鯉といったところかしら。

とはいえ、鱗が固すぎるのも困りものね。包丁が通らないせいでこっちの手段に限られる。とはいえ……」

姉の声に合わせて、付き人がアタツシユケースを開けた。そこには、小さな虫籠むしかごが。

「やりようはいくらでもあるのだけれど」

◇

くぼぼ同時刻 バンドラボックス 禁断箱施設付近く

その場所は地図には載っていない。しかし、衛星写真からみればすぐにわかる。木々が密集した森の中に、ぼつかりと空いた空間。そこには、敷地を囲う塀とそれに守られる大層な施設が。

塀の外、見通しの悪い森の中には雷夢らいむ、黒子くろこ、他に動きやすい姿のメイド長・執事長が身を隠している。

「だ、だいぶ人が出入りしているようだね……」

「かなり防衛体制が整っているようです」

黒子とリーダーの言う通り、施設には車が頻繁に出入りしている。人員を輸送しているのが明らかだった。

「かえって都合が良い。援軍が集まるのを待つ必要が無い。私たちの仕事は突破するだけになった」

「と、とはいえどうやって侵入する……？ 塀は簡単に乗り越えられるけど、確か施設までは200mぐらい。室内じゃ力を生かしづらい遠距離攻撃できる素能エレメントを持った人員を配置してらるろうし、下手したらハチの巣に……」

「ハゲ、お前の出番だぞ」

「……あつ……っす……」

リーダーに指名されたのはハゲというあだ名で呼ばれるスキンヘッドチビの執事長。執事長やメイド長の前ではイキリ散らしてい

た彼だが、黒子や雷夢がいる前ではひどく大人しい。雷夢の前だからという訳ではない。単純に彼は典型的内弁慶のコミュ障だった。

「…その、付いて来て、下さい……」

その様子にツインテールやリツチが必死に笑いをこらえていた。とはいえ、ハゲに連れられて各々が塀の前で身を寄せる。

ハゲは親指でコンクリート塀に穴を開けて、中を覗き込んだ。施設の玄関がちょうど見える。

「3, 2, 1で、いきます…」

今にも枯れそうな声でカウントダウン。

3, 2, 1 そう告げられた瞬間、その場にいる全員は施設の玄関に移動していた。

ハゲ。もう一つのあだ名は「ブリンク」。瞬またたく間に遠間とつまを移動する瞬間移動という素能エレメントの使い手。

視界の中にしか移動出来ないという制約はないものの、精度を上げる為に塀に穴を開けた。

そうして敵陣の後方に出現した雷夢、黒子の一行。近くにいた二人の兵を、一番近くに転移したリーダーとガルーが奇襲し、一瞬で倒す。先頭の雷夢はカードキーで入退室を管理する自動ドアを力づくで蹴破った。

施設内に響く警報。ガラスが破れる音に外の警備が一齐に振り向くが、すでに遅い。

外の警備を上手くスルーし、施設に押し入った一行。彼ら、彼女らを待ち受けるのは玄関を埋め尽くす警備員たちだった。ゾンビ映画一歩手前の密度。

警備の内の誰かが、警報を聞いて侵入者を阻む結界を張る。

しかし、これも瞬間移動によってスルーされた。とはいえ、急いでの瞬間移動だったため、距離が短い。一行が転移したのは玄関を抜けて、幅が狭くなっている通路の部分。

前には十数人も警備、後ろには何十人も警備。ちょうど挟まれた形。

先頭の雷夢と黒子が突出した。雷夢がまたたく間に2人に掌底を

喰らわせれば、黒子が3人を切り伏せる。

しかし相手もやられるばかりではない。玄関の警備と挟み撃ちするため、何とか時間を稼ごうとする。しかし、頑張ろうとした警備の後ろには、再び瞬間移動したガルとツイントールが。逆に挟み撃ちにあつた警備は一瞬で押しつぶされた。

その間に玄関の警備が一齐に一行へと詰め寄せる。通路で人数制限があるとはいえ、その勢い鉄砲水のごとし。それを防ぐべくリーダーが結界の素能エレメントで壁を作り、氣勢を削いだ。

とはいえ、向こう側には人材が腐るほどいる。その中にリーダーの結界を破れる者もいたようで、結界は数秒と持たず壊された。しかし、壊された傍からリーダーが再び結界を張る。

壊す、張る、壊す、張る。

コンマ1秒の世界で破壊と再生が繰り返される。その間に連続の瞬間移動キュリアで異能をほとんど失い、戦力外となったハゲは警備に紛れて気絶したふり。通路の警備を屠ほぶったメンバーはそのまま奥に進んでいった。

この場に残った戦力はリーダーとリッチだけ。リーダーが時間を稼ぐ間に、リッチは倒れている警備兵に触れる。そして異能エレメント“制御インペリオ”を発動させた。

すると死体となり動くはずのない警備兵たちが一瞬痙攣。直後に起き上がり、リッチの命令にだけ従う忠実な肉人形へとなり替わった。

死霊術師リッチ。触れた物体を自在に操る素能エレメント“制御インペリオ”をもって、敵の死体を自らの戦力とする戦い方から付けられたあだ名。

リッチの人形はリーダーの結界を壊している警備に襲い掛かる。その戦闘力は生前と大差ないどころか、リッチの異能キュリアコントロール力と戦闘センスが適用されているせいで、より強化されていた。

瞬時に標的を仕留める人形たち。しかし、その際に他の警備によって2体の人形が壊されてしまう。しかし、リッチの力はここからが恐ろしい。先ほど仕留め、死んだはずの警備がいつの間にか人形化しているのだ。

リッチは人形が持っている^{キユリア}素能を消費し、^{インペリオ}制御を発動することもできる。人形が人形を増やす、ゾンビの如き感染力こそが彼の力の真価。とはいえ、精密かつ同時に動かせるのは10体が限界だが。

「あんまり殺すな。この後のデカイ戦^{いくさ}の戦力だ」

「分かってるよ、リーダーの結界を壊せる奴らを始末するだけ。とはいえ、案外ぬるいね。これなら生きて帰れるかもしれない。遺書を置いてくるんじゃないかなあ」

鉄砲水の様な警備の勢いは完全に殺されていた。

42話 剣先の当主

玄関を突破すると、しばらくは散発的に警備が見られるだけ。その程度で勢いづいた4人の侵入者を止められるはずもなく、一行は内部へと進んでいく。

「左、もうすぐ非常口…のはず」

黒子が自信なさげに呟く。廊下からは少し見えづらいが、確かにドアが存在しており、緑の人のマークが上に輝いている。

とはいえ、目標は施設の一番奥。一行は非常口を通り過ぎる。その瞬間、非常口のドアが吹っ飛び、走る一行を強襲。近くにいたガルーが飛んでくるドアを蹴飛ばして防御する。異能者の蹴りを二度も喰らった哀れなドアは、原型を留めぬまま地面を転がる。

「い、行つてください…!」

事前に確認した施設の見取り図が正しければ、玄関とこの非常口からしか中に侵入できないはず。玄関はすでに抑えている。最後の出入り口を防御し、援軍を押さえる役を買って出たガルー。

しかし、彼女の言葉通り先に進んだのは黒子と雷夢の二人だけ。残りのツインテールは足を止めて、ガルーと一緒に残る。

「な、なんで…?」

「アンタは燃費悪いんだから、1人でここを押さえ続けられないでしょ?」

二人の前には数人の警備が。玄関に大勢たむろしていたのより少し服装が豪華だ。

隊長格、なのだろうか。

「……それにこいつら相手にアンタじゃ役不足よ」

「そ、そうでしょうか…」

「そうよ。まったく、相手の力量を見抜けられないんだから」

その言葉をきっかけにツインテールが動く。前にいる警備二人の間に突貫。自ら挟み撃ちされにくい愚行……かに見えたが、左の警備には体で、右の警備には彼女の長いロングツインテールが対応する。

奥義

“赫髪”

自分の髪の毛を自在に扱える能力。髪の毛の

引つ張り強度は一般人の物でも鋼鉄に匹敵する。それが異能者シンギュラリティの物となれば如何程いかほどのものか想像もつかない。

敵の手足に絡めるも良し、敵の首を絞めるも良し。彼女の1m20cmのツインテールは3、4本目の腕となつて右の警備に襲い掛かる。

一本の髪束は警備の目を潰す。良く手入れされた太さ0.01ミリの髪の毛。それが無数に瞳を撫でた。

もう一本の髪束は警備の足を捕らえる。2本の足を一括ひとくくりにし、自由を奪つた。

そして髪の毛がたった一本、警備の喉を締めた。弾力のある皮膚と肉に埋もれる細い髪の毛。それを掴み、引つ張るには人間の手は大きすぎる。

呼吸を塞がれた警備は自らの爪で皮膚と肉を裂き、ようやく髪の毛を掴んだ。目を潰していた髪の毛も、いつの間にか無くなっている。

警備が痛む目を開くと、目の前には拳。左の警備はすでに気絶させられていた。

2人を制圧。残りの3人も同じように倒そうとするツインテール。髪の毛を2人に拵からめ、1人を生身で対応する。

しかし、ここで予想外の出来事。髪の毛の手ごたえが無い。確かに敵の首を絞めつけてやったはずなのに。とはいえ、1人はすでに制圧済み。残りの2人も拳でノックダウン。

この戦闘でツインテールは無傷。強いて言うのであれば、髪を切られたのがダメージに入るだろうか。彼女はいつの間にか地面に落ちていた自分の髪束を拾い上げる。

「私の髪が切られた？ どうやって……」

倒れている警備の側には刃渡り5cmほどの白いナイフが。

「これは……骨？ 骨のナイフ……」

見慣れないブツだが、ツインテールの知識に一件ヒットする。

「剣先けんさきだったっけ。骨の形状を変えられる奥義を新しく開発したっていう……」

その時、廊下の奥から足音が。角かどから姿を現あらわしたのは、刃長70c

mほどの骨の剣を持った警備が2人。

「は？ 長^{なが}。背骨でも引っこ抜いてるの、あれ…」

ツインテールはナイフで切られた不揃いな髪を集め、ツインテールではなくポニーテールで結ぶ。

「ガルー、手伝って。あれは私じゃ役者不足」

「わ、わかりました……」

後ろで控えていたガルーがツインテールの隣に並ぶ。警備の2人も正眼に構えて、戦闘態勢。

(リーチ差、キッツ)

対峙して改めて分かる、剣という武器の有意性。たった70cm。しかし、その70cmがツインテールにとっては果てしなく遠くに思える。

(防御して……いや、血なんか流したらそれこそ継戦^{けいせん}できなくなる)

逡巡するツインテールの隣で、ガルーは僅かに身を沈める。次の瞬間、前に突き出される骨の刀を躲し、対面する警備の目の前に出現。反応する間もなく、ヤクザキックが警備の腹に決まった。

ガルー。袋鼠^{カンガルー}の略称。彼女は有効的な素能^{エレメント}や奥義^{キョウイ}を一切持たない。女性ながらにして男性より高密度の筋肉を、異能^{キョウノウ}の高速循環によって更に強化。超高水準の基礎スペックと体術で敵を倒すのが彼女の戦い方だ。オーストラリアのボディビルダーと言われる袋鼠^{カンガルー}の名に相応しい脳筋スタイル。

純粹な力比べであれば、彼女より優れる生物は地球上に存在しないだろう。しかし、超パワーの反面、身体能力を強化する際の疲労も大きく、すぐにガス欠するのが弱点だ

剣を振る暇もなく1人を無力化。加えて、剣も奪い取っている。

もう1人の警備がガルーに剣で切りかかった。しかし、奪った剣で相手の一太刀を力任せに弾き飛ばす。そして、ガルーにとって人生初めての上段振り下ろし。

体術の経験を反映したそこそこの太刀筋。しかし、元の筋力が強すぎるせいで敵の受けごと潰し、警備を唐竹割^{からたけわり}に。

「警備の人、あんまり剣に慣れてないんでしようか…?」

「いや、アンタのパワーが凄すぎるだけだから。……とはいえ、確かに
お粗末な感じはあったわね。付け焼刃の剣術よりかは、慣れてる素手
で戦った方が強かったりして」

「……そんな事より、次が来てます」

ガルーが非常口の方に目を向けると、暗がりの奥から手が見える。
先制攻撃するべく、彼女は持っていた剣を敵目掛けて全力で放り投
……その時だった。ガルーの体が大きく吹っ飛ぶ。

パン！ 遅れて空気を切り裂く音が響く。音の発生源は非常口
の向こうから。

敵の攻撃が目視できない。しかし、何か飛び道具だろうと直感した
ツインテールは非常口から射線が通らない所に身を隠す。

一方、ガルーの怪我は酷い。腹からとめどなく血が溢れている。彼
女の任務は敵の侵入を時間いっぱい防ぎ続けること。しかし、この怪
我でもって1分か。

それを察した彼女はせめて刺し違えようと、非常口に向かって走
る。決死の特攻だった。

少しの戦闘音の後、通路から出てきたのは数人の警備。彼らは1人
を除いて全員が骨の剣を持っており、その刀身は血で汚れていた。

「……もう一人は？」

「あれ、いませんね……逃げたんでしょうか。どうします、^{剣様}」
「奥に向かうぞ。……くそっ、痛^いつてえ……」

その時、警備の上方には天井に指を突き刺して張り付き、身を隠し
ているツインテールがいた。髪の毛は首に巻いて下に垂れないよう
にしている。

会話から察するに、様付けで呼ばれてる真ん中の女がリーダーだろ
うか。彼女は左腕を抑えて痛がっている。袖には血が滲んでいた。
その女が床に転がっている骨の剣を拾おうとする。

垂涎の好機だった。首に髪の毛を巻き付け、手足に組み付けば、殺
せるはず。他の警備に刺し殺されるだろうが、この不利な状況で敵の

リーダーと引き換えられるならば、十分命を賭ける価値がある。

ツインテールはそのまま女の上に落下し、髪の毛を首に巻き付けた。加えて背中に乗るようにして関節を極め、自由を奪う。

完全に入った。死んでも離さない……その決意とは裏腹に、現実是非情だった。

何故か髪の毛は切断されており、首が全く締まっていない。加えて、組み付いた手の指も切断されている。

「普通ならお前の勝ちだったんだろうが……悪いな、たまたま良いエレメント素能持ってて」

剣先 剣は自分に組み付くツインテールを掴み、地面に叩きつける。取り巻きの骨の剣が、倒れる彼女を針山にした。

「馬鹿ッ！。血を飛ばすな……つくそ……」

剣はツインテールからダメージをほとんど貰っていないにも関わらず、フラフラと眩暈を起している。

「剣様、治療を」

「良い。別に出て行った血が戻るわけじゃない」

「しかし傷跡は……」

「くどい。そんなに私の事が心配なら、手を煩わせるな」

「は、はい……」

剣先の一行は、黒子と雷夢の後を追いかけるようにして施設の奥へと進む。2つの死体を乗り越えて。

◇

後ろが時間を稼ぐ間にも、侵攻を進めていた黒子と雷夢。施設の奥部は通路も狭く、警備も少ない。代わりに警備の質は上がっており、いかに強力な2人といえども侵攻の速度は遅くならざるを得ない。

17人目の警備を倒した時、後ろが心配になった黒子が振り向く。彼女の目に映ったのは、こちらに腕を向ける元親友の姿が。黒子の姿を見て、剣も瞳孔を縮小させて驚く。

「ッ………」

剣の素能つるぎ エレメントと新しく開発した奥義 “鉄髓てつずい鏤骨” を知っている黒子は、今から何をされるかを予知し、咄嗟とつぜんに行動した。

隣の雷夢を押し飛ばし、その反動で自分も横に飛ぶ。素能エレメントの応用で全方位を知覚できる雷夢は状況を把握し、その押し出しを甘んじて受け入れた。飛び道具を警戒するような射線ズラし。

しかし、結果として何も飛んでこなかった。2人を強襲しようとした剣つるぎも、黒子が敵にいと知って、逡巡しゆんじゆんしてしまったのだ。何もせぬまま、廊下の角から飛び出した体を引っ込める。

攻撃が来ない事に首を傾げながらも、雷夢と黒子はひとまず射線が通らないように廊下の角を一つ曲がった。

「どっちが対応する？」

「……………」

「…………お前は先に行け。後ろは私がやる」

明らかに狼狽する黒子を見て、雷夢は自分が対応することに決めた。推定飛び道具持ちに突貫するのは悪手。廊下の角で待ち受けようとする。一方で、黒子はその場に留まり続けていた。

「どうした、早く行け」

「……………」

苦汁を飲み込む様に、苦々しい表情で喉を鳴らす黒子。しかし、一度顔を下げ、再び上げるとそこに迷いは無かった。

「私がやる。先に行っててくれ」

雷夢はそれを聞くなり、すっ飛んでいった。

43話 枯れた血の花

黒子（くろこ）は手にしていた漆黒の日本刀を握り直す。刀の峰（みね）を前に向ける非殺傷の構え。

黒子は元親友（つるぎ）と戦う腹を決めた。ただし、殺しはしない。向こうはこちらの命を狙ってくるかもしれないが、殺さない。どれだけハンデを背負おうとも、ここ一度だけは不殺を貫く。

黒子は覚悟を決めて待つ。廊下の角から敵が姿を現すのを待つ。

1秒が1分に、1分が1時間に引き伸ばされるような待ち時間。しかし、終わりは必ず訪れる。

廊下の角から同時に顔を出した2人の内、1人の警備を刀の峰（みね）で叩き伏せる。もう一人に刀の間合いの内に入られるが、変則的な柄殴りで対処。しかし一撃では倒し切れず、腕を掴まれ、廊下の角へと引っ張られる黒子。もう一撃を加えれば、地面に倒れ伏した。

そこに、残りの2人が迫りくる。黒子は刀を上に取り投げ、左からの攻撃を左手、右からの攻撃を右手で受け流した。さらにそれぞれに反撃。片手で流し、片手で返す2対1で真価を發揮する妙技。

剣（つるぎ）以外の全員を一時的に無力化に成功。肝心要（かんじんかなめ）の最後の1人は、15m先にいた。腕を黒子に向けて突き出している。同時に上に投げた刀が黒子の手に戻ってきた。

剣（つるぎ）の素能（エレメント）“血刃（ブラッドエッジ）”は体内の血を操れる能力。主に血を高圧噴射し、敵を切断するために使っている。弱点は体外に出て行った血の分だけ貧血を起すのと、血を体外に噴出する際、自分の体が傷つくことだろうか。

この力と鉄髄鏤骨（てつずいろうこつ）を合わせる事によって、彼女は新たな攻め手を生み出した。骨の弾丸を作り出し、腕を通る大動脈に装填。血を操り弾丸を高速射出。

その速度は動体視力に優れる異能者（シンギュラリティ）の目をもってしても見切れない、不可視の飛び道具。その威力の代償は余りの高圧に耐えかねた大動脈の破裂と、腕の多部位裂傷。

剣（つるぎ）はガルーに向けて一発撃っている。そのため、すでに

左腕は使い物にならない。残弾は残り、右腕の一発のみ。しかし、当たれば一発で勝負が決まる威力。それを不可視の速度で飛ばせる。この状況、圧倒的に剣（つるぎ）が有利。

一方で黒子は腰に刀を構える。鞘があれば見事な抜刀術を披露しそうだ。そして目を細めて剣（つるぎ）を見つめた。

黒子には奥の手がある。相手の呼吸を盗むことによる敵の動作の予知。奥義や素能（エレメント）とは違う、純粹たる技術。彼女の抜群のセンスがあつてこそその技。

しかし、初対面の敵の呼吸を盗むためには、瞬きすら許されない極限の集中力が必要とされる。それほど高難易度の技。

だが、元親友（つるぎ）の呼吸は不思議と平常心のまま、一息で盗むことができた。二人の呼吸が同期する。

剣（つるぎ）と心臓の鼓動（リズム）すら同期した黒子が剣を振るう。

その直後、狙いをつけ終えた剣（つるぎ）は血液を一気に加速。大動脈に装填された骨の弾丸を一気に射出。

放たれた弾丸と刀が空中でぶつかり、目が眩むほどの閃光火花。

……光が収まった。廊下に立っているのは、両腕を裂損し、満身創痍の剣（つるぎ）と無傷の黒子。諦観の表情を浮かべる剣（つるぎ）と困惑の表情を浮かべる黒子だった。

「ツル、なんで……」

剣（つるぎ）は返事もせず、喋る暇も与えず突貫する。ズタズタに裂けた腕から血を高圧で噴射しながら、腕を振るう。当たれば肉が裂ける事間違いない威力だが、黒子は距離を取って避けた。

噴出された血は確かに驚異的な威力を持つているが、距離による威力の減衰が激しく、20cmも離れば、ただ血を飛ばすだけの水芸に成り下がってしまう。そこも弱点だろう。

「ツル！ それ以上出血したら……」

剣（つるぎ）は黒子の忠告を無視して、血を放出し続ける。黒子も下手をすれば自分が切り刻まれるため、止める事も出来ない。加えて背後からは、先ほど打ち倒した取り巻きが立ち上がり、襲ってきてい

る。

前に触れれば即死、後ろに捕まっても遅かれ早かれ死ぬ。黒子は貧血で動きの鈍った剣（つるぎ）に背中を向け、取り巻きに対処することに。刀で膝を打ち、剣（つるぎ）を巻き込むように後ろへ投げ飛ばした。

そうして時間を稼いだ隙に、取り卷きを再び打ちすえる。残りの3人を気絶させた。

ひとまずの安全を確保したつもり黒子だったが、振り返ればすぐ目の前に剣（つるぎ）。触れられる事こそ逃れたものの、血刃（ブラッドエッジ）の加害範囲内。

黒子は歯を食いしばる。……しかし、痛みはやってこなかった。剣（つるぎ）の体から垂れた血が黒子の服にシミを作るだけ。

その後、剣（つるぎ）は前のめりに倒れる。黒子はその体を思わず抱き留めた。

腕の中の剣（つるぎ）は酷く枯れている。血を失いすぎたせいで肌のハリは失われ、実年齢より老けて見えた。

「なんで初段を外したんだ…？」

黒子が剣（つるぎ）に問うが、カサカサの唇は動かない。

「肩の上、ワザと外したのはどうして…、それにどうしてこんなに血を失うまで無理を…！」

積もった疑問をぶつける黒子。やはり返事はない。

聞かれている本人は、血の足りない脳で他の事を考えていた。

（本当に中途半端だったな。剣先家のためにクロを裏切り、クロを助ける為に当主としての責任を放棄した、今もこうやって。

何か、全部面倒になっちゃった…）

力を振り絞って、自分の手を顔の前に持ってくる。

（しわしわ。もうちよつと死に方は選んだ方が良かったかも…）

その時、手が濡れる感触が。黒子の涙が濁いた肌に染み込む。

（何で泣いて…。まだ私の事を友達だと思ってるの？ この頭花畑…）

掠れた視界の中に黒子の姿が目に入る。

(血、いっぱいかけちゃったな。感染症にならなきゃ良いけど。私の射撃を切るって何だよ。やっぱりバケモノだなあ。

というか、何で黒子と戦う事に……黒葛原(つづらはら)からの要請、なんか…無視、すりや……よか……っ)

ついに意識が薄くなってきた。

「……う」

掠れた声を聞いて、黒子が剣(つるぎ)の口元に耳を近づける。

「……クロ、ごめん。わざわざ目の前で死んじゃって…」

「……え」

突然の言葉に驚く黒子。彼女を他所(よそ)に、剣(つるぎ)の瞳孔がどんどん散大していく。

「い、今、クロって…!」

ついには瞳から対光反射が失われた。

「……ツル? ツル!」

黒子は48kgの肉袋に呼び掛けるが、当然返事はない。

「きつ、貴様…! よくも当主様を!!」

感傷に浸る間もない。黒子は激昂して襲い掛かってくる敵を刀で3枚におろした。その際、死体(つるぎ)も手放してしまい、3等分の肉塊が地面に転がるのと同時に、死体も地面を転がる。

遅れて黒子が膝を付いた。蹲(うずくま)り、すすり泣く。しかしそれも数十秒の事。

黒子は立ち上がり、雷夢を追いかけるために施設の奥へと進む。涙は止まっていなかったが。



~~~~ 禁断箱(パンドラボックス) 突入時 廃病院にて ~~~~

「大丈夫なのです?」

私は柄鎖ちゃんの姉にいびられて消耗している人を気に掛けます。



あれから1時間経っており、大分正気を取り戻していました。

彼は私があげた水を飲んで、一息つきます。

「ふう……あ、ありがとう。水の代金を返して……あれ、財布が無い？」

「あ、ごめんなさい。つい癖で盗んじやってました。この水も君のお金で払っているのです」

財布を返しますが、彼は何とも言えない顔を浮かべています。

「……そういえば君は異能者（シンギュラリティ）だろう？ 見たところ高校生ぐらいだし、どうして作業服を着てこんな仕事を？ どちらかと言えばあのお嬢さん側の人間じゃあないのか？」

「別に異能者（シンギュラリティ）だからといって、みんながお嬢様、お坊ちやまじやないのですよ。私はただの根無し草、かろうじて戸籍があるくらいなのです」

「……大変だね。それに真面目なんだ」

「真面目、ですか？」

「ああ。その歳で不遇にも負けずに働いてるようだし……。それに悲壮感も無い。

普通だったら将来の見通しの立たなさに、嫌になって来るものさ……」

「一応、仕事でここに在るわけじゃないのですが……。まあ、私の人生はもうすぐ終わりを迎える予定なので、将来の見通しに不安はないのです。

それに1つ大間違い。私は真面目では無いのですよ。自分の都合で友達を売るクズなのですから」

「……？ それはどういう……」

彼の言葉を遮って続けます。

外から気配を感じる。もう時間なのです。

「さ、ここから離れた方が良いのです。他の作業者も連れて避難してください」

「え、でも、まだ待機してろって言われて……」

私は渋る彼からペットボトルを奪い、軽く握ります。それだけで

ペットボトルは圧に耐え切れず、蓋を吹き飛ばして中身を吐き出しました。

「こうなりたくなければ、皆で避難した方が良いのです。命あつての物種でしょう？」

「あ、ああ……」

私の有無を言わさぬ思いを感じ取ったのか、彼は素直に退いてくれます。私は窓から廃病院の駐車場へと飛び降りました。そこには私が倒した警備員が数人寝ています。そんな中、見知った顔が1人だけ立っていました。

「久しぶり、ですかね？ 1, 2週間は会っていないと思うのですが」

狼牙君。一番の友達と再開に自然と口角が上がります。

「フシミン……。ここに倒れてる奴らは、お前が？」

「はい。ちよつと邪魔になるので寝てもらっているのです」

私が倒れている人たちを見回すが、狼牙君は私から目を逸らしません。多分、感づかれていますね。

そうであればサプライズをする甲斐がありません。少しは驚いてくれるかと思つたのに。私は早く本題に入るため、戦闘態勢に入ります。

「さ、手合わせしましょう。今日は寸止め無しのフルコンタクトなのです」

私が構えると狼牙君も構えました。しかし、心の整理がついていないのかやりきれないといった表情を浮かべています。

「フシミン……。なんで、こんな……。何のために！」

君に殺してもらうため。

1週間前、謎の追手に殺された時にふと思つたのです。死ぬなら、狼牙君の手が良いな……。つて。欲を言うなら腕の中で。

不思議ですよ、死に方を選ぶつもりは無かつたのですが。

しかし、私を殺してくれと頼んだところで狼牙君が殺してくれるとも思えません。だからそうせざるを得ない状況に持ち込むのが一番でした。

とはいえ、そのために柄鎖ちゃんを危険な目に合わせるのはやりす

ぎですかね？　もう少し勉強していればもっと上手なやり方が思い浮かんだのでしょうか。

「ツカサちゃんも病院の中にいます。お姉ちゃんにいじめられていたのです。殺すつもりは無いと思うのですが、暴力には弾みがありませんから……ね？」

私がそう言うと、狼牙君は様々な表情を見せてくれます。

嫌悪、怒り、躊躇（ためら）い、そして恐れ……次の瞬間には、腹を決めたようです。

少しだけ羨ましい気持ちになります。やはり私より柄鎖ちゃんの方が大事なのです。だからこそ殺して貰えるのですが。……複雑な気持ちです。

そう思った瞬間、顎に衝撃。視界が上を向きました。

昔、「戦う時と場所は選ばない」などと言っておきながら、お恥ずかしい話です。センチメンタルな気持ちになって、目を伏せてしまいました。そんな隙を狼牙君が逃すわけは無いのです。

私が下を向き、狼牙君を視界に捉えた時には、すでによく見た正拳の構え。限界まで引き絞られた拳が解き放たれます。

正拳を受けた私は攻撃の勢いのまま、数メートル下がります。ダメージは右腕の尺骨単純骨折、橈骨（とうこつ）粉碎骨折、上腕骨解離骨折、エトセトラ etc……。柳雪折無（りゅうせつむ）で受け流したにもかかわらず、この損傷。致命傷を逃れただけとは。

右腕を動かそうとしますが、動くのは親指と人差し指と中指だけ。肘と一緒に尺骨神経がおしやかになつたようです。

ハンディキャップにしては、ちよつと大きすぎるのです。とはいえ、勝つ事が目的ではないので問題ありません。

……狼牙君、私を黄泉（よみ）に送ってくださいますか？

私は普通からはかけ離れた人生を送ってきました。

幼い頃に親に捨てられ、犯罪上等で子供ながらに生計を立て、かと思えば変な暗殺集団に攫われる。

この話を聞くと大体の人は同情します。暗殺集団を抜けた時、保護してくれた大人たちも可哀想な子、という目で見てきました。

司法も年齢を理由に、私には刑事責任能力がないと判断しました。

可哀そうな子だから、刑事責任能力が無いから。だから過去に行つた殺人の罪を償う必要はない。

私は少年院には入れませんでした。

「事物の是非・善悪を弁別し、かつそれに従って行動する能力のない者に対しては、行為を非難することが出来ず、刑罰を科す意味に欠ける」

事物の善悪を弁別できるか——万引きや置き引きはともかく、殺人に関しては明確な悪だと弁別できています。

なのに世界は私に罪を償わせません。私は自己中心的でどうしようもないクズですから、少年印に入つて数年不自由な生活をすれば、それだけで罪を償った気になって晴れ晴れと生活できたかもしれないのに。

結局、全部自分の手で終わらせることにしました。……いえ、狼牙君の手を借りているので全部という訳では無いのでしょうか。

「フシミン……」

戦闘中、狼牙君が私を呼びます。会話はやぶさかではありません。これが最後のコミュニケーションですから。

「何なのです」

「お前、俺を殺す気無いだろ？」

……流石にバレますね。狼牙君は敵意を感じ取る第六感に優れますし。その通り、今の私は殺して貰いたいだけで、狼牙君を殺すつも

りは一切ありません。

「どうしてそう思うのです?」

「殺気が感じられない。それと昔言ってただろ、お前が人を殺すには免罪符が必要だ。それが今のお前にあるのか?」

「ありません。とはいえ免罪符の話は嘘で、いつでもどこでも殺つちやうかもしれないのですよ? 口外しないと約束したにも関わらず、襲撃計画を喋っちやうぐらいのクズですし」

「……いや、免罪符の話に関しては嘘じゃない。それだけは分かる。理由もなしに人を殺すことは、お前の絶対のタブーだ」

「随分言い切るのですね。根拠でもあるのですか?」

「客観的な根拠は無い。主観だ。俺にもタブーがあったから……何となく分かる」

「……」

正直、嬉しかったです。狼牙君が私の事を良くわかってきて。

私は免罪符無しに人を殺せません。それだけは絶対です。

「俺の直感が正しいとすると、今の状況の意味が分からない。俺を殺すつもりが無いのに、なんで敵対する? ……なんでこんな事しないといけないんだ!」

苦しそうな表情を浮かべる狼牙君。私と敵対している状況に、苦しんでくれています。それはつまり、私のことを多少なりとも特別に思ってくれているという事で。

私は再び嬉しくなつてにやける口元を左手で押さえつけ、それから大仰に構えました。

「それじゃあ狼牙君の推測が正しいか、試してみるのです?」

先制攻撃で右腕を潰された私と五体満足の狼牙君。戦力は流石に私の方が不利なのです。このままなぶり殺されても良いのですが、下手に手加減しすぎると気絶させられて終了……なんて事になりかねません。私を殺さざるを得ないぐらいには追い込まないと。

そして実力で劣る相手に上手に戦おうとするのは愚策。一か八かを通すしかありません。

無事な左腕を大きく振りかぶる構え。見え見えのテレフォンパンチ。私が暗殺組織にいた時に放とうものなら、その場で処分されてもおかしくない1発落第の赤点パンチ。

しかし、こと狼牙君に限ってはあからさまな方が良いのです。当たればただでは済まないぞ、とこれ見よがしにアピールします。

狼牙君は臆病ですから、少し怯んでくれるかも。上手くいけば緊張のあまり避け損ねる可能性も。まあ方が一当たって、当たり所が悪かったです、では済まないのです、寸止めはするつもりですが。

私が構えても狼牙君は動きません。受けて立つつもりです。

私を信じて寸止めを待つのか、それとも恐怖に負けて避けるのか。私は拳を繰り出しました。

結果、狼牙君は待つでもなく避けるでもなく。私の攻撃を柳雪折無りゆうせつむで受け流しました。私の体は勢いのまま右側によろけます。次の瞬間、体を何かが貫く感触が。

狼牙君の左腕が、私の腹を刺していました。こんなことも出来るのですね。多分、正拳突きせいけんつきの握りを貫手の形にして貫通力を高めたのでしょうか。

そんな感想を抱く間に、狼牙君は私の左手を残った右手で拘束します。私は自分の腕で自分の首を絞めるような体勢に。

正面から抱き合うでもなく、後ろからハグされるでもなく。側面からの変則的な抱擁。

「けいっつ、…げいっつ」

体内の異物に体は拒否反応を起こしますが、心持ちとしてはそんなに悪くありません。狼牙君の手は脇腹から斜め上に侵入しており、私の心臓を掴んでいます。

心臓が脈を打つたび、狼牙君の手も痙攣けいれん。まあ、動いている生の心臓を掴む感触は確かに気持ち悪そうです。とはいえ、彼の拒絶反応に少し傷つきます。

ああ、それにしても狼牙君は本当にすごいです。あれだけ怖がりだったのに、私の攻撃にタイミングを合わせての柳雪折無りゆうせつむ。失敗すればまともにパンチを喰らうにも関わらずギリギリで。

免罪符を盾にし、罪の意識に耐えられなくなれば三途の川を渡ろうとする私とは真逆。君はやっぱり、嫌なことから逃げずに立ち向かえる勇気を持っているのです。

狼牙君の手に力が入ります。正拳で吹き飛ばさず、心臓を潰して殺そうとしているのは確実に私を殺したかったからでしょうか。

私としても願ったり叶ったりです。狼牙君の腕の中（今の状態を抱擁と比喻して良いのかは疑問ですが）で死ぬるのですから。

ああ、冷たい。

ウォームアップが済みの体内には狼牙君の腕が冷たい。

心臓は特にそう。

火照った体には気持ち良い。

……迷惑かけてばかりなので。

最後に一つ。

送りもの

◇

数メートル先が見えない程の霧が立ち込める川辺。

ギイ、と櫂かが軋かむ音。

停泊したボートからは黒くろずくめの船頭。

私はポケットの中から五文銭を取り出す。

「一文足りぬ。帰れ」

また、追い返されました。

◇

意識が飛んでいたのは1秒にも満たなかったと思います。握りつぶされた心臓が再生すると同時に五感を取り戻しました。

私の体に刺さったままの狼牙君の手は、心臓が再生するという突拍子なファンタジーにもすぐに対応します。再び握りつぶそうとしてきますが、とんでもない速度で再生する肉体が、狼牙君の手を外に押し出しました。左手で狼牙君を突き飛ばし、距離を取ります。

これが私の素能エレメント “一文無アンデッド”。死んでも好きなタイミングで体を修復して生き返れる、とつておきの奥の手です。とはいえ、復活後は常に異能キュリアを消費するので放ほつとくと結局死んじやうみたいなのが。

死なないためには体を修復し、異能キュリアの消費を止める為に10秒ほど棒立ちで集中しないとイケません。まあ、今の目的は死ぬのが最終目的なのでそんな事をする必要はありませんが。

ただ、狼牙君に一つプレゼントを贈るために、無理して黄泉返よみがえつてきました。

三途の川の渡し賃は六文銭。五文銭じゃあ一文足りない。

とはいえゾンビのように生き返った私を目の前にしても、狼牙君は狼狽うろたえていません。多少の驚きはあるものの、想定はしていたようです。

私のサプライズは悉こたく失敗。少し気分が落ち込みますが、残された時間はそう多くありません。早く要件を済ませないと。

残りの外傷も全て治し、改めて狼牙君と対峙します。

「ありがとうございます狼牙君、私を殺してくれて。お礼に一つ、奥義を見せてあげるのですよ」

この奥義は誰かを殺す時以外使わないようにしていたのですが、出血大サービスです。



「お、お礼だつて?」

「はい。何のためにこんなことをしているのかと聞かれれば、狼牙君に殺して貰うため、が答えになりますから」

「……殺して貰う? 何で……」

私の心臓を握りつぶしたせい、顔を真っ青にしている狼牙君。私が生き返れることは予想していたようですが、それでも私を一度殺して相当動揺しています。

それだけ私という存在が狼牙君の中では大きかったのでしょうか、素直に嬉しいと思いました。

「狼牙君には私の事をもっと理解して欲しいので、ちゃんと説明してあげたいのはやまやまですが、あんまり時間も無いので第2ラウンドを始めちゃいましょう」

私は狼牙君に見せるつもりの奥義を発動します。右腕でデコピンの形を作り、そのまま保持。私の変な指の構えに嫌なものを感じ取ったのか、彼はデコピンを除いて私の構えを真似ていました。

体内の異能キュリアを消費しきるまで、残り1分といった所でしょうか。狼牙君との距離を一気に詰めます。

左手刀、右肘打ち、左足刀、右回し蹴り。

狼牙君はそれに対して、私と鏡合わせに技を繰り出して相殺。

私の構えを真似る事で、次の動作を予想しているようです。こうなると、受けが堅牢そうですね。向こうから攻めてこないと柳雪折無りゅうせつむも使えませんし、今の私はどれだけ怪我しても自動で回復するのですが、やはり向こうから攻撃してこないと回復力も意味がありません。

とはいえ、私も元暗殺集団の端くれ。手札の数には自信がありません。私は重心を低くして前のめりに。タツクルを狙う構え。

私の構えに狼牙君は僅かに逡巡しました。同じ構えを取れば、お互いにぶつかり合わざるを得ない。私の右手のデコピンを警戒して、至近距離に近寄る事を嫌っている彼にとっては嫌な状況でしょう。しかし、結局は私と同じ構えを取ろうとしています。

とはいえ一瞬の逡巡が命とり。構えが僅かに遅れた隙に私は突っ込みます。接近する私に狼牙君も同じ姿勢でタツクル。

二人、勢い良くぶつかりながらも、狼牙君はデコピンを警戒してか、真つ先に私の右手首を取りました。対する私は狼牙君の脇の下に手を入れ、首に手を回します。

狼牙君、柳雪折無は小さな力で大きな力を制する奥義。こういう使い方もあるのですよ。

私が手に力を込めて狼牙君の体勢を崩そうとします。当然、彼は抵抗する。しかし、柳雪折無はその抵抗を私の力に。

彼はガクンと膝を付きました。何が起こったか分からないという顔をしています。ふふ、珍しい顔が見られました。冥途の土産には十分なのです。

狼牙君は急いで私の手を無勁で弾きます。しかし、無勁に集中したせいで私の右手首を掴んでいる手がお留守に。腕をねじり、拘束を解きます。

狼牙君の立ち上がりりと、私の右手が彼のおでこに添えられるのは同時でした。

「一具弓懸」。体の筋肉を限界以上に収縮させ、あらゆる技の威力を上げる奥義。

事前に溜めが必要ですが、ちゃんと使えば柄鎖ちゃんの金剛不壊すら突破できると思うのです。

接触状態からデコピンを放ちます。打つというよりは押す、ですかね。

指一本だけで狼牙君は10mほど吹き飛び、廃病院の看板を凹ませました。

これが私から狼牙君へ最後のプレゼント。模倣して勝手に使ってください。

……柳雪折無の時もそうでしたが、自分の考えた技を誰かに教えるのは案外悪くない気分なのです。自分の証が残るような気が……

その時でした、地面が急にせり上がってきたのは。いや、私が倒れたのは。

自分の体に意識を向けると、異能がほとんど残っていません。異能が切れれば、一文無の能力は解除されて私は死ぬる。犯した罪に背を

向けて、永久の安寧を手に入れる事ができる。

しかし、体は今までの訓練を覚えているのか、勝手に立ち上がりました。暗殺者時代、地面に寝てたら問答無用で蹴り飛ばされましたし。

とはいえ体は限界の様子。すでに視覚は8割ほど失われ、聴覚も多分効いていないのです。触覚の方も大半が失われており、肘から先の感覚がありません。

意識と外界との接点である五感が次々にシャットダウンしていく感じ。意識だけが取り残されて孤独になっていく感じ。

……寂しい。私が殺した人たちもこんな感じだったのでしょうか。彼ら、彼女たちは絶命の瞬間、いつも私の体を掴んできました。単なる反射なのかと思ってきましたが、もしかしたら皆もこんな風に寂しかったのかも。自分を殺した憎い怨敵にもかかわらず、すが縫らざるを得ない程。

私の体も何か抛り所を求めて手を伸ばします。しかし空を切る。一番近くにいる狼牙君も、手の届かないところに吹き飛ばしてしまいました。

今まで好き勝手やってきたツケが回ってきたのです。最後だけ安らかに死のうというのは都合が良すぎでした。

胴体の位置が下がります。膝を付いたのでしようか。すでに手足の感覚が無いため、自分の体勢すら把握できません。

恐らく膝を付いた体勢で踏ん張ることも出来ず、前のめりに倒れます。そのままクズらしくコンクリートを枕にわうじょう往生……するはずでした。

私の体を抱き留める何か。狼牙君でしょうか。かろうじて残った触覚が人の温かさを知覚します。

私は記憶を頼りに、感覚の無い腕で狼牙君を抱き返します。……ちゃんと出来ているでしょうか、感覚が無いので分かりません。

「……ありがとうございます」

ちゃんと言えたでしょうか？

ほつぺたが濡れる感覚が私の最後でした。



狼牙は冷たくなった二四三の睨を降ろした。

親しい者の死。どうしても父親が死んだ場面と重なる。

柄鎖を危険な目に合わせた奴だから、と開き直れるほど短絡的でない彼は、その場で蹲る。

しかし、状況は悲嘆にくれる事を許さない。一刻も早く柄鎖を助けなければいけない。

加えて、フシみんと戦闘中、狼牙は車の音を聞いていた。そしてたった今、一人分の足音がこちらに近付いている。

「こんな時に……来てんじゃ、ねえよ……！」

敵は気持ちを慮おもんばかつてくれない。容赦なく襲い掛かって来る不埒者は、目にも止まらぬ縦拳たてけんを繰り出す。しかし、フシみんと戦いでトップギアに入ってた狼牙は、それを難なく避けた。

しかし、狼牙が避けることを見越していたかのように、敵はフックを繰り出す。それは彼の顔面を完璧に捉えたが、柳雪折無りゅうせつせつむで受け流された。

狼牙は一步踏み込み、受け流しに使った手で敵の肩を掴む。瞬間、敵が膝を付いた。先ほどフシみんにかけられた柳雪折無の応用。

「くくソアッ!!」

狼牙は膝を付いた敵の顔めがけて、右腕を振り下ろす。それは一具弓懸いちくゆかけで溜めを作った一撃。容易たやすく敵の頭をコンクリートに埋めながら、意識を刈り取った。

「……………く、ぐく……………ッ」

故人フシミンの教えを借りて敵を倒した狼牙。形容しがたいうめき声を漏らす。

「……さっきの車、他にも仲間がいるかもしれない」

思考を口にして、ブレる心を何とか落ち着けようとする。

「柄鎖はB1階の放射線室にいるはずだ……」

死体<sup>フシミン</sup>を一瞥。それから、病院内部へと向かう。

## 45話 上戸鎖家

拷問。というには少し幼稚すぎるだろうか。

「…………ツ！ 本当に気に食わない……！」

加害されると金剛不壊こんごうふえが発動するせいで、責め手に制限があるとはいえ幼稚すぎる。

虫を顔中にバラまかれた。正直どうという事は無かった。私は虫に生理的嫌悪を抱くタイプではない。なんなら姉の方が悲鳴を上げていた。

水責めされた。とはいえ、姉は方が一にも私の脳に後遺症を残せない様子。溺れ死ぬという所まで追い込まれなかったため、そこまで苦しくは無かった。

他にも色々されたが、やはり私が苦痛に苛まれる程の拷問はふつてこなかった。姉が満足するのであれば、苦しむ演技ぐらいはしても良いのだが、そもそも電撃を喰らって麻痺しているため、表情筋をあまり動かせないし声も出しづらい。

平然としている私の様子を見て、姉は爪を噛んでいる真つ最中。私を痛めつけようと熱心な事だ。

「私を攫った事、兄様に知られば…、何か罰を受けるのでは…？ なぜそうまでして私を…！」

麻痺が抜けてきた体で姉に問いかけると、彼女は顔を真つ赤にして私を睨みつけてくる。

「分かり切った事を聞く！ そうまでして貴方をこき下ろしたいのよ！」

私を蹴る姉。金剛不壊こんごうふえが発動したため、別に痛みは無い。

「自分でもビックリよ。貴方がもうじき死ぬって思うと、居ても立つてもいられない。貴方へ手が出せなくなると思うとね！ それぐらい貴方が憎い……！」

随分と拗ならせたものだ。初めの方は物を投げたり、無視をする程度の仲違いなだったのだが。

「……………いっそのこと、殺してしまおうかしら。どうせ私の様な不良に

はどうせ未来も無いのだし」

姉の目が据わっている。本心から言っている可能性大。

「良いのですか？ 私を殺せば、禁断箱バンドラボックスの封印が近い内に必ず解ける……そうなれば姉様も……」

「うるさいッ!!」

姉は私の口を開き、鉄の棒を喉の奥に突きこんでくる。

金剛不壊こんごうふえのおかげで、鉄の棒を突きこまれたといえ咽喉内いんこうが傷つくことはない。しかし、麻痺が残る体は押し込まれる異物を吐き出せない。嘔吐感さいなに苛まれる。

「良く回る口は塞ぐに限る……! 昔からそう! 少し出来が良いからと私のミスや欠点をあげつらって! 貴様も兄に比べれば劣等の癖に! 年下の妹の癖に!」

一応、言い訳はできる。あの時は、生贄なる事を知らされ、精神的に不安定だった。だからストレスのはけ口として姉に当たってしまった。

「そのくせ少し経てば貴様はごめんなさいと私に謝り、それからはまだで私への非道など一切無かったかのように振舞った! その後は善人ぶって、ある程度の社会的な地位を築いた! それで改心したつもりか!?!」

生贄になる事が決まって1年も経てば、将来の死に折り合いをつけられた。代わりに希望を失った。何を積み上げてもどうせ死ぬのだからと。

お嬢様としての教えを惰性で守りながら、面白そうな事物に対してたまに首を突っ込むだけの刹那的な生き方をしてきた。

喉から鉄の棒が引き抜かれる。

「うぐッ、げぼッ、げぼッ……ッは……」

麻痺している喉が、行き場を失っていた胃液をゆつくりと吐き出す。

「もう容赦しないわ。殺す気でやるから覚悟しなさい」

「お嬢様! 流石にそれは……」

暴走気味の姉を、付き人が諫めるいさめ。しかし、姉は聞く耳を持たない。

「うるさいッ！ もう決めたこと！ 貴方は出て行きなさい！ ここからは姉妹の時間よッ!!」

「……………ええ、ええ。お嬢様の意志を尊重いたします」

付き人は肃々と部屋の外へ出ていく。私と姉の二人きりに。

姉は私の髪を掴んだ。そして水の入った水槽の中に顔を叩きつけられる。

「準備するから頭を冷やしてなさい！」

水に沈んだ鼓膜でも姉の怒気が伝わってくる。本当に私を殺すつもりかもしれない。

麻痺が抜けてきたとはいえ、まだまだ体の自由が効かない。水槽の縁に手を掛けるが、驚く程力が入らなかった。

1分ほどかけて、何とか水槽から顔を上げる。久しぶりの酸素が体に染み渡るが、すぐに水中に押し戻された。腕を拘束され、水を飲まされ続ける。

「……………」

姉からの言葉は無い。拷問が始まってから一番の危機感を覚える。ジタバタしてもどうにもならないため、できるだけ何も考えないようにして酸素の消費量を減らした。

……………まだか

……………まだ…

……………本当、に…

……………ま、ず……………い……………

ザバツ

「ゲボツ！ ツ——ゴボ、ゴボハツ…！ カハ…ッ！ ハアツ！  
ハアツ、ハアツ…！」

喉に詰まっていた水を吐き切ってからようやくくの呼吸。酸欠で視界が霞む。

「流石に堪えたみたいね。まあ、ただ苦しかっただけでしようけど」

顔にタオルが押し当てられた。呼吸を塞ぐ目的かと思ったが、どうやら違う。単純に濡れた顔を拭いているだけ。

「死ぬ事すら恐れていない貴方はどうすれば怯えてくれるのかしら？



……私に似た顔を傷つけるのは正直気が進まないのだけれど」  
酸欠から少しだけ回復。 “ゴー……” とガスバーナーの様な音が聞こえる。

視線を動かせば、姉が真っ赤に燃える鉄の棒を持っていた。

「自慢の顔に傷でも負えば、少しは落胆してくれるのかしら」

ジュツ

「ツ……あ、ぐ……ツツ!!」

鉄の棒は躊躇なく私の目に。ギリギリで目を閉じたため眼球を焼かれる事は無かったが、代わりに瞼とまつ毛を焼かれる。瞼1枚では熱の伝達を上手く防げない。目の奥が痛む。

しばらくして鉄が離れていった。しかし、すぐにひるがえ翻って頬に当てられる。鼻のすぐ横でタンパク質が焼けていく。嫌な臭いだ。

「あ……ツ……ぐ……ツ……!」

鉄と肌の温度が同じになる頃。ようやくBBQは終了した。

「ひどい火傷ね。誰もが目を背ける酷い顔」

姉は私の顔を再び水槽の水に漬ける。ジュウ、と顔を冷やされ、引き上げられた。波立つ水面には自分の顔が映っている。

確かにひどい火傷だ。子供が見たら怖がるかもしれない。しかも右目の視力が悪い。視界がぼんやりする。

「しかも何その目。焼かれて濁っているじゃない」

しかし焼肉にされる間、だいぶ麻痺が抜けた。

「まつ毛も焼かれて台無し。左側も同じように焼いてあげる」

今なら何とかなるかもしれない。

髪を引つ張られるのに合わせて後ろに飛び退く。勢いのまま姉に肘鉄を食らわせた。

よろめく姉に追撃……しかし、足が効かない。麻痺が残っているのか、ほんの一瞬痙攣して硬直を晒す。

その隙に姉は体勢を立て直す。状況は四分六分。麻痺が残る分、私の方が不利だろうか。

結局、その対戦ダイヤグラムは覆らなかつた。お互い、こんじょうふかえ金剛不壊があるためダメージは通らないが、姉が私の体勢を崩した際に、スタン

ガンの化物ばけものみたいな電極を手にしていた。

「もう一度寝てなさい!!」

大仰な機械に繋がった電極が私の体に押し付けられる。

また、電撃で麻痺させられるのだろう。

間違えた。こんな事なら、顔の左側も焼かせておけば良かった。そうすれば、もつと麻痺が抜けて私がああ電極を握っていたかもしれない。

やはり、私も出来の悪い子供だ。

姉が手元のスイッチを押す。その瞬間けたたましい雷鳴と閃光が、  
“装置”から放たれた。

私の体は痺れてない。

顎に一発入れるべく、驚く姉目掛けて一歩踏み込む。しかし、麻痺のせいで一瞬遅れた。

その隙に姉が顔を防御するが、50cmはある電極を握ったまま。それらが干渉して防御が遅れる。

結果、私の拳が姉の顎に入った。もちろん金剛不壊こんごうふえで防御されたが、姉は脳を硬化できるほど練度が高くない。

顎への打撃で脳震盪を起こした姉に、一番威力の出る上段回し蹴りを食らわせた。皮膚と肉と骨を叩く音。金剛不壊こんごうふえは発動してない。

私に蹴られ、漏電した機械に叩きこまれる姉。当然の如く感電。姉の体が光った。

少しの間感電させておき、それから装置のコンセントを抜いた。ようやく姉の痙攣が収まる。

漏電した機械の隙間から虫が見えた。私の顔にぶちまけた虫の回収忘れが原因で漏電したのだろうか。なんとも安全性の低い機械、今は平身低頭で感謝だが。

………何とか、なった…?」

安堵できたのは束の間、部屋の扉が開く。

「お嬢様!・今の音は?!」

姉の付き人が姿を現す。私は装置に突っ伏している姉の首に腕を回した。

「動かないでください。さもなければ姉の首をへし折ります」

付き人を忘れていた。咄嗟に気絶した姉を人質に取ったものの、それで止まってくれるのだろうか……

私が考えを巡らせていると、付き人は両手をポケットの中に入れる。

ポケットハンド。その状態からは攻撃がどうしても遅れる。その関係から、シンギュラリティ異能者の間ではポケットハンドは無抵抗の意志を示すジェスチャーとされている。

「ええ、ええ。下手な動きはいたしません。柄鎖様のお望みの通りに……案外と素直に従ってくれた。少しだけ拍子抜けする。」

「ひとまず、私の携帯を持っていけば渡してください」

「申し訳ありません。柄鎖様の携帯は実家の方にございます」

「ではあなたの携帯を……いや、流石に覚えていませんわね」

狼牙様が雷夢様に連絡しようと思ったのですが、電話番号を覚えていない。どうやって皆さんと合流するか……いや、そもそも私たちの計画がバレたのであれば、全員無事でない可能性が高い。

「私がここにいる間、上戸鎖家に何か動きはありましたか？」

「ええ、お嬢様が柄鎖様を換金している間に、長男の絆十様はんとが禁断箱バンドラボックスの方へ私兵を動かしている様子でした」

「……学園の方には私兵を動かしていない？」

「ええ、私が知る限りでは」

私の反乱は知られていたが、そのメンバーまでは知られていない？

……妙な情報の伝わり方だ。

「この場所に追加の人員を寄こしていませんか？」

「いえ、私の知る限りでは誰も呼んでおりません。しかし、部屋の外で待機していましたが、先ほどから建物の外が騒がしい様子です」

外が騒がしい？ 狼牙様や雷夢様がこの場所を知っているとは思えない。という事は……

「……とにかく、外に出ましょう。先に行ってください」

「ええ、ええ。承知しました」

私は姉を引きずりながら部屋の外に出た。

「どうやら、ここは廃病院の地下らしい。私がいた場所は地下1Fの放射線室。姉を人質にしながら廊下を歩く。」

「……柄鎖様はどうして反乱を起こそうと思ったのですか？」

道中、付き人が話しかけてきた。彼は姉の付き人だが、私とも面識がある。とはいえ、こんな場面でも雑談とは……相変わらず緩い人だ。

「数か月前までは近い将来の死を受け入れていたにも関わらず……何か生きる意味を見出されたのですか？」

答える義理は無い。下手に情報を渡す必要は無いだろう。

しかし、彼は一人でつらつらと喋り続ける。

「実家を裏切る事を厭いとわない程の生きる意味、柄鎖様の中では随分と大きな事なのだろうと類推できます。……やはり、姉妹ということでしょうか」

「……何が姉妹なのでしょう？」

彼の言葉が気になってつい聞き返してしまった。

「お嬢様は今回、実家から責せきを問われる事を承知で柄鎖様を攫さらいました。それほどもで柄鎖様が憎かったのでしょうか。先ほども、柄鎖様は生贄せいぢにもかかわらず、殺す気で痛めつけておりましたし。」

お嬢様は昔からそうでした。こうと思えば、どんな手を使っても達成しようとする。……残念ながら実力が伴わず、失敗する事も多々ありました」

その通りだ。今も、こうして失敗している。

「その点は柄鎖様も同じでございます。何か大切なもののために、これほどもでの大事を起こされたのでしょうか。だから、『やはり姉妹』と申させていただきました」

「……そうですね。確かにそっくりです」

周りの事も鑑みず、何なら学友を殺しまでした。行動だけ見ると姉以上かもしれない。姉も、必要に迫られれば実行するかもしれないが。

どんな手を使つてでも生きる。狼牙様がそう願つてくれるから。  
……とはいえ、状況は絶望的。皆は今どうしているのだろうか。失敗する所まで、姉と同じにならなければ良いが。

階段を昇ると、地上一階。廃病院らしくガラスが割れて散らばつて居たり、床が一部剥がれていたりする。

気絶した姉を引きずりながら廊下を歩いていると、外から戦闘の音が聞こえる。誰と誰が戦っているのか気になるが、生憎あいにくと音が聞こえる方面に窓が無い。

壁を破壊してしまおうか。そう思った所で、廊下の角から人影が現れた。

「昨日ぶりだな、柄鎖」

かみとくさりはんと上戸鎖絆十。私の実兄。

兄がこつちに来ることを言わなかった付き人に鋭い視線を向けるが、彼も驚いている。本当に想定外の事らしい。

「それに連歌れんかも。出来の悪い妹が二人揃つてご苦労な事だ」

「……何の用でしょうか」

「わざわざ説明する必要があるのか？」

「見当はついていますが、誤解が生じている可能性もありますので」

「ふん……。柄鎖、お前は反逆の罪で。そして連歌れんかは家に不利益となる行動を取った罪で連行する」

「兄様は実家の方で指揮を執っているとそちらの付き人からお聞きしたのですが」

「いいや、お前ら側の人間にバレないよう少人数でここに来た。そつちのスパイは影武者を見分ける技量も無かったようだな。」

連歌れんかの奴、柄鎖を攫うまではまだ手際も良かったが、余計な人員を引つ張ってきたせいですぐに足がついた。こここの場所は楽に分かつたぞ」

「……このまま捕まれば、姉も罰を受ける事になります。兄を倒すのを手伝っていただけませんか？」

姉の付き人に聞くが、返事は芳しくない。

「いえいえ。これはお嬢様が望んで行動した結果です。それを誤魔化するのはお嬢様のためにはならないと考えます。」

「なにより、私の様な凡庸ほんしようが一人増えた所で戦力は変わらないかと思えますが…」

それを聞いた兄が私の方に呆れた目を向けてくる。

「そいつの言う通りだ。それにしても私を倒すなどと……本気で言っているのか？」

お前の様な凡人が、それも私より6歳年下。才能、経験、そのどちらにおいてもお前が私を上回っている所など無い。現に、お前が俺に勝ったことは一度も無いだろうか？」

「……確かにそうですね」

私は引きずっていた姉を地面に降ろす。もう人質としての役目が期待できない以上、戦うのに邪魔なだけだ。

「体術キョリアでも、異能による身体能力強化でも、手合わせでも……兄様に勝ったことは一度もありません。とはいえ、金剛不壊こんごうふえの自動化は私の専売特許でしたわね」

「ふん、硬度は私の方が上だろうに。一つの事に十数年費やして出来たのが自動化だけとは……効率が悪すぎる。目を鍛えれば自動化などせずとも防御は容易い」

天才の兄だが隙はある。本人は気づいていないし、その隙を突かれる場面も無かっただろうが、私は知っている。ほぼ伊達とはいえ、十数年兄妹をやっていない。

今回ばかりは金剛不壊こんごうふえを自動化していなかったことに泣きを見てもらおう。私はゆっくりと構えた。

「あくまでやる気か。彼我ひがの力量差すら分からん凡人の相手は面倒だ。私と同じ血が混じっているとは思えん。」

……お前が私に似ているのは、整った顔立ちぐらいの物だったが、それも今では失われてしまったな。ひどい火傷だ。」

「……」

「唯一とりえの取柄とりえと言える美貌びぼうを失い、反逆によって上戸鎖かみとくさりの長女として

も失格……その立場を失った。今のお前には何の価値も残されていない。精々が生贄としての価値ぐらいだ」

「……ふふ」

「何が可笑しい？」

「いえ、何でもありませんわ」

こんな簡単なことを兄が間違えるとは。上戸鎖かみとくさりの立場を失った私に残された価値は、つかさ柄鎖つかさだけに決まっているでしょうに。

私は上戸鎖家かみとくさりに伝わる構えを崩した。腕を顔の周りに寄せた大胆な構えに切り替える。

「……なんだその構えは。腹ががら空きだ」

「……」

「誘っているつもりか？ 金剛不壊こんごうふえがあるから大丈夫だとも？」

「……」

「まあ良い、丁度試してみたいと思っていた所だ。この前舞踏会で受けた屈辱をお前にぶつけてやる」

兄は私の懐へと一息に飛び込んできた。そのまま腰を落として拳を引いて上に向ける。良く見た、狼牙様の正拳の構え。

やはり舞踏会の夜、一度見ただけで模倣していたのか。兄は天才、狼牙様と同様に一度見ただけで技を模倣できる。

しかも、兄の構えは堂に入っている。ただ狼牙様の正拳を模倣しただけでなく、兄の体格に合わせた最適化が行われていた。

瞬きまばた一つしない後に殺人拳が飛んでくるはず。私は小さく息を吐いた。

瞬間、腹が爆発した。そう勘違いする程の衝撃と痛み。兄の拳が私の腹に深々と突き刺さっていた。

しかし私は怯まない。ただ最適化しただけの正拳では膝を付かない。十年以上、1日1000回素振りし続けてきた狼牙様の正拳の重さと比べれば軽い。私を屈服させるには、あまりに軽すぎる。

「なッ……」

私は顔の横に構えていた右拳を、驚く兄の顎目掛けて振り下ろした。

兄は天才だ。頭もキレる。物事の先を予測する能力が高い。だからこそ予測が外れた時、慌てる悪癖がある。

狼牙様が舞踏会で兄に正拳を喰らわせた時、兄は動く事すらままならなかった。だからこそ兄が私に正拳を決めた時も、自分と同じように動けなくなる程のダメージを与えられると予測したはず。

なぜなら、自分が動けなかったのだから。天才の自分が動けなかったのだから、凡人の柄鎖が動けるわけがない。

だが違った。痛みに耐える力は才能では無い。兄が最も毛嫌いな非効率な根性。痛みの許容量を引き上げる為に腹パンしてもらおうような私にこそ備わっている力。

兄は私の拳を金剛不壊無<sup>こんごうふゑ</sup>しで喰らった。自動化していないから慌てた時に不意打ちを喰らう。

顎への打撃で柔らかい脳を揺らされた兄は平衡感覚を失い、後ろによろめきながら膝を付く。脳震盪<sup>こんごうだう</sup>を起こしている今なら金剛不壊<sup>こんごうふゑ</sup>を使えないはず。使えるにしても不完全なはず。

私は返しの左拳を繰り出そうとしたが、なぜか体が動かない。次の瞬間には口が鉄の味でいっぱいだった。

「…ウツムぶ、げはッ！」

そんな暇は無いというのに、体は勝手に血を吐き始める。膝が折れて体が沈む。

痛みさえ我慢すれば動けるほど軽傷ではないようだ。今なら、兄に止めを刺せるといふのに。

私が血反吐<sup>ちへど</sup>を吐く間に兄は大分回復したようだ。壁を支えにしながらも立ち上がりつつある。

「……ま、さか…な。お前に、傷つけられ、るとは……。夢にも思わな、かった…。」

確かに、自動化が必要かもしれん……。とはいえ二の矢は無し、結局は私の勝ちだ」

兄は壁から手を離して完全に自立する。



……ここまで、か…？

腹から湧き出る血を口に溜めながら顔を上げる。

…いや、違う。来てくれたのですね。

兄の右後ろ。視線を送る。

私の視線に気づいた兄はすぐさま振り向き、右後ろを見る。

「お前を殴るのはこれで二回目だな」

その声は兄の左後ろから。次の瞬間、兄の姿がかき消える。轟音の  
後には煙たい粉塵と、向こう側の景色が貫通して見える大きな穴。

更に次の瞬間には、姉の付き人が廊下の奥へと吹き飛んでいった。

「柄鎖ッ！ 大丈夫か!？」

そしてこの場に残ったのは気絶した姉と、血を吐く私。それと狼牙  
様。

彼は取る物もとりあえず、私に駆け寄ってくれる。本当に一番良い  
所で駆けつけてくれる王子様だ。

「顔は……火傷か？ 他に傷は……」

狼牙様は私の心配をしてくれる。しかし、まだ戦いは終わっていない。  
一見この場を制したように思えるが、まだ落とし穴がある。

私は口に溜まった血を吐き出し、喉を震わせる。

「つげほ…ッ！ 狼牙、様……治療の力を持った敵が…、まだいるはず  
……」

私は生贄。兄は私を生かしておく必要がある。だが、兄は私を殺し  
かねない一撃を放ってきた。逆に言えば、私を治療できる見込みが  
あったという事。そいつを抑えなければ。

「兄の……さつき殴り飛ばした人のもとへ……」

「……わ、分かった……」

狼牙様は血を吐く私に顔を青くしていたが、私の言葉に従って兄の  
方へと向かってくれた。その背中を見つめていると、彼は私の方を心  
配そうに振り返る。

そんなに心配せずとも大丈夫。私は軽く手を挙げてひらひらと手  
を振った。それ以降、狼牙様は振り向かなかった。

狼牙様の姿が見えなくなると、急激に力が抜ける。挙げていた手が

へたれ、床に這いつくばった。

「しゅぷ…」

大げさに吐くと、耳の良い狼牙様に聞こえるかもしれない。一度口で堰き止め、徐々に口から血を漏らす。

……間に合う、でしょうか。狼牙様に任せるしかありませんわね。

遠のく意識の中、狼牙様が私を心配してくれた場面を思い出す。

——顔の傷を嫌悪しないでくれた。傷を気持ち悪く思うとか、そもそも美醜を気にするような性格では無いのは分かっていたが。

それでも少しだけ安心したのは事実。

安堵と嬉しさを胸に、私は気を失った。

## 46話 100年越しの浦島太郎

結果、狼牙<sup>ろうが</sup>が治癒の力を持った敵を捕らえるのは容易かった。吹き飛ばした柄鎖<sup>つかせ</sup>の兄の元へ先んじて行き、近くで気配を消して隠れていると、件の敵<sup>くだん</sup>がこのこと姿を現したのだ。

そこを奇襲して敵を捕まえた狼牙は、ついでに瀕死の柄鎖の兄を引きずり、柄鎖の元へ戻って来る。

「柄鎖<sup>つかせ</sup>を治癒しろ。お前らも柄鎖が生きていないと困るだろ。生贄に使えなくなるから」

「そ、そのまえに絆十様<sup>はんと</sup>を治癒させろ！ 今にも死にそうだ…！」

確かに柄鎖の兄はすぐにでもくたばってしまいそう。

「……柄鎖とそいつ、同時に治癒しろ」

「ど、同時には出来ない！ 先に絆十様<sup>はんと</sup>を…！」

狼牙は喋る敵の頭を掴む。

「なら、そいつの頭を潰して俺に嘆願しなくて済むようにしてやろうか」

「っ……」

「同時に治せ。できなければ柄鎖から先に治せ」

「……わ、分かった…」

折れた敵が柄鎖と、柄鎖の兄に触れる。その手が僅かに光った後、二人の傷が一瞬で完治する。

狼牙は敵を抑えながら、いつでも柄鎖の兄に飛び掛かれるよう準備していたが、その心配は杞憂に終わる。治癒は素能<sup>エレメント</sup>によって行われた。正拳でズタズタになっていた体を再生するには、患者のエネルギーを大量に消費する必要がある。

結果、柄鎖の兄はほとんど栄養失調の病人。とても戦えるコンディションではない。とはいえ、それは柄鎖にも当てはまる事だったが。ひとまず二人とも栄養補給をする必要がある。そんな時、救急車のサイレンの音が。

「やっと来たか…。いや、突入前に呼んだにしてはタイミングが良いと言うべきだな」

少しして、救急隊員が病院の中へ入って来る。

「人が倒れていると通報を受けてきました。傷病人はどこですか！」

今この場には、柄鎖・柄鎖の兄・柄鎖の姉・姉の付き人。病院の外にはコンクリートに顔が埋まっている男とフシみんの遺体。

救急者には乗り切らないため、隊員は追加の救急車と警察を要請している。しかし警察については柄鎖の兄が権力を用いて止めさせていた。

「狼牙様。医療関係の人間はもともと黒葛原つづらはらの人間ですが、今は半分以上の人員が剣先けんざきに吸収されています。そして剣先けんざきと上戸鎖かみとくさりは同盟関係にある。

私達が救急車に乗るのはリスクが高いと思いますが。今も兄様が指示を出していましたし」

「救急車をジャックするか……それとも柄鎖つかさを背負って逃げた方が良いか？」

狼牙が治癒の素能エレメントを使う敵を抑えながら悩んでいると、彼の携帯が鳴る。

「悪い、柄鎖が出てくれるか」

敵の拘束で手が塞がっている狼牙の代わりに、柄鎖が電話を取った。

「もしもし、狼牙様の代わりに柄鎖が出ています。

………狼牙様」

柄鎖は耳から携帯を離し、狼牙の方を見る。とはいえ、狼牙は耳が良い。通話の内容はすでに聞こえている。

「雷夢らいむ様が禁断箱パンドラボックスを開いたそうです」

◇

……禁断箱パンドラボックス施設 少し前……

雷夢は黒子くろこと別れた後、施設の奥を目指していた。しかし、意外に

も奥の方には警備員がほとんどいない。

代わりに避難していた<sup>シンギュラリティ</sup>異能者の職員は沢山いたが、誰もが戦闘経験のない素人。雷夢の敵では無い。

力量差は明らかだったが、それでも歯向かってくる職員たち。数だけが多いそれらを、次々と倒していく雷夢。

自分より明らかに弱い<sup>ヤ</sup>雑魚を蹴散らす。ここまでの拮抗した戦闘と違い、なんと快適で<sup>かんび</sup>甘美な<sup>じゆうりん</sup>蹂躪だろうか。

殴る、蹴る、折る、潰す、たったそれだけ、犠牲者は良い声で鳴く。戦闘経験を積んでいる奴は痛みに強いからこうはいかない。

10人程が戦闘不能に。残りは<sup>かな</sup>敵わないと<sup>さと</sup>悟り、部屋の隅で腰を抜かしている。

「……………はハ」

乾いた笑いと共に、雷夢の瞳孔が興奮で開いていく。雷<sup>いかづち</sup>家の血が、クズの系譜がこの状況に呼応して沸き立つ。腰を抜かす職員的首根っこを引っ掴み、持ち上げる。

自由な手で職員の喉ぼとけを指で挟んだ。そのまま力を入れて挟み潰す……

「にやあ」

その時、猫の鳴き声。雷夢が聞き覚えのある声に振り返ると、いつの間にか彼女が飼い始めた猫がそこにいた。

「ゴットン」

ようやく名前を付けたらしい。猫が名前を呼ばれると、雷夢の方に近寄る。彼女は職員を放り投げ、足元に寄ってきた猫を撫でる。

「どうやってここに来た」

ここにたどり着くには雷夢が通って来た道を通る必要がある。しかし、<sup>シンギュラリティ</sup>異能者の猫といえど無事にここまで来られるのだろうか。

「素能か？」

「にやあ」

肯定か否定か。人間が知る<sup>よし</sup>由はない。

「まあ良い。それより、<sup>バンドラボックス</sup>禁断箱の解放が先だ」

雷夢の瞳孔は普段の大きさに戻っていた。意識のある職員の中で

一番偉そうな奴を引っ捕まえ、奥の部屋へと進む。

そこでは制御盤やモニターが色々と並んでいる。それらの前の椅子に連れて来た職員を座らせた。

「素能の発動を防いでいるガスの流入を止めろ」  
エレメント

逆らえば自分の身がどうなるかはさつき見た通り。職員は言われるがまま、制御盤を操作した。ガスの流入を止め、換気を最大出力で回す。

「ガスが抜けるのにどれくらいかかる」

「た、多分、5分かからないかと…」

「そうか」

雷夢は計器を見て、確かにガスが止まっていることを確認すると、制御盤を叩き壊した。そして携帯を取り出し、別行動している狼牙へと電話をかける。

「もしもし、狼牙様の代わりに柄鎖が出ています」

電話口からは柄鎖の声。どうやら、向こうも上手くやったらしい。  
バンドラボックス

「禁断箱のガスを止めた。一旦は決着だ」

雷夢がそう言うと、しばらく電話の向こうが静かになる。

「……………雷夢様、ビデオ通話でこちらの様子を映していただけませんか？」

雷夢は言われた通り、ビデオ通話に切り替えて制御室の風景を映した。こっそり逃げようとしていた職員を引っ掴み、二人並んで自撮り風に映る。

すると、再び電話に向こうが静かに。しばらくして柄鎖の代わりに狼牙が出る。

「ガスを止めて、何か変化はあったか？」

「まだない。ガスが抜けるのに5分かかるらしい」

「…………ガスが抜ければ、中の奴が出てくるのか」

「かもしれない。中の奴は100年箱の中にいた。ガスが抜けたとしてもすぐに外に出てくるとは限らないがな」

「…………ガスの装置そのものを壊した方が確実か？」

「制御盤はすでに壊した。装置の方にも今から向かう。お前も戦闘可

能なら今すぐこっちに来て——」

その瞬間、雷夢の全方位センサーに突如何かが引つ掛かる。携帯を手放し、後ろにいる正体不明の物体に肘鉄。しかし、手のひらで受け止められる。そのまま無効で弾き、膝蹴りを推定敵の腹に叩き込んだ。

「えぐッ」

膝がモロに入る。突如現れた「そいつ」は数歩よろめいた。とはいえ、次の瞬間には攻撃など喰らわなかったかのように、無傷で立っていた。「そいつ」は雷夢が手放したスマートフォンを手にし、それをまじまじと見ている。

「……これ何だろ？　なんか別の場所の景色が映ってる。

あ、真っ暗になった。ボタン押したからか？　……とりあえず返す」

「そいつ」はスリープモードのスマホを雷夢に放り投げる。

雷夢と同じ薄い紫の長髪、身長は170cm程度、何より全裸。股間には棒と玉が二つぶら下がっていた。

「……女性の前で全裸は良くないか」

その男は部屋に居る職員を引つ掴み、その服を瞬く間に剥いだ。剥ぎ取った衣服をそのまま装着。男と職員の背丈が同じぐらいだったので、それなりにフィットしている。

裸にされた職員は恨みがましい目で男を見つめるが、意にも介さない。

「お風呂と違って近くにある？　仮死状態とはいえ、長いこと閉じこもってたから流石に垢が痒い……」

ぐしぐしと服越しに体を搔く男。雷夢は少し考えた後、手招きする。

「……近くにある。ついてこい」

先行する雷夢に男は大人しくついていく。二人は道を引き返す道中、黒子とすれ違う。

「え、あれ、その人は……」

バンドラボックス  
「禁断箱の中にいた奴だ」

「一応、ブイブイいわせてるレ（ニュー）のリーダーをやってる……やってた、になるのか？　レ（ニュー）って今もある？」

「今って大正何年？　……いや、そもそも大正？　そんなに天皇長生きじゃないよね」

「レ（ニュー）はすでになくなつた。今は令和4年、西暦で言えば2022年」

「2022年!?　……すごいな、100年も経ってるのか。……それより、そっちの君」

男は戸惑う黒子の方を見つめる。

「涙の痕があるけど、何か悲しい事でもあつた？」

言葉自体は黒子を心配しているように聞こえるが、男の顔には面白いものを見つけた、というニュアンスの笑みが浮かんでいる。

「いや……別に……」

「そんなはずは無い。何か深く心が傷つく事があつたはず。

……血が付いてるけど、怪我したってわけじゃなさそう。返り血、つてことは近い人が殺されたか……近い人を殺した、とか？」

黒子の体が震える。男はそれを見逃さなかつた。

「近い人とはどんな関係だつた？　思い出話とかがあれば聞かせて欲しいな。後は、どんな状況で殺した？　与えた致命傷は……」

黒子の方へ少しずつ近寄る男。そして、彼女の射程範囲に入る。

逆夢<sup>マニフェス</sup>で刀を手に顕現。異能者ですら瞬く間も無い斬撃。それは男

の首を捉え、頸骨の隙間を通り、首を完全に切断した。

……はずだつたのだが、男はピンピンしている。首から血が一滴垂れた程度。男は黒子から距離を取り、射程範囲外へと逃げた。

「やっぱり治癒の力があると油断しやすくなる……。100年の空白もあるかもしれないけど」

高速かつ正確無比な斬撃。それはあまりにも綺麗に細胞を切断するが故に、治癒するのは容易。ズタズタに傷つけられる方が治癒には苦勞する。

「それより異能者<sup>シンギョラリテイ</sup>の体を切断できる刀。……浦島太郎の僕には知らない事が色々出てくる」



男は黒子を前に、常に一定以上の距離を保っていた。隙の無い男に、黒子も踏み込みあぐねている。

「止めろ」

「けど……！」

「いいから止めろ。そいつは風呂に入りたらしい。玄関の方にまで連れて行く」

「……そういう事なら、分かった」

雷夢の言葉を聞き、黒子は構えを解く。とはいえ刀は握ったままだが。

「そつちのは話が分かる。なんとなく気が合う気がするな。僕と髪色も一緒だし。名前は？」

「雷いかづち 雷夢らいむ」

「奇遇。俺も苗字は雷いかづち。親戚さんだったんだ」

「……」

「いや、1000年経ってるから親戚というよりは……子孫？ でも僕の子供ってわけじゃないし……」

男がぶつぶつと呟く間に、剣の遺体つるぎが残っている場所まで戻って来た。

思わず体を硬直させ、目を逸らす黒子。その様子を見て男は話を交える。

「ああ、これか。君が殺したのは」

男は遺体を蹴り飛ばそうと足を振りかぶる。その動きを視界の端に捉えた黒子は、一瞬で戦闘モードに。男は直前で思いとどまった。

「寝起きで怠だるいし、君と事を構えるつもりはないんだ。ただ人を貶けなすのが癖で。

性さがでね。虐さめて、弄もてあそんで、咎とがめるのが。そうやって好き勝手してたら、いつの間にか荒くれ者の頭目だ」

「……道理だな」

最後に雷夢が呟いてから廊下の角を一つ曲がると、玄関付近で敵を抑えているはずのリーダーとリッチの背中が見えてくる。どうやらここまで押し込まれたようだ。

リーダーが張っている結界の向こう側には相変わらず大量の警備員が。

「……お祭り?」

封印から脱出したばかりの男が首を傾げたのも無理ないだろう。

「雷夢様、そいつは?」

リーダーは結界を張り替えながら問いかける。

バンドラボックス  
「禁断箱に封印されていた奴だ」

「そっくだよな?」と言いたげな顔で雷夢が男に視線を送る。

「まあ、そっだね。それよりお風呂は……」

男が自分を禁断箱バンドラボックスから出てきたレ(ニュー)のリーダーだと認めた瞬間。雷夢は男の頭を掴み、床に叩きつけた。

「だ、そっだ」

そのまま床を擦るように男を引きずり、警備員の大群の方に放り投げる。リーダーは雷夢の意図を汲んで、結界を解除していた。

「お前らの目的は今変わった。こいつを壊せ」

雷夢が警備員たちに発破をかける。一方、放り投げられた男は放物線を描きながら、警備員の海へとダイブを余儀なくさせられていた。

「……やっぱり、寝起きで頭回ってないな……」

男は自嘲気味に呟いた。

## 47話 浦島太郎の実力

雷夢によつて警備員の海に放り投げられた「男」。空中で体勢を整え、着地地点にいる警備員の肩に乗る。肩車の体勢から、土台の警備員の顔に手を掛け、一切の躊躇なく目を潰した。

「うぐああッ!!」

男は警備員の叫び声を聞いて口元を緩める。土台の警備員は視力を奪われながらも男を掴み、地面へ叩きつけようとする。

しかし巧妙に警備員の手から逃れた男は、ふわりと地面に着地。周りには、警備員、警備員、警備員。男の周りに50cmの空間を残し、後は全てが警備員だ。

「飛んできやがった! 殺せ!!」  
にわかに殺気立つ。

四方からの同時攻撃。とはいえ、完璧な連携では無い。男はわずかなタイミングのズレを利用して、順番に対処していく。

前、上段前蹴り。後ろ、上段刻み突き。これを右に避けて対処。

右、足を狙ったローキック。相手の蹴り足の太ももを蹴りあげて対処。

左、前と後ろの上段前蹴りと上段刻み突きに阻まれて攻撃が届かない。

再び四方からの攻撃。男が対処。

再度四方からの攻撃。男が対処。

無限に繰り返される神業。

練度の低い警備員たちではこの男を傷つけること叶わない。四方では駄目。もつと多方面から攻めなければ。

まず、雷夢が飛び出した。次いで黒子。彼女らは天井に指を突き刺し、空中から男に蹴りを仕掛ける。五方、六方目からの攻め手。どんな達人でも物理的に対処しきれないフォーメーション。

かくして、男へのファーストヒットが入った。警備員のローキックが決まる。体勢を僅かに崩す男。そこへ、群衆が群がった。

男の髪を掴む手。男の腕を掴む手。男の顔を殴る手。男を押し倒

す手。

男を踏みつける足。男の顔を蹴る足。

良いのが入った。男の首が曲がってはいけない方向に折れる。

しかし、なおも群衆のリンチは止まない。死体相手に、気の済むまま技を繰り返し続ける。技は次第に暴行へ。洗練さを失ったただの暴力へと成り下がっていく。

その隙を「男」は見逃さなかった。首が折れたまま雑な踏みつけ攻撃を腕で絡めとる。そのまま警備員の足を巻き込み、転倒させた。

死んだはずの人間が動くという異常事態に場は浮き足立つ。その隙を突いて男は立ち上がり、雷夢や黒子がそうしているように、天井へと指を突き立てた。

「流石に分が悪い。外でやろうよ」

その言葉を境に、男の姿が消える。瞬間移動の素能エレメントを使って、外に逃げたのだろうか。警備員の大半も男を追って外へと駆けだしていく。

「あれが不死の素能エレメント……死なない力」

話には聞いていたが、いざ目撃すると驚かざるを得ない。黒子が天井にぶら下がりながら目を丸くしていると、下から手が伸びてくる。彼女はそれを蹴とばして、地面へと着地した。雷夢も同様に地に足付ける。

「敵を間違えるな。あの男を狙え」

「敵はお前らだ！ あの男だってお前らの仲間なんじゃねえのか!？」

「違う、あの男は禁断箱パンドラボックスから出てきた奴だ。男の口からそう聞いたはず。」

そうなった以上、私達を止めることに意味は無い。今はあの男を壊す方が先だ」

「んなモン聞こえるかよ！ でまかせ言うんじゃねえ！」

警備員はそのまま殴りかかって来るが、雷夢は相手の腕を取り、ねじりあげる。そうして拘束した警備員の喉元に、黒子が刀を突きつける。

「全員落ち着いて私達の話聞いて欲しい。無駄に喋ると、こいつを

刺す」

人質を取った状態で黒子が警備員に呼び掛けるが、構わずすぐにも飛び掛かってきそうさ。

「全員が聞けていなくとも、これだけいればあの男が禁断箱バンドラボックスから出てきたという自供を聞いた人間がいるはずだよ」

そう呼び掛けると、1人がおずおずと手を上げる。それに呼応して2人、3人と手が上がっていく。

「分かっただろう、今の敵は私達じゃない。封印が解けた以上、あの男を殺す事が最優先のはずだ。このまま放っておけば100年前の悲劇の再来になる」

「封印解いた奴が言うな……うぐっ！」

雷夢に捕まっている警備員が余計な茶々を挟む。雷夢が締め付けを強くして黙らせた。

「あの男を封印するため人が1人、生贄いけにえとして死ぬ。私達はその間違いを止めに来ただけだ」

「1人殺させないために複数人殺すのか!？」

「お前らは戦士だろう。死を覚悟してこの場に立っているはずだ。生まれた瞬間に死ぬことを義務付けられた子供と同類に括くくるのか？ それこそ散った仲間失礼だろう」

「……………」

顔を真っ赤にして歯ぎしりをする血の多い警備員たち。とはいえ、反論は無い。それを良い事に雷夢は続ける。

「生贄として死ぬのは一人じゃない。もうすでに数人が犠牲になつている。見たことがあるか？ 体を切り裂かれ、生体機械に改造され、素能エレメントを垂れ流すだけの生贄を。まともな人間としての尊厳すら保てず、生きる屍しかばねとして晒し物にされている犠牲者を」

雷夢が警備員を見渡す。生贄の惨状を聞いた警備員たちは雷夢と目が合うたび、気まずそうに目を逸らす。

「それも全ては過去の人間達が怯えを胸に、保身に走り続けたせいだ。私達はその負の連鎖を断ち切りに来た。事が終われば煮るなり焼くなりしてくれて構わない。」

だが、今ここ。ここだけは協力してくれ。お前たちは昔の臆病者とは違うはずだ。誇りを胸に、世界を脅かしたと伝え聞く災厄に立ち向かってくれ…」

雷夢が頭を下げると、しばらく場は静まり返った。

足音がする。1人、また1人と施設の外へと向かっているのだ。

そのまま外に出て行った「男」を追うように人が流れていく。しかし、1人の警備員が雷夢の肩に手を置いた。

「どんな理由があるうと、お前らのせいで俺の友人が死んだ」

警備員の手には力が入り、ぎりぎりとして雷夢の肩を軋ませる。

「……だから、あの男を潰した後はお前らの番だ」

そう言っつて、警備員は雷夢から手を離し、走って行ってしまった。

この場に残されたのは、雷夢達だけ。

「バカが多くて助かる」

雷夢は先ほど強く掴まれた肩を回し、解す。先ほどの演説から一転、その様子を見て黒子は閉口。リッチは「まあそうだよな」という目、リーダーは？八百の演説で大量の人間を死地に送ったあくどきに目を輝かせていた。

「それである男、どうしますか？ 死なないってのはどうにも厄介ですよ」

リーダーが皆に呼び掛けるとリッチは首を捻る。

「確かにそうだよな。死んでも良いとなると自爆特攻も視野に入れなれないといけないし。そもそも何回殺せば死に切るのやら……」

「……その前に、どうしてあの男は治癒の素能を持っている？ 死んでも生き返るなら必要ないはずだ」

雷夢の疑問は尤も。男は黒子に首を切られた時、不死の素能ではなく治癒の（エレメント）で対処していた。

その疑問には黒子が答える。

「多分、生き返るだけで傷が全部治るわけではないんだと思う。

さつき男が生き返った時、頬に痣が残っていた。警備員の集団に捕まった時、初めて受けた傷。それが残っていたことは、死ぬ寸前

に受けた傷しか治せないんじゃないかな……」

「んー……例えば、腕を骨折した後には首を折られて死んだら、首は治るけど腕の骨折は治らない感じ？」

リツチの合いの手に黒子が更に補足する。

「うん、そんな感じ。さっきの感じかららして、多分死ぬ10秒前までの傷しか治らない……かな。だから、治癒の素能エレメントも持っているんだと思う」

「なら、殺すより怪我させる方が良さそうだね。あくまで言い伝えだけど、あの男は本当に不死と勘違いするほど蘇キュリテらしい。相当な異能力だと考えられる。

だったら怪我を治癒させて、体のカロリーを枯渇させる方が速いんじゃないかな」

「うん、出来るだけ治りにくい怪我。

皮下組織を大きく傷つける打撲、粉碎骨折、裂傷……」

黒子は言いながら、手にした刀の刃先を鋸ノコギリのように変化させる。

戦いの相談を進める流れに待ったをかけるのはリーダー。

「少し良いでしょうか。そもそも瞬間移動が出来る敵を仕留めるのは難しいと思います。劣勢になれば逃げれば良いのですから。もっと早く気付くべきでした。

私とリツチはさっきの戦闘で異能キュリアが底をついているため、戦闘では役に立ちません。追跡と探査が出来る人材と追加の戦闘要員を引張ってきて良いでしょうか。ここにくるまでかなり時間がかかると思いますが……」

「……そうしろ」

「仰せのままに」

許可を取ったリーダーはすぐに動かせそうな人員をこちらに寄こすため、真つ先に電話をかける。

「ほらハゲ。一旦家の方に戻るからなけなしの異能キュリア絞って瞬間移動しろ。この施設の外に出るだけで良いから」

一方でリツチは死んだふりをしていたハゲを引き起こし、隊をそろえる為に本拠地に戻ろうと準備を整える。

執事たちを背に、雷夢と黒子は外へと駆けだした。

◇

2人が施設の外に出て、すぐに目に入ってきたのは地面に転がっている警備員たち。3割ほどが倒れ伏している。残りの警備員は群れを成して、まるで台風のようにある一点を囲っている。

台風の目には「あの男」がいた。前後左右から襲い掛かって来る警備員をキレのある動きで捌さばいている。寝起きよりも戦いの勘を取り戻しているのが見て取れた。

室内よりも人の密度が下がり、動きの自由さを獲得した男は一か所に留まることなく、警備員の数を減らしていく。

しかし、警備員もただやられるばかりではない。束たばになっても叶わないと悟り、技をいい加減に振るようになる。狙きって振るわれた攻撃を捌さばくのは容易たやすくとも、無造作に飛んでくる攻撃を捌さばくのは達人といえど確実ではない。

誰にも当たらない場所で振られた蹴り。他の警備員の攻撃を避けた男に直撃。

動かず立っているかと思えば、突然のダブルリアット。それを避けるのには成功した男だが、別の警備員の掌底を喰らってしまう。

警備員が倒れるごとに、男の痣あざも増えていく。そして増えた痣が増えすぎれば、男が治癒する。

そんな消耗戦を打破する変化が。雷夢が隙を突いて男の懐に飛び込んだ。

隻眼せきがんに産まれたからこそ完成させられた超密着距離を得意とする戦闘スタイル。それは男にとっても過去に体験した事のない比類なき技。いかんせん対応が遅れる。

雷夢は無理をしない。出来るだけ自分の手の内を見せないように、しかし男の動きを縛るように戦う。そうして周りの警備員に殴らせるのだ。

男がグーを出せないよう縛る。すると周りの警備員がグーとチョ



キを出す。

男がパーを出せないよう縛る。すると周りの警備員がパーとグーを出す。

数の有利を存分に生かさず、永遠と不利を押し付けられる男。しかし、男は一切慌てない。彼が数多の打撲を負い、その代わりに得たものは雷夢への対策法。

徐々に、次第に、雷夢の技が通用しなくなってくる。

まだまだ技の引き出しはあるが、このままではジリ貧か——  
そう感じた雷夢は今持っている全てを使うことに。

至近距離での裏拳。手首から先を鞭のようにしならせ、男の目を潰すように当てる。男の視界を奪った一瞬にワンツートの連携。

“ワン”は寸勁すんけいと無勁むけいの合わせ技、二連掌にれんしょう。

“ツー”は狼牙から習った正拳。インパクトの瞬間に無勁を合わせるのも忘れない。

刹那に最大火力を叩き込まれた男は数歩よろめく。内臓という内臓が破裂しているが、周りの警備員が襲い掛かって来る頃には全ての傷を治癒していた。

「やっぱりどの時代にも強い奴はいるんだね。初見じゃ流石に対応できなかつた」

雷夢がもう一度男に接近しようとする。しかし、男はそれだけはさせない。雷夢と自分との間に警備員を挟むようにして戦い続ける。

「というか、二回目でも怪しそうだからもう近づけたくない。後で相手するよ」

雷夢を常に意識して戦っているため、警備員からの打撃を喰らう事が増えたが、それでも雷夢だけは近づけないように戦う男。

男が戦い方を変えれば、雷夢も戦い方を変える。

近付くのは難しいと察し、自分を囷わとりに。そうして、黒子がいる方に追い込む。もう一人の猛者もさの存在を知らない男は、脇から伸びてきた刀に反応しきれない。

他にも警備員がいる状態で刀を振るうと周りを巻き込んでしまう。そのため、黒子は突きを繰り出し、突きを引き戻す際に鋸のこぎり状に変化さ

せた刃で男の服と肉を削り取った。

一度削っては身を隠し、隙を突いて再び刀を伸ばす。警備員の隙間を縫ってのヒット&アウェイ。男に影も踏ませず、ザクザクと削っていく。

傷は治癒していくが、その消耗は激しいはず。

このままでは削り殺されると慌てたのか、男は無理やり黒子を捕まえようと動く。しかし、黒子は捕まりそうに捕まらない位置取りを心がけ、ギリギリでかわ躲す。

そんな男の隙を雷夢は見逃さない。男が再び雷夢に意識を戻した時、すでに彼女は0歩の距離に。

「ちか……いッー！」

自分を捕まえようと伸びてくる雷夢の手を2回弾き、最後の突進を大きく回転して受け流した。

「自分でもビックリ。たまにあるよね、何かすごい上手に出来る時」

そのまま男は目を付けていた警備員の1人を捕まえる。戦いの中で攻撃した際、エレメント素能で体を硬化させていた警備員。彼の鳩尾みぞおちに1本拳。

指1本という僅かな面積に拳の威力を全て乗せられ、胃を撃たれた警備員は硬化したとはいえども悶絶。

「硬化の力、貫うよ」

男は警備員を捕まえたまま、生来のエレメント素能を発動させた。

バグ強奪。他人のエレメント素能を奪い、4つまでストックできる。5つ目の

エレメント素能を奪った場合、ストックしているエレメント素能を1つ捨てる必要がある。

奪ったエレメント素能は自由に使えるが、エレメント素能は初級者のまま。そして奪うためには5秒間対象者に触れる必要がある。

5秒。普通の人にとってはすぐだが、シンギユラリテイ異能者にとっては悠久ゆうきゆうにも感じられる時。

1秒。本能的に今が危険な状態という事を察した雷夢が突っ込む。

2秒。片手を使えない男が雷夢の攻撃を、急所を外しながら受け続ける。周りの警備員も男を囲んで攻撃し続ける。

3秒。警備員が邪魔で近寄るのが遅れた黒子がようやく攻撃に参

加。無限に傷を負い続ける男。5秒なら死んでも傷を治して生き返れると強引だ。

4秒。雷夢が拘束されている警備員に正拳を放つ。素能エレメントを奪う前に死なれてはたまらない。男が警備員をかばう。

5秒。時が満ちた。

瀕死の体を一気に治癒し、奪った素能エレメント——硬化の力を発動させる。ギヤリギヤリギヤリ!

脇から伸びてきた黒子の刀と硬化された皮膚が擦れ、嫌な金属音が鳴り響く。これで黒子の対策は完了。男は用済みの警備員を振り回し、周りの敵を遠ざける。

再び仕切り直しの間合い。警備員はすでに10人ほどまでに減っていた。

## 48話 対峙

「あれだけいたのに随分寂しくなったね」

男は地面に倒れている90人以上の警備員と立っている10人強を眺めて呟く。

「始めの方は途方もない数と思っていたけど、渦中は夢中で、気づけばゴールまであと少し」

男の構える様子に淀みはない。今までの消耗はほとんどなさそうに見える。

「おかしい……」

「何がおかしいの?」

黒子の呟きを律儀に拾う男。

「あれだけの傷を治癒したのなら相当量のエネルギーを消費したはず。すでに倒れていてもおかしくないのに……」

「まあ、僕の異能キユリアの量は尋常じゃないって言われるし」

「いや、そうじゃない! 治癒には体内のカロリー消費ともなが伴うはず!

栄養不足で倒れてもおかしくない、はず、なのに……」

「……んー」

黒子の発言に、男は斜め上を見上げる。彼が思考する時の癖。

それを隙と捉えた警備員が数人飛び掛かるが、足並みのそろっていない彼らは、あつという間に制圧された。

「多分、誤解がある。治癒エレメントの素能は体に蓄えたエネルギーを消費するのが当然なのかな、この時代だと。でも昔は異能キユリアだけでも治癒できる人がいた。僕はそいつから力を奪い取ったし」

「……そんな、はず……」

男の独白に黒子は驚愕する。

「異能キユリアだけ消費する治癒の力を持っている人が絶滅したのかな。昔は紛争ばかりだったから、あり得ない話じゃないと思う。それで今の時代には体のエネルギーを利用する方しか残っていなくて、それが常識になった」

男の独白に証拠はない。全てが嘘かもしれない。

しかし、黒子には真実だと分かる。

「……さつきから何か変な異能キュリアの流れ。もしかして君の？ 僕の体を探ってるのか？

もつと早くにやるべきだったかもね。それか、さつきまでの戦闘がカオスすぎて出来なかつたとか」

黒子が奥義、しんがん“心眼”で男の体を診断した結果、栄養状態に問題無し。

——しかし、異能キュリアの量は底が見え始めていた。

まだ勝機はある。自然と黒子の表情は緩む。

「……まあ、そういう表情するって事は異能キュリアの量も分かるんだ。長々と語った意味が無かつたな。戦意が折れてくれれば楽だし、楽しかつたんだけど」

男はため息を吐く。

「とはいえ、勝てるかもしれない希望を砕くのも愉悦の王道か」

ぼやきと共に男の姿が黒子の視界から消える。

瞬間移動。目の前で起きた現象に心当たりがある黒子。体を捻り、背後から伸びてきた手を掴んだ。

「後ろにも目がついてる？」

男の疑問も尤ももつとだが、黒子が男の手を掴んだのはほとんど偶然。しかし、その偶然を掴めたのも、黒子の状況把握力の高さで判断の速さがあつてのもの。

男の手を取った黒子は刀を手放し、立ち関節技を男にかける。手首、肘、肩をロックされかける男だが、元々立ち関節技は対処さえ知っていれば早々極まるような技では無い。男は前方にたたらを踏んで逃れる。

黒子は男が前に逃れようとした瞬間、男の腕を引き寄せ男の動きを回転運動に変えた。そのまま右腕で渾身の掌底を叩き込む。

たたらを踏む男の真つ向からぶつけた一撃。しかし、皮膚を硬化させた男へのダメージはほとんどない。彼女の本領はやはり刀の間合あひい。

黒子が掌底を繰り出す間に、男は黒子の喉に手をかけていた。その

まま指で首の動脈を絞める。僅かに遅れて黒子も男の喉に手をかけ、同じく首の動脈を絞めた。

しかし、男は頸動脈に硬化点を集中させる事で、血管の硬化を成功させる。不死の素能エレメントと治癒の素能エレメントを手に入れる以前、素能をとつかえひつかえ奪っていた頃に硬化の素能エレメントを触っていた経験がここできた。

脳への血流を一時断たれた黒子はすぐに気絶。ぐったりと脱力した。

「はあ…」

1人仕留め、息を吐き出す男。しかし落ち着く暇は無い。黒子の手が男の首から離れた瞬間、接近していた雷夢の手が男の首へと迫る。

再び頸動脈を絞められるのかと思いい血管を硬化する男だが、雷夢の手は男の気道へと伸びる。判断を間違えた男、硬化場所を切り替える暇も無く、雷夢の手によって肺への酸素供給を断たれた。

男も瞬時に喉絞めを雷夢に返した。お互いに片手を喉輪のどわに、もう片手を手四つに組んでの殺し合い。

気道を絞められる男、動脈を絞められる雷夢。気絶、致死までの道のりは雷夢の方が短い。しかし雷夢は無効を常に発動し、男の手を僅かに押し返している。お互いの死亡までのタイムリミットは同程度だろうか。

しかし、味方の数は雷夢が有利。残っている数人の警備員が一斉に男へと飛び掛かった。

地面に倒され、踏みつけられる。だが、男が雷夢の首から手を離すことは無い。

脳への血流を絞られた雷夢。視界が明滅し、瞳の焦点がブレている。しかし、彼女も男の喉から手を離すことは無い。

男の唇、爪が紫に変色していく。典型的な酸欠チェンジーセの症状。

——雷夢の瞳が明後日の方向を向く。先に意識が途切れたのは雷夢の方だった。

男は掠れた意識かすの中、瞬間移動の準備をする。雷夢の手が離れ次

第、転移して体勢を整え直す算段。

だが、雷夢の手は動かない。完全に意識は途切れているはずなのに、手に万力の力を込めたまま動かない。

男は雷夢の首から手を離し、自分を踏みつけんとする警備員の足を掴んだ。そのまま足を引いて警備員を転ばせる。直後、男の意識が酸欠で途切れた。

二人の意識が途切れた後も、雷夢の首絞めは続く。必死の殺意が意志のないはずの体を動かし続ける。気絶後の重なる気道圧迫に、男の体は脳死まで追い込まれた。

直後、男の不死の素能「蘇生」<sup>リバイヴ</sup>が自動発動。死ぬ10秒前に体の状態が戻り、蘇生した。

死ぬ10秒前。つまり酸欠<sup>チェアノーズ</sup>の最中。男は真っ青の顔で気絶までの残された時間をギリギリまで使う。腕以外は脱力した雷夢を引きずりながら、警備員を2人なぎ倒した。また死亡。

蘇生して、気絶までの僅かな時間でまた警備員を倒す。そうしてようやく男の前で意識を保っている人間はいなくなった。男は地面に転がっている黒子の刀に手を伸ばす。

刀まであと僅かという所で男は再び意識を失う。死亡、蘇生。次の命で、ようやく刀を手にした。

刃物を手に入れた男は雷夢の腕に刀を突き立て、腱<sup>けん</sup>を切断する。「~~~~カハアツ！ ハアツ！ ハアツ……！」

ようやく首が自由になった男は、久しぶりの酸素を肺一杯に吸い込む。紫だった顔が朱色を取り戻す頃に、男は立ち上がった。

「……最悪。こいつらの反応も楽しめなかったし、骨折り損のくたびれ儲けだ」

男は改めて自分の状態を確認する。異能<sup>キユリア</sup>の量は最大量と比べるとひどく少ない。蘇生や致命傷の治癒を行うのは不可能だが、体に循環させて身体能力を強化するには十分。

「そういうえば借りたこの刀。流石に科学技術が進んで出来た、ってわけではなさそう。それなら複数人が持っているはず」

男は黒子の方へと歩み寄り、彼女の顔に触れる。

「硬化はもういらぬい」

5秒。黒子の素能エレメントを硬化の素能エレメントと引き換えに強奪。

「能力は後で試そう」

独り言の多い男は、黒子の頭に手をかける。そのまま頸椎けいついをへし折り――

「多分…敵ッ！」

突如として現れた人間に蹴り飛ばされた。地面を転がり、数メートル先で体勢を立て直す。顔を上げれば、小柄の人間が1人と猫が1匹。

◇

狼牙ろうがは禁断箱施設から離れた所にある廃病院にいた。そこで柄鎖つかさを助け、雷夢から禁断箱バンドラボックスを開いたという電話を受けた。

しかし、電話からは聞きなれない男の声が聞こえ、次いで電話が途絶えた。恐らく封印されていた人物が抜け出し、戦闘になったのだろうと予測。柄鎖の兄は後詰めを動かす判断を下し、動ける狼牙は何が出来るかとは分らなかったが、単身援軍に向かった。

とはいえ、施設までの道のりは遠い。本気で走っても30分以上かかる。向こうで勝つにしろ、負けるにしろ、恐らく間に合わない距離。何の意味があるのだろうかと思いつつも走る狼牙。

急に猫が現れたのは、一つ山を越えた時だった。見覚えのある姿に足を止める狼牙。雷夢が飼いだめた猫。

猫の方も狼牙を覚えているのか、彼の肩に飛び乗る。

「お前、どこから……。いや、今はお前とじゃれてる場合じゃ…」

狼牙が猫を肩から降ろそうとしたその時。自分の体に異能キュリア流れ込んでくる感覚が。何か妙な事をされるのでは、と抵抗する狼牙。

「にゃあ」

猫が一鳴き、狼牙の首筋を甘噛みする。しかし、抵抗する獲物を抑



え込むような攻撃性は一切ない。

「……分かった、好きにしろ。悪いようにはならないんだよな？」

狼牙は不安を覚えながらも力を抜く。瞬間、景色が変わった。

畑が永遠と広がる風景から、死屍累々（ししるいるい）の風景に。足元には倒れた雷夢。他にも大勢が倒れている中、一人の男が黒子の首に手をかけていた。

「多分…敵ッ！」

狼牙は跳躍し、男を蹴り飛ばす。顔を狙ったが、寸での所で腕の防御を間に合わされた。男は離れた所で体勢を立て直している。

「急に新手。……その猫、復活早々見たような…」

狼牙の肩に乗っていた猫は地面へと降り、雷夢の方へ寄っていく。倒れている彼女の顔を舌で舐め始めた。

「主人が心配で助っ人を連れてきたのかな。一段落ついたら僕も飼ってみようか…。」

とにかく、面白そうなのが来てくれた」

男は戦闘態勢に入る。狼牙も同じく。

「伝えておくけど、僕は今かなり弱ってる。普通に戦う分には問題無いけど、蘇生も出来ないし、治癒の力も使えない。致命傷を受けたら終わりだ」

「……」

手の内をぺらぺらと喋る男。その意図が読めず、警戒心を増す狼牙。

「信じるかどうかはそつち次第だけど、嘘は言っていないよ。ただ、こう言っておいた方が君も頑張ってくれると思うし、なにより僕が勝った時に弱っている相手を仕留めきれなかったっていう絶望が増すと思っただけ。君は良く怯えてくれそうだしね」

男の視線の先には、震えている狼牙の手が。

「安心してほしい。瞬間移動の素能エレメントで逃げたりもしない。別に僕は生き残る事が目的じゃないんだ。愉悦さんしたが好きだね。

三下虐めさんしたたりもするし、圧倒的戦力差を覆して楽しんだりもする。勘だけど、君はすごく良い相手だと思うな。こんなチャンスを見逃す

ほど命を重くは見てないよ」

「……仮に、俺を殺した後はどうするんだ」

「この後？　生きてたらとりあえずお風呂かな。その後は……二回目の封印はごめんだし、元凶を探して始末しに行こうかな。昔にも相手の素能エレメントを封じる奴はいて、厄介だったしね。目につく限りは殺してただけど、漏れがいたんだ。子孫もちやんと残って遺伝もしてるし」

廃病院でフシみんを相手にした時とはまるで違う。相手は明らかに自分を殺しに来ている。地面に寝転がっている奴らを全員倒したに違いない腕前を持った奴がだ。

狼牙は恐怖に震える。だが、臆病な彼が勇気をもって立ち向かえる理由を提示された。柄鎖の顔を思い浮かべ、震える手を握りこんだ。

男と狼牙、対峙していたのは数秒。狼牙の方から先に仕掛ける。雷夢から模倣した密着距離での戦闘を仕掛けようと踏み込むが、リーチで勝る男の蹴りに出鼻をくじかれる。

「さつき見たのに似てる。そこで転がってるやつの弟子か、師匠か」  
狼牙はもう一度踏み込む。再び蹴りで迎撃する男。しかし、狼牙は男の蹴りを避けない、防がない。脇腹に直撃するが、蹴られた方向に加重して耐える。

ダメージはほとんどなかった。金剛不壊こんごうふえ、それも内臓まで硬化する完璧な出来のおかげ。

いつ死んでもおかしくない極限状態に放り込まれながらも、勇気をもつて立ち向かっている現状は狼牙の脳を最大限に活動させる。結果、制御の難しい金剛不壊こんごうふえを普段の倍以上の精度で模倣することを可能にしていた。

「死に臨みて応戦しろ」

狼牙の父親が言葉で残した狼牙の最大の武器。それが今、遺憾なく発揮されている。

蹴りを金剛不壊こんごうふえで受けた狼牙は、防御姿勢を取らなかつた分、体勢有利。そのまま勝負を決めるつもりで構えから正拳突きを繰り出す。彼の100%が引き出された殺人拳。

しかし構えから繰り出す関係上、出が遅いそれをギリギリの所で男は躲した。反撃に一本拳の一点集中の突きを繰り出すが、体の内部まで硬化させる狼牙に効果は薄い。

近い距離まで接近している両者。狼牙は自分の腹に当てられた男の腕を掴み、リゆうせつむ“柳雪折無”を発動させる。フシみんとの戦いで学んだ応用、力の流れを細かく変え、男に膝をつかせることに成功。

そのまま半分関節技をかけたような状態で、上から拳を振り下ろす。変則的だが、これも正拳突き。確実に殺してやる、と自分の持つ最強の技を繰り出した。

上からの振り下ろし、それも背中側からの攻撃。男は身を膝をついた状態から更に身をかがめ、狼牙を背負い投げるまではいかなくとも、僅かに前のめりにさせた。

狼牙の拳は男を行き過ぎ、地面を砕く。地面に着いた手で地面スレスレを鋭く跳躍し、二人とも様子見の距離に戻った。

先ほどの攻防で、お互いの技量の高さはお互いに知る所に。狼牙は、何か怯ませてからでないかと正拳を当てられないと悟り、右腕にいちくゆがけ“一具弓掛”を溜め始めた。

## 49話 異臓厚壁症

狼牙は右腕に“一具弓掛”いちぐゆがけを溜めながら考える。目の前の男がどんな技を持っているかは分からないが、体内まで硬化する金剛不壊こんじょうふくわえを扱える今、そうそう致命傷を負う事は無い、と。男の懐に潜り込むため、体重を前にかけた。

一方で男も考える。高硬度の硬化能力、あれを突き破るには点の攻撃、一本拳しか無い、と。握った拳の中指を浮かせた。

仕掛けたのは狼牙。5mの距離を二歩で詰める。しかし、男は今までの攻防と変わらない狼牙の前のめりの構えを見て、至近距離での戦闘に持ち込みたいと看破。

一本拳に構える右腕はそのままに、左腕を前に伸ばして狼牙を近づけさせない。無理に近付こうとすれば、髪の毛を掴まえられ、一本拳が飛んでくることは明らかだ。

狼牙と男の身長差は20cm。リーチ差にして約10cm。たったそれだけの差を狼牙は攻略しかねていた。

男が前に突き出している左腕を無暗に払おうとすれば、逆に腕を捕まえられ、そのまま展開を握られかねない。狼牙は左腕を突き出し、左腕同士での叩き合たたいに発展する。

手を伸ばさず、引く、指だけを動かしてフェイント、足さばきで距離を詰める、空ける。

傍から見れば、じゃれ合いにも見えるやり取り。しかし、その実は高度な牽制合戦。それは2分も続いた。異能者にとっては気の長くなるような時間。

長い間膠着状態が続くと、余計な考えがよぎるもの。元々臆病な狼牙は、“このまま時間稼ぎをすれば、援軍が来るまで持ちこたえられないのでは”、そう考えてしまう。

真剣勝負の最中には余りに不純な邪推。結果、狼牙は左手の甲を男に掴まれていた。

腕を引っ張られ、体勢を崩しながらも柳雪折無りゆうせつむで男に働きかけようとする。しかし、柳雪折無りゆうせつむを発動する頃には、すでに手は離れていた。

狼牙の横面を一本拳が叩く。金剛不壞こんごうふえを発動してもなお、ダメージを与える一撃。当たったのは乳様突起——耳の後ろの出っ張った骨の部分。

三半規管に近い急所を突かれ、一時的な眩暈めまいや吐き気に襲われる狼牙。

丁度、蹴りの間合いまで離れた二人の距離。男は容赦なく上段前蹴りを放ってくる。不調に見舞われる狼牙は、金剛不壞こんごうふえこそ発動出来なかったものの、顎を引き、急所だらけの顔の中では一番マシな額で攻撃を受けた。

そうして仕切り直しの距離に。男は変わらず左手を前に出し続けている。一方で狼牙は体を沈め、四つん這いに構えた。

安全を追ってどのような死闘を制そうと言うのか。素能エレメント // ヴォルフを発動させ、体を四足歩行に適した骨格に変化。四つん這いに構え、突進以外を捨てる。

狙いはあからさま。男は避けやすいよう半身に構えた。

2人は僅かな間、動かない。

「にゃあ」

雷夢の猫の声 Kitsukake。瞬間に事は終わっていた。

男の遙か後方で狼牙が転がりこけている。

——避けられた、通用しない。技だけでなく素能エレメントを併用した力づくの突進も。

ジワリと冷や汗がにじみ出る。まだ自分の技を全て試したわけでも無いが、漫然と何をしてしても通用しないイメージだけが頭に浮かぶ。狼牙は体勢を立て直すのが構えが定まっていな。今までに模倣してきたどんな構え、技を使えば良いのか分からない。

狼牙が最悪の想像に到達するのは遅くなかった。汗の代わりに涙が滲み初める。そんな折だった。

「にゃあ」

また猫の泣き声。いつの間にか狼牙の近くに雷夢の飼っている猫がいる。

「……獣、か」

狼牙の構えが定まる。

腰を落とし、右腕を上、左腕を下に。腕でトラの口、指でトラの牙を模した虎口拳。中国拳法に伝わる動物を模した象形拳の一種。模倣を得意とする彼も昔に学んでいた。

狼牙の構えが変わる。龍拳、鶏拳、蛇拳……。今までに学んだ象形拳の構えを次々と。

「どうして今まで思いつかなかったんだ」

象形拳とは動物を真似、野生の力を借りる拳。しかし人間と動物ではどうしても骨格が違う。結局ただのモノマネだ。真の模倣とは及ぶべくもない。

だが、狼牙は素能で骨格を変化させられる。蛇とまではいかないが。虎、犬ほどになら。

狼牙の構えが決定する。先ほどと同じく四つん這い。その姿は、隣に居る猫とそっくり。

同じ猫科でも虎ではなく、猫を選んだ。その理由は、狼牙が猫カフェに行った時に感じた猫の動きの読めなさ。

今、狼牙は右腕に一具弓掛を溜めており、近づいてそれを叩きこむことが第一の目標。なによりも、相手の牽制をかくぐって近寄る事が先決なのだ。

そのために、気分屋で予測不能なイエネコの動きを模倣しようと決意した。その構えに名付けるなら家猫拳。

「……狼牙なのに猫か」

冗談を呟いたのは、構えが決まったことによる僅かな心の余裕の現れか。とはいえ、自分の技が通用しないのなら、いつそ新しい型を、「、という考えは危険だ。いくら模倣が得意とはいえ、ぶっつけ本番の技が通用するのか。

一方で、男は狼牙の構えを見て困惑していた。戦闘経験豊富な彼とはいえ、流石に四足歩行と手合わせした経験は無い。ひとまず対応力の高いオーソドックスな構えで待ち受ける。

狼牙はゆっくりと距離を詰める。まるで手のひらに肉球がついているかのように音がしない。

彼<sup>ひが</sup>の距離が10m程に縮まった。そこで唐突にそっぽを向く狼牙。死闘の最中に相手から目を離す。自殺行為にも思える暴挙。しかし、男は対処に困る。

視線は外しているが、狼牙の注意は確実に男に向いている。どれほど小さな音、空気の乱れすら見逃さないだろう。わざと隙を見せて仕掛けさせようというのか。

男が逡巡する間にも、距離は縮まる。残り5m。

そこで狼牙は再び男の方を向く。その顔にはびっしりと汗。命懸けのよそ見。精神を大きくすり減らした代価として、男に迷いを植え付けた。

不意に狼牙が寝転がる。文字通り、地面に寝転がった。相手に無防備な腹を見せて。

明らかな隙だが、男は動かない。いや、何かあるのではない。彼<sup>ひが</sup>の距離は3m。1歩踏み込めば届く間合い。

男は混乱を消すために決断する。次に隙があれば必ず行く、と。

狼牙は死の淵<sup>ふち</sup>で予感する。次に来る、と。

狼牙が再び寝返りを打つ。仰向けから四つん這いに戻ろうとした瞬間、男は踏み込んだ。狼牙は男の動きを察知する前に決め打ち。地面に手を突き、足払い。

男の踏み足に直撃。しかし踏み込みの足。体重と勢いが乗った重い足。

その足が崩れた。

狼牙の素能<sup>エレメント</sup>は骨格を変えるだけではない。身体能力向上の副機能も備わっている。たった一回、それも確実な当てのない決め打ちのため、狼牙は全力で身体能力強化を発動した。

男は膝を付き、狼牙は足払いから流れるように膝立ちへと移行。そして右手の一具弓掛<sup>いちくゆがけ</sup>を掌底と共に男の顔へ解き放つ。

もちろん男は腕で防御。しかし、防御の上からでも男は一瞬気を失う。それだけの威力が一具弓掛<sup>いちくゆがけ</sup>には内包されている。

そうしてできた隙。狼牙が男の胸に正拳突きを叩きこむには十分な時間だ。

男の体は数十メートル向こうへ吹き飛んでいた。金剛不壊こんごうふえで硬化した人間ですら、瀕死に追い込む狼牙の正拳。生身で受けた男が無事で済むはずはない。

狼牙は確実な手ごたえの余韻に浸りながら、大きく息を吐いた。決着。

いや、彼の持つ知識の限りではまだ決着は先のはず。男は不死の素能エレメントを持っていてのだから。緊張と弛緩の余りの落差に忘れてしまっている。

とはいえ、事実として男に蘇よみがえるだけの異能キュリアは残されていない。致命傷を治すだけの異能キュリアも同様。狼牙が力を抜いても問題は無い。

はずだった。

「……正直、負けたと思ったんだけどね」

男はゆっくりと体を起こす。その姿を見て、狼牙は激しく動揺する。

「本当は生き返るだけの異能キュリアは残ってなかった。いや、本当に。寝転がってる皆に削られてさ。君の勝ちだったんだ」

男自身も驚いている。彼にとっても予想外の事態。

「君の攻撃で僕は死んだ。ほぼ即死だったよ。肋骨が折れて、心臓に突き刺さった。

……とはいえ、心臓の隣にある異臓にも刺さったんだ」

男は自分の胸を指差す。

「そこから異能キュリアが漏れて来てさ、それで僕は復活出来た。ずっと胸のあたりが詰まった感覚が続いて、病気かなと思ってたんだ。異能キュリアが溜まって苦しかったわけだ。

未来にならこの病気の治療法も確立されてるかと思って、あのどっかい箱に仮死状態で引きこもってたんだけど、封印されちゃってね……ああ、今この話はどうでも良いか」

淡々と語る男とは対照的に、狼牙の目には涙が浮かんでいる。

「とにかく、骨が折れて異能キュリアが溜まった異臓に刺さって偶然復活でき



ただだけだ。

蘇生時に傷は全部治るから異能キュリアの漏れは僅か。しかも蘇生に使ったからあんまり残ってないんだけど……君は僕以上に残っていないのかな」

男は狼牙の弱弱い所作から判断する。彼の見立て通り、狼牙の残り異能キュリアは上限の5分の1にまで落ち込んでいる。

元々、彼の異能量キュリアは多くない。突進と足払い、二度の身体能力強化と骨格の変化によつて、消耗し切っていた。

「勝ったと思っていた所悪いけど、もう1ラウンド付き合ってもらふよ。」

ここで僕が勝った方が君の絶望も大きくなりそうだし、張り切ろうか」

男が再び構える。

一方で狼牙は自分の腹に手を置き、服ごと握りしめる。その表情はまさに苦渋。しかし、すぐに腹を据すえた目で、自分の服を捲くった。

シャツの下には腹巻。腹巻の下には大型の針が収納されている。禁断箱バンドラボックスを襲撃する作戦を立てる時、黒子に貰っていた針だ。

それを引き抜き、間髪入れず自分の胸に突き立てる。黒子の素能エレメント、逆夢マニフェスで作りに出した針。それは異能者シンキョラリテイの体を貫ける強度を持っている。

針は狼牙の体に深々と突き刺さり、肋骨をすり抜け、適切な角度で異臓に刺さる。異臓厚壁症の狼牙だ、針を抜けば今までに蓄えられていた異能キュリアが漏れる。痛みと怪我と引き換えに、戦うための異能キュリアを獲得できる。

はずだった。

現実には狼牙の手に針は無く、力強く胸を叩いただけ。

「な、んで……」

「本当、運が良いな今日は。それに勘も働く」

愕然がくぜんとする狼牙。一方で男は腕を前に突き出し、拳を握りこんでいた。

「君が持っていた針。多分そつちで寝ている女の子の素能エレメントで作った

物かな、って思ったんだ。女の子は刀を作っていたみたいだし。同時に、君も僕と同じ病気なのかな、って。針で自傷して異能を補給しようって魂胆」

男が無表情で、しかし調子の良い口調で語り続ける。

「だから、さつき女の子から奪った素能エレメントを使ってみたんだ。そしてたら針を消せてね。流石に素能キュリアを回復したら敵しかった。これでまだ五分五分。そして……」

男は黒子から奪った素能エレメントを発動し、手の中に針を作り出す。それは不格好だったが、人を刺すには十分。

狼牙は男が何をするのかを察し、急いで距離を詰める。しかし、遅かった。

男はさつきの狼牙と同様に、自分の胸に針を突き立てた。異臓に穴が開く。針を抜けば、血と一緒にまばゆ眩い光が。

高濃度に圧縮された異能キュリア。同時に狼牙が制空権まで接近するが、次の瞬間には蹴り飛ばされていた。

「これで僕の圧倒的有利」

針を抜いた傍から、男の怪我は素能エレメントで治癒されていく。残ったのは異能キュリアの貯金を大量に引き出した利益のみ。

男は全盛の勢いを取り戻し、蹴り飛ばした狼牙に一瞬で肉薄する。異能キュリアの欠如で身体能力を満足に行えない彼は抵抗を許されず、そのまま首を掴まれて宙に浮かされた。金剛不壊こんごうふえのおかげで動脈や気管こそ締まってないものの、為す術がない。

男は自分の元まで狼牙を引き寄せ、まじまじと表情を観察する。絶望的な状況に追い込まれた彼の表情を見て、男は思わず口角を引き上げる。

「こういうのを楽しみたかったのに。今日は随分と遠回りしたな」

体を引き寄せられ、手を伸ばせば相手の体に届く距離。狼牙は男の目に指を入れる。

「いっ……た。目は困るな、君を見れなくなる」

男は逆夢マニラエスで不格好なナイフを作り出す。それを軽く投げ、宙に遊ばせている間に、一本拳で狼牙の胸を突く。

「ぐ……ッ！」

そして、空中のナイフを掴み、狼牙の両腕に突き刺した。

「なッ！… んで……？」

腱を切断され、だらりと垂れ下がる両腕。一方で男の目は再生し終わっている。

「異臓を打った。ショックで異臓がびっくりして、少しの間異能が使えなくなる」

一時的に金剛不壊こんじょうふゑが解除された事で、男の指が狼牙の喉に埋まる。

「あ……っ……！」

体に酸素が供給されず、消費するばかり。分かりやすく死が近づいている感覚に、狼牙の気が触れていく。

紫に染まる顔色、瞳から流れる大粒の涙、眉間に寄った苦悶の皺を男が楽しみながら呟く。

「こういうのは終わり際が大切なんだ。だからと引き伸ばしても反応が単調になる。

……それに、君みたいな目をした奴はトドメを刺さないと面倒な事になるんだよね。昔にもいたよ、死に近づくほど潜在能力を発揮する人種は」

男が右腕を振りかぶると、狼牙の首を掴んでいる男の手が滑るのは同時。

僅かな時間、自由になる狼牙の体。それは男の右腕に破壊されて終わった。

男は滑った手を見る。

「……油？ いや、涙か。

すごいな、涙をこんなに滑りやすく。体を硬化させたり、力の流れを変えたり、あれもこれも異能エレメントじゃなくて奥義かな。100年で随分と技術が進化したものだね」

呟きながら、男は倒れた狼牙の方へ歩み寄る。すでに瞳孔は開き切っており、対光反射が無い。

「折れた骨が心臓に刺さったかな。意図せずしてお返しになったわけだ。本当は腹を打つつもりだったけど、滑って体が落下したせいで打

点が上にズレた。

彼も僕と同じ病気だったみたいだし、異臓に刺されれば第3ラウンドもあり得たのかな。……まあ、生き返ればの話だけど」

男は立ち上がり、大きく伸びをする。

「さ、お風呂を探そうっと」

汚れた体に辟易へきえきしながら、戦場に背を向けた。

## 50話 彼岸と此岸

「でしゃばるのは違うかなと思っていたのですけど」

死体の口が動く。紛れも無く狼牙の声。しかし、その口調はいつもと違う。

「『生き返れば』、なんて前振りされちゃうと期待にお答えしないとですよ」

狼牙の体が幽鬼のようにぬらりと立ち上がる。その目は真紅に染まっており、下瞼（したまぶた）から赤が垂れ落ちている。瞳孔は真黒（まっくろ）の渦巻き。

その特徴的な目は、まさしくフシミンの物。

「んー……、男の子の体はやっぱりちよつと勝手が違いますね。股関節の可動域が……。」

あ、それより、もうちよつと異能（キュリア）を引き出しておいた方が戦いやすいのです。よいしょ……つと」

次に折れたままの肋骨に手を当て、グリグリと乱暴に動かす。それは異臓を更に傷つけ、ため込んでいた異能（キュリア）大量に吐き出させた。

「というか本人に出てきてもらった方が早いのです。おきてくださいーい、狼牙君。まだ死んでいないのですよ」

かと思えば、頭をゴツゴツと手で叩く始末。すると渦巻きの瞳が、片方だけ元の虹彩に戻った。

「……な、んだよ、フシミン……？ いや、お前、死んだはずじゃ……というかどこにいるんだ……？」

「細かい事はどうでも良いのです。そんなことより大事なことがあるんじゃないのですか？」

「……そうだ。あいつを倒さない……」

「そうそう、その意気なのです」

男は困惑していた。内容だけ聞けば会話だが、実際には狼牙が1人で寸劇をしているようにしか見えない。とはいえ男は拳を握り、構える。

「まあ、何か良くわからないけど、とにかく第3ラウンドなのかな」  
仕掛けたのは男の方から。狼牙の体より少しだけ長いリーチを生かして、ギリギリの間合いから拳を繰り出す。狼牙の体はその攻撃をギリギリで躲し、腕の戻りに合わせて踏み込んだ。

それを男のフックが迎撃する。しかし、男の腕を狼牙の手が掴み、柳雪折無（りゅうせつむ）を発動。受け流し、残った片腕が正拳の構えに移行する。

男もそれを見て、正拳を躲（かわ）すべく体を屈めようとする。しかし、躲（かわ）そうという意識に反して、なぜか男の顔が狼牙の体の正拳の射線上に動いた。まるで引き寄せられるように。柳雪折無（りゅうせつむ）の応用。

男の困惑した顔が正拳で吹き飛んだ。しかし、吹き飛ばしの勢いは急激に向きを変え、男は地面に叩きつけられた。まるでクレーン車が思い切り鉄球を打ち付けたような跡が地面に刻まれる。男は蘇生を余儀なくされた。

地面に伏す男への追撃は、もう一度正拳。大地が揺れる。男は再び蘇生を余儀なくされる。

二度の正拳の衝撃により、狼牙の体は男の腕を手放してしまう。その際に、男は瞬間移動で一時離脱した。

「あはっ！ 凄いのです、この体。肉体のスペックはともかく、頭の方はビックリするほど明晰。2人の人間の意識を並列起動させながら、高いレベルで結合。戦闘までこなせるなんて。これが死に臨み、応戦する人の底力なのですね……」

基本的に狼牙が体を動かし、フシミンが異能（キュリア）の流れを調整。特に柳雪折無（りゅうせつむ）などのフシミン由来の奥義は、彼女本体が使っていた時より高精度。無駄口を叩く余裕まである。

（とはいえ、このままじゃキリがないぞ。アイツが何回蘇るか分からない）

（そうですねえ……したためておいた新奥義があるんですけど、それでどうにかしますか？ 構想段階でしたが、この体ならぶっつけ本番でもやれる気がするのです）

(……それなら、何とかなるかもな。けどアイツの動きをどう止める。転移されたら当たらないぞ。触れていけば転移できないみたいだが、向こうも捕まらないよう注意するだろうし……)

(それは狼牙君の模倣でどうにかできるでしょう?)  
(……分かった。任せろ)

この間、僅か0.001秒。脳内で会議を終えた瞬間、フシみんは右腕に異能(キュリア)を溜め始める。狼牙は骨格を四足歩行用に変化させ、再び突進を狙う。

1度は男に躲(かわ)された狼牙の突進。今回もやはり男に避けられた。男のカウンターが、殺人的な勢いのついた狼牙に叩きこまれる……かと思われたが、急激に突進の方向が変わる。

左腕を軸に回転。柳雪折無(りゅうせつむ)の応用。自分自身の力の向きすら変化させる妙技。

男のカウンターは空を切り、代わりに狼牙の掌底が男の胸に刺さる。その一撃は男の心臓と異臓の動きを一瞬止めた。

その隙に狼牙は構える。腰を落とし右腕を引く。左腕を相手の腹に据(す)え、狙いを定める。

構えの際にフシみんは右腕に集めた異能(キュリア)を操る。腕の中で高速回転。

「……シッ！」

鋭く吐かれた息とともに、正拳が男の腹を貫いた。それは男の内臓を破壊しつつ、男の体内の異能(キュリア)を根こそぎ吹き飛ばす。

自分の異能(キュリア)を高速で相手の体に注入することで、相手の異能(キュリア)ごと体外に吹き飛ばす奥義。

「名前は……螺旋風波(らせんふうは)、とかで良いですかね?」

男が倒れる。

——動かない。

生き返る気配も無い。

男が完全に息絶えたのを確認して、狼牙が尻もちをついた。

決着。しかし狼牙はどこか自分の勝利を信じられないのか、何度も男の脈をとる。

「……勝つ時は、あつという間だったな」

「実践はそんなものですよ。今回がレアケースなだけなのです」  
気が抜けたのか、尻や膝どころか全身を地面につける狼牙。

「何だ、力……が……」

いや、抜けたのは気でなく、力。再び立ち上がろうとするが、膝立ちが限界。

その時、正常だった片目がぐるりと渦を巻く。

「気絶しちゃった……という用語弊がありそうですが。とにかく狼牙君の意識は寝ちやつたみたいですね。」

安心したのもそうでしょうが、実際に体もヤバい状態ですし。さっきの一発で異能（キュリア）を使いすぎて、蘇生を維持する異能（キュリア）がほとんどありません」

残ったフシみんは狼牙の体を操り、胸に手を当てる。

「まあ、死にはしないと思うのですが……」

そのまま10秒ほど集中し、蘇生を定着させる。異能（キュリア）の消費が止まると同時に、フシみんも意識を失った。



ここは何処（どこ）だ？

狼牙が目を覚ました時、真つ先に抱いた感想。

手を伸ばせば指が見えない程の濃い靄（もや）。尋常ならざる環境に、不安を覚える狼牙。

しかし、音は聞こえる。水が流れる音。一步（いっぽ）歩けば、石が擦れる音。

河原にでもいるのだろうか。狼牙がそう推測すると、視界が段々と明瞭に。

——やはり河原。川がすぐそこにある。

どうしてこんな所にいるのか。狼牙が疑問におもいながら川沿い



を歩いていると、新しい音が聞こえてきた。

こと…

石を積む音。音のする方にはフシミンが。学園でいつも見るベージュのブレザー姿。狼牙も先ほどまでの服装では無く、学校でいつも着ている黒のズボンとカッターシャツ姿だった。

「……あれ？ 狼牙君もここに来たんですね」

フシミンは14段目の石を詰みながら、呑気に呟く。

「フシミン、か？ ……なあ、ここはどこなんだ？ なんで俺たちはここにいるんだ？」

「三途の河原」

何か知っている様子のフシミンから帰って来たのは、到底受け入れがたい返答。

「……何だつて？」

「三途の河原。といっても私が勝手にそう呼んでいるだけですけど。私達は一度死んだからここにきているのですよ」

「何処（どこ）」、だけでなく「何故（なぜ）」にもフシミンが答えてくれる。しかし、狼牙は要領を得ない。

「死んだ……って、男に殺された時の事か？」

「そうですね。一応私の素能（エレメント）で蘇生しましたが…」  
「待て。そもそもどうしてお前が……俺の中にいた？」

自分とフシミンの意識が同居していたあの感覚を何と言い表せば良いのかと、少し悩んだ狼牙。フシミンは淡々と答える。

「私の体は確かに死んだのです。一文無（アンデッド）で生き返りましたが、それすらも無駄にして、完膚なきまでに死にました。」

とはいえ、私の魂は死ななかつた。一番近くにいた狼牙君の体にお邪魔させてもらったのです。魂が生き続けるという意味では本当に不死みたいなのですよね、私」

「た、魂……？ なんだそれ？」

「肉体が死んだにもかかわらず、こうして私の意識がある以上は意識が付随する別の何かがあるはずなのです。それを便宜上「魂」と呼んでいるだけですよ。」

とにかく、私の意識はこうして狼牙君の中にあるのです。ほら、狼牙君も変に思いませんでしたか？ 私が死んだ後、柄鎖ちゃんを助けに行こうとした時に柄鎖ちゃんの居場所が分かったじゃないですか。あの時点で狼牙君が知り得るわけ無かったのに。あれは私がこっそり助言したからなのですよ？」

「ああ、確かに……。つまり魂には記憶も付随していて……」  
「もう。今は考えても仕方のない事は考えないでほしいのです。これが最後のお別れなのですから、会話を楽しむべきなのです」

フシみんは頬を膨らませながら言う。狼牙は彼女のセリフを聞き流せない。

「これが最後のお別れ……だって？」

狼牙の肌が泡立つ。

「そう、お別れなのです。狼牙君はここで死んで、私だけが生き残る。

私達は今、死の分水嶺（ぶんすいれい）にいるのですよ」

「いったい何を……。俺が死ぬ？」

「狼牙君、ポケット」

困惑しながらも、言われるままに狼牙がポケットを漁（あさ）る。手に掴んだのは六文銭。

「やっぱり六文あるのです。私よりお金持ち」

フシみんもポケットを漁（あさ）る。手を広げて五文銭を狼牙に見せつけた。

「なんでこんなものが……」

入れた覚えも無ければ、そもそも現代では使えない昔のお金。

「多分、死ぬ権利を持っている人は六文銭を持っているのですよ。ほら、三途の川の渡し賃は六文銭っていうじゃないですか。私は魂が貧乏なので渡河させてもらえないのです。彼岸（ひがん）には行けず、此岸（しがん）で立ち往生」

不満そうに言うフシみん。一方で狼牙は六文銭を握りこんだ。

フシみんの言葉はあまりに根拠に欠ける。しかし、いきなりの河原、突然現れた六文銭。なにか嫌な予感を感じる狼牙は身震いした。

「な、なんだよ……。こんなもの……！」

狼牙は手の中の六文銭を川の方へ放り投げる。不思議と銭が水に落ちる音はしない。

「無駄なのですよ。以前、お金を落としましたけど、不思議とポケットに戻って来ちやうのです」

フシみんは狼牙のポケットを指差す。狼牙が恐る恐るポケットに触れると、銭が擦れる音がした。

「な……!?!」

ポケットには再び六文銭。狼牙はそれを捨てようとするが、どうにも手放すことは出来ない。

狼牙がそうこうしている内に、ギィ…と軋(きし)む音が聞こえてきた。

「お迎えの音なのです」

靄(もや)で姿は見えないが、川の対岸から何かが近付いてくる。規則的な軋(かい)の軋む音。狼牙は冷や汗をかきながら、川とは反対側へ全力で逃げた。

しかし、川から離れると靄(もや)が濃くなる。そんな中走り続けていると、気づけば見知った顔。フシみんがいる所になぜか戻って来た。

「……ね、お話ししないのですか？　これが最後のお別れなのですから」  
フシみんがそう言うのと、狼牙は観念したように座り込んだ。

「そこまで深刻にならなくても良いのです。色々脅しましたけど、川を渡ったら実際に死ぬかどうかは分かりません。私が勝手に思い込んでいるだけです」

「なら、良いんだけどな。……正直、嫌な感じしかしない」

「やっぱり死にたくないですか？」

「当たり前だ」

「そうですよねえ。私と違って狼牙君は死んだら悲しむ人がいますし」

「お前にもいるだろ。少なくとも俺が」

そう言われたフシみんは狼牙から視線を逸らす。痒いのか、もぞもぞと体を掻きむしっていた。

「……私も、狼牙君が死ぬのは悲しいですよ」  
フシみんの言葉に狼牙は反応を示さない。代わりに疑問をぶつける。

「俺の魂が死んだらどうなる。俺の体をお前が使う形になるのか？」

「多分、そうかと」

「だったら後で柄鎖に伝えておいてくれ。『先に死んで悪かった』って」

「……分かったのです」

了承するフシミン。その目には少しだけ羨望の光。

二人が静かになると、川の方から聞こえてくる櫂（かい）の軋む音が良く響く。

ギィ…と鳴るたび、狼牙の体が震えていた。それを見たフシミンは震える彼の隣に座り、そつと手を握る。

「別に痛いわけじゃないのです。ただ…：…そう、睡眠。

布団はありませんけど、良く熟睡するように。きつと、悪くはないと思うのですよ」

「それはお前が死にたいからそう思うだけだろ」

「狼牙君も死にたいと思う事は無いのですか？ 思い出すだけで吐きそうな嫌な思い出があるとか、世界から嫌われているような漠然とした疎外感を覚えるとか」

「…：…無いわけじゃない。けど次第に風化するだろ、そういう記憶や感情は。

内臓を全部吐きそうだったその時に比べれば、今は夢で見て、寝覚めが悪い程度だ」

「へー、便利ですねえロウガ君の記憶は。私は全然そんな事無いのですよ。」

嫌な事を忘れるのは生きていく上で必要な機能だと聞いたことがありますから、生存本能の強い狼牙君は忘れっぽいのですかね」

ガコツ

船が棧橋にぶつかる鈍い音。それと同時に二人の前に真っ黒なフードを被った船頭が現れる。

「銭を見せろ」

狼牙は深呼吸をして震えを抑え込む。そしてゆっくりと立ち上がり、ポケットに手を入れた。

船頭のフードの中には光が全く入り込んでおらず、表情を伺い知る事は出来ないが、首から上がフードごと動き、狼牙のポケットの方を見る。

その瞬間、狼牙は反対の腕で船頭の腹に正拳をぶち込んだ。船頭は反応すらできない。

しかし全くダメージは無い。正拳が船頭を貫いたのは確かにも関わらず。むしろ船頭の体に刺さった腕が抜けず、拘束された狼牙の方が手痛い。

「抜け…ない…っ！」

「船頭さんには触れないのです。ここでの私達は実体を持たないただの魂。連れていかれるか追い返されるか、仕分けを待つだけの存在なのです」

ジタバタする狼牙のポケットに船頭が手を突っ込む。

「ぐ…ッ！ 止め——」

「一文足りぬ。お前は帰れ」

船頭はそう言つて、狼牙のポケットから抜き取った銭を放り投げた。河原に転がるのは5枚の硬貨。

「……は？ 何で…」

狼牙が困惑する間に、船頭は彼の拘束を解いた。腕が抜けた勢いで尻もちをつく狼牙。

「次はお前だ。銭を見せろ」

「はいはい。今回はちゃんと持ってきましたから」

フシミンがポケットから銭を取り出し、一枚ずつ船頭に渡す。

トス…、チャリ、チャリ、チャリ、チャリ、チャリ

船頭の手のひらに6枚の硬貨が落ちた。

「お前は来い」

「はいはい」

船頭とフシミンが乗船。船頭が錨(いかり)を回収している最中、狼

牙が声を上げる。

「——盗んだなッ！ 俺の側に寄った時か!？」

その声を聞いて、フシみんはいつもの微笑をニツコリ笑顔に変える。

「私、手癖が悪いので」

悪びれもせず、ひらひらと手を振るフシみん。

「何でお前が俺の代わりに……」

「私、お友達が少ないのです」

狼牙の言（げん）を無視して勝手に話すフシみん。

「だから、狼牙君が仲良くしてくれて嬉しかったのですよ」

「うるさい！」

狼牙が船の中にいるフシみんに飛び掛かる。しかし、冷静さを失った猪突猛進。彼女はそれを悠然と受け流した。放り投げられた狼牙は川に着水。顔だけを水面に浮かべる。

一方で船頭は錨（いかり）を回収し終え、櫂（かい）を手に持つ。船が棧橋から離れた。

「おい待てッ！」

狼牙は泳ぐ。しかし、いくら水を掻いても前に進まない。船との距離は離れる一方。

「さようなら。縁があれば地獄でまた会いましょう」

初めて見せた名残惜しそうな表情。それが、狼牙が最後に見た五文銭（ごもんせん） 二四三（ふしみ）の姿だった。

狼牙の体が水面下に沈む。不思議と息は苦しくない。

「……くそッ！」

安堵。銭を盗まれたことに気づいた時、狼牙が真っ先に感じたのは、フシみんが自分の身代わりになってくれたという安堵。

つくづく保身ファーストな自分に嫌気が差す。

「クツソオオオオオオッ!!」

水底へと沈むこと、体感時間で数分。気づけば狼牙はベッドの上で寝ていた。目を開くと、真っ先に目に入ってきたのは柄鎖（つかさ）の顔。

「……狼牙様」

酷く憂鬱な表情で狼牙を覗き込んでいたが、彼が目を開けると顔の険（けん）がとれる。

「大丈夫ですか、狼牙様？」

「……俺は、大丈夫だ」

「良かった……」

「ここは？」

「戦場から一番近くにある病院です」

狼牙がいるのは4人部屋の病室。戦いで出た大量の傷病人がここに担ぎ込まれているため、病床数の関係から個室とはいかない。

代わりに、雷夢（らいむ）や黒子（くろこ）といった反乱組がまとめて寝かされている。雷夢と、一応黒子の安否を確認して安心する狼牙。

柄鎖は大事なさそうな狼牙を愛おしい目で見つめている。ふと、何かに気づいた。

「狼牙様。その……瞳に何か模様が……」

「模様？」

柄鎖がスマホのインカメラを起動し、狼牙に渡す。ディスプレイに映される狼牙の瞳。そこには薄っすらと渦巻き模様が。

「確か二四三（ふしみ）様の目にもそのような模様があったと思います  
が、何か関係が？」

「……」

渦巻き模様が涙で歪む。

「三回も俺の前で死んでんじゃねえよ……」

その呟きは誰にも理解されない。

## エピローグ 墓

バンドボックス  
禁断箱関係のいざごきは、狼牙ろうがが封印されていたもののリーダーを倒した事により収束に向かった。

この事件による被害は軽傷者数12名、重症者数134名、死亡者数19名。施設破壊による損害額2億4463万。しかし、この事件がテレビで報道される事は無かった。全ては異能者シンギュラリティのコミュニティでのみ消費される情報。

事件からたったの数日後。にも関わらず、当事者であった狼牙と柄鎖つかせは異能学園へと登校している最中。

「……ここまで早く収束するとは思わなかった」

狼牙が呟くと柄鎖が答える

「人的被害に関しては、死んでいなければ素能エレメントですぐに治癒出来ます。施設の被害に関しては、そもそも封印する対象がいなくなってしまう必要。解体の方に時間がかかっているようです」

「いや、俺達は一応逆者の立場だろ？ 雷家いかづち当主の雷夢がこっち側についていて、パワーバランスが拮抗しているとはいえ禍根かこん無く収束するものか？」

「普通はしないでしょう。とはいえ、先の事件で被害に遭ったほとんどは上戸鎖家かみとくさりと剣先けんせんの兵士です。剣先家に至っては当主が死んで混乱しています。パワーバランスとしてはこちら側が有利な状態。そのせいで下手に手を出しづらい状況になっていたのが一つ。

二つ目は、私の両親ですわね」

「柄鎖の親？」

「ええ、私が生贄になる事に引け目を感じていたようで。こちら側に便宜を図ってくれたようです。とはいえ、流石に逆者の私を上戸鎖家に置いておく事は出来ないらしく、勘当くわんどうされましたが」

「大丈夫なのか？」

「一生働かなくても良いぐらいの餞別せんべつを貰いました。食べる物に困る



ような生活はしなくても大丈夫です」

「……雷家の勢力が抜きんでた今、また戦争が起こったりしないのか？」

「雷夢様がそんな酔狂な事をなさるとお思いで？」

「……まあ、しないな」

「ちなみに雷夢様は昨日、動物園でライオンの鬣たてがみを触ろうとして職員に止められてしまったため、アフリカに行くそうです。今朝、空港に向かう予定だと」

「病み上がりに良くやる……」

などと話しながら下駄箱で靴を脱ぐ二人。上履きに履き替えて廊下を歩いていると、廊下の角から人影が。気配を察知していた狼牙は寸前で止まるが、向こう側の人間は狼牙に驚き、たたらを踏んで倒れた。

「黒子様！ 大丈夫ですか？」

倒れたのは黒葛原つづらはら 黒子。彼女の目元には大きな隈くまが刻まれている。禁断箱バンドラボックスの事件で剣つるぎが死んでしまった事を定期的に思い出し、睡眠不足の状態。

取り巻きの女生徒が彼女の側に駆け寄った。

「やはりお休みになられた方が……」

「……ああ、そうだね。保健室に連れて行ってくれるかな？」

「はい！ もちろん！」

頼られた女性とは嬉しそうに黒子に肩を貸す。一方で他の取り巻きの女生徒は、不可抗力とはいえ、黒子が倒れるキツカケとなった狼牙に詰め寄る。

「アンタ！ 前見て歩きなさいよ！」

「そもそも寝不足の理由もアンタなんじゃないの!？」

「あの事件に黒子様を巻き込んだのだった!!」

確かに黒子を戦力として誘ったのは事実。狼牙が黙っていると、黒子が取り巻きを制止する。

「誘われたのは事実だが、私は自分の意志で戦場に赴おもむいた。だから、彼を責める理由は無い」

「しかし黒子様……！」

「良いんだ。狼牙君も悪かったね」

「いや……大丈夫だ」

「それじゃあ、また今度」

別れの言葉を残して黒子は保健室の方へ歩いていく。取り巻きは狼牙を睨みながらも、黒子の後を追った。

「……なんか変わったな、アイツ」

狼牙は口元を押さえて、疑問符を頭に浮かべる。

「あんまり良い言い方じゃないが、媚びと卑屈さが無くなったとか……」

「先の事件で心境の変化があったのでしよう。確か、旧友が死んだと病室で泣いていましたし」

「……俺のせいなんだろうな」

僅かに目を細める狼牙。柄鎖はその背中を擦る。

「責任を感じているのですか？」

「いや、柄鎖を助ける為にと割り切ってやった事だ。ただ、それで嫌われるならともかく割と普通に接してくるのには戸惑う」

「それは本人も言っていたでしょう。最終的に決めたのは自分だから恨む筋合いは無いと。」

そもそも、狼牙様も黒子様に病気を盾に無理な注文をされた事があったでしょう。にもかかわらず、そこそこ黒子様に優しくされているではありませんか」

「同じ、なのか……？」

「同じです。この界限、ドライな人が多いので。そうでなければやっていけないというのもありますが」

「……」

狼牙は再び廊下を歩き始める。柄鎖もその後が続いた。教室までの道中で狼牙がつぶやく。

「学校が終わったら墓参りに行くか……」

「失礼ながら誰のお墓参りに？」

「親父の。色々一段落ついたから、久しぶりにな」

「ご一緒しても？」

「良いけど……人の親父の墓参りなんか暇だろ？」

「いえ、狼牙様の両親なのでですから、一応挨拶には向かいませんと」

「……まあ、好きにしてくれ」

教室に着いた2人。扉を開けると、騒がしかった教室が一瞬静まり返った。

「おい！ 事件の首謀者の登場だぞー！」

1人の生徒が叫ぶと、2人の周りに教室内の生徒が集結する。

やれ、どうしてあんなことをしたのか。

やれ、実戦はどうだったのか。

やれ、何人倒したのか。

聖徳太子でも聞き取れないほどの質問が矢継ぎ早に飛んでくる。

その騒がしさに狼牙は堪<sup>たま</sup>らず、気配を消して人の輪から抜け出す。

大勢の生徒は柄鎖の方に構ってもらっているらしく、狼牙がいなくなった事は気にしていない。

「何なんだあいつら……」

「ふあ……あれ、狼牙君？」

人の輪から外れた狼牙をあくび混じりに呼び止めるのは結界ちゃん。寝不足でホームルームまで寝ていたらしい。

「聞いているよー。どえらい悪さしたんでしょ？ それも柄鎖ちゃんのためだからってんだから。この色男」

結界ちゃんの擲<sup>から</sup>揄<sup>か</sup>い口調を無視して、疑問を口にする狼牙。

「なんであいつらは悪さした俺達を持ち上げるような真似をする？」

「皆退屈している所にこんなトピックスが降ってくれば、そりや大騒ぎするよ。それがノーベル賞取ったでも、施設を襲撃するでも」

「……人死を出してもか？」

「人死を出しても。」

……そういえば狼牙君は寒門の出だっけ。異能<sup>シンギユラリテイ</sup>者の界限は大体ことはないよね。ぐらいの扱いは、人死にも「まあ、無くて、身内が死んだ組はそっち」

結界ちゃんが指差す方には、重い雰囲気を纏った数人の生徒。狼牙が自分の方を見ているのに気づくと、睨み返してくる。

「当然恨まれてるから、しばらくは周りに気を付けておいた方が良くんじゃない。柄鎖ちゃん助ける為に無茶したのは良いと思うけど、自分のケツぐらい自分で拭かないとダメだよ」

「……そうだな」

狼牙が教室を見渡すと、ある机に花瓶に活けられた菊の花。

「この机、フシみんの……」

「ああ……。この間の事件で亡くなったから、その弔いにね」

教室の玄関が騒がしいのとは対照的に、花が飾られた机の周りは酷く静か。狼牙はフシみんの机を撫でる。

「お墓は体育倉庫の裏にあるよ。二四三ちゃん、身内がいらないらしいから学園の方で埋葬したって」

「……助かる」

狼牙は花瓶を手に持ち、水を変える為に水洗場へと向かった。



保健室。そのこのベッドでは、目の下に大きな隈を作った黒子が横になっていた。取り巻きの子達は睡眠の邪魔になってはいけなさと退出している。保健室には、黒子と保険医の二人きり。

ふと、目を覚ました黒子が保険医に声をかける。

「……久しぶり、赤音姉さん」

声をかけられた保険医はカーテン越しに会話を続ける。

「本当に久しぶりだよ。私が家を追い出されて以来だから……4年ぶりぐらいかな？ 同じ学校にいるってのに何故だかお互い話をしない」

「許して欲しい。当主の時期は本当に余裕が無かったんだ」

「今も余裕がある様には見えないんだけどね」

目の下の隈を指摘された黒子は目を伏せる。

「うん……どうにも私はストレスから逃げられないらしい。ツルもそうだった。だから、自暴自棄になって……」

しばらく、すすり泣く音。保険医もその間は作業をして時間を潰す。

「……他の当主は、皆このストレスに耐えられる強い人なんだろうか。それとも、私達が弱いだけなんだろうか。それすら分からない」

「それは……」

保険医がかける言葉を探す間もなく、黒子は続ける。

「……将来は精神科医になろうと思う。今までは医者になるなら、漠然と外科医を想像していたんだけど」

黒子の将来に対する前向きな言葉を聞いて、保険医の緊張が幾分取れる。

「そうか、頑張っておくれ。とはいえ医者もストレスの多い仕事だからね。人の健康、生死に関わる仕事だ、真面目な人ほどやられやすい。

……とはいえ、今の黒子なら大丈夫だよ。きつと」

黒子の返事はない。不審に思った保険医がカーテンの隙間から覗くと、黒子は再び寝ている。保険医は黒子にそっと忍び寄り、涙の痕をハンカチで拭いた。

◇

雷<sup>いかづち</sup>家の屋敷。その庭園の隅に、執事服で身を包んだ者たちが集まっていた。

「あの戦いで古株はすっかり男所帯になっちゃったな。どうしてメイド長ばかり死んじゃったんだか」

執事長の一人、リッチが二つの墓の前で手を合わせながら呟く。その隣には蹲踞——というよりは不良が良く行っている座り方で、執事長の一人、ハゲが居た。

「ほら、ハゲも手ぐらい合わせておきなよ」

「墓参り、黙禱<sup>もくとう</sup>に意味は無いんだが。やってる事無駄すぎて草」

「震え声でまったく説得力無いけど。こういうときぐらい、拗らせるの止めたら？ 内弁慶で他に話す奴がないハゲが一番傷ついている癖に」

墓から少し離れた所を、雷夢、執事長の1人であるリーダー、それと新しくメイド長に任命された女性が1人、通りかかった。

「あいつらは何をしている」

雷夢が墓参りをしている二人の方を見て、リーダーに尋ねる。

「先の戦いで死んだメイド2人の墓参りをしているようです」

「そうか。何をしても自由だが、仕事に支障が出ないよう言っておけ」

「仰せのままに」

リーダーは雷夢に恭しく礼をした後、新しいメイド長の方に向き直る。

「これからあなたは雷夢様とアフリカに行くわけですが、身の回りの世話をしっかりするように。特に食事に由来する病気には細心の注意を払ってください。良いですね？」

「は、はい！」

「それではお二人とも、行ってらっしゃいませ」

雷夢と新しいメイド長は、リーダーに見送られて行ってしまふ。残されたリーダーは、墓参りをしている二人の方へと歩み寄った。

「あれ、リーダー。てつきり雷夢様と一緒に旅行に行くのかと思ってたけど」

「先の戦いで情勢が不安定な今、実質的に雷家の舵を取っている俺が外国に行くわけには行かん。……本当に！ 何でこの時期に……！」

あんな小娘に雷夢様の世話を譲らねばならんとは……!!」

「すっごい不服そう」

「とはいえ自らのために戦い、命を落としたメイドの墓に対してあの興味の無さ……。ああ……。やはり雷夢様はそうでなくては。悪は犠牲に罪悪感など感じるはずもない」

歯をむき出しにしたかと思えば、恍惚の表情を浮かべる情緒不安定なリーダー。

（あの戦いで死んだのがリーダーだったら、多分雷夢様は墓参りに来たと思うんだけど。）

……とは言わないでおこう。面倒くさそうだし）

リッチはリーダーを一瞥し、再び墓に視線を戻す。

「まあ、人使いの荒い推しだから僕もすぐそっちに行くかもしれない。その時は雷夢様の話を土産に持っていくからさ」

リッチは桶から柄杓ひしゃくで水を掬い、墓にかけた。

◇

異能学園の片隅。学び舎には異様な、死を連想させる墓石が一つ。そこには、多くの墓碑銘が刻まれている。墓碑銘の一番端に、真新しい削り跡。

五文銭 二四三

“三”の一番下の棒を指が撫でる。墓参りに来た狼牙の指。その隣には柄鎖つかさも付き添いで来た柄鎖。

“食べ物 供えるべからず”

そう書かれた看板を尻目に、狼牙は教室の花瓶から抜いて来た菊を花立はなたてに差す。その後、狼牙は父親の墓参りのために持ってきていた線香にマツチで火をつける。

火のついた線香を指に挟み、合唱。お参りが済めば線香を手で振り消化。

付き添いに来た柄鎖も、狼牙から線香をもらい受けて同じようにお参りを済ませる。柄鎖が線香を消化した所で狼牙が口を開いた。

「殺そうとした本人と、殺した本人で墓参りつても妙な話だ」

狼牙の言葉に柄鎖が動きを止める。

「……知っていましたか」

柄鎖は襲撃計画を万が一にも口外されないため、フシみんを始末しようと同画策。結局、彼女が不死の力を持っていたため、失敗に終わる。その後、狼牙とフシミンが戦った事を聞いたため、狼牙が被害者本人の口から自分の謀略について聞かされている可能性は考慮していた。

実際には、狼牙とフシみんの魂が一つの体同居していた時、記憶の一部を無意識のうちに共有しており、その断片的な情報から真実を推測していたにすぎない。そして今、カマをかけた結果、仮定が証明された。

「軽蔑しますか？」

自分のやったことは間違いではない。狼牙に「生きてくれ」と言われ、その約束を守るために最善と思われる手を打った。ただ、失敗しただけ。

「いや……本当なら協力を断られた時点で、俺がやるべきだった。柄鎖は俺が迷った代わりに遂行したにすぎない」

自分のやったことは間違いだった。情に流され、二の足を踏んでしまった。「生きてくれ」と願った本人が。

「軽蔑するか？」

「いいえ。結果論で言えば、二四三様に手を出してしまったせいでは計画が露見してしまったのですから、私の行動は裏目に出てしまったわけですから。そのせいで狼牙様自身の手で二四三様を……」

「……結果論で言うなら、それがフシみんのためには一番良かった。生きるのに疲れて、しかもどういふ訳か俺に殺されたがっていたからな。俺が今生きているのも、アイツを殺したおかげだ」

狼牙は自分の目の付近に手を当てた。あの日から変わってしまった渦巻き状の瞳孔が指の隙間から見える。

その様子を見て、柄鎖は嫉妬する。生きて狼牙と話せるのは生者の特権だが、愛する人間にこれほどの証と傷を残して死ぬるのも、そうは無い事だろうと。出来る事なら彼の目玉を交換してしまいたいが、流石に無理な話。

などと柄鎖が考えていると、ふと首に狼牙の手が当たる。指は頸動脈に。自らの性の鼓動を確かめられる。

「……柄鎖は、死なないでくれよ」

柄鎖は狼牙の目に滲んだ涙をハンカチで拭く。

「約束しましょう。柄鎖の名前に懸けて」

墓前にもかかわらず抱擁を交わす二人。しかし、咎める者はいな



い。

以上が20xx年6月5日～11月14日、バンドラボックス禁断箱事変の全容であつた。